魔裟斗に完敗!! されど川尻、おまえは男だ!

kamipro
紙のプロレス

MMA & PRO-WRESTLING

enterbrain MOOK

2009
137
特別定価940yen

三沢光晴さん追悼
天国の橋本真也に捧げる

特集 プロレス

リング禍、猿虐待疑惑、
恐喝、ノア分裂騒動……
いまこそプロレスの
環境問題を考えろ!!

武藤敬司
ジョシュ・バーネット
高山善廣
高田総統最終回
船木誠勝
馳 浩 衆議院議員
U・ドラゴン
猪木の呪い
浅草キッド
大槻ケンヂ
豊田魔波 ほか

いまこそ
苦しみの中から
破壊王チョップ!

プロレスド元気ですかーっ!?

MMA
スーパーボウル!
UFC100
だぜ!!

プロレス・格闘技を
より深く愛するために…
どうしても欲しいモノがある!
高価買取・格安販売!
マスク、ベルト、Tシャツ、ビデオ、本、雑誌、CD、
パンフ、フィギュア他…50,000点販売中!!
★いらなくなったお宝お売り下さい!★
お持込の場合
営業時間内に当館へ直接お持込ください。その場ですぐ査定→お支払いします!
※一部高額商品は一度お預かりさせていただき、後ほどご連絡する場合もございます。
配送の場合
「商品が多すぎる」「家から遠い」などの場合は、宅配または郵送でお送りください。
届き次第24時間以内に査定をして、ご連絡後、指定の口座にすぐ入金します。
※送料はお客様ご負担とさせていただきます。在庫状況により一部買取できない商品もございますので、
お送り頂く前に必ず必ず電話・FAX・メールなどでご連絡ください。
事前におおよその買取金額をお知りになりたい場合はメール(info@toudoukan.com)
またはFAX(03-3512-2080)などで具体的なタイトルをお知らせください。早急にお返事いたします。
※雑誌、パンフレット類は在庫過多の為お値段をお付けできないものが多いです。
http://www.toudoukan.com
▼携帯からも注文できます!
毎日夜9時、新入荷商品更新しています!!
〒101-0061
東京都千代田区三崎町
2-9-9ナガヤビル5F&6F
(JR水道橋徒歩3分)
03-3512-2080
午前11時～午後9時(年中無休)
後楽園ホール
東京ドーム
西口
JR水道橋駅
東口
マクドナルド
ファミリーマート
バトルロイヤル
チャンピオン
闘魂ショップ
富士そば
コロッセオ
神社
闘道館
(1F居酒 屋どんたく)
白山通り
東京歯科大
薬局
マニア館
牛角
薬局
T-1
格闘技プロレス買取販売!世界最強の品揃え!
闘道館

2009 No.137 CONTENTS

kamipro

追悼・三沢光晴、天国の破壊王に捧げる

特集 プロレス

K-1&MMA

004 川尻達也
009 “川尻の参謀”が見た魔裟斗戦
010 谷川貞治 FEG代表
016 “暴走ボクサー”渡辺一久
020 魔裟斗なきあとの世界 座談会
026 石井慧×フィル・バローニ 夕焼け番長対談!
113 7.11『UFC100』
118 魔王・秋山成勲はどう見られたか
122 ヴァンダレイ・シウバ
124 ダナ・ホワイト UFC代表
128 皇帝戦直前! ジョシュ・バーネット
132 トム・アテンシオ アフリクション副代表
136 大予想 ヒョードルvsジョシュの行方!!

PRO-WRESTLING

036 武藤敬司 プロレスの未来
040 高山善廣 帝王のプロレス論
044 船木誠勝 プロレス復帰と三沢の死
049 “幻の統一コミッション”GPWAとはなんだったのか
056 馳浩 プロレス協会の裏側
060 高岩竜一 プロレス界の実態
065 プロレス技術論
ザ・グレート・カブキ／スタントマンとは何か?／ウルティモ・ドラゴン／宮戸優光
081 浅草キッド「レスラーと芸人」
086 菊地成孔「三沢の死に見える猪木の影」
090 大槻ケンヂ「合気道プロレス論」
094 森達也「プロレスの不謹慎さと幻想」
097 1993年の女子プロレス「豊田魔波」編
104 同級生から見た三沢光晴
106 ファンはプロレスをどう見ているのか?

Columns

103 掟ポルシェの『萌え萌え女々苑』
112 花くまゆうさくの『豆リングの汁』／金原弘光の『どこまでやるの!?』
139 椎名基樹の『サムライ三昧』

©2009 ENTERBRAIN, INC. ©2009 DOUBLECROSS 本誌記事、写真等の無断転載、複写、マイケル・ビスピンのせいにすることを禁じます。

魔裟斗vs川尻に鳥肌全部立った!!

俺たちは〝決闘〟が見たい!!

競技性や視聴率なんかに
縛られてたまるか!!

川尻がK―1 MAXのリング、しかも
メインで世界王者の魔裟斗と対峙する―
。クラッシャーがPRIDE武士道に

賞

を
が

達　也

本誌認定09年上半期マット界主演男優賞

川尻

「魔裟斗戦はDREAMを好きな人たちみんなが一緒に闘ってくれた」

DREAMを背負ったクラッシャーが反逆のカリスマ相手に男を見せた!
魔裟斗のK-1 MAX最終試合、そして川尻の“一歩踏み出す勇気”を観ようと、
日本武道館には1万6555人超満員札止めの大観衆が集結。
大きな盛り上がりを見せた運命の一戦を終えて、いま川尻の胸に去来するものとは?

聞き手／鈴木佑　撮影／菊池茂夫　撮影／乾晋也

“究極の他流試合”に場内熱狂!
K-1 MAX世界王者に大健闘!!

川尻がK―1 MAXのリング、しかもメインで世界王者の魔裟斗と対峙する――。クラッシャーがPRIDE武士道に初参戦した05年当時、そんな光景をいった い誰が想像できただろうか?

PRIDE時代、そして08年にDREAMに主戦場を移してからも、常に川尻はライト級戦線において重要なキーマンであった。しかし、本人が口にするようにその役割は〝助演男優賞〟の域は出なかった。だが、昨年大晦日の『Dynamite!!』で武田幸三に初のK―1ルールで激勝を収めてから、物語は一気に加速していく。

「いま、僕は自分の力で格闘技界を盛り上げるために必死なんです。だって闘う場所がなかったら生きていけないんだから」

川尻がこう語るのは、PRIDE消滅から丸一年にわたって試合がなかったことに起因する。川尻はDREAMという〝自分の場所〟を盛り上げるため、そして守るために魔裟斗戦に向けて走り抜けた。

この一戦は瞬間最高視聴率19・8%を記録。世間の大きな注目を集めた激闘から一夜明けて、そこには大仕事をやりとげた心に安堵が訪れたのか、穏やかな表情の〝主演男優〟がいた。

――川尻さん、凄くすがすがしい顔してますね。

川尻　そうですか? さわやかな感じ?

――はい(笑)。なんかやり終えた感のある、いい顔というか。

川尻　フフフ。あ、そういえば、『kamipro』の三沢(光晴)さんの追悼特集読みましたよ。

――ありがとうございます! 川尻さんにも追悼コメントをいただいて。

川尻　なんか、僕のコメントだけほかの人

［7.13 K-1 WORLD MAX 2009 World Championship Tournament FINAL8］
東京・日本武道館
スーパーファイト
○魔裟斗vs川尻達也×
（2R 1分43秒 TKO）

1R、おもいきり踏み込んでフック、アッパーを振う川尻に対して、魔裟斗はカウンターの右ストレートでダウン奪取。2R、川尻は捨て身の打ち合いを仕掛けるが、魔裟斗は前蹴りからロー、ストレート、ヒザ蹴りと猛ラッシュ！　最後は川尻が棒立ち状態となり、セコンドがタオル投入。魔裟斗が最後のMAXで有終の美を飾った。

尻達也

に比べてえらく短かったからビックリしましたよ。嫁にも「え、これだけ？」って言われちゃって（笑）。

――ダハハハ！　いえいえ、世紀の一戦に向けて追い込みで忙しい時期に、わざわざ協力いただきまして。きっと三沢さんも喜んでると思います。

川尻　本当に残念ですよね。僕、中学の頃は「三沢最強！」って思ってましたから。

――へ～！　何か印象に残ってる試合とかありますか？

川尻　やっぱり川田（利明）戦ですね。あの二人って同じ高校の先輩後輩だからなんでしょうけど、感情的になるし観てておもしろかったですね。えげつなくて（笑）。

――川尻さんと魔裟斗さんの舌戦も感情的でおもしろかったですよ（笑）。昨日の魔裟斗戦の試合映像は確認しました？

川尻　いや、まだ観てないです。携帯サイトの記事を見た程度ですね、もちろん『kamiproムーブ』で。

――それ、本当ですか？

川尻　ちゃんと毎日見てますよ、選手の日刊ブログとか。だって、もともと僕も連載してたじゃないですか？

――その節はお世話になりまして。

川尻　あれ、毎日更新するのって凄くきついんですよ。あ、ここ最近の選手が1ヵ月くらいで連載を交代してるのって、それが理由なんじゃないですか？　そう考えたら僕なんて半年以上も連載してたんだから、相当頑張りましたよね？

――いまは金原弘光さんにボヤきながら執筆していただいております（笑）。

川尻　ハハハハ！

――さて、昨日の魔裟斗戦を振り返りたいんですが、入場時には凄まじい歓声が巻き起こってましたね。DREAMファンの野太い声を中心に（笑）。

川尻　ホント、期待してたとおりで（笑）。やっぱり気持ちよかったですし、ありがたかったですね。

――一緒に桜井〝マッハ〟速人さんをはじめ、青木真也さんや高谷裕之さんといったDREAMの選手たちも入場したわけですが、あれは事前に聞いていたんですか？

川尻　そうですね。2週間くらい前にマッハさんたちも一緒に花道を歩いてくれるって聞いて。入場前にはバックステージで、一人一人とグローブ越しに拳を突き合わせてパワーをもらいましたよ。

――選手だけじゃなくDEEP代表の佐伯（繁）さんや、煽りVアーティストの佐藤大輔さんも列に加わって。

川尻　あれ、佐伯さんもですか？　それはいま初めて知りました（笑）。

――佐伯さん、不憫だな～（笑）。じゃあ、佐藤さんが入場することも？

川尻　いや、佐藤さんは知ってましたよ。事前にご本人から「一緒に入場させてほしい」ってメールをもらったんですよ。だから「ぜひお願いします」って返事して。

――今回、佐藤さんは煽りVを制作してなかったですし、「一緒に入場して力になりたい」って思ったのかもしれないですね。

川尻　なんか昨日の試合って、もちろん闘うのは一人なんですけど、一人じゃないって感じでしたね。DREAMを好きな人たちが、一緒に闘ってくれたっていうか。

――あの穏和な表情の石田（光洋）さんも、入場してくる魔裟斗さんを怖い顔で睨みつけてましたからね（笑）。

川尻　ハハハ！　僕と同じくらい気合いが入ってたんでしょうね、嬉しいですよ。

――あれだけの期待を背負って決戦の舞台に上がったわけですが、恐怖心やプレッシャーはありました？

川尻　僕の中では恐怖心はなかったし、プ

に、ちょっとはフラついたけど、「これなら大丈夫だな」って思ったんですよ。でも、

ウンターも合わせづらいし。でも、思ったよりは魔裟斗選手も打ち合いに来てくれ

だからこそいいところを見せたかったんですけどね……悔しいですね。

んですが、入場時には凄まじい歓声が巻き起こってましたね。DREAMファンの

——あれだけの期待を背負って決戦の舞台に上がったわけですが、恐怖心やプレッシャーはありました？

川尻　僕の中では恐怖心はなかったし、プレッシャーもそんな感じてなかったですね。むしろワクワクしてたっていうか。

——対する魔裟斗さんは、もの凄い黄色い声援の中を入場してきましたね。

川尻　もう、そのへんは心の準備ができてました（笑）。やっぱりジャンルを背負ってきたカリスマはハンパじゃないなって思いましたよ。でも、アウェー感は全然感じなかったですね。気負いすることもなかったし、凄く闘いやすかったです。

——ブーイングもまったくなかったですもんね。試合展開的にはいかがでしたか？

川尻　う〜ん、作戦どおりにいかなかったですね。こっちから動いて先に先に攻撃しようと思ってたんですけど、魔裟斗選手の出入りが速すぎて、ちょっと「あれ？」みたいな感じになっちゃって。本来なら僕のほうが相手のタイミングをずらさなきゃいけないのに、こっちがずらされて「なんかうまくいかないぞ？」って思ってるうちに、向こうのペースで打ち合っちゃったって感じですね。

——予想とは違った、と。

川尻　想像以上に強かったです。情けない話ですけどK—1ルールじゃ通用しなかったですね。山田さんと一緒に考えたものがまったく出せなかったですから。

——でも、パンチを被弾しても手を広げて「効いてないぜ」って余裕をアピールしてましたよね？

川尻　最初にガツンと一発もらったときに、ちょっとはフラついたけど、「これなら大丈夫だな」って思ったんですよ。でも、そこからの手数がハンパじゃなくて……、連打で効かされちゃいましたね。警戒してたローキックはそんな効かなかったし、「これはいけるかな」って思ったんですけど。だけど、やっぱり向こうはディフェンスもうまいし、こっちがバランスを崩したところを一気にたたみかける術も持ってるし、いろんな面で格が上でした。

——とにかく強かった、と。

川尻　こっちの攻めどころを許してくれないんですよね。スピードがあるからカウンターも合わせづらいし。でも、思ったよりは魔裟斗選手も打ち合いに来てくれたんで、前に出ようとするこっちの心意気に応えてくれたのかなとは思いました。

ファン公開のもと行なわれた対戦カード発表会見では、丁々発止の舌戦を展開した両者。上から目線の魔裟斗と挑発まじりにやり返す川尻の姿は、いやがうえにもこの一戦への期待を高めた。これぞプロの姿だ！

川尻達

背中を見せる試合だけはしたくなかった。自分の闘いはできたのかなって思います

——あと、ダウンしたあとにタックルに入ろうとしてましたよね？（笑）。

川尻　それ、ほかの人にも言われたんですけど覚えてないんですよ（笑）。たぶん本能なんでしょうね。ていうか、1R終盤はもうバテバテだったんですよ。でも、インターバルで回復するトレーニングもしてたんで、2Rは最初から捨て身でいくしかないなって覚悟を決めて。パンチを当てなきゃ相手は倒れないんだから、とにかく下がらないようにしようと思いました。

——本当にやるか、やられるかって感じで。

川尻　試合前に笹原（圭一・DREAMイベントプロデューサー）さんにも「10秒で倒れるかもしれないけど、そのかわり本気で僕も倒しにいきます」って伝えてたんですよ。そういう試合をファンは求めてると思うし、僕がK—1に出るならそういう試合をしないと意味がないし。武田幸三戦、JZカルバン戦を乗り越えてたどり着いた場所で、背中を見せるような試合だけは絶対したくなかった。そういう意味では負けはしましたけど、自分の闘いはできたのかなって思います。

——試合中の歓声は聞こえましたか？

川尻　聞こえましたね。あそこまでの後押しは格闘技人生で初めてでしたよ。

——黄色い魔裟斗コールが起こると、負けじと黄土色の野太い川尻コールが（笑）。

川尻　いやぁ、ありがたかったですよ（笑）。きれいごとじゃなくて、ホントにファンのみんなに後押ししてもらったっていうのは凄くありますね。僕のHPにもたくさんの応援コメントを寄せてくれて。だからこそいいところを見せたかったんですけどね……悔しいですね。

——タオルが投げ込まれた瞬間には前のめりに倒れ込みました。

川尻　「あぁ、終わっちゃったな」って、張りつめてた糸が切れた感じですね。普通、選手だったらブッ倒れるまでやりたいっていうのはあたりまえですから。

——タオル投入の直前にも魔裟斗さんを挑発して、気持ちは死んでないというか。

川尻　もう、相打ちでもいいから当てないとっていう気持ちですよ。玉砕覚悟でブッ倒すしかないなっていう。心だけは折れてなかったんで。でも、タオルが投げられたことに関して何一つ文句はないです。あのままやって壊れてたら一生闘えない身体になってた可能性だってあるんだし。そこは山田（武士トレーナー）さんに守ってもらえたって感じですね。

——試合後に魔裟斗さんと言葉を交わしてましたけど？

川尻　それ、覚えてないんですよね。僕、しゃべってました？

——そのくらい完全燃焼だった、と（笑）。

川尻　いや、ホント覚えてないんですよ。おもしろくなくてすいません（笑）。試合後にちゃんとしゃべった選手は高谷さんくらいかな。「すいません」って謝ったら、「いやいや、お疲れさま」って言ってくれて。

——ちなみに谷川（貞治K—1）プロデューサーは「昨日のMVPはダントツで川尻選手と魔裟斗選手」って言ってましたよ。

川尻　まあ、今回の試合までの流れは、いいように、谷川さんの思いどおりになりましたからね（笑）。

——ダハハハハ！　昨年の大晦日からJZカルバン戦。そしてそこからまた魔裟斗戦までの1ヵ月半、相当身を削ってきた

川尻達也

次はDREAMでライト級王者になって うれし涙でファンを泣かせたいですね

かわじり・たつや■1978年5月8日、茨城県出身。04年修斗ウェルター級王座に君臨。PRIDEを経て08年からはDREAMを主戦場とする。同年の『Dynamite!!』では武田幸三からKO勝利。続いて09年5月のJZカルバン戦にも勝利を収め、今回魔裟斗のK-1 MAX最終試合の相手を務めた。09年の格闘技界のキーパーソン。171㎝、69.9kg。

わけですものね。

川尻　でも、凄く充実してましたよ。K―1の世界王者と闘うなんて、普通は味わえないじゃないですか？　MMAの道をきわめるっていう意味では、K―1ルールの試合は遠回りだったのかもしれないですけど、その道は僕にとっては必要な道だったと思うし、けっして無駄にはしたくないし。練習も本当にきつかったですよ。でも、山田さんと一緒に打倒魔裟斗選手を目指してやってきたことが、何より楽しかったし。今回は最初から最後まで楽しかったですよ。これまで以上にないほど、たくさんの人から試合前に声をかけてもらって。

――その中で何か印象に残ってる言葉はあります？

川尻　「信じてる」って言葉は力になりましたね。だからこそ結果を出したかったんですけど。やっぱり「頑張った」だけじゃダメなんですよ。もう僕は自分のことを「頑張った」で評価されるような選手じゃなく、DREAMがかつてのPRIDEみたいな熱を生み出すための大きな役割を持ってる選手だと思ってるんで。

――一貫して川尻さんは「自分で格闘技界を盛り上げたい」って言い続けてますね。

川尻　今回も僕が勝てばもっと盛り上がったでしょうしね。もちろん僕は勝つつもりでいたし。僕が格闘技で好きなところは、『0か100か、勝つか負けるか』っていうところなんですよ。

――でも、昨日の一戦は勝負は勝敗だけじゃないってことを見せたいいお手本というか、客席で泣いてる人もいましたよ。

川尻　そうですか……。うん、結果は残せなかったですけど「格闘技っておもしろいな」ってあらためて思えた一戦でしたね。魔裟斗選手はこれまでにたくさんのものを背負って、K―1MAXを支えて結果を残してきた。僕もMMAの世界であぁいう選手になりたいなって思いましたよ。ホント勉強になりましたね。

――なるほど。

川尻　試合後に魔裟斗選手の控室に挨拶しに行って、「引退するのもったいないですよ！」って伝えたら苦笑いしてましたけど（笑）。正直、打たれ弱くなってたり、動きも鈍ってたりしてるのかなって思ってたんですけど、やっぱり強かった。あの舌戦の「俺、いまメチャクチャ強いよ」は嘘じゃなかったです（笑）。

――でもあのときは川尻さんも「何をそんなに偉そうに～」って言い返して、まったく位負けしてなかったですよ（笑）。

川尻　僕、口喧嘩じゃ人に負けたことないですから（笑）。

――一般層にも有名な魔裟斗選手と闘ったことで、川尻さんの認知度も昨日一晩で相当上がったと思います。

川尻　そうですね。それはDREAMへの大きな土産になると思います。今度はしっかり自分の本職に戻って、結果を出したいですね。

――目指すはヨアキム・ハンセンの持つDREAMライト級王座だ、と。

川尻　もちろん！　さっきファンが泣いてたって言ってましたけど、今度はうれし涙でファンを泣かせたいですね。

――次の試合の理想としては、大晦日にタイトルマッチですか？

川尻　どうなんでしょうね。そのへんは主催者におまかせで。まぁ、とりあえずはちょっと休まないとヤバいでしょうね。僕、カルバン戦でもパンチ食らってるし、魔裟斗戦でもダウンしてるんで、しっかり休みを取って充電したいです。……なんか一年に一回はブッ倒されてるんですよね、僕（笑）。

――確かに去年はエディ・アルバレス戦がありましたね。

川尻　やっぱり年齢的なこともあるし、ちゃんと自己管理しないと現役も長く続けられなくなっちゃうんで。自分の身体と相談しながら調整すると……でも休ませてくれるのかな？（笑）。

――10月には古巣の修斗でバーリ・トゥード・ジャパンがありますね。

川尻　う～ん……、ちょっといまはあんまり先のことは考えたくないです。

――あ、その前に8月にはG1クライマックスもありました。

川尻　それ、僕は全然関係ないじゃないですか！

――まだ出場枠が一つ空いてるんで、〝スーパー川尻マン〟としてお願いしやす！（『kamipro Special 2009 JULY』の「川尻達也vs魔裟斗を100倍楽しく観る座談会」を参照）。

川尻　じゃあ、オファーが来たら考えるってことで（笑）。

――魔裟斗戦みたいに〝DREAMからの刺客〟として参戦して、会見とかでレスラーに絡まれたら「何をそんなに偉そうに～」って言い返して……。

川尻　（さえぎるように）あの、僕、試合後で疲れてるんですけど？

――失礼しました！（笑）。では最後に歴史に残る激闘を終えて、いま一番何がしたいですか？

川尻　う～ん……、ドラクエ？（笑）。これから買いに行こうかな。それで当分家に引きこもります！

――しばらくは練習も休む感じで？

川尻　そうですね、身体の様子を見ながら、ラーメンとか唐揚げとか好きなもの食べたり。あ、あとは海に行きたいですね、自然と触れ合いたい。早く取材を終わらせて、東京からわが茨城に帰りたいです（笑）。

――了解です（笑）。では、故郷の自然でまた英気を養ってください！

【09年7月14日／都内・某ホテルにて収録】

魔裟斗選手はこれまでにたくさんのもの

うれし涙でファンを泣かせたいですね

【09年7月14日／都内・某ホテルにて収録】

川尻達也の名参謀が魔裟斗戦を振り返る

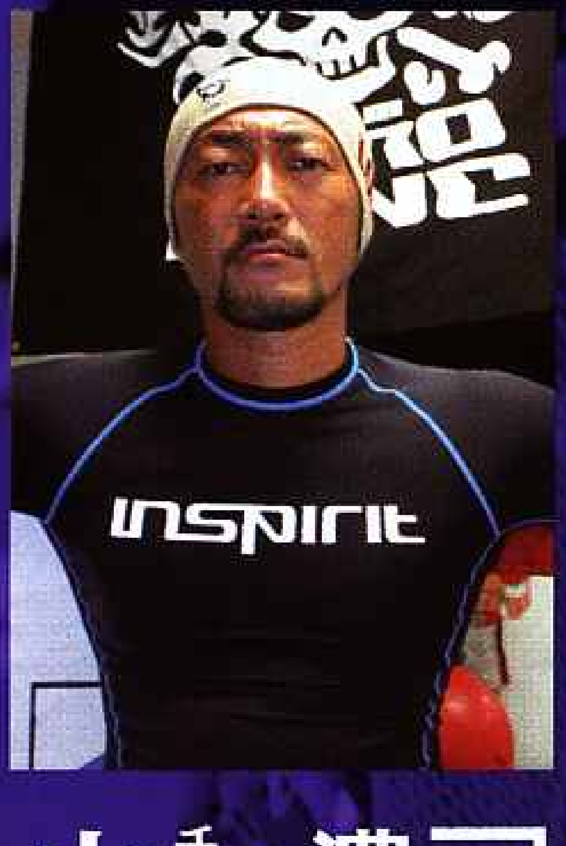
ケンカ祭りのあと

「長いトレーナー人生でこんなに濃密な1ヵ月はなかったね」

チーム黒船船長

山田武士

聞き手／鈴木佑



——山田さん、お疲れさまでした！

山田　いやぁ、やっぱ魔裟斗くんは強かったな〜（しみじみと）。ホント、その一言につきるね。

——あらためて強さを実感した、と。

山田　もともと俺はK—1ファイターとして一番尊敬してた選手だからね。で、実際にそのとおりの選手だったから、結果はどうあれ気持ちよかったですよ。

——試合内容的にはどうでした？

山田　こっちがやりたいことが全然できなかったね。逆に全部先手を打たれたって感じで。俺らとしては去年のK—1 MAX世界トーナメントの魔裟斗くんのように、ただ打ち合うみたいな展開にしたかったんだけど。そうすればまだ勝機も見出せたかもしれない。

——試合前の舌戦ではノーガードで打ち合うってやり取りもありましたけど、いざ試合になるとやっぱり魔裟斗さんもアスリートというか、勝利に徹して。

山田　そうだね。K—1王者として見事な闘い方をされちゃったね。あれだけ距離をうまく取られたら、川尻が飛び込んだところで当たらないし。そうなると必然的にこっちは下がるしかないんだよね。で、その状態で蹴りを出したところに右ストレートを合わされて。まぁ、やられましたよ。完敗！（キッパリ）。

——川尻さんは「この1ヵ月はきつかったけど、山田さんと一緒に打倒魔裟斗を目指して楽しかった」って言ってました。

山田　うん、俺も楽しかったね。だってK—1二戦目で魔裟斗くんだぜ？　そんなキャリアで現役の世界王者と闘うなんて、普通の競技じゃありえないよ。もう楽しむしかないよね。俺は入場前に「ここまできたら楽しもうぜ」って川尻にも言ったしさ。もうお祭りだよ（笑）。

——祭りだワッショイ！（笑）。

山田　そうそう、日本中を巻き込んだケンカ祭り（笑）。試合が終わってから魔裟斗くんと話したんだけど、「今回は舌戦から盛り上がっておもしろかった。プロとして最高でしたよ」って言ってたよ。川尻も魔裟斗くんとやることで名を上げることができたと思うしね。

——最後のタオル投入は山田さんが？

山田　うん。俺はもうちょっと早く投げてもよかったと思うけどね。

——あ、そうですか？　逆にこっちは早すぎるかなって。というのは……。

山田　（さえぎるように）それはK—1だから、ってことでしょ？

——そうです（笑）。通常のK—1だったら続行させてただろうな、と。

山田　川尻がK—1の選手だったら俺も投げなかったかもしれないけど、MMAファイターで、しかもデビュー二戦目だからね。

——あのタイミングで投げるのは、競技性が取り沙汰されることが多々あるK—1への当てつけかなと思いました（笑）。

山田　いやいや（笑）。まぁ、でも昨日もKIDくんがあんな倒れ方したのにカウントを取り続けてたり、安全面に関してK—1はナンセンスって思う部分はあるからね。そもそも俺はずっと今回の試合に最後まで反対してたでしょ？　それは俺が一番打撃の怖さを知ってるからであってさ。だから、あそこでタオルを投げたのは間違えた判断ではないと思う。

——なるほど。

山田　まぁ、とにかくいまは祭りが終わったって感じですよ。あとは川尻が今回得たものをどうMMAの世界に持ち帰るかってことだね。

——あと、今回の試合に絡めてちょっと聞いておきたいことがありまして。

山田　あぁ、俺のライセンス停止うんぬんのことでしょ？　どうも世間を騒がせてすいません（笑）。

——いえいえ（笑）。一部報道で、山田さんがK—1の興行に関わるのは、JBC（日本ボクシングコミッション）のルールにある「他のプロスポーツへの関与の禁止」に違反するということで、東日本ボクシング協会がJBCにライセンス停止の実行処分を要望するっていうことでしたが……。

山田　（さえぎるように）あれは新聞の先走りなんだよね。実際はまだ要望書はコミッションには提出されてないからさ。

——あ、そうなんですか。報道では山田さんは去年も一度JBCから注意を受けたって書かれてましたけど？

山田　うん、石田（光洋）くんが宇野（薫）くんとやったときにね。そのときは「リングサイド内に入ってセコンドを務めるのはやめろ」って注意されたんだけど。

——リングサイドじゃなければいい、と？

山田　そうそう。メインでがっちりやるって感じじゃければかまわないって話になって。だからあの試合以来、俺はリングサイド内には入ってないし。

——そうやって注意も受けて、なおかつ秋山成勲選手のヌルヌル事件のときには、実際にライセンスを一時剥奪されたこともあった。トレーナーにとっては死活問題だと思うんですけど、それだけのリスクを冒してでもボクサー以外の選手もバックアップしたいっていう？

山田　そうだね。今回だったら川尻達也のためでしょ。彼はMMAを背負い始めている一番重要な時期だしさ。選手は俺を信頼してくれてる。それなら俺もその気持ちには応えたいし、それがチーム黒船だしね。

——ライセンス停止に関してはとりあえずは動向を見守るって感じですか？

山田　うん。もしかしたらライセンスを剥奪しない条件として、黒船を解散しろとかメディアには出るなとか、どういうふうになるかは現時点ではわからないけどね。まぁ、俺としては総合だろうが線引きせずに受け入れていきたいよ。昨日もその話になって、川尻には「迷惑かけてすいません」って言われたんだけど。

——ちなみに谷川さんも今日の一夜明け会見で「ボクシング協会と山田さんがこういうことになってるとは知らなかった、申し訳ない」って言ってました。

山田　……それは黒魔術なんじゃないの？（笑）。

——ダハハハ！

山田　まぁ、なるようにしかならないからさ。俺のことはさておき、今回は川尻が魔裟斗くんという本物の男と試合ができて、結果的にはよかったですよ。あの度胸は立派だったと思う。だから絶対に俺も川尻に弱気なところを見せるわけにはいかなかったし。トレーナー人生でこんなに濃密な1ヵ月はなかったね。

——これでこの試合で延期になってた沖縄への家族旅行も行けますね！

山田　う〜ん、でもライセンスの問題もあるしなあ。いつになったら沖縄に行けんのやら……。

【09年7月14日／電話インタビューにて収録】

やまだ・たけし■1973年2月7日、埼玉県出身。JBスポーツ代表。同所にて川尻達也や石田光洋らの合同練習を主宰する、MMAファイターの頼れる兄貴分。思わず「え、本職？」と尋ねたくなる風貌とは裏腹に、家族を愛する心優しきマイホームパパでもある。

――谷川さん、昨日のK―1MAXはおもしろかったですね！

谷川　会見で注目度がガッと上がりましたよね。前回のハルクトーナメントや内藤

7.13K-1MAX大成功も、サダハルンバの呪詛が飛ぶ!!

このままだと 日本はペトロシアンに殺されるよお!

※本当はこんなこと言っておりません。あくまでイメージです。

――谷川さん、昨日のK―1MAXはおもしろかったですね！
谷川　よかったよねえ～！　なんか〝格闘技の神様〟がボクに「まだ頑張れよ」ってささやいてる感じだったよね！（身を乗り出して）。
――そんな勝手なメッセージを受け取りましたか（笑）。視聴率もよかったですし、チケットも完売で会場にはお客さんがあふれてましたね。
谷川　ホッとしました。ホントに完売だったんだよ。だって試合始まってるのに、まだ「なんとか入れてくれ」って電話が鳴ってたもん。島田裕二が「なんとか3枚ほしい」とか言ってきたりさあ。
――谷川さんの天敵からそんな図々しい要求が（笑）。
谷川　「安生洋二がほしがってるんだ」って。でも、そのくらいみんなが観たかったということだよね。
――ここまで盛り上がったのはいろいろな要因があると思いますけど、やっぱり魔裟斗vs川尻戦につきると思うんですね。
谷川　やっぱりね、いい興行、悪い興行というのは、一にも二にもプロモーション力ですよ。その点、今回は見事なプロモーション力だったでしょ。魔裟斗くんが引退するというだけで引っかかってくるし、そのうえでK―1vsDREAM、つまり魔裟斗vs川尻が発表された。そしてあの赤坂サカスで開いた記者会見。これがファンにかなり響いたよね。
――あれはおもしろかった！　あの記者会見で注目度がガッと上がりましたよね。
谷川　前回のハルクトーナメントや内藤大助と同様に、今回の入り口もわかりやすかったよね。で、プロモーションを全力でやったとしても、選手がそれをどう受け止めるかという問題もあるんだけど、今回そこは魔裟斗くんが見事に受け止めてるし、魔裟斗くんが負けたらMAXがなっちゃうという中でよく勝ったなあという感じもしましたよ。しかもさあ、ちゃんと彼の隣にいる選手まで輝やかせるじゃない。
――かつてのKIDさんがそうだったように、今回の川尻選手も輝いてましたね。
谷川　ボク、今回の川尻くんは別人に見えたよ。色気たっぷりだしさあ（うっとり）。
――自称・川尻達也ファンにはたまりませんでしたか。
谷川　たまんない！　だからトクしたのは魔裟斗くんというより、ボクは川尻く

いい興行、悪い興行というのは一にも二にもプロモーション力ですよ

平均視聴率 15.0%
瞬間最高視聴率 19.8%
（魔裟斗vs川尻達也）

ファンとともに多くの業界関係者から「観たい！」という声が届いた魔裟斗vs川尻戦。セミの試合が終わると会場は異様な熱気に包まれ、二人の入場、そして試合では歓声が爆発した。

FEG代表 谷川貞治

**世紀の一戦、魔裟斗vs川尻にサダハルンバ大興奮！
視聴率、観客動員、そして内容すべてにおいて満足度100パーセントの7.13K-1MAXだが、トーナメントの試合に関しては自ら厳しいコメント。
「ペトロシアンに殺される」というその意味とはいったいなんなのか!?**

聞き手／ジャン斉藤　試合写真／乾晋也

勝つと思います？　どっちが勝ったほうがうれしいですか？」って聞かれたし。

コケて、スーパーファイトが全部活きましたよね。KIDの試合にしても、渡辺一久

したし。

谷川　今回って知り合いの人たちがチケ

ないですから。

谷川　試合後のコメントで魔裟斗くんが

『DREAM.9』ジョー・ウォーレン戦で判定負けを喫したKID。続けてMAXにも参戦したが、日本では無名の韓国人ファイターに衝撃のKO負け。この写真も衝撃的だが、この状態でカウントを数え続けるレフェリーはもっと怖い……。

タオル投入は賛否両論だよね。ボク自身は早かったと思ってるし

んだと思うよ。あとさ、川尻サイドの入場のときに最後の最後で佐藤大輔が立ってたじゃない。あれには「DREAMは本気だぞ！」というのを感じたしね！

――ワハハハハ！　何をやってるんですかね、佐藤大輔は。

谷川　でもボクが一番笑ったのは、笹原くんがスペシャルゲスト解説で来たのに「こんにちは」の一言しかしゃべらなかったことなんだけどね。リングも解説もK―1サイドの完勝だよぉ！

――まあ厳密に言うと、2回くらいコメントしてたんですけど（笑）。

谷川　思わずツッコみましたよ、「笹原くん、何しにきたんだよお！」って。本人は「振られないとしゃべれないですよ」って言ってたけどさ、ボクなんか振られなくてもしゃべるからね！　もう、笹原くんがあまりにもしゃべらないもんだから、なぜかボクが川尻くんの応援しちゃったし。以前、『kamipro』で解説特集やってたけど、あれだったらもう笹原くんは最下位です！

――さすが横綱解説者。しかし、魔裟斗vs川尻はもうちょっとあっけなく終わるかなあと思ったんですよ。

谷川　あ、そう？　ボクはもうちょっと川尻くんが頑張るかなって思ってたよ。だからね、タオル投入はちょっと賛否両論だよね。ボク自身は早かったと思ってるし、ボクの中ではタオルを投げないことが川尻くんの最後のこだわりだというイメージがあったから。セコンドに「絶対にタオルを投げないでくださいよ」って言ってそうじゃない。

――川尻本人はともかく、セコンドからすると、本職が総合格闘技であるだけに「ここが死にどころじゃない」という思いはあったんですかね。セコンドがなかなかタオルが投げられないことが多い中、ボクはあの判断は素晴らしいと思いました。

谷川　審判団の人たちからも評価を受けてたよ。あそこでタオルを投げるのは、もの凄くできないことだし、選手のことを考えたら立派だって。でも、一般の人から考えれば、タオルを投げる行為自体が「負けるつもりだったの？」って捉えられがちじゃない。しかも、川尻くんってパンチが当たってもああいう表情だから効いてるようには見えないしね。

――いや、それはもの凄く効いてるでしょ！（笑）。

谷川　あ、本人も「効いた」って言ってた。とくに連打が効いたって。

――そりゃそうですよ。あたりまえですよ（笑）。

谷川　総合の選手はなかなか連打を浴びるということはないから、あんなふうに何回ももらったことが初めてだったんだって。だから「ああ、連打ってこうなっちゃうんだ」という感覚だったらしいよ。

――へえ～。でも、川尻さん本人からそういうお話を聞くなんて、谷川さんもずいぶんと仲良くなりましたねぇ。

谷川　ウフフフ。試合前もたくさんしゃべったんだよ！（得意げに）。「どっちが

勝つと思います？　どっちが勝ったほうがうれしいですか？」って聞かれたし。
——なんて答えたんですか？

谷川　「どっちでもいいよ」って。そしたら「じゃあ、ボク勝っちゃいますよ。勝ったらどうします？」って。それだったら「このままやめるのか！」ってマイクで言ってくれって頼んだんだよね。そしたら「ああ、いいですね。引退をやめさせましょうか」って言ってた。

——あら、そんな軽口までたたく間柄に。

谷川　うん。終わったあとも話したんだよ！「ボク、役不足でした？」って聞かれたんですよ。だから「ぜんぜん！　それにそんな気持ち持たなくていいよ、そんなの川尻くんのための場でもあるんだから」って言ったら、「いやあ、いい選手ですね。あんな選手やめさせたらダメですよ」って言ってくれたんだよ。

——はー、いい人ですね、川尻達也は。

谷川　いいヤツなんだよねえ。好きだなあ、川尻くん（うっとり）。

——き、気持ち悪い。一方の魔裟斗さんともお話しはされたんですか？

谷川　たしかにボクが一方的にしゃべってた気がするなあ。「さすがだね。魔裟斗くんにしかできないよ」って言ったらうれしそうにしてて、「オレやるでしょ？」みたいな感じだったと思うよ。

——でも、魔裟斗 vs 川尻戦が盛り上がっただけに、トーナメントのカードがいまいちだったのが非常に気になりました。

谷川　普段はあんなに悪くないんだけどね。だから本当に興行の流れってあって、トーナメントがよかったら、たぶん魔裟斗くんの試合とかがコケたと思うんですよ。だから今回は佐藤（嘉洋）くん、城戸（康裕）くん含めたトーナメントがらみの試合がコケて、スーパーファイトが全部活きましたよね。KIDの試合にしても、渡辺一久の試合にしても。

——本来なら魔裟斗さんがまだ現役で注目を浴びてるうちに、ほかのMAXファイターがいい試合をして引っぱっていくというのが理想的なんですけどね。

谷川　トーナメントで唯一よかったのが山本優弥くんだけだよね。優弥くんは視聴率でも18パーセントも獲ってたし。あとは一人一人集めて大反省会ですよお！

——（ジョルジオ・）ペトロシアンなんかは〃ゲームの達人〃って感じの試合運びでしたし。

谷川　今回って知り合いの人たちがチケットを買って観に来てくれたり、芸能人が観に来てくれたりしたんですけど、どういうところに反応してるかというと、やっぱり「勇気をもらった」とか「活力になった」とか、そういう内容ばっかりなんだよね。もう、それが格闘技の存在意義なんですよ。でも、あのブアカーオとかペトロシアンの試合からはまったく勇気をもらわないもんね！（キッパリ）。

——通が観ればうなるところはあるんでしょうけど、みんながみんな通なわけじゃないですから。

谷川　試合後のコメントで魔裟斗くんが「闘いたい相手がサワーで、闘いたくない相手がペトロシアン」とか言ってたんだけど、ボク、終わったあとにペトロシアンに言ったらしいんですよ、「闘いたくないなんて言われるファイターなんて最低だよお！」って。

——ワハハハハハハ！　確かに技術は凄いのかもしれないですし、距離の取り方とかも絶妙なのかもしれないですけど。

谷川　勇気も感動もあったもんじゃない。そこがもう一つ足りないんですよね。

——しかし、谷川さんはあいかわらず気持ちいいですね。とてもプロデューサーとは思えない発言だ（笑）。

谷川　そう？　でも、本当に本当につまらなかったじゃん。距離を取ったり前蹴りだけで勝とうとするのはいいけど、まったくおもしろくない。あれはある意味、感心したぐらいだし。なぜ、魔裟斗と川尻の試合であれだけ興奮したのかをもっと考えないと。

——やっぱりボクは魔裟斗と川尻みたいな〃決闘〃が観たいんですよね。視聴率とか競技性も大事なんですけど、そこが一番じゃない。

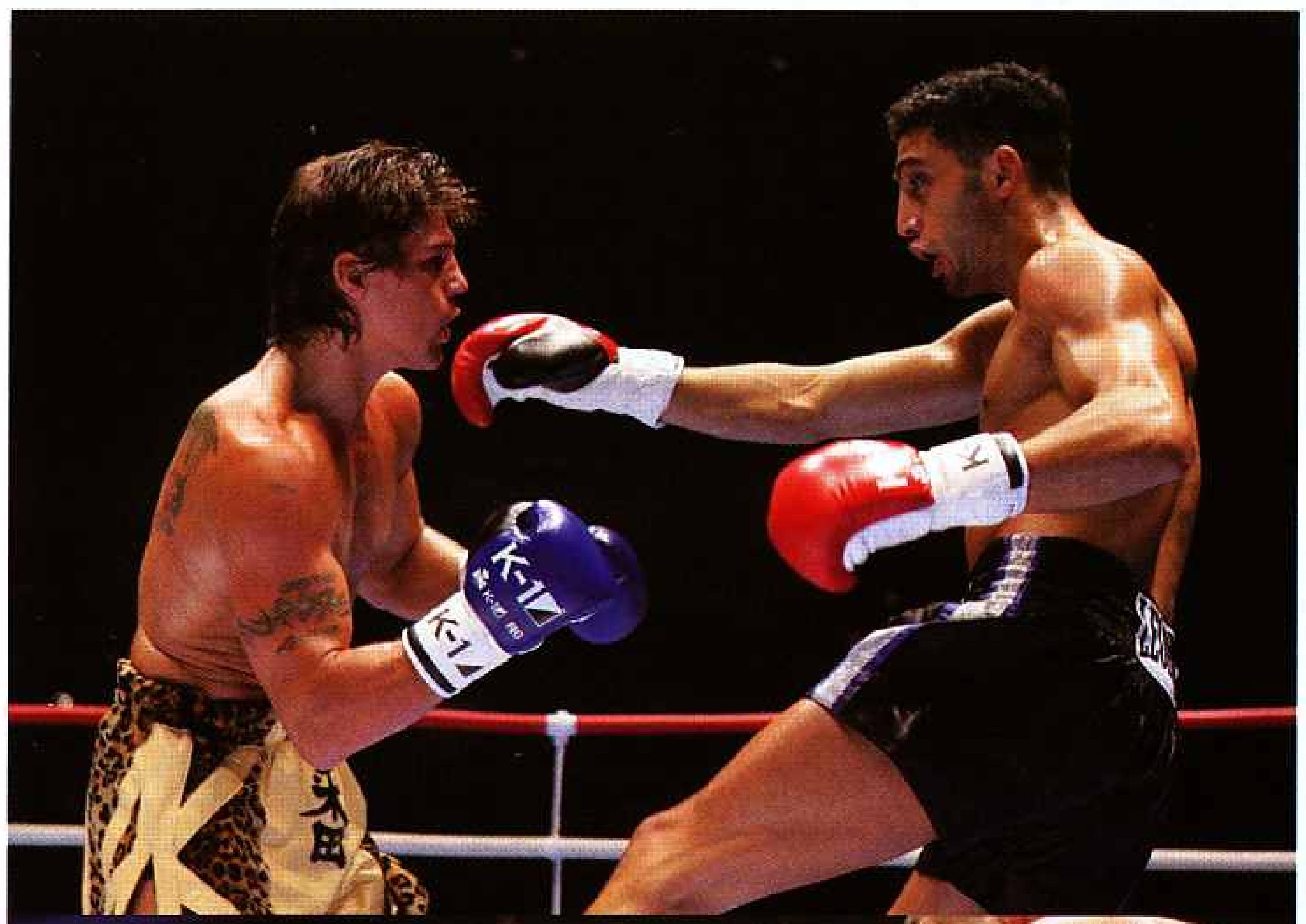
谷川　へんな話、DREAMの選手が「MAXを潰しにいく」って言ったり、MAXの選手が総合に乗り込んだりしたらおもしろいと思うよ。だってKIDのKO負けなんて総合の選手にとっては痛いよ。

——KID選手は総合ではKO負けしたことないですから勲章ですよね。

谷川　ボクもあんな選手に負けると思わなかったよ。ボクとしては、K―1ルールでも総合の選手が上がったら危ないぞというのを見せたかったんだけど、あんなか

ペトロシアンには「魔裟斗くんに闘いたくないって言われるなんて最低だよお！」って言った

このままだと 日本はペトロシアンに殺されるよお！



予想を覆す山本優弥の勝利こそあれ、トーナメントがらみの試合は素人にはわかりにくすぎる内容に。ブアカーオもペトロシアンもトーナメントを意識して堅実に勝ち上がったが、これに対してサダハルンバは「大反省会だよお！」と青筋を立てたのだった。

たちでドカーンって倒れるなんて総合のイメージが傷つくよ。

——そのKIDさんとはお話しされたんですか？

谷川　向こうから何回も話してきたね。「すぐ試合させてください」って。「いまスランプだけど、一回勝ったらガッといくから」って。確かにKIDくんが勝ってくれないとおもしろくないんだけど、やっぱりどこか勘が鈍ってるよねえ。ケガでもしていたのかなあ……。

——ミルコや桜庭選手もそうですけど、一回ヒザをケガしちゃうと……。

谷川　そういう身体的な不安要素が精神的にもくるんだろうね。あんまりマイナスには考えたくないけど、ボクも「道場作るとこうなるのかなあ」とか、「家族を持つとこうなるのかなあ」とかいろんなことを考えちゃうよ（ぶつぶつ）。まあでも、負けたというのは凄くドラマになるし、ようやく〝神の子〟じゃなくて〝人の子〟としてのストーリーができるような気がしますよ。あとはさ、渡辺一久みたいな選手を総合に出すと勝ちそうだなって思ったりするんだけど、でもああいうタイプって競技に慣れるとダメなんだよね。

——サップだってずっと大暴れしていればよかったのに、競技を覚えちゃうとおとなしくなりましたもんね。

谷川　KIDもそんな感じがするんだよ。いま凄くムエタイっぽいじゃない。やっぱり修斗とかDEEPとかで経験を積んで出てくることもすっごい大事なんだけど、ああいう特殊なタイプって勢いで勝っていくところもあるからね。

——KID選手は『DREAM・11』には出るんですか？

谷川　もちろん、ケガさえなければ組みたいですね。でも、どうしたらいいんだろう。なんかチェイス・ビービとか言ってる場合じゃないもんね。かといって、ちょっと追

結局ダナ・ホワイトなんて日本で発掘した選手で商売してるだけ

い詰めたほうがいいような気もするしなあ。今回の相手の韓国人選手にしても「ロト6が当たった感じだ」って言ってたけど、ホントにそうだしね。……でもさ、あの相手、ムカついたよねえ！　入場曲に猪木さんのテーマ曲を使うなんてありえないよ！

——リミックスとはいえ、あれは凄くイヤな予感がしました（笑）。

谷川　あれは許せないよ！　なんか韓国で流行ってるって言ってたけど、ボクが事前にチェックしてたらあんなの流させなかったのに。だって猪木さんに失礼でしょ。

——でも、会場ではなんの反応も起きない時代なんですよ（笑）。

谷川　ボクはダメだなあ。猪木さんに失礼です！（怒）。

——韓国といえば、秋山さんのUFCデビュー戦はご覧になりました？

谷川　それが観てないんだよ。でも、勝ってよかったんじゃない？　どうだったの？

——微妙な判定決着だったんですけど、泥臭い闘い方で秋山の人間性がやっと見えてきましたね。

谷川　へえ〜。興行は盛り上がってたよね。ボクがMMAデビューさせたレスナーも凄くよかったみたいだし。

——クククク。

谷川　だから結局ダナ・ホワイトなんて、日本が発掘したファイターで商売してるだけなんだよ。どうせGSPもつまらなかったんでしょぉ？

——やっぱり谷川さんは気持ちいいですねぇ（笑）。でも、格闘技の競技志向の流れは止まらないような気がするんですよ。ほら、いまは〝遊び〟が許されない時代ですし。

谷川　だけど、「じゃあペトロシアンでいいのか？」って問題だもんね。彼らも必要な選手だけど、でも本来ならああいう選手がベビーフェイスになったときにジャンル自体が盛り上がるんですよ。だってモハメド・アリとかシュガー・レイ・レナードとかはそうだったじゃない。いまは、どうしても彼らがヒールになるし、逆にペトロシアンにパンチを当てた人がヒーローになるみたいな構図に自然となってる。それじゃ「ペトロシアンに勇気をもらいました」にはならないよね。

——「ペトロシアンの距離の取り方に元気をもらいました」というメールが来るようにならなきゃダメ（笑）。

谷川　んあ〜！　そんな時代は絶対に来ないよぉ。

——でも、そのペトロシアンが優勝しそうじゃないですか。ボクは大晦日に魔裟斗vsペトロシアンになったらどうなるんだろうって心配だったんですけど、なんかここまでくると逆に観てみたいです！（笑）

谷川　魔裟斗がペトロシアンに触れることができずに引退したら、もう責任取ってもらいますよお！　まあ、それでも盛り上げるのが魔裟斗くんだけどね。

——ちなみに、数日後に迫った『DREA

このままだと
日本はペトロシアンに殺されるよお!

©Josh Hedges/UFC

サダハルンバが発掘したと豪語するブロック・レスナーは、ついにUFCヘビー級王者にまで君臨！　UFCで活躍するファイターは確かに日本で育った選手も多い気がしなくもない!?

まだ競合団体があるから DREAMは本当の意味での メジャー団体になってない

M・10』のほうはいかがな感じでしょうか？

谷川 えー……その話はいま聞かないでよ（急に声が小さくなって）。

――んあ〜。

谷川 なんかさ、ミルコとかレイ・セフォーを出す予定があったんだけど、それが病気でダメで調子が狂ったみたいだねえ。

――なるほど。でも、2、3年前と違って、いまは有名外国人ファイターが出ることが厳しい時代になってますよね。

谷川 そういう選手で客が来たり何かが変わるということはないもんね。だってMAXなんか外国人選手は本当に超一流ですよ。でも、サワーやペトロシアンとか世界最高峰を並べても、なんか引っかかるかと言ったら、やっぱり盛り上げようという自覚があって試合をおもしろくしてくれるヤツじゃないとダメじゃない。だから山本優弥くんのひたむきさが光ったしね。日本人でも外国人でも、そういう気概がないと客を引っぱれないよね。

――まさにテーマは勇気ですね。

谷川 で、日本人選手に関して言うと、DREAMはまだメジャーの舞台になりきれてないなと思いますね。これは佐藤大輔くんが言ってたんだけど、K－1MAXはそれぞれのキックの団体が凄く確立してて、各団体の選手に固定客が凄くいるって。つまり日菜太くんを応援してる人もたくさんいるし、HIROYAも優弥くんもそうだって。そこに支えられてる感じがしたって言ってた。だから実際、代々木第二ぐらいだと何もしなくても満員になっちゃうんだよ。選手の手売りだけでチケットは売れちゃうから。

――晴れ舞台に上がる選手を応援したいということですよね。

谷川 それは、やっぱりまだ競合団体があるから、DREAMが本当の意味でのメジャー舞台になってないからですよ。でもやっぱり日本の総合でDREAMがメジャーにならないと、総合の未来は明るくないよね。

――石井慧のデビュー戦をTBSが放送するんじゃないかといいう話があるんですけど。

谷川 それはないです。DREAMと『戦極』が協力関係にならないとありえないですね。

――『戦極』を放送するというよりも、石井慧のデビュー戦だけをTBSが放送したい意向があるとか。

谷川 まあ、それは去年なんだけどね。だからFEGと契約しないかぎりは難しいでしょう。

石井参戦で地上波放映が噂される『戦極』だが、サダハルンバは『戦極』との協力をやんわりと否定。しかし、石井の試合が放送されないのは格闘技界にとってはなんとももったいなさすぎる。

――一方でWGPシリーズの発表が遅れたことで、フジテレビとうまくいってないような印象があるんですけど。

谷川 いやいや、そんなことないですよ。ただ海外大会をやる資金がないんですね。いまは海外戦略の立て直しを行なってるところなんです。

――いままでのやり方を変えないといけないと。DREAMってどういう意味でのメジャー舞台になればいいんでしょうか。

谷川 そこはやっぱりDREAMの顔を作らないとダメだよね。いまDREAMにはそういう「顔」がいないもん。今年は本当はKIDくんが顔になるはずだったんだけど……。いま一番いいのは川尻くんだけど、川尻くんがチャンピオンでもないしね。

――川尻達也がライト級で飛び抜けているかというと、そこまでの雰囲気はないですもんね。

谷川 でも、そこで川尻くんがめちゃくちゃ強いチャンピオンになって、それに対抗できるキャラが出てくるといいと思うよ。あ〜、早く川尻くんにチャンピオンになってほしいなあ。

――まあ、谷川さんはペトロシアンの心配でもしててください（笑）。

谷川 ホントさぁ、なんだろうね？ アイツ。誰か潰してくれないかなあ〜。

――クククク。谷川さん、それ、確信犯でペトロシアンのキャラを立ててるでしょ（笑）。

【09年7月14日／都内・某ホテルにて収録】

K-1 WGP 2009 in SEOUL-ASIA GP-
韓国・ソウル／ジャンチュン体育館
8月2日（日）開場15:00 開始16:00（予定）
チケット料金
30,000ウォン（自由席）
お問い合わせ
FEG TEL.03-3796-5060 http://www.k-1.co.jp/

K-1 甲子園 2009 KING OF UNDER 18 -FINAL16-
東京・国立代々木競技場第二体育館
8月10日（月）開場15:00 開始16:00（予定）
チケット料金
SRS席 10,000円／S席 5,000円／A席（自由席）3,000円
お問い合わせ
FEG TEL.03-3796-5060 http://www.k-1.co.jp/

K-1 WGP 2009 in TOKYO
東京・国立代々木競技場第二体育館
8月11日（火）開場17:00 開始18:00（予定）
チケット料金
SRS席 22,000円／S席 10,000円／A席 5,000円
お問い合わせ
FEG TEL.03-3796-5060 http://www.k-1.co.jp/

K-1 MAX 2009 FINAL
神奈川・横浜アリーナ
10月26日（月）開場16:30 開始18:00（予定）
チケット料金
SRS席 25,000円／SS席 15,000円
S席 10,000円／A席 6,000円
お問い合わせ
FEG TEL.03-3796-5060 http://www.k-1.co.jp/

——昨日の山本篤戦、かなりおもしろかったです。

してましたよね。格闘家にもビッグマウスと言われる選手はいますけ

れませんが、大会前の公開会見ではド派手な衣装でピコピコハンマー

という部分では、ほかのK―1の選手についてどう思います?

——はい。存じ上げております。

渡辺　もう別格なんで。日本チャン

KIDの愛弟子
山本篤に圧勝!

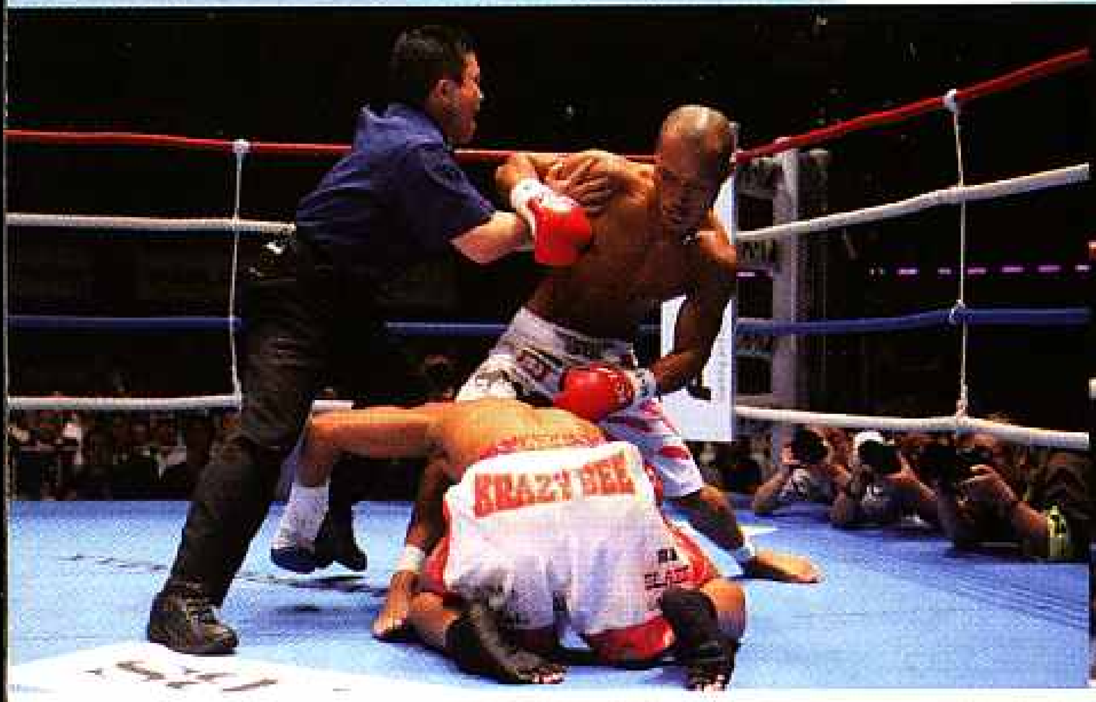
強くて悪くて キップも売る こいつはヤベェ!

日々反省する暴走ボクサー

渡辺一久

暴走ボクサーがK-1初勝利! 06年1月、ボクシング日本フェザー級王座に輝くも、数ヵ月後、反則三昧を犯し1年間の試合出場停止処分。その後ボクシング界で復活するも、結局は引退。新たにK-1&総合格闘技を戦場に定め、09年2月にデビューをはたしたのが渡辺一久だ。今回、KIDの愛弟子・山本篤に圧勝した自称“クソガキ”の素顔とは!?

聞き手／阿修羅チョロ　撮影／山口比佐夫　試合写真／乾晋也



［09.7.13 K-1 WORLD MAX 2009
World Championship Tournament FINAL8］
東京・日本武道館
スーパーファイト

○ 渡辺一久 vs 山本篤×
（1R 2分40秒 KO）

渡辺のK-1ルール2戦目の相手はMMAファイターの山本篤。開始直後こそ山本のローキックを食らう場面も見られた渡辺だったが、その後は得意のパンチやハイキックで立て続けにダウンを奪う。渡辺はそのたびにタックルに来る山本を振り切り3度のダウンを奪って、嬉しいK-1初勝利！

——昨日の山本篤戦、かなりおもしろかったです。

渡辺　あ、ホントっすか。ありがとうございます！

——K—1初勝利となったわけですが、一夜明けていかがですか？

渡辺　嬉しいッスね。名前もあって自分の中で凄く評価してる相手だったんで。

——山本選手とは一緒に練習したり、プライベートでも仲がいいってことでしたけど、試合前は「普通にやれば楽勝」とか強気な発言を連発してましたよね。格闘家にもビッグマウスと言われる選手はいますけど、ここまで自信満々な人って、なかなかいないなって思って。

渡辺　いや、俺の場合はビッグマウスじゃないッスから。前も言ったことあるけど、保険作りたくないだけなんで。だいたい俺、自分より強い人に「絶対勝つ」とか言わないですもん。強い人には「強い」って言うし、弱い人には「弱い」って言うし。ただ正直に言ってるだけッスよ。

——ビッグマウスではないかもしれませんが、大会前の公開会見ではド派手な衣装でピコピコハンマーを持って日菜太選手をブッ叩いたりもしてましたけど、お客さんを楽しませたいという気持ちはかなり強いんじゃないですか？

渡辺　それはありますね。でも、俺といつも一緒にいればわかると思うんだけど、あれが普通なんすよ。べつにパフォーマンスと思ってやってるわけじゃないんで。

——普段からハイテンションだと？

渡辺　そうそう。べつに俺は将来バラエティに行きたいとか、そういうわけでもないし（笑）、そっちの世界にいったらおもしろい人いっぱいいるじゃないすか。

——渡辺さんと同じくボクサー出身のおもしろいタレントもいっぱいいますからね（笑）。

渡辺　ですよね。俺の場合は普段の姿をそのまま出せる機会を設けてもらってるからやってるだけで。とは言っても、プロのファイターっていう自覚は持ってるんで、俺の素を見てくれて盛り上がってくれたらそりゃあ嬉しいッスよ。

——ちなみに、そういったプロ意識という部分では、ほかのK—1の選手についてどう思います？

渡辺　やっぱね、みんな自分の売り込み方がヘタだなって思いますよ。

——プロとして、自分を売り込むのは大事なことでもありますからね。

渡辺　でしょ。プロは常に見られてるんだから。ただね、そこに関して言うと、ボクシング時代ってそういうパフォーマンスをする機会とかもあんまりなかったんですよ。制限もあるし。それで自分の中で葛藤もあって。だからこそK—1みたいな世界に憧れを持ったっていうのもあって。闘うだけじゃなくて。

——ボクシング界のシステム的なところも含めて、ちょっと居心地が悪いなと感じる部分もあった、と。

渡辺　そうッスね。ボクシングはボクシングで本気でやってたんですよ、俺は。一応、日本チャンピオンにもなってるし。

——一応というか、第52代日本フェザー級チャンピオンですからね。

渡辺　でも、自分の場合はあきらめとは違うんですけど、凄い先を見る能力が普通の人より強いんですよ。で、先を見たときに、俺は日本チャンピオンまではいったけど、世界っていうのを見たときに……、やっぱ、世界チャンピオンっていうのは凄いんですよ、ボクシングの世界って。

K—1の選手は、みんな自分の売り込み方がヘタだなって思う

——はい。存じ上げております。

渡辺　もう別格なんで。日本チャンピオンになった俺だから言えるんだけど、もう未知の世界っていうか。そこに挑戦するのもありなんだけど、たまたま俺は世界チャンピオン級の人ともスパーもやったことがあって、そのときに「あ、これは違うな」って思ったんですよね。

——具体的にはどういった違いを感じたんですか？

渡辺　まぐれでチャンピオンになることは、もしかしたらあるかもしれない。ただ、なったところで、自分で世界チャンピオンになったっていう実感が湧くかっていったら湧かないと思って。ならしてもらったとか、まぐれでなれたとしても、それは俺は気にくわないし、それを追い求めてやるのが嫌だったんで。だったら、自分をもっと自由に活かせて、闘いの場以外でも自分のキャラを認めてくれるような世界を考えたら、K—1っていうのがパッと思い浮かんで。それで、すぐに自分の中で区切りをつけましたね。

——それって年齢的にもまだバリバリのときですよね。まあ、いまでもバリバリだと思いますけど（笑）。

渡辺　ボクシングに区切りをつけたのが23ぐらいの頃だったんで。いまからなら全然いけるなって。

——ボクシングの世界って世界チ

ャンピオンはファイトマネーも凄いって聞きますけど、日本王者クラスだと仕事をしながらの人も多いって言うじゃないですか。

渡辺　実際、多いッスよね。

――お金のことも考えてK―1に転向したという部分もあったりするんですか？

渡辺　正直、俺はお金はあんまり気にしてなかったんすよ。それよりも地位と名誉がほしかったっていうか。そうすれば金は自然とついてくるもんだと思ってるんで。

――地位と名誉があれば、ある程度のお金は入ってくるでしょうね。

渡辺　でもね、若いうちは金に目を眩ましたら絶対足もとすくわれるってずっと思ってたんすよ。ただ、毎日楽しく生きていけるぐらいの金があればいいやって思って。俺、ギャンブル好きなんで。

――そんな感じはしますね（笑）。

渡辺　まあ、ギャンブルやるのも渡辺一久の練習の一つですから（ニヤッ）。

――ギャンブルが練習というと、スロットの目押しとかは動体視力が鍛えられるとか言いますけど。

渡辺　そういうのもあるし。あとは、ギャンブルにも浮き沈みってあるんすよ。そのときの人生にスゲー照らし合わせたりもできるんで。麻雀とかしてても、「なんでこんなとこでツモっちゃうの？」とか、やっぱ、流れってあるんですよね。

――あ〜、あるっていいますね。

渡辺　要は勝つときは何やっても勝つんですよ。で、負けるときは何やっても負ける。そういうのってけっこう格闘技とかスポーツの世界に俺は通ずるものがあるって思うし。だから、俺から言わせたら格闘技とギャンブルはセットですね。

――飲む・打つ・買うでいうと、飲む・買うのほうはいかがでしょうか？

渡辺　あ〜、そっちはやんないッスね。もうギャンブルが好きすぎるってのもあるんですけど、酒は下戸なんで（苦笑）。

――体質的に受け付けないとか？

渡辺　そうッスね。まあでも、飲めない酒乱って言われますね（苦笑）。

――それ、一番タチ悪いですよ！（笑）。あと、渡辺選手というと、やっぱり反則についても聞いておきたいんですが、以前、反則はやりたくてやってるわけじゃないと言ってたこともありましたね。

渡辺のK-1デビュー戦となったのが09年2月23日のK-1MAX代々木第一体育館大会での上松大輔戦。渡辺は序盤から反則スレスレの攻撃を連発するも決定打は放てず、3R終盤に自らの頬にパンチを食らわせダウン。この前代未聞の自作自演の自爆劇が響いて渡辺は判定負けとなった。

渡辺　まあ、そうッスね。ただ、ちょっと今回の試合で気づいたことがあって。

――え、何を気づいたんでしょうか？

渡辺　今回、総合の選手と初めて闘って、やっぱ総合格闘家はスゲーなって。闘った篤くんもそうだし、魔裟斗選手と闘った川尻（達也）さんもスゲーと思ったし。

――それはどういった意味で？

渡辺　いままでボクシングのときはボクサーとやって、K―1の一発目のときは上松（大輔）っていうキックボクサーとやったんですけど、総合の選手とやって思ったのは、あの人たちは倒れても無意識でタックルしにいったじゃないですか。

――二人ともダウンと同時にタックルにいってましたね。

渡辺　あれこそ本能だと思ったんですよ。それに比べて、「俺は、はたしてどうなのか？」って凄い考えて。

――渡辺選手も本能で闘うタイプのような気がするんですが。

渡辺　俺は基本的には素なんだけど、反則とかもどっかでパフォーマンスの一部だと思ってやってた部分が多少なりともあったと思うんですよ。なんか勘違いしちゃって。俺はこうじゃなきゃいけない、みたいな。でも、べつにそんなことをやらなくても盛り上がるんだっていうのがわかったし。そういう意味で、反省してるんですよね。

川尻さんたちの本能のタックルを見て、ちょっと反省しました

――〝暴走ファイター〟も反省することはあるわけですね？

渡辺　そりゃありますよ。だって、川尻さんとか本気で「K―1ブッ潰す！」ぐらいの感じで来て、それが観客にも伝わったから、あんだけ盛り上がったわけじゃないですか。

――まあ、そうですよね。

渡辺　そう考えたら、あの人たちのやってることと俺がやってきたことを一緒にしたら、ちょっとまずいんじゃないかなって。へんなパフォーマンスに走るんじゃなく、しっかりした試合だったり覚悟とか技術を見せられたら、もっと俺は光るんじゃないかなって自分でも思って。

――上松戦の前には「これまでくぐってきた修羅場が違う」とも言ってましたけど、当然、ボクシング時代も多くの修羅場をくぐってきたと思うんですが、それ以外でも、かなりヤンチャをしてた時期もあったのかなって思うんですが。

渡辺　まあ、ヤンチャっていうより、俺なんて、ただのクソガキでしたね。世の中、凄い人はいっぱいいるし、逆にいろんな悪いことしてきた人もいると思うんですよ。でも、俺はその人たち以上にあんなことしてきたんだとか言いたくないんで。全然そんなのは自慢にもならないし、べつに暴走族やってたわけでもないし、俺は何者でもないんスよ。

――何者でもない（笑）。

渡辺　見てわかると思うんすけど、ガキなんすよ。しかもクソガキ。もうね、超ガキなんスよ、俺。

――超ガキ（笑）。いつぐらいまで、超ガキだったんですか？

渡辺　いまだにそうッスよ。26歳の誕生日を迎えたときに、お母さんに「おめでとう」って言われたんですけど、そのあとで「いいかげん、大人になりなさい。いくつになったの？」って言われて。たぶんね、15

一時期、『kamipro』でも大プッシュしていた藤門喗裟とも練習をともにしているという渡辺。「門喗裟くんは前蹴りとかもそうだし、スゲーいいもん持ってる。でも、まだ俺には勝てないけどね（笑）」。見るからに真逆のイメージが強い二人だが、どっちも頑張れ！

今回の山本篤戦のチケットは500枚以上は売りましたね

わたなべ・かずひさ■1983年5月18日、山梨県出身。02年11月にボクシングでプロデビュー。06年1月、阿部元一と日本フェザー級王者決定戦を行ない、KO勝ちで第52代王者に輝くも、06年10月の梅津宏治戦で相手を投げ飛ばしたり頭突きを繰り出し1年間の出場停止処分を食らう。その後、09年2月にK-1MAXでの上松大輔戦でK-1デビュー。7.13日本武道館大会での山本篤戦でK-1初勝利。167cm、60kg。見た目と違って意外とマメに更新している渡辺一久ブログアドレス→http://ameblo.jp/watanabe-kazuhisa/

こいつはヤベェ! 渡辺一久

ぐらいから変わってないッスよ。

――見た目はそうは見えないですけど、ハートはいまだに15歳だと？

渡辺　そう。……ってことは全然成長してないんすよ。15から、ずっとトイザらスキッズのまんまなんで。

――トイザらスキッズ（笑）。

渡辺　いつまでも子どもでいたいんすよ。ピーターパンとはちょっと違うけど、永遠のトイザらスキッズっていうか。……トイザらスから何か来ますかね（笑）。

――CMの話とか……来ないでしょうね（笑）。ちなみに今後の野望は何かありますか？

渡辺　野望はね、ボクサーの頃からずっと変わらないんだけど、俺は自分一人でやってるんじゃなくて、常に周りのことを考えてる。周りのことっていうか、自分一人で世界チャンピオンになりたいなんて思ってなくて。「なったところで」って思ってるし、ぶっちゃけ、ベルトなんてほしくなかったし。

――あ、そうなんですか。

渡辺　やりたいのは周りが求めて自分も納得するような試合。たとえば、周りで「KIDと渡辺の試合が観たい」と言うとするじゃない？

――はい。

渡辺　周りがそこまで言うんだったら、俺もやってみてぇ、みたいな感じで盛り上がってくるし。周りが求める相手と俺自身もやってみてぇと思ったカードが一致するような試合。そういうビッグマッチがしたいッスね。あんまり、段階踏んでとかそういうのは好きじゃないで。俺の性に合ってないっていうか。

――トーナメントとかはモチベーションが持続しないんですかね？

渡辺　そう。でもね、一発勝負ってスゲー強いんすよ。

――そのへんはギャンブルと一緒の部分もありますよね。

渡辺　そうそう。何日も前からデータ収集してとか好きじゃないし、「そんなもん勘でいくよ！」みたいな。そういうのが好きッスね。

――流れで言うと、「1面のボスキャラ」の山本篤を倒したら、ホントのボスのKIDさんとやりたいと試合前は言ってましたけど、KIDさんは負けちゃいましたよね。

渡辺　そうなんすよね。総合ルールでもいいかなっていうのはあったんですけど、ちょっと難しいかな。でも、俺は知らないガイジンとかとはやりたくないんですよ。やっても盛り上がんないじゃないですか。

――60キロ級で名前のあるガイジンってそんなにいないですからね。

渡辺　いや、違うんスよ。やっぱ、日本でやって相手が日本人だったら、向こうの応援もそれなりに来るじゃないですか？

――それなりには来るでしょうね。

渡辺　そうなると、相手だけじゃなく、向こうの応援団も倒すことができるんスよ。そんな気持ちいいことないんで。

――そういえば、谷川さんも感心してましたけど、渡辺さんってモノ凄くチケットを売るらしいですね。

渡辺　売りまっせ～！

――ちなみに、今回は何人ぐらい応援団が来たんですか？

渡辺　たぶん、500人以上は来てくれたと思いますよ。まあでも、魔裟斗さんにはかなわないからな。

――でも、魔裟斗さんの場合は女性ファンを中心に……。

渡辺　（さえぎって）まあ俺には「キャーキャー」はないッスけど、俺の場合は本気の500だから！

――それはどういう意味ですか？

渡辺　枚数とかは関係なく、本気で俺を応援してくれる気合いの入った人たちばっかりなんで。

――決して睨みを効かせて売ってるわけではない、と（笑）。

渡辺　いやいや、そういうのはないッスよ。……まあ、この顔なんで、それもできると思うんすけどね（とギロリと睨む）。

――か、買わせてもらいます！

渡辺　まあでも、格闘技ももちろん大切だけど、それを通じて知り合ってくれて、俺の試合を観て、いい酒飲んだり、喜んだりしてくれる人のためにやってるっていうのもあるんで、そういう付き合いは今後も大事にしていきたいッスね。

――今回いい試合もして、チケットもかなり売ったんで、また近いうちに谷川さんからオファーが来るんじゃないですか。

渡辺　まあ、チケット売りやすくて、俺もやる気になるような相手だったら、絶対おもしろい試合になるのは間違いないんで。そのときは損はさせないんで、自分からチケット買ってください（笑）。

【09年7月14日／都内某所にて収録】

勝つんですよ。で、負けるときは何

たいんですが、以前、反則はやりした

ど、反則とかもどっかでパフォーマ

り、俺なんて、ただのクソガキでし

る。でも、まだ俺には勝てないけどね（笑）。見るから

に真逆のイメージが強い二人だが、どっちも頑張れ！

斉藤　今月は橋本さんと八木さんという黒色の組み合わせでお送りいたします。

八木　おそらく携帯電話の件だけだと逮捕はできないんだよ。呼び出しても罰金じゃないよ、いま何時だと思ってるんだって（笑）。

座談会出席者

座長なきあとの時代

座談会

魔裟斗の引退がいよいよになったり、髙田総統がさようなら直前だったり、座長なきあとの時代を迎えようとしております。それに合わせてということもあるのでしょうか、業界のスーパー再編の足音も近づいてきました。さあ、Xデーに備えましょう!

斉藤　今月は橋本さんと八木さんという異色の組み合わせでお送りいたします。
八木　共通点は同い年というだけの二人ですが(笑)。なんでこの組み合わせなの？
斉藤　なんで……？
橋本　何もないのかよ(笑)。
斉藤　え～っと、まず先ほど終わったばかりのK—1MAXの座談会をやらないといけない。で、7・26『ハッスル・エイド』の「さようなら髙田総統」の話もしないといけない。でも、二つも座談会をやるほどページも時間も余ってない。
橋本　つまり「面倒だから一緒にやっちゃえ！」ということ？
斉藤　そのとおりです！　橋本さんにはK—1を、『ハッスル』事情通の八木さんには髙田総統を語っていただきたいと。
橋本　いいかげんだなあ。
斉藤　(無視して)本題に入る前に、まずは三崎和雄逮捕の件から。簡単に事件の概要を説明すると、3月中旬、三崎が車を運転中に携帯電話を使用。警察に停止を求められたけど無視してその場から離れたら、その際に車のバックミラーが警官の手に当たった、と。それから1ヵ月以上経った5月頃に警察から呼び出しを受けて公務執行妨害で逮捕されて。裁判で懲役1年、執行猶予3年の有罪判決を受けてしまったんですよね。
八木　きっと三崎の逃げ方が悪質だったということで、バックミラーが手に当たったことにしたんだろうね、警察は。
斉藤　「逃げ方が悪質」ってどういう逃げ方だったんでしょうね。
八木　停止をしたのに止まらなかったというだけでしょ、ただ単に。
橋本　もしそこで停止していたら駐車違反と同じで罰金で済んだんだろうけど。
八木　おそらく携帯電話の件だけだと逮捕はできないんだよ。呼び出しても罰金や減点で終わるから、公務執行妨害をつけたみたいな。なんかさ、SMAPの稲垣五郎のときと似てるよね。
橋本　そうですね。あれは駐車違反で逃げるときに警官を轢いたとか当たったとか。それがプラスされることで大ごとになってしまうという。
八木　でもさ、わざわざ1ヵ月も時間をかけて追いかけて逮捕するくらいだから、印象として三崎はよっぽどの無視をしたんじゃないかな。
斉藤　「よっぽどの無視」って厳しい言い方ですねぇ。
八木　じつは俺、三崎があんまり好きじゃないのね(笑)。どうしてかというと、『PRIDE武士道』のウェルター級GP決勝ラウンドって、興行が凄く長かったあげく凄くつまらなかったでしょ？
斉藤　はいはい。大会終了後のバックステージで「三崎が優勝するなんてゴッドアングルだ！」って騒ぐ関係者や記者にビックリした記憶があります。そういう問題

8.2『戦極』中村和裕戦はファイトマネー没収のうえ行なわれ、試合翌日から無期限出場停止。ミドル級王座次期挑戦者決定戦と銘打たれているが、三崎は勝っても権利は得られないという不思議な試合。

三崎のやったことは全然微罪だが『戦極』の処分はもの凄く中途半端

じゃないよ、いま何時だと思ってるんだって(笑)。
八木　あのとき「もういいかげんに帰らせてくれ！」という恨みがなぜか俺の中ではメインの三崎のせいになっていて(笑)。で、そういう三崎に肩入れしてない自分からみると「執行猶予つきで試合に出ていいんですか？」というのはありますね。三崎のやったことは全然微罪だと思うし、悪いことしたとは思わないけど、ただやっぱり逮捕されて執行猶予ついちゃったわけだから。芸能人が執行猶予ついたら、とりあえず謹慎でしょ。もし草彅剛が執行猶予つきの犯罪だったら、しばらくテレビに出ていないだろうし。
橋本　一定の謹慎期間は必要っていうのが常識になってますよね。
斉藤　ボクは三崎にはその文句はないんですけど、『戦極』の処分自体がおかしいと思うんですね。とくに「8月2日の試合は出るけど、翌日から無期限出場停止」って意味がわからない。
八木　そこは感じるね。なんか『戦極』はいまの世間の常識とズレてるというか。
斉藤　なんの処分もなしで試合をさせるか、試合中止で無期限出場停止にするかのどっちを選ぶべきだったんですよ。なんだか凄く中途半端というか意味不明。
八木　やっぱり「試合が終わってから出場停止」ってないよな。たとえばSMAPだったら、ライブが8月2日にあるからって、そのあと謹慎処分になんてするわけがない(笑)。
斉藤　ちなみにボクは「罰を与えずに試合させる派」ですね。
橋本　だから『戦極』側の価値観を押し通せばよかったんだよね。「謝罪会見したり出場停止になるような犯罪とは思いません」って言いきったりね。それか試合しないか、どっちかでしょ。終わったら出場停止が確定してる試合で三崎が全力を出せるわけないしさ。これでふてぶてしく三崎が登場して激勝して高笑いでもしたら、〝新・魔王誕生〟になるんだけど(笑)。
斉藤　WWEみたいにアメ車で入場すればいいんですよ。もちろん携帯電話をかけながら(笑)。あと全日本キックの金田会長が結婚詐欺で逮捕された件もビックリしましたね。なんか背後には反社会性力も絡んでいるそうで、これぞ蝶野正洋もビックリの〝ヤ〇ザキック〟だ！
橋本　うまくないよ、全然(笑)。
八木　その件で言いたいのは、俺の師匠は

座談会出席者

八木賢太郎
『ハッスル』事情通ライター。プロレス・格闘技業界の仕事はほとんどしていないにもかかわらず、『ハッスル』の内幕にやたらと詳しい男。本誌の奥付には、いつも非番なのに名前が載り続けている。

橋本宗洋
リバウンド気味の格闘技ライター。いろんなところで連載してて忙しいはずなのに、なんとブログまで開設する男。みんなでチェックだ！
http://d.hatena.ne.jp/N-Hashimoto/

ジャン斉藤
本誌編集長。ブッカーKとシュウ・ヒラタの仁義なき闘いに巻き込まれた被害者。どうでもいいけど、人をダシに喧嘩すんな。こうなったら麻雀で勝負だ！　と意気込む、雀鬼こと桜井章一の元・門下生。

竹本幹男というライターなんだけど。その昔、自費出版で『カジノフォーリー』というお笑い雑誌を出すときに、制作費を得るために偽装結婚をしたんだよ（笑）。

斉藤 ダハハハハ！

八木 いまから30年くらい前の話だから時効なんだけどね（笑）。

斉藤 それを聞いて思い出したんですけど、いまドラゴンゲートの猿虐待疑惑がけっこう騒がれてるじゃないですか。最近ウチは犬や猫とか動物企画を扱ってて、その延長でデンジャー松永に動物虐待の件でインタビューをしたりしてるんですけど。よくよく考えてみるとウチの前の編集長（山口日昇）って、〝犬殺し〟の異名で売り出してたんですよね。

橋本 『kamipro』が言うな、と（笑）。

斉藤 そうそう（笑）。

八木 でも、山口日昇個人の名誉のために言うと、あれは虐待じゃないですからね。酔っぱらったうえでの過失というか事故ですから。本人は朝起きて「誰がこんなことしたんだ!?」って号泣したんだから（笑）。

斉藤 ダハハハハ！

八木 ちなみにそのとき死んだ犬の名前が「ラッキー」。ホントによくできた話ですよ（笑）。

斉藤 しかし、いまなら〝犬殺し〟なんてことは売りにできないですよね。

橋本 そんなこと言ったら、この業界の原点には〝牛殺し〟がいるからね。〝熊殺し〟もいるし、（カール・）ゴッチさんだって犬の効果的な殺し方を猪木さんにずっと教えてたんでしょ。

八木 破壊王（橋本真也）だって空気銃で犬やスズメを撃ったりさ。

橋本 新日本にはさらにタチの悪い新人虐待もあったわけじゃん。俺がビックリしたのは、時津風部屋のリンチ事件が世間を騒がせてるときに、『kamipro』が堂々と昭和新日道場伝説企画をやってて。新弟子のかわいがりをおもしろおかしくネタにしたことだよ。

斉藤 ありましたね、船木（誠勝）とライガーの対談だ！ そうか、いまは時代が変わったんですねぇ。

橋本 いわゆる〝ネット世論〟というやつもあるしね。ワイドショーも含めて、いろんな意味で正義感が強いから。

K―1MAXは日本独特の世界。外国のスポーツで黄色い声援が飛ぶことはない

MAXといえば女性ファン。ブアカーオにもちゃんと黄色い声援が飛んでいる。『kamipro』には縁もゆかりもない世界だなあ……。明日また生きるぞ!!

八木 ネット世論で言えば、いまの世の中からはマイケル・ジャクソンみたいなスーパースターは、もう生まれないって言われてるんでしょ。

斉藤 隙だらけな人間に対して、受け手の楽しみ方が変わってきてるということですね。「眺める」から「叩く」へ。

橋本 たぶん勝新みたいなスターも生まれないでしょ。いまの20歳前後の人が勝新伝説を聞いても、「ただの悪人じゃないか」と思うんじゃない（笑）。

八木 今日のK―1にも佐藤隆太が出てたけど、いま売れてる俳優は、スタッフに気に入られるようないい子が多いんだよね。例外もいるけど、現場でスタッフとぶつかるような人は、だんだん敬遠されてきちゃう。実力や個性よりも、素の人間性が重視されるというか。そのぶんインタビューとかのコメントも普通でおもしろくないことが多いんだけどさ。それは格闘技とかプロレスラーも例外じゃないってことでしょうね。政治家もそうじゃん。

斉藤 それはちょっとつまらないですね。今日の魔裟斗vs川尻でも、川尻サイドの山田トレーナーの言動が盛り上がりに一役も二役も買ったわけじゃないですか。でも、ファンから評判は悪いんですよね、あんなにおもしろいのに（笑）。

橋本 山田さん、遠慮なしになんでも言うしね。

斉藤 ここでやっとK―1の話題にたどり着いた（笑）。八木さんはMAX初観戦だったんですよね？

八木 生で観たのは初めて。K―1は何度か観たことあるけど、MAXの黄色い歓声の多さにはビックリしましたね。

橋本 でも、今日はDREAMファンの野太い声援に中和されてました（笑）。

八木 いつもはもっと黄色いんだ。でも、スポーツでこんなに黄色い世界はなかなかない。日本独特ですよね。外国に黄色いスポーツってないから。

橋本 ヨーロッパのスポーツを見ると驚きますよね、黒さや野太さに。

八木 イギリスだと「女の子はサッカーなんか観に行くな」って言われるらしいから。女子が行くものじゃないって。

斉藤 日本のスポーツ文化が特殊なんですね。どれも女の子がキャーキャー言いますもんね。

八木 何がビックリしたかってブアカーオにも黄色い声が飛ぶでしょ。所（英男）くんとかはわかるじゃん。キシェンコとかもさ。ブアカーオの女子人気は意味わからないなって。

斉藤 じつは女子がブアカーオに会いに行くタイツアーというのもあって、それでブアカーオが勘違いしちゃってるっていう話も聞きますね。

八木 すげ〜。魔裟斗を入り口にして、そこからブアカーオギャルが生まれるっていう。K―1MAXはいい文化なんだな。

橋本 その黄色い世界の武道館で、佐藤嘉洋vsユーリ・メスやペトロシアンの渋い試合もやってるんですよ。

八木 ブアカーオギャルは、ペトロシアンという人のうまさをわかって観てるんですかね。

橋本 まるでわかってないですね。単に

ブアカーオが勝てばいい（笑）。それに今日はほとんどの客にとって、すべてが魔裟

橋本 そうそう（笑）。

斉藤 「彼って80キロくらいから70キロに

かどうか。

橋本 やっぱりさ、テレビ的には主婦層へ

八木 魔裟斗にないってことは、MAXにないと言えちゃうかもしれないね。

ブアカーオが勝てばいい（笑）。それに今日はほとんどの客にとって、すべてが魔裟斗vs川尻の前座でしたし。

斉藤　盛り上がりも内容も凄かったですね、魔裟斗vs川尻。ここまで完成された作品は近年なかったですよ！

橋本　魔裟斗の存在はもともと巨大だったけど、それに対抗できる存在に川尻が転がっていったね。それは二人ともちゃんとこの試合に向き合ったからですよ。

斉藤　魔裟斗も相当おもしろかったですよね。直前会見で、相手の発言を読むと頭にくるから絶対に新聞とか見ないとか言いつつ、川尻のブログをチェックしていることをあきらかにしてたり。

橋本　そうそう（笑）。

斉藤　「彼って80キロくらいから70キロに落とすんでしょ」って。川尻のブログ読んでる魔裟斗を想像するだけで微笑ましいですよ。

八木　確かに川尻みたいにどんどん突っかかっていけば、魔裟斗はどんどん盛り上げられるから。打てば響く存在。そういう意味で今日の二人のプロ意識は高いよね。

斉藤　でも、魔裟斗って感情移入しづらくなかったですか？

八木　俺はテレビで矢沢心の顔を見て感情移入してるウチの嫁を見て感情移入できる（笑）。

斉藤　なるほど。夫が無事に帰ってくるかどうか。

魔裟斗の引退ロード、川尻やKIDの参戦でメチャクチャ盛り上がった今回のK-1MAX。ただしいずれも今回ばかりの限定要素だっただけに、今後のMAXを考えさせられたことも確かだ。

座長なきあとの時代座談会

橋本　やっぱりさ、テレビ的には主婦層へのアピールが大事ってことですね。

斉藤　ボクの家庭の場合は、谷川さんが解説で応援している選手に「負ければいいのに！」とつぶやいてる奥さんを見て黒魔術を感じますね（笑）。

橋本　世間には矢沢心も谷川さんも必要だと（笑）。

斉藤　それで魔裟斗といえば、このあいだ取材したんですけど、テレビのイメージと全然違うんですよね。

橋本　基本的には凄くいいヤツですよ。カメラを向けられたらちゃんと使い分ける頭の良さっていうのもあるけどね。

八木　そういう頭の良さは感じるかな。

斉藤　あと一試合で引退するし、MAXをほとんど扱うことはなかったのに、いまさら魔裟斗の魅力を語ってもしょうがないんですけど（笑）。なんか『ゴン格』とか『格通』はあんまり魔裟斗の人柄みたいのを追ってないですよね。

橋本　有名になった魔裟斗に遠慮してるんじゃない？　まあ『ゴン格』、『格通』はそもそも人柄を追わないけど。

斉藤　そういうもんなんだ。

橋本　俺の場合は、MAXの世界チャンピオンになった頃くらいから、魔裟斗のことをあまり書かなくなったね。書く必要を感じなくなったっていうか。凄い選手だし人間もいいんだけど、俺が思ってる魔裟斗のイメージとパブリックイメージとのギャップがほとんどなくなってきたんだよ。書くことのモチベーションって「本当はこうなんだよ」とか「もっと見えてない部分があるんだよ」というのがあるんだけど、魔裟斗に関してはほとんど過不足ないんで。

八木　魔裟斗にないってことは、MAXにないと言えちゃうかもしれないね。

橋本　もっと技術をわかってほしいとかありますけど。これからのMAXは魔裟斗人気的じゃない黄色くない人気の作り方を模索してかないといけないですよね。

八木　でもさ、結局これってDREAMのためになるのかな。

斉藤　それは今後の川尻次第でしょうね。

八木　いまのところは結局K－1で火がついて、K－1で消化されちゃったところはあるよね。なんかもっと凄い意地悪な言い方をすると、みんなK－1でやればいいんじゃないのって感じにすら思えっちゃって。

橋本　だから川尻がクローズアップされたことが今後のDREAMにつながるかどうか。川尻は〝命懸けで売名行為〟をしたわけだから。これでDREAMファンだけが「川尻よくやった！」と言って、DREAMの中で声援が増えたとかではダメだよね。

八木　川尻のジムにギャルが訪れるようになんなきゃダメだよね。ブアカーオみたいに。

斉藤　もっと言うと、山田ギャルが出てくるくらいじゃないと（笑）。話題は変わるんですが、髙田総統が『ハッスル』からいなくなっちゃうんですよ。

橋本　へえ〜。それは新キャラになるんじゃなくて？

斉藤　完全撤退らしいです。それで7月13日の現時点で7・26『ハッスル・エイド』で髙田総統は試合をやるかどうかも発表されていない。本誌が発売された頃には何かしらカードが発表されてるかもしれないですけど。

八木　MAXの会場で島田裕二さんに会

ったら、「俺と中村カントクの再戦を組めば満員になる（笑）」って言ってたよ。

斉藤　全然意味がわからないんですけど。

八木　それくらい不透明なものになってると（笑）。

斉藤　はあ。髙田総統いなくなって、『ハッスル』は成り立つんですかね？

八木　成り立たないんじゃないですか。だから、それはもう『ハッスル』ではないですよね。今年の7月までの『ハッスル』と、8月以降の『ハッスル』というのは、もしかしたら同義語じゃなくなるんじゃないですか。

橋本　前の『ハッスル』なら「別キャラになるんだろ？」って考えてたけど、そんな感じじゃなくて本当に「さようなら」だと思えてしまうところが残念だよね。

斉藤　『ハッスル』消滅説も一時期ありましたからねぇ。で、『ハッスル』とウチってオーナーが同じでしょ。『ハッスル』がなくなったら、ウチはどうなるんだろうって。

八木　他人事じゃないわけね（笑）。

斉藤　だからってウチが『ハッスル』を応援してるかといえば、あまりそんなことはないから都合がいい話なんですけど（笑）。今後の『ハッスル』はどうなったらおもしろいですかね？

八木　ちゃんと髙田総統をいじって終わってくれないとダメだよね。突然髙田総統なき世界が始まっても凄く困る。やっぱり髙田総統は『ハッスル』の象徴だったわけだから。

橋本　そもそもなぜ髙田総統がいなくなるの？

八木　明確な理由はわからないですけど。

斉藤　本部長（髙田のあだ名）って芸能活動が忙しいじゃないですか。

八木　こういうことまで書いていいかわからないけど、髙田さんが所属しているレプロってけっこう大きい芸能事務所でしょ。こないだこの事務所のホームページを見たら、トップのバナーが新垣結衣と髙田さんのブログ。

橋本　看板タレントだ。

八木　事務所自体が押してるし、去年から今年にかけての髙田さんの活躍は凄いですよ。だって、うちの息子が去年から髙田道場に通ってるんですけど、道場の子どもたちを使う企画でうちの子は2回もテレビに出させてもらってますからね（笑）。

斉藤　その本部長の活躍によって角田信朗のテレビ仕事が減り気味のような気が……。

どうだろう、髙田の躍動感！　このたった一枚の写真からでも、芸能界で活躍できることがよくわかるのである。ノゲイラはまだちょっと固さが見えるな。バカになれ！

座長なきあとの時代座談会

プロレスの器では髙田延彦という個性を許容できなくなったのかもしれない

八木　やっぱり格闘家枠はいつまで経っても一人なんだ（笑）。髙田さんにはいまこそフジテレビで『すぽると！』の司会をやってほしいけどね。あの頃はつたなかったじゃないですか。

橋本　いまならもっと映えますよね〜。総選挙で民主党から立候補するとかないんですかね（笑）。

斉藤　充分にありえますよ！　本部長がさわかや新党から立候補したのときの公約は「校庭に芝生を」ですけど、いまならあの橋下府知事も選挙の公約にしていたくらいですから。

八木　つまり、選挙も『プロ野球ニュース』も早すぎたってことですよね（笑）。

斉藤　しかし、PRIDE統括本部長をやり始めたときは、まさかこの位置まで登り詰めるとは思いもしませんでしたね。

八木　やっぱり本部長から『ハッスル』の髙田総統の流れで鍛えられたというか、うまさが爆発したという部分はあるね。

橋本　選手時代からうまさはありましたけどね。「もう一丁！」とか特殊な言語感覚。「ちょっとだけ時間ください」とか、小泉純一郎ばりのワンフレーズのおもしろさ。

八木　やっぱり『ハッスル』の座長は髙田さんでしょ。梅沢富美男一座から梅沢富美男がいなくなるようなものだから、MAXから魔裟斗が抜けるよりも大きいんじゃないかっていう気がするし、『ハッスル』がこれからどうするのかっていう興味はあるよね。

橋本　魔裟斗がいないMAXはマニアックには楽しめますけど、髙田総統のいない『ハッスル』はマニアックな楽しみ方ってできるの？　たとえば、「いまのマグナムTOKYOやTAJIRIはうまいわ」とかそういう楽しみをできる余地はあるんですか？

八木　どうなんですかね。おもしろくならないとは言わないですけど、どうなるかまったくわからないから。

橋本　たとえば会長（山口日昇のあだ名）が表に出てくるとか。

斉藤　う〜ん、社長が演者として出てくるのはプロレス団体として末期症状だからなあ。

橋本　いや、ビンス（・マクマホン）はそれでずっともってるじゃん。

斉藤　いまの『ハッスル』だとWWEというよりWCW末期になっちゃうからな。脚本家が暴走して、自分がチャンピオンになっちゃったりとか。

橋本　どっちにしろ、あれだけの役者はいないですよね。

八木　結局さ、プロレスの器では髙田延彦を許容できなくなったのかもね。

斉藤　そうか、本部長はプロレスを超えてしまったのか。

八木　マスとかテレビとか大きな世界では受け入れられたのに、プロレスではちょっと手に余っちゃったという。もったいない話ですよ。いまプロレス界でいちばん有名なのにさ。

斉藤　そういえば本部長って、プロレスや

格闘家の肩書きを売りにしてるわけでもないですもんね。髙田延彦で勝負してるから。

八木　健介は髙田と芸能界での立ち位置が違う。健介はどこまでいってもプロレスラーとして出ているし、嫁さんの話をしなきゃいけない。髙田延彦はプロレスと関係ないところで出てたりするからね。本当はもっとプロレス界が共有すればいいんだけど。だから『エイド』での課題はどんないじり方をして終わるかじゃないかな。

斉藤　で、『ハッスル』だけじゃなくて、いまはどこも大変なんですよ。内容はおもしろいけど、ビジネス構造自体に限界にきてるじゃないか、と。

八木　もう一回構造を改革したほうがいいかもしれないね。プロレスも三沢光晴の件があって、いい機会だしさ。

斉藤　このままいくと、日本は〝韓国化〟するんじゃないかと思うんですよね。簡単にいうと、情報は扱われるけど、継続性のある興行はどんどんなくなっていき、自前で文化を発信するものも消えていく。

橋本　『戦極』はそこを改善しようとしているよね。会場規模を落として。

八木　『ハッスル』なんかは目標設定が最初から高すぎるというのはある。

橋本　だから、いろんなものを設定し直す必要があるかもしれない。〝人気がある〟とか〝稼ぐ〟〝有名〟っていうことのレベルをどこに置くかとか。もちろん昔のPRIDEみたいになるのが万々歳だけど。

八木　プロレスも格闘技も含めて、皆ちょっとダウンサイジングして目標数値を下げて設定したほうがいいのかな。

橋本　テレビで有名になる、ビックアリーナで興行を打つ、お茶の間的に有名な人をバンバン出すみたいな方向の売れ方以外を模索しないといけないのかもしれない。

八木　そこはやっぱりやり方次第じゃない。興行は儲からないっていうけど、演劇界はちゃんと儲けてる人いっぱいいるし。昨日、中村勘三郎の歌舞伎を観に行ったけど、あそこなんか1ヵ月のあいだ毎回超満員だし。あと、お笑い界でいま一番営業で儲けているのは綾小路きみまろなんだけど、あれもいいビジネスモデルだよ。お花見プラスきみまろとか、どっかで食事プラスきみまろみたいなツアーになったりするんだよ（笑）。

斉藤　へえ～。

八木　きみまろなんていつも同じことしかやらないんだから。つまり、ベタで不変で同じことやってるのに稼げるという方法は絶対にはある。きみまろは中高年を狙ったことが一番大きいんだけど、格闘技も絶対に何かあるはずだよ。

ファイトマネーの高騰、選手争奪戦とは無縁の『K-1甲子園』。それでいてテレビ向きだし、じつに将来性と即効性を兼ね備えているイベント。あとはTBS＆レフェリー陣のHIROYAプッシュが気にならないような演出が必要だ。

斉藤　そう考えると、K―1甲子園はいちばん可能性があると思うんだけどね。去年のイベントの中で脱・佐藤大輔の色があって、新規層開拓の可能性があって、独自の世界観を楽しめたのはじつはK―1甲子園のディファ有明大会なんですよ。

橋本　話は急に飛ぶけどさ、たとえば落語家で立川談春って人がいて、たぶん日本でいちばん落語がうまい。ライブやると即日完売でチケットなんて獲れない。でも世間は立川談春のことを知らないでしょ。でもそれで立川談春がダメだと誰が言えるのって。

斉藤　そこはモノサシの種類の問題になってきますよね。格闘技で言うと、いまは視聴率が絶対的なモノサシになってるじゃないですか。でもね、視聴率をモノサシするのは谷川さんだけでいいんですよ（笑）。そこから物事を考えていくことも全然いいことだけど、それで選手や試合を判断するのは、自分の価値観がないってことですから。いったい格闘技に何を求めてるんだって話ですよ。

橋本　テレビでやるんだったら視聴率を獲らないといけないけど、そうじゃない価値観は絶対あるし。

八木　格闘技ってさ、毎年大晦日にテレビでやっててけっこう数字を獲ったりしてるけど、格闘技自体の視聴率って凄く薄いよね。俺なんかは周りに観てる人が多いけど、おじさんおばさんまで含めて観てるかというと観てないでしょ。だから、たとえば大河ドラマとDREAMが同じ視聴率を獲ったとしてその密度ってやっぱり凄く違う。NHKの大河ドラマが16パーセントまで落ちたとしても結果的に凄く観てるじゃん。

橋本　生活の一部に組み込まれてるパーセンテージですね。

斉藤　そこから考えると最近の格闘技の視聴率は単なる数字であって、〝現象〟になってないんですよね。去年のワールドグランプリ決勝って知名度皆無のメンツで16パーセントも獲ったんですけど、「K―1がおもしろい！」というムードになってないじゃないですか。たとえば今日のK―1が仮に20パーセントを超えたとして、それで「K―1がおもしろい」とはならないと思うんですね。

橋本　今日ある程度の現象が起こせるとしたら川尻でしょ。

斉藤　あとは山本優弥の期待って凄く大きいし、ボクも試合はおもしろかったと思うんですけど、TBSの山本優弥のイメージ作りってどこかで見たことがありすぎるんですよね。

橋本　典型だよね。世界に立ち向かっていく日本人っていう。で、バイトしてて（笑）。不幸もならさ……。

斉藤　ダハハハハ。つまり安田忠夫の時代からTBSは何も変わってない。

八木　そうか、TBSの原点は安田忠夫なんだ。

斉藤　髙田総統が抜ける『ハッスル』にはいまのところ今後が何も見えないですけど、魔裟斗がいなくなるK―1には安田忠夫が見えてくるという（笑）。

橋本　どっちも不安だなあ（笑）。

八木　談志という遺伝子から談春が生まれたみたいなことを続けていかないといけないと思うんだけどね。あとは、きみまろとブアカーオギャル（笑）。

【09年7月13日／『kamipro』編集部にて収録】

BROTHERS

ラスベガスで衝撃のマッスル・ドッキング!!

石井 慧

“夕焼け番長”
フィル・バローニ
と合体!

“筋肉四兄弟”宣言!!

［友情対談］

石井 慧×フィル・バローニ

6月末よりラスベガスで修行中の石井慧。ランディ・クートゥアーのジムを中心にさまざまなジムで練習をしているが、
そこでひょんなことから、あの“夕焼け番長”フィル・バローニと仲良くなり、いまやバローニの自宅に居候するまでになっているのだという。
そしていまや“筋肉四兄弟”の一員を自称するまでになった石井。
いったいこの不思議な友情はどのようにして生まれたのか。凸凹友情対談をお届けしよう!

聞き手&撮影／堀江ガンツ　通訳／石井史彦

MUSCLE B

——今日は、石井選手がフィル・バローニと仲良くなって、マーク・コールマン、ケビン・ランデルマンを含めた〝筋肉四兄弟〟になったと聞いて対談を企画しました（笑）。

石井　もう身も心も筋肉兄弟の一員です。

——いつの間に（笑）。

石井　でも、まだランデルマンさんには会ってないんで、早く〝次男〟の許しを得たいんですけど。

バローニ　いや、〝長男〟のコールマンがOKしてるんで、問題ないぜ！

——筋肉四兄弟に入るための条件というのはあるんですか？

石井　やはり、まずは筋肉があること。それから、やっぱりエキサイティングな試合をしないと、筋肉ブラザーズに入ることは許されないですね。フィルからは、いつも「キクタみたいな、つまらない寝技で押さえ込むことだけはやめろ」って言われてますから（笑）。

——そんな教えが（笑）。

バローニ　あとはマッスル・ブラザーズの条件として、世界の頂点に立つチャンピオンじゃなきゃダメってことだ。マーク・コールマンはUFCとPRIDE・GPのチャンピオン、ランデルマンも元UFCのチャンピオン、イシイはオリンピック・チャンピオン。でも、俺だけはまだチャンピオンになってないんだよなあ……。

——ダハハハ！　一人だけ条件を満たしてないじゃないですか（笑）。

バローニ　まあ、ポーカーゲームのチャンピオンではあるんだけどな（笑）。

——遊びのチャンピオンですか（笑）。

石井　フィルはブラザーズの中でも歳が近いこともあって、一緒にいてリラックスできるんで、大学とか高校のときの先輩後輩みたいな感じなんですよ。自分が大学から出て、そういう関係の人っていうのはいなかったんですけど、そのときに戻ったような感じでおもしろいです。

フィルからはいつも「つまらない寝技で押さえ込むのはやめろ」って言われてます（笑）

石井がホームステイしているバローニの自宅で行なわれたこの対談。石井のリラックスした表情が、バローニとの仲、そしてその居心地のよさを物語っている。

マッスル・ブラザーズはチャンピオン揃い！俺だけチャンピオンじゃないんだけどな（笑）

バローニ　俺たちはチームであり、家族だからな。

——そもそも、お二人が仲よくなったきっかけはなんだったんですか？

バローニ　最初はランディ・クートゥアーのジムで会ったんだけど、イシイが一人で練習しているのを見て、いくつか教えたい点がでてきて、アドバイスをしたんだ。あと、俺はもともとチャンピオンに憧れてるから、ゴールドメダリストのイシイのことは尊敬しているんで、一緒にトレーニングしたいと思ったんだよ。

——フィルからのアプローチでしたか。

石井　孤独に練習してたんで、話しかけてもらえたのは凄く嬉しかったです。

バローニ　ランディのところは、トレーニングに来る選手がたくさんいるから、自然といくつかグループができるんだ。その仲間同士で、練習が終わったらプールに行ったり、クラブで遊んだり、メシを食いに行ったりするんだけど、イシイはいつも一人だったからな。

石井　かわいそうな転校生でした（笑）。

——なるほど（笑）。そこから一緒にトレーニングするようになったんですね。

石井　フィルはラスベガスで顔が広いんで、いろんなジムに連れていってもらって。一番印象に残っているのは、フランク・ミアさんの家に連れていってもらって、仲良くなったことですね。ブロック・レスナー戦を控えたジムの練習でも、ちょっと練習相手として参加させてもらったりして。こんな経験は、フィルに連れていってもらわなかったらできなかったんで、ありがたかったです。

バローニ　俺はけっこう怠けグセがあって、すぐにビールを飲んでしまったり、ダイエット食じゃないものを食べてしまったり、練習サボってDVDを観ながら寝転んじゃうこともあるんだが、イシイがいるおかげで、サボらずにすんでるよ（笑）。彼がいるから俺も一緒に練習しなきゃならないし、ダイエット食にしなきゃならない。凄く自分のためになってるんだ。

——双方にとって、いい影響を与えてるんですね。

石井　でも、ボクは柔道時代から「この練習やるか？」って言われたら「はい」としか答えられない世界にいたんで、ホントは疲れてるのに、フィルから「午後はこのジムに行ける、夜はこのジムに行けるけど、行くか？」って聞かれると、全部「イエス」って答えてたんですよ。

——「ノー」が言いだせずにいた（笑）。

バローニ　イシイは一切練習を休もうとしないから、一緒に付き合ってる俺はつらくてしょうがなかったよ（笑）。

石井　二人して苦しんでたんですよ（笑）。でも、最近は「ノー」って言えるようになりました。やっぱり思ってることをハッキリ言わないと長く続かないから。

バローニ　俺もイシイから「ノーと言えずにいただけで、自分も苦しかった」って聞いたときは、ほっとしたよ（笑）。

石井　あとフィルは自分に気を使って、毎日、ダイエット食のチキンと卵の白身だけを食べてたんですよ。これも自分が「たまにはビーフも食べたい」って、言いだせなかったからなんですけど。

——そんなストイックな生活を送る一方、〝夜のクラブ活動〟にも何回か連れていってもらったんですよね？

石井　それはもちろんです（笑）。

バローニ　俺の得意分野だからな（笑）。イシイにはせっかく人種のるつぼであるアメリカに来たからには、金髪から黒人か

石井　凄いありがたかったですね。ホテル住まいでタクシーで移動してるときは、食べるものも全部、ホテルのサンドウィッ

輩みたいな感じなんですよ。自分が大学

じゃないんだけどな（笑）

かったです。

石井 それはもちろんです（笑）。

荒野で筋肉ポーズをとる石井とバローニ。江口寿史の「トーマス兄弟」を彷彿させる素晴らしいキャラだ。

MUSCLEB

バローニ 俺の得意分野だからな（笑）。イシイにはせっかく人種のるつぼであるアメリカに来たからには、金髪から黒人から、いろんな人たちと経験を持って、文化交流をすることが必要だからな。

――やっぱり男の経験値が上がるというか、男として強くなるわけですね。

バローニ PRIDEに参戦してた頃、日本人の彼女を見つけたコールマンみたいにな（笑）。

――ダハハハ！　長男を見習え、と（笑）。石井選手がフィルの家にホームステイするようになったきっかけはなんだったんですか？

バローニ イシイに「どこに泊まってるんだ？」って聞いたら、ホテル暮らしで、しかもタクシーでジムまで来てるって言ってたんで驚いたんだ。「タクシーで通うぐらいだったら俺が送ってやるよ。住む家がないなら俺の家に来い」って言ったのが最初だな。

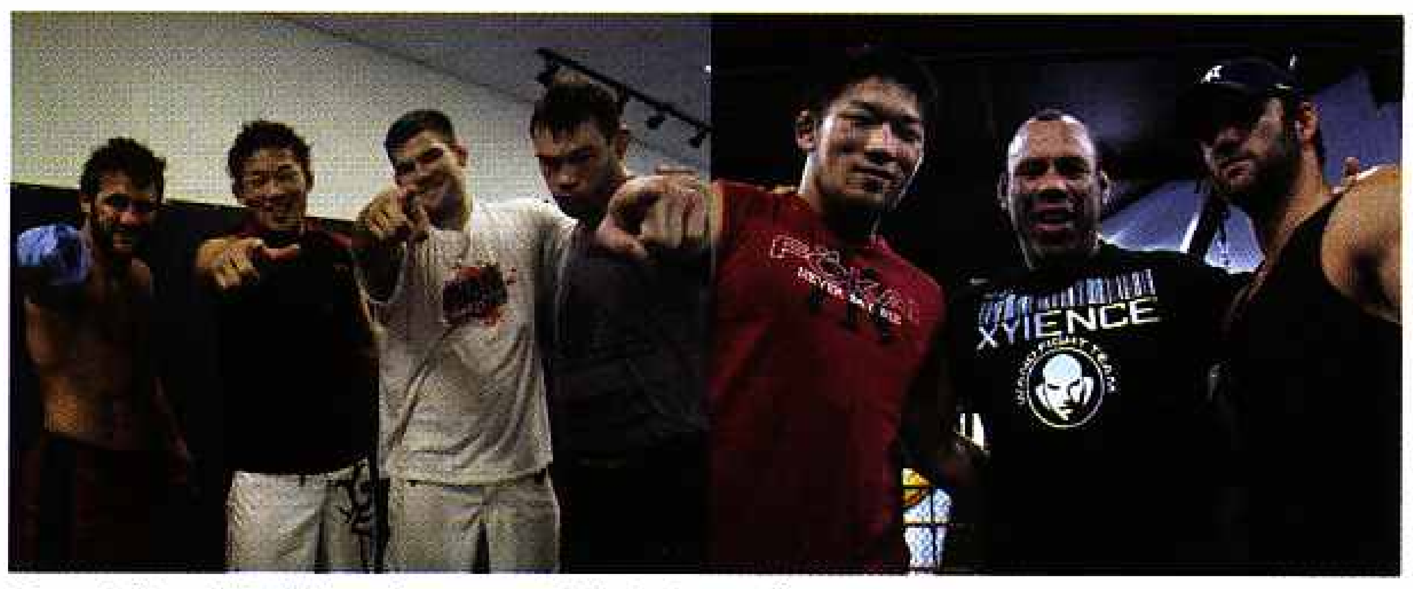
石井 凄いありがたかったですね。ホテル住まいでタクシーで移動してるときは、食べるものも全部、ホテルのサンドウィッチだったんですよ。スーパーに行くにもタクシー代がかかるんで。でも、フィルの家に行ったら、食事もちゃんと考えられたものが食べられるようになったんで、ストロングになれるなって。

バローニ それに俺のワイフもイシイが来ることを喜んでくれたんだ。彼女は陸上競技をやっていたアスリートで、オリンピックに出た人を尊敬しているので、俺がゴールドメダリストを連れてくるって言ったら、大喜びしてたよ。

石井 逆にボクはアマチュアよりプロの人をリスペクトしてるんで、フィルと一緒に生活してると、勉強になることが多いんですよ。

――プロとしての心構えとかアドバイスを受けているわけですか。

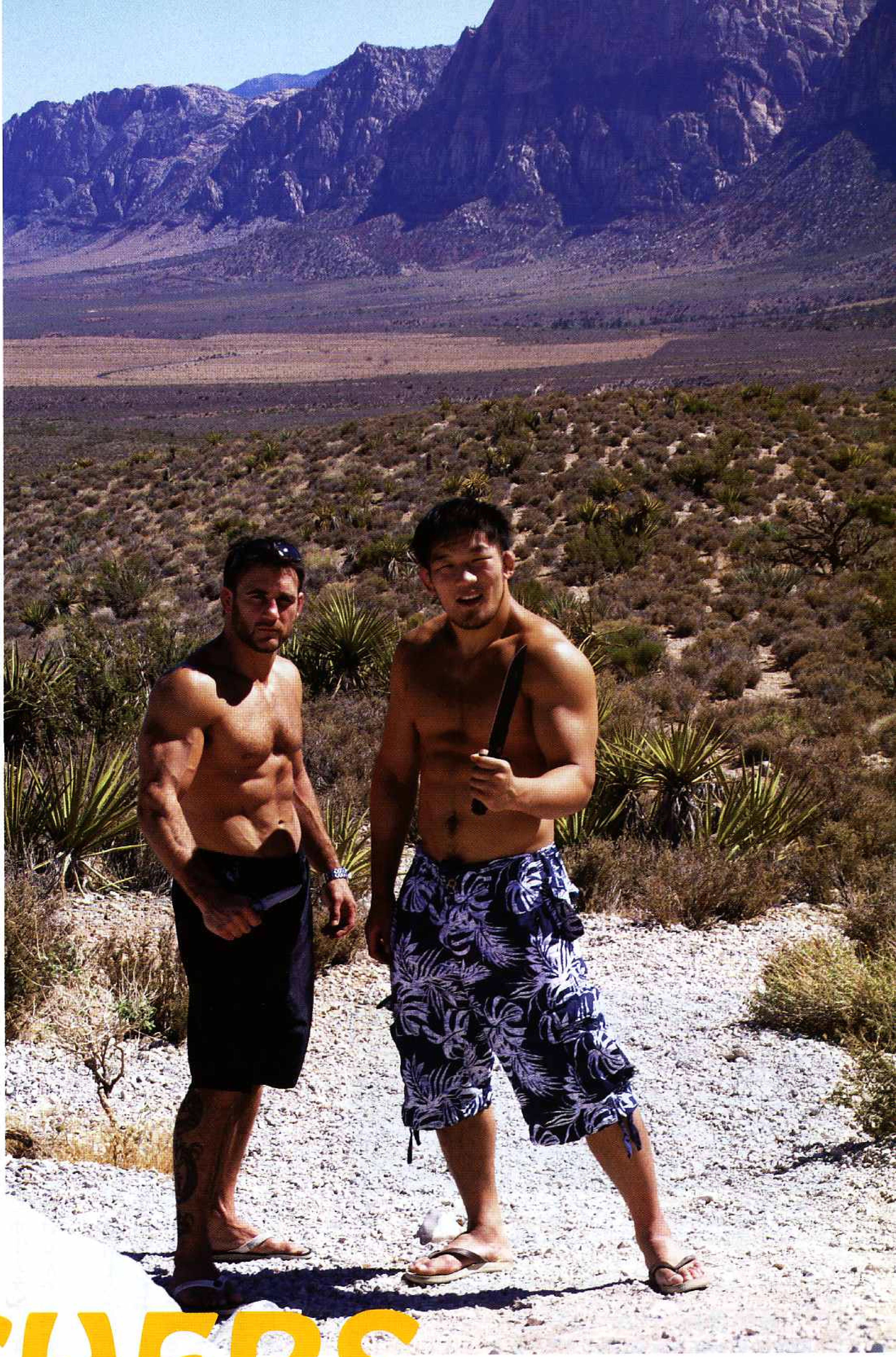
石井 やっぱり、プロの世界はいかに自分



ラスベガスで顔が広いバローニに連れられ、石井はエクストリーム・クートゥアーをはじめ、いろんなジムで練習ができている。ADCC王者ロバート・ドライスデール、フォレスト・グリフィン、ヴァンダレイ・シウバらとの対面も実現。

“夕焼け番長”フィル・バローニ
男泣きエピソード

フィル・バローニといえば、汗と涙と男臭さが売りの筋肉三兄弟の中でも、とくに熱く、涙もろく、デタラメな男であることは、賢明なる『kamipro』読者であるならご存知であろう。中でもとくに有名なのが、07年10月に行なわれた『PRIDE.32』ラスベガス大会後のプレスカンファレンスでの一件。この日、娘をリングサイドに呼び、最強皇帝ヒョードルと闘い敗れたコールマンに対し、アメリカ人記者が「あんな残酷な試合を娘に見せて居心地が悪くなかったか？」とぶしつけな質問をすると、誰よりも熱い男・バローニが割って入り“長男”を熱血擁護。マイクで大熱弁をふるい、記者を黙らせたのだ。「確かに子どもたちにとって、父親が殴られる姿を観るのはつらいだろう。だが、人生とはつらく残酷なものなんだ。子どもたちも、あれだけ殴られながら生きてリングを降りた親父を誇りに思い、自分たちも強く生きていこうと思う日がきっとくる。俺はそんなコールマンの決断を心から尊敬している」



をマネージメントするかってことを言われましたね。あと、いかにして自分を売るか、とか。たとえば、「おまえは腕が太いんだから、それをアピールするために、Tシャツは全部ノースリーブにしろ」って言われたんで、Tシャツの袖は全部ハサミで切りました（笑）。

――あ、それで袖なしTシャツを着ているわけですか。長州力と同じ理由ですね。

バローニ　プロは見た目が大事だからな。

筋肉三兄弟の長男、コールマンが44歳にして、『TUF1』出身のステファン・ボナーに勝利。UFCでの勝利はなんと97年2月『UFC12』でのダン・スバーン戦以来、じつに12年半ぶりという復活劇だった。

俺なんかタンクトップ以外は着ないぜ。

石井　あとは「アグレッシブじゃないと、マッスル・ブラザーズじゃないぜ！　押さえ込みは眠くなるぜ！」とも言われています（笑）。

――でも、昨日はマーク・コールマンが押さえ込みで勝ちましたけどね（笑）。

バローニ　いや、コールマンはアグレッシブに前に出て、グラウンドでハンマーパンチを降り下ろしたからいいんだよ。

BROTHERS

――ところで、昨日のコールマンの試合では、セコンドとしてコールマン以上に興奮してましたよね？

バローニ　オー・イェー！　恥ずかしながら興奮してしまったよ（笑）。

石井　フィルは試合前、自分が試合をするかのように入念にアップをしてましたからね（笑）。

――やっぱり仲間を思う熱さっていうのも、この筋肉四兄弟の特徴なんでしょうね。

石井　試合の最後のほうは、オクタゴンに背を向けて観客を煽ってましたから（笑）。

バローニ　やっぱりプロは、いかに観客を味方につけるかも重要だからな。

石井　フィルがセコンドについてくれたら、日本のお客さんも味方につけられますかね？

バローニ　メイビー。逆に俺が試合をするときは、イシイに助けてもらわないとな（笑）。

石井　ボクもフィルの試合では、フィル以上に興奮しないといけないですね（笑）。

――それぐらいの心の絆は芽生えてきました？

石井　それはもう。

バローニ　短い期間だけども、凄く近い関係になってるよ。

――それぐらい絆が強いと、やっぱり仲間が勝ったときは自分のことのように嬉しいんでしょうね。

バローニ　ああ。昨日、コールマンが勝ったときは、自分のことのように嬉しかったよ。昨日はコールマンにとって、絶対に負けられない試合だったんだ。彼はあの歳だし、前回のマウリシオ・ショーグン戦にも負けているから、今回負ければ契約を切られる可能性があった。でも、切られたってヤツは、サラリーマン生活を送ったことがないから、仕事がないんだよ。

――闘いの場で生きるしかないんだ、と。

イシイがデビューする

てもらって、喜んでいるよ。

――石井選手は早ければ年内にも日本で

ね！

バローニ　フー・イズミ？

石井　オリンピック・シルバーメダリスト。

がないから、仕事がないんだよ、と。

——闘いの場で生きるしかないんだ。

バローニ　そう、9時から5時の仕事ができない男なんだ。だから今回は試合前の練習でも「勝つぞ！」じゃなくて、「ノー・モア・ナイン・トゥ・ファイブ！」っていう檄を送り続けて盛り上げたんだ。それにコールマンは離婚してるんだけど、前のワイフは娘に「あなたの父親はダメな男だ」って教えてるんで、ヤツは娘に嫌われるのが寂しくて仕方がないんだ。

——あのかわいい娘さんですよね。

バローニ　だから、コールマンはそれを見返すためにも絶対に勝たなきゃならなかった。「俺はダメな男じゃないだ！」ってな。だから試合に勝ったあと、コールマンはロッカールームに戻ってすぐ「俺はルーザーじゃない。お父さん、勝ったぞ！」って娘に電話してたよ（涙ぐみながら）。

——熱い男ですね。カッコいいですね。

バローニ　コールマンは「俺は負け犬じゃない」って娘に証明したんだ。UFCからカットされるかもしれない、娘から見放されるかもしれない、そんな崖っぷちな男が、若いステファン・ボナーに勝ったんだから、感情的にもなるよな（涙ぐみながら）。

——映画になりそうな話ですね。

バローニ　『ロッキー5』だよ！

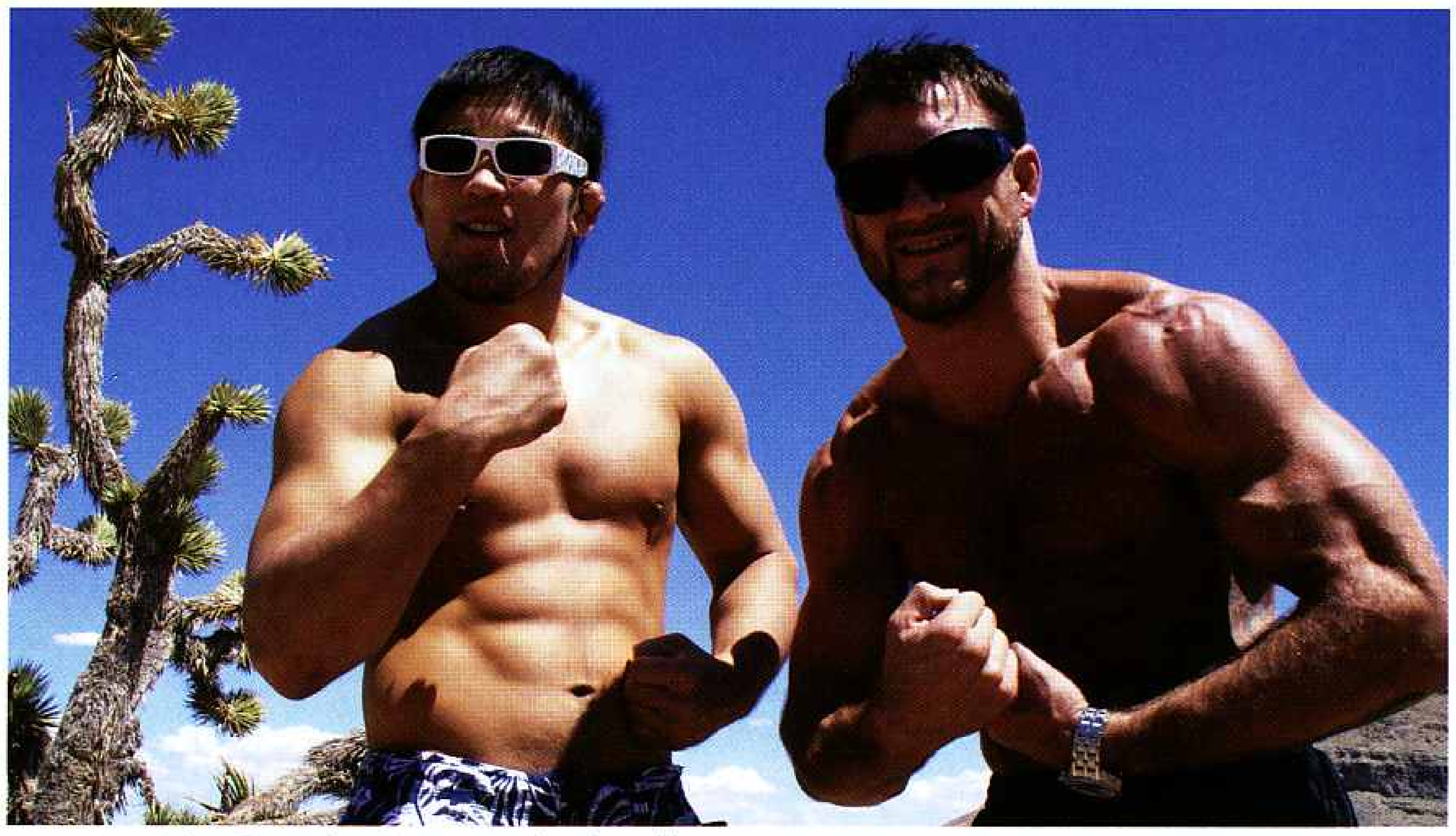
——石井選手もこういう、闘いに人生を懸けてる男がそばにいると、励みになるんじゃないですか？

石井　そうですね。ボクも人生懸けてるんで。それに自分でコールマン選手のDVDセレクションを作るぐらいファンだったんですよ。だから、昨日勝ってホントに嬉しかったです。

バローニ　コールマン自身も、イシイのような素晴らしいアスリートに敬意を払っ

イシイがデビューするときは、俺たち兄弟が全面的にサポートして盛り上げるぜ！

フィルが闘う相手は泉選手なんかいいんじゃないですか？ 勝てば日本で名前が売れるぜ！



いしい・さとし■1986年12月19日、大阪府出身。柔道五段。06年に史上最年少で全日本柔道選手権大会で優勝。08年に北京オリンピック柔道100kg超級で金メダルを獲得。同年11月3日に総合格闘家への転向を発表。今年、『戦極』と出場契約を結んだ。181cm、110kg。

Phil Baroni■1978年4月16日、米国ニューヨーク州出身。2000年にデビューし、UFCで活躍後、PRIDEでは美濃輪育久、長南亮、近藤有己をKO。コールマン、ランデルマンとの筋肉三兄弟として人気を博す。現在はストライクフォースを主戦場とする。178cm、77kg。

てもらって、喜んでいるよ。

——石井選手は早ければ年内にも日本でデビューしますけど、そのデビュー戦にはマッスル・ブラザーズも応援に行きたいんじゃないですか？

バローニ　もちろんだ！　兄弟のサポートは俺たちの役目だぜ！

石井　でも、つまらない寝技で押さえ込んで勝ったりしたら、〝兄弟〟に怒られそうですね（笑）。

バローニ　寝技でもアグレッシブにいけば問題ないよ。

石井　逆に藤田選手あたりにタックルでテイクダウンされて、〝つまらない寝技〟で押さえ込まれないようにしないと（笑）。

バローニ　上になってもガンガン、パウンドで殴るヤツはいいけど、固めるようなヤツにはレフェリーもイエローカードを出して、立たせるようにしないとな。

石井　だからフィルは「アオキ、キタオカは論外だぜ！　あくびが出るぜ！」とか言ってるんですよ（笑）。

——あんなに寝技でアグレッシブでもダメですか（笑）。フィル選手は昨日の秋山成勲選手の試合を観てどう思いました？

バローニ　イシイのほうがはるかにポテンシャルが高いと思ったよ。柔道ではイシイが比べものにならないほど上だが、MMAでもイシイのほうが上だ！

——秋山成勲vsフィル・バローニとかもおもしろそうですね。

バローニ　ノー・プロブレム！

石井　フィルが闘うなら、秋山選手じゃなく、泉浩選手なんかいいんじゃないですか？

——泉浩のデビュー戦の相手がフィル・バローニっていいですね！

バローニ　フー・イズミ？

石井　オリンピック・シルバーメダリスト。

バローニ　体重は？

石井　（フィルより2階級上の）ライトヘビー級だけど、勝てば日本で名前が売れるぜ！

バローニ　オーケー！　ノー・プロブレム！　ぶっ飛ばしてやる!!

——『戦極』にはランデルマンも参戦してるし、『戦極』マットを筋肉四兄弟が荒らしまくるっていうのもいいですね。

バローニ　ぜひ、センゴクには上がりたい。去年、センゴクのオープニングファイトで、俺はケガをしてキクタ（菊田早苗）との試合をキャンセルしてしまったが、ミスター・コクホにそのことを謝りたいよ。俺は日本で試合がしたいんだ！

——では、今後の筋肉四兄弟の活躍を期待してますよ。

石井　最後に一言。吉田でも藤田でも、つまらない寝技で押さえ込まず、かかってこい！　つまらない寝技だけはお断りだ！

バローニ　そうだ！　KOしてやるぜ!!

【09年7月12日／米国ネバダ州ラスベガス、フィル・バローニの自宅にて収録】

“キモ強”北岡、“ネコ柔道”小見川参戦!

『戦極～第九陣～』
フェザー級GP Final Round
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
8月2日（日）開始16:00

主要対戦カード
［戦極ライト級チャンピオンシップ］
北岡悟vs廣田瑞人
［ミドル級チャンピオンシップ挑戦者決定戦］
三崎和雄vs中村和裕
藤田和之vsブラゴイ・アレクサンドル・イワノフ
［戦極フェザー級GP セミファイナル］
日沖 発vs金原正徳　小見川道大vsマルロン・サンドロ

チケット料金
VIP席 100,000円／RRS席／30,000円
SS席 17,000円／戦極シート 17,000円
S席 12,000円／A席 7,000円

お問い合わせ
WVR　TEL.03-5381-7108

え〜、皆さま、すでに結果はご存知かと思いますが、
7.20『DREAM.10』詳報は7月29日（水）発売のカミスペでチェック!

は やれたのか!?

8.1『アフリクション』、8.2『戦極〜第九陣〜』直前情報
から全女・松永会長追悼企画もあるでよ!

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special

全国書店にて
7月29日（水）
発売予定!!
※地域によっては
発売日が多少遅れるかも。
ばいーん!

2009 AUGUST
定価=880円（本体838円+税）

eb! enterbrain 株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555（代表） http://www.enterbrain.co.jp/

いまこそ苦しみの中から
破壊王チョップ!
プロレスは続くよどこまでも!!

プロレスラーのあり方を問う!!

特集

プロレス

プロレスはどうあるべきか。プロレスラーたちは何を表現すればいいのか。
プロレスに正解はないのはわかっている。
しかし、考えざるをえない状況にプロレス界が追い込まれているのは確かなのだ——!!

スはどこに いるのだろう

今月号の表紙は、4年前の05年7月11日に亡くなられた破壊王・橋本真也さんの在りし日の姿です。

あまりにも突然すぎた破壊王の訃報──。あれから初夏になると破壊王のことを思い出す方は多いだろうし、あの底抜けの明るさはプロレス界にとって何物にも代えがたかった。「元気ですかーっ!?」は猪木さんのキメゼリフだが、本当の意味でプロレス界の〝元気〟の象徴だったのは破壊王にほかならない。

そう、いまのプロレスには破壊王が足りない‼ ここ最近のプロレス界には、いろんなことが起こりすぎている……。

プロレスラーが恐喝で逮捕

6月下旬、都内・渋谷区の飲食店に長時間居座り、売上金約30万円を脅し取ったとして、プロレスラーの橋本友彦ら4人が警視庁に逮捕されていたことが明らかになった。

橋本は柔道出身で98年にJPWAでプロデビュー。その後はDDTで活躍したのちフリーに。現在はチームMAKEHENの代表としてMAKEHENやベイダータイムを中心に活躍していた。警視庁は背後に指示役がいると見て、事件の全容を調べているという。

ドラゴンゲートの猿虐待疑惑

ドラゲー所属のレスラーが合宿所で飼っている猿の首を絞めている画像や猿に「お湯をかけている」といった、まるで虐待していると思わせるかのような記述をブログに掲載。この内容が波紋を広げ、今年の3月に「猿が虐待されている」との通報が県警に寄せられ、さらには動物愛護団体が本格的に動き出すほどの事態に発展していた。

虐待を受けていたのは「コラ」と名づけられたニホンザルの雌（推定10歳）。「コラ」は屋外で犬用の鎖につながれ、背中には約5センチ四方の傷跡があったとされている。この騒動に関して事態を重く見たドラゲー側は、6月9日に公式見解として「現時点では動物虐待の事実はない」と否定しつつも、「本当に虐待がなかったのか引き続き検証を行なっている」と発表。また、世間に不快感を与えたとして、当該選手を無期限謹慎処分、岡村隆志代表取締役を謹慎、減俸処分とした。

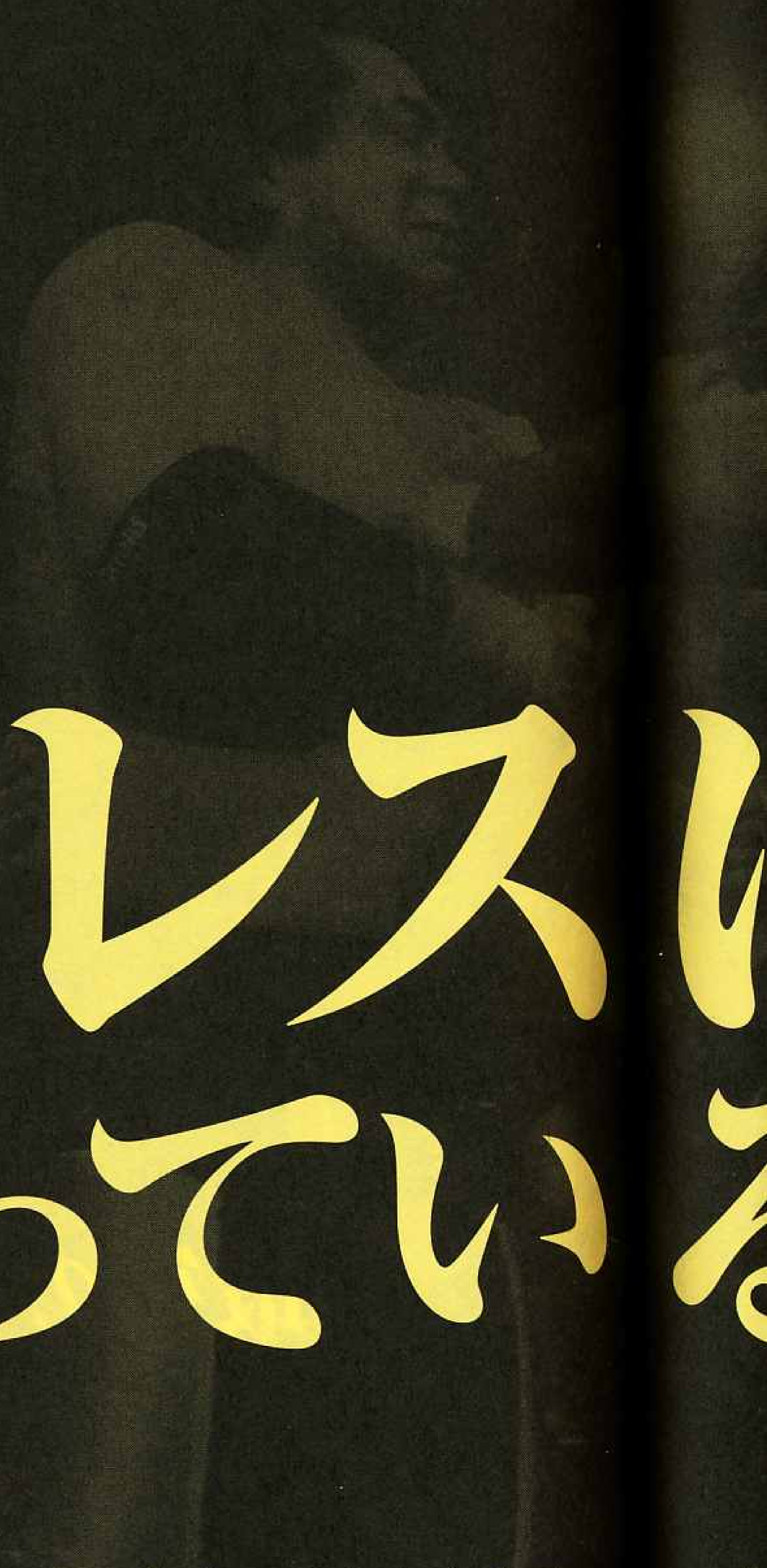
百田光雄がノア新体制発を大批判

ノアの前副社長の百田光雄が、同

団体の新人事発表翌日に辞表を提出。「俺は自分の生き方を通してき

スパイラル。それもフリーやインディーにかぎった話じゃない。メジャ

プロレスは
向かってい



容を調べているという。

ノアの前副社長の百田光雄が、同団体の新人事発表翌日に辞表を提出。「俺は自分の生き方を通してきたから、生き方に反することはできない。いろいろあったけど、あんまりゴチャゴチャ言うのは好きじゃない」というコメントを残したが、7月12日の後楽園ホール大会に来場。報道陣に対して50分にもわたり体制批判を行なった。

『ｋａｍｉｐｒｏ』はノアを取材できないので、そのゴチャゴチャとした詳細は『週刊プロレス』などを参照していただきたいが、簡単に言ってしまうと、主亡き後の〝政治闘争〟のようだ……。新人事で百田は権限がない相談役に就くことが発表されていた。

――いったいプロレスはどこに向かっているのだろう。

「プロレスは笑っちゃうくらい、お金にならない」

『ｋａｍｉｐｒｏ』先月号のテーマは「お金」だった。この言葉は、その特集に登場した黒田哲広インタビューからの引用だが（ちなみに彼はプロレスで１０００万円以上貯めている）、プロレスを取りまく環境はビックリするくらい悪化の一途をたどっている。

数年前から比べるとギャラは50パーセントも下がり、試合数は３分の１以下になっているという負のスパイラル。それもフリーやインディーにかぎった話じゃない。メジャー団体にだって、ほかに仕事を持ちながらリングに上がるレスラーがいる。そうしてでもレスラーたちは身体を張り続けている。そして46歳のレスラーが社長業を務めながら、夜にはリング上で30分近くも身体を張り続けなければならない環境があった。

三沢さんの死を伝える報道の多くは、プロレスの危険性をクローズアップしており、ライセンス制度や協会設立にまで話は発展している。確かにこういった事故が起きてしまった以上、各選手の能力や体格を審査し、健康面のチェックは執り行われるべきだろう。

だが、実際に制度が導入されれば、コンディション面やステロイド等の問題で〝失格者〟が続出するのは〝有名団体〟のほうではないか？という厳しい指摘もある。

ぶよぶよの身体でもプロレスはできる。腹筋が割れた身体を持つからプロレスができるとは限らない。いったい何をもってプロレスラーと呼ぶのか。プロレスと認めるべきなのか――。

そんなものに〝答え〟はない。しかし、我々は〝答え〟を考えなければならない状況にある。

今回の特集は「プロレス」です。

――今日は武藤さんに「プロレス界は
これからどうしたらいいのか」ってい

しい問題が多いんだよ。事故の再発
防止策についてもさ、ドクターを常

い問題だよ。
――あとライセンス問題なんかは、

から集客できるらしいんだよ。でも、
あれはおそらくメディアがついたら

たわけだから、そういう時代ってど
んなカルチャーにとってもいいとき
なんだよ、きっと。

いまこそ苦しみの中から
破壊王チョップ!
プロレスは
続くよ
どこまでも!!

“最後の社長トップレスラー”が語る

三沢光晴亡きあとのプロレス

「俺も三沢社長も尊敬する先輩という道しるべがなかったんだよ」

武藤敬司

三沢光晴さんとは、90年代はお互い全日本と新日本の若きエース同士、2000年以降は、
ノアと全日本の社長同士として、同じような境遇で、常に比較されてきた武藤。
そのプロレス界の“両横綱”の一方に起きた今回の大事故について、武藤はどう感じているのか。
そしてマット界のリーダーとして、三沢さん亡きあとのプロレス界をどうしていこうとしているのか。

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／平工幸雄

俺たちは今回、ある意味で三沢社長からチャンスをいただいたと思う

——今日は武藤さんに「プロレス界はこれからどうしたらいいのか」っていうことをうかがいに来たんですよ。

武藤 どうしたらいいって、そんなのわからねえよ！

——そりゃそうですよね（笑）。「俺が聞きたいぐらいだ」って感じですか？

武藤 いや、べつに聞きたかないけどな。プロレス界をどうするかなんて、あんまり他人の意見聞いてもしようがないから。

——自分が思う道を行くしかないという。

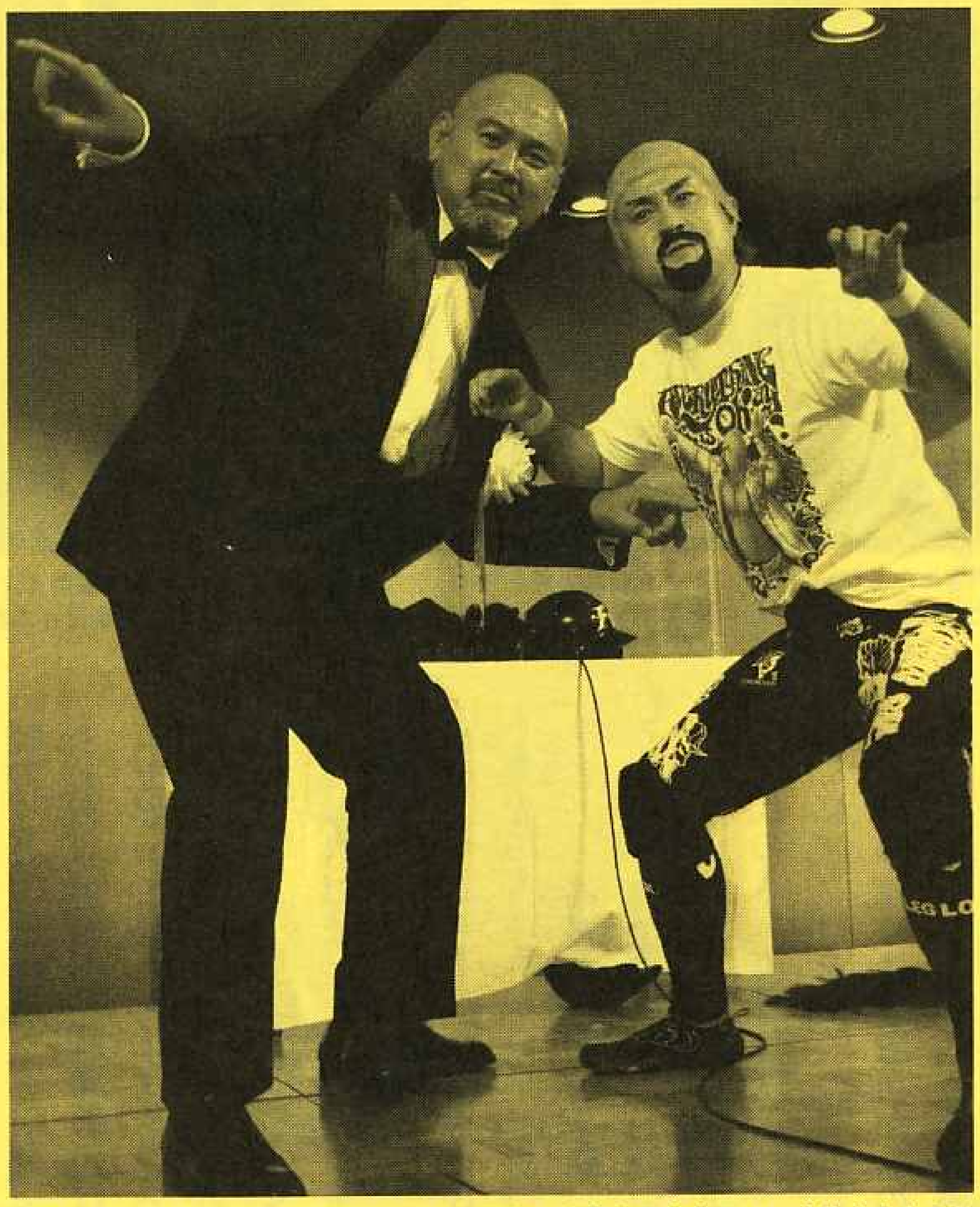
武藤 ただね、三沢社長の件があって、凄く悲しく残念なことではあるけど、ここ2週間ぐらい「プロレス」というワードが凄く世間に広がったと思うんだ。これはある意味、三沢社長の置き土産というかね、これを活かすも殺すも残された人間たち次第だから。そういう意味では、三沢社長からチャンスをいただいた気持ちはあるよな。

——三沢さんの死を無駄にしないという意味ではそうですよね。プロレスの発展は故人の遺志でもあるわけですし。

武藤 ただ、どう邁進していいかわからないよな。この件があって、急に自民党（の文部科学部会）にノアと新日本、全日本が呼ばれて、いろんな先生方の意見も聞いてね。それを持ち帰って考えると、コミッショナーやライセンスについても、やっぱり難しい問題が多いんだよ。事故の再発防止策についてもさ、ドクターを常駐させるべきじゃないか、とか。できることに越したことはないけど、誰がその金を出すんだっていう問題があるしね。

——日本全国で年間100試合以上やってて、そこに全部ついていくっていうのも難しいですよね。

武藤 東京近郊はね、毎回来てくれるドクターがいるんだけど、地方までとなると難しいよ。それでもウチなんかは常時トレーナーはいるし、新日本とかノアにもいる。緊急に備えてAEDなんかも持ってるけど、それでも事故は起きてしまう。難しい問題だよ。



プロレスラーのボーダーが曖昧となった現在。武藤全日本もモノマネ芸人を中心とした芸能人とのコラボ興行に着手。とくに神奈月とは、いまや盟友関係のような感もある。レスラーのライセンス制度導入にあたっては、こういったプロレスの自由な面をどうするかなど、さまざまな問題がいまだに山積みだ。

——あとライセンス問題なんかは、その基準が難しいですよね。

武藤 俺でさえ芸人ともやったり、女の子ともやったりしてるんだからな。神奈月やインリンにライセンスはどうすんだって話だし。まあ、そういうことも考えてはいるけど、3団体で決まりを作ったところで、ほかがやるだろうし。営業を止める権利はねえもんな。

——逆にコミッションに加盟してないところが、その加盟してない強みを活かして、隙間産業でゲリラ的にいろんなことをやってくるでしょうね。

武藤 まあ、表があれば裏もある世界だからね。これは他人から聞いた話だけど、前田（日明）さんがやってる『ジ・アウトサイダー』なんかは、出場するヤツらが〝組織票〟持ってるから集客できるらしいんだよ。でも、あれはおそらくメディアがついたらできないことじゃん。

——おおっぴらにできることじゃないですよね。

武藤 だからあれは隙間産業だよね。裏の産業っていうか。プロレスだってね、アングラに逃げることはある意味、簡単なんだよ。でも、ノアとか全日本、新日本が自民党に呼ばれたっていうのは、やっぱり理由があると思うんだよ。俺だってね、森先生とか松浪先生とか、いろんな先生がいる前で、プロレスの今後について意見交換してさ。プロレス自体がここまで浸透してるっていうのは、逆に光栄に思ったからな。

——プロレスのメジャー性に逆に気づかされたというか。

武藤 俺たちがやってることは、一歩間違えたら昔ながらの旅芸人一座と変わらなくなるけど、ステータスを勝ち取る可能性だってあるんだって。せっかく、先生方がミーティングで集まってくれるようなジャンルで、「プロレス」というワードも、たぶん国民の中にかなり浸透してると思うんだよな。だからそれをアングラに行かせたくねえっていうのはあるよ。

——三沢さんという大レスラーが亡くなって、このままプロレス自体も衰退していくのか、それともここから発展させられるのか、という分岐点ではありますよね。

武藤 やっぱり、どんな世界でも生き残りゲームになってきてる時代じゃん。昔、先輩方がやってた頃のプロレスっていうのは、社会全体が高度成長期で、経済すべてに勢いがあったわけだから、そういう時代ってどんなカルチャーにとってもいいときなんだよ、きっと。

——ジャンルにとっての成長期でもあったんでしょうね。

武藤 そしていま、そういう時代じゃなくなった中で、三沢社長が亡くなって。何が悲しいかって、三沢社長とは生涯で4～5時間しか話してないと思うけど、きっと尊敬する先輩なんていなかったと思うんだよ。俺もそうだけど、それって切ないことだよ。

——目標になる人がいない中で、進んでいかなきゃいけなかったわけですか。

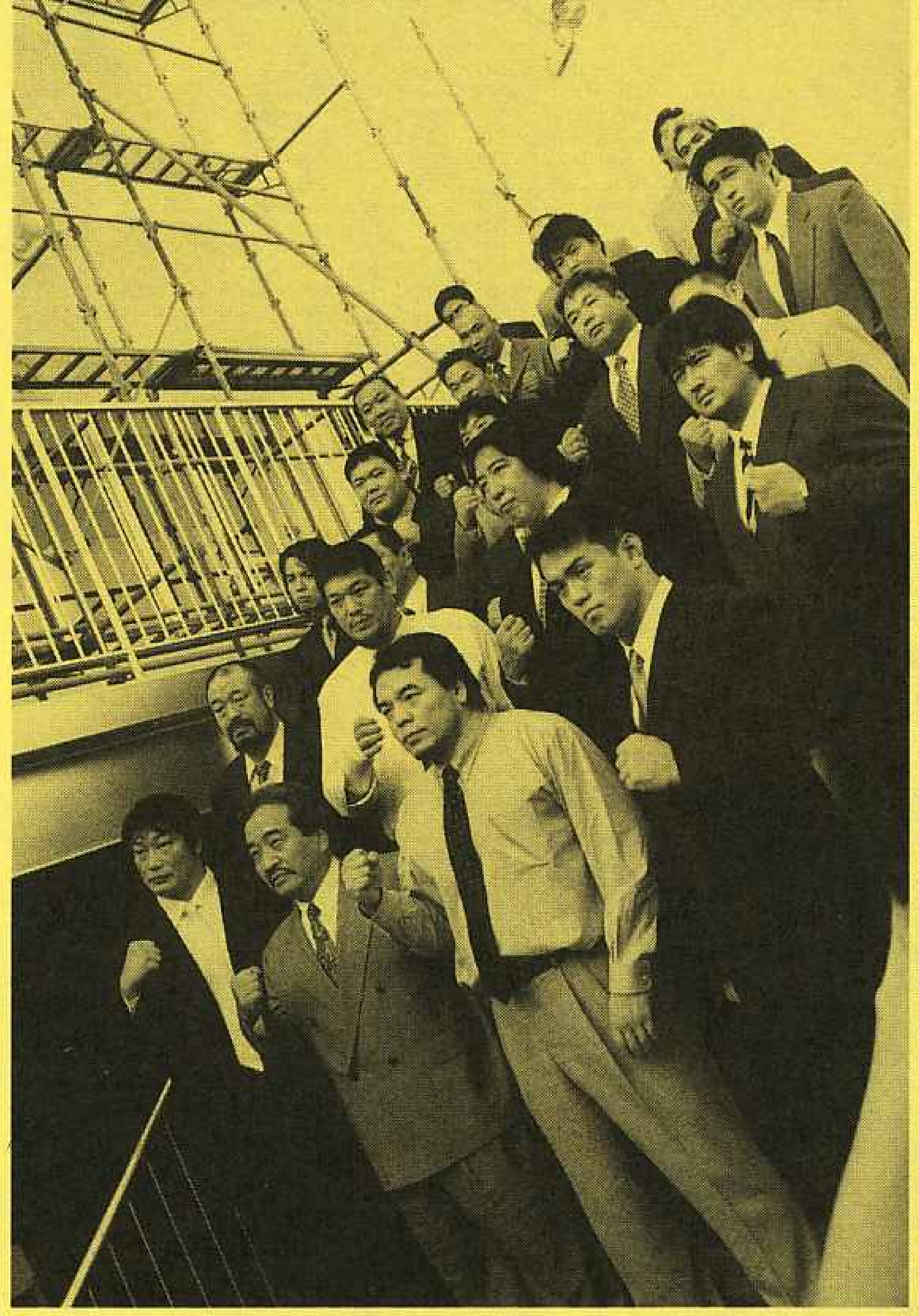
武藤 うん。俺も三沢社長も道しるべがないところで、模索しながら進んでいたと思うんだ。でも、それは同世代で同じような立場で同じように苦しみながらやってきた人間がいるから、頑張れた部分もあるし。その同時代を生きた同志がいなくなったというのは、非常に心細いし、さみしさを感じるよね。

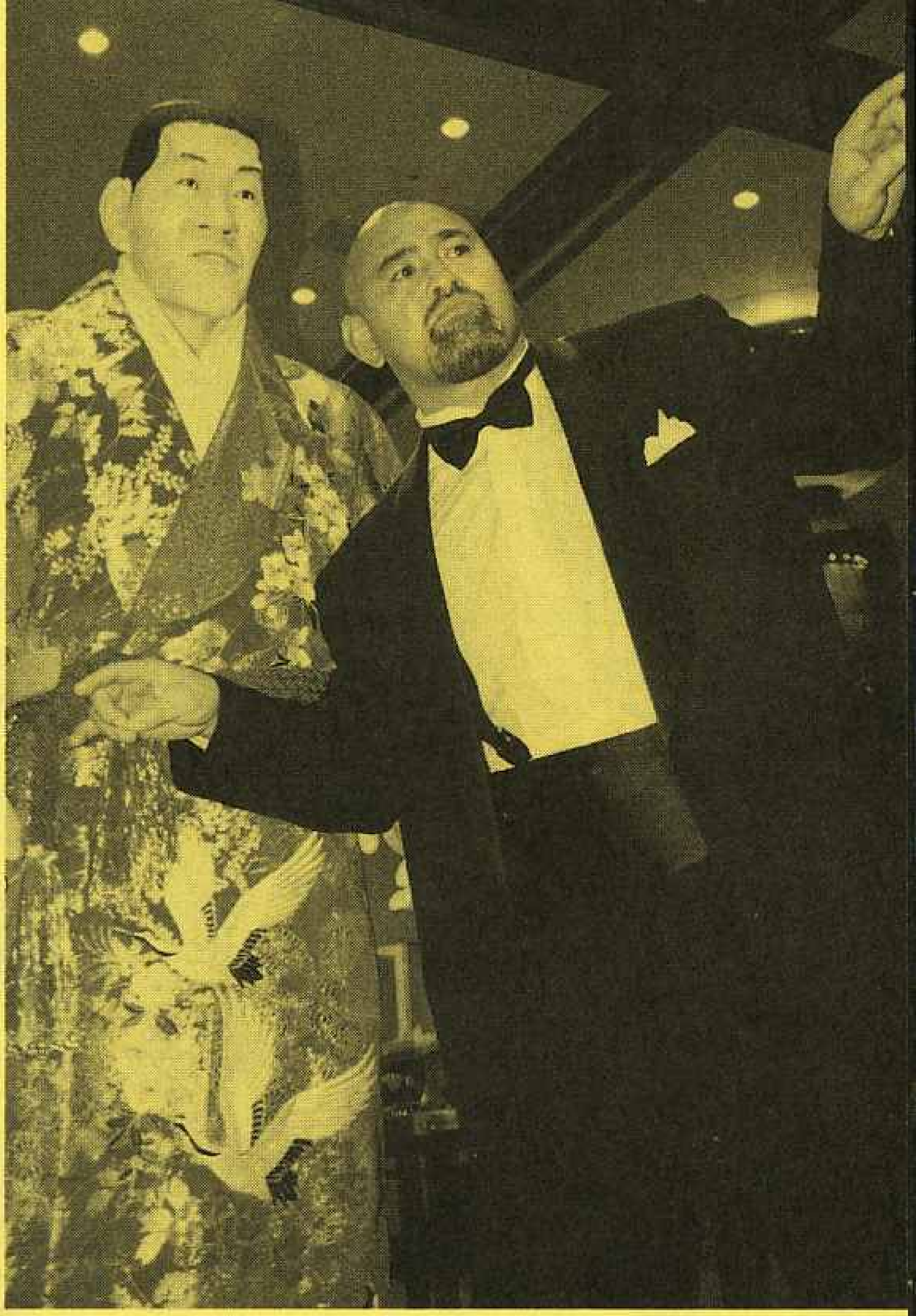
——一緒に仕事はしてなくても、同じ時代で同じような立場だったわけですもんね。

武藤 そうだよ。だから同じような悩みだって抱えてたと思うしな。

——そんな同じ社長レスラーという立場の人が亡くなったことについて、何かしら自分を顧みることにもなりましたか？

武藤 いや、三沢社長の事故っていうのは、試合を観たわけじゃないけど、社長だから起きたのかどうかっていうのはわからないよ。組織は社長一人で回してるわけじゃないし、





三沢さんたちが全日本プロレスから大量離脱し、ノアを設立すると、それと入れ替わるように武藤が新日本から全日本へ移籍。そして、"王道"を引き継ぐかたちとなった。直接的な交流は少なかった二人であるが、間接的には、常に影響を与え合った関係であり、それが近年のマット界の構造でもあった。

オフィスだって俺が巡業に出てるあいだは、誰かが東京の城を守ってるわけだから。それぞれに役割があるっていうだけだと思うからね。

――それを死因みたいなかたちに直結させるのは違う話だ、と。

武藤 そういう要因があったことも否定できないんだろうけど、一概にそればっかり言ってもよくないよ。

――では、今回の事故に対して、何か教訓にしなければならない部分ってありますか？

武藤 まあ、事故についてはさ、いま選手全体がね、気が引き締まってると思うんだ。だからいまは起きづらいと思う。ただこれもある程度時間が経てばまた慣れてきて、また事故が起きやすくなるんだよな。そこが難しいよね。

――いまは地方でも全力ファイトが求められる時代ですしね。

武藤 ただ「全力ファイト」って、何をもって全力ファイトというのかっていう部分もあるからな。そこを履き違えられても困るし。

――危険なことをすることが全力ファイトなのか、という意見は当然出ますよね。

武藤 そうそう。危険なことをやったから、お客の心を捉えられるかっていうと、また別だからね。

――ある選手が「武藤敬司はリングに上がって決めポーズをとった段階で、大半の客が満足しているところが凄い」って言ってたんですよ。そこに危険性はまったくありませんもんね（笑）。

武藤 だからそれは歴史が作り上げた部分でもあるし。〝水戸黄門の印籠〟をどこで出すかっていう難しさもあるしね。俺はデビューした頃からゴールデンタイムに映ってたから、40代50代の人も応援してくれてるけど、そこにアグラをかくつもりはないから。やっぱり武藤敬司がこの歳までやってても、ただ名前を連ねてるだけじゃ応援してくれねえと思うんだ。やっぱり「40代なのに若いヤツとここまでやってるのか」っていう姿を見せて、初めて「武藤頑張ってるな、俺も頑張ろう」っていうエネルギーを与えられるんだと思う。やっぱり年取ると、名前だけ連ねてるヤツらもいるじゃない。食うために上がってるだけなんだろうけどさ。

――でも、武藤さんといえども、年齢を重ね、身体もボロボロになる中で、若い選手と闘うのは危険に思ったりしたことはないですか？

俺も年々退化してるかもしれない。でも違う方法でお客を納得させてる

武藤 どうなんだろうな。俺らが若い頃のほうが、もっとヤバい試合してた気がするんだ。で、プロレスっていうのは、〝さじ加減〟が凄くわからないものなんだよな。

――さじ加減ですか。

武藤 全日本っていうのは、俺がリーダーでやってきてるから、みんな俺の背中を見てるわけだよ。だから俺が老いてきて、ヤンチャにやらなくなったり、俺が楽こいたら、そっちの楽なほうを真似しちゃったりするんだよな。

――武藤さんのベテランとしての動きを若い選手もマネしてしまう、と。

武藤 俺はだんだんアグレッシブじゃなくなるし、ちょっとごまかしも入ったりする。そこだけを若いうちから真似ようとしたりするんだよな。本来は若いヤツらにしかできないことをもっとやればいいのに。まあ、俺のやり方でやってる若いヤツとやるのなんて、俺からしたらやりやすいんだけど。ホントさじ加減が難しいんだよな。

――武藤さんとしては、若い選手はもっとヤンチャでもいい、という考えですか？

武藤 大きな事故があったばかりだから、あんまり奨励できないけどな。これ活字だと伝わるかわからねえけど、要は〝生〟が一番楽なんだよ。（観客を）説得するのも生で入れるのは凄い楽なんだよな。

――生……要はプロレスにおけるフルコンタクト。

武藤 うん。ただ、それを俺らは違う方法論、技術で〝生〟に近づけようとするんだよ。そこで生をチョイスするヤツは、プロとしてはある意味、逃げというか。技術を持ってないからそういうふうになるわけであってね。

――生で入れずして、いかに観客を説得するかがプロの技術というわけですね。

武藤 ただ、若いヤツはホントは生ぐらいのほうが若々しくていいんだけど。で、痛い思いをしながら、うまく洗練されていってね。やっぱり最初から小手先の技術に頼るっていうのも、味のないレスラーじゃん。

――へんな話、どんなにうまくてもわざとらしく見えますよね。

武藤 そうそうそう。

――武藤さんなんか若い頃から、それこそ生一本槍の前田さんとやり合ってたわけですもんね。

武藤 やったよな。こっちは正攻法でやってるんだよ。でも、向こうは生でくるんだから、もしかしたらズルいよな。

――そうですよね（笑）。そういう経験をしたうえで、身体で生に見える技術を培っていく、と。

武藤 生であれなんであれ、お客さんをどう説得するかの方法論だから

三沢社長が育てた王者と闘えるよう
全日本も若い王者を育てていきたい

な。だから、おっしゃるとおり、俺も歳とともに動きは退化してるかもしれないけど、若い頃とは違った方法論でお客さんを説得してるんだよ。

——やっぱり昔の動き回る武藤さんもいいですけど、いまの武藤さんがシャイニング（ウィザード）出すと説得させられますもんね。

武藤　まあ、あれは幸いそこまで〝印籠〟として育ってくれたからね。でも、10年やっても15年やっても〝印籠〟を持てないレスラーもいるからな。そういう説得する方法を作り上げたレスラーが優秀で、作れないレスラーは優秀じゃねえんだよな。

——なるほど。一流のレスラーはみんなそうですよね。猪木さんの延髄斬りにしても、ロックのピープルズエルボーにしても。

武藤　それをどうやって作るかっていうのは、スターをどう作るかと一緒で答えを探すしかないけどな。あとレスラーの身体を守るっていう意味で、全日本がオフィスとして常に心がけているのは、闘うヤツらにテーマを持たせて、お客さんが見やすい環境を作ってあげられるかっていう部分だよな。

——試合自体で盛り上げる前に、対立関係とか状況設定の時点で盛り上げるようにする、と。

武藤　そう。ぶっちゃけた話、たとえば8月30日の試合（武藤敬司&船木誠勝vs蝶野正洋&鈴木みのる）っていうのは、自然が作り上げたアングルというかさ。背景があるから、おそらく入場するだけで観客は興奮してできあがると思うんだ。でも、これがお客がシーンとしてて、観る側にテーマがなかったら、沸かせるために選手が無理するんだ。

——凄い技を出したり、凄い技を受けたりして、客を沸かせようとする、と。

武藤　でも、会社がマッチメイクの段階で盛り上がるものを作り上げれば、そんな必要はないんだよ。だからウチは極力選手に無理させない状況を作ろうと心がけてる。あと一つの興行でいえば、技がかぶるような試合をしないとかね。かぶる試合をしたら、上のほうの試合はかぶった試合とも競争するから、また選手が苦しむよ。技一個増やすとか、もっと危険な角度で落とすとか、そんなことやったってナンセンスじゃん。

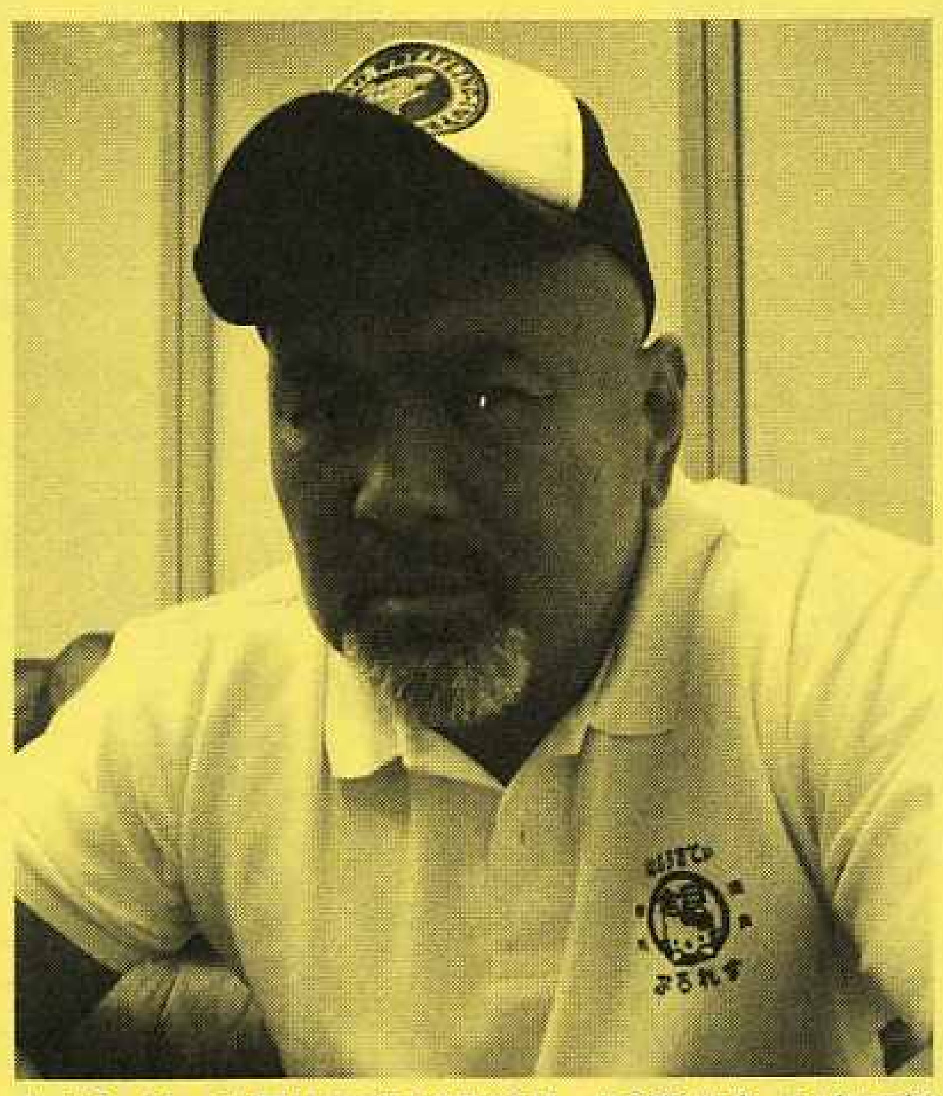
——前の試合でジャーマンが一発出たから、こっちは二発みたいな。

武藤　そうそう。ウチはなるべくかぶらないようにしてるから、そういう張り合いはそんなにないと思うけどね。やっぱりレスラーっていうのは、この客をどう沸かせようかって思うわけだから、そこには無理が生じるよな。

——あと、事故が起きないようにするには、やっぱりコンディショニングというのが一番重要になってきますかね。

武藤　コンディションはもちろん重要ですよ。

——武藤さんなんかは、三沢さん同様、社長として夜のお付き合いも凄く多いじゃないですか。



むとう・けいじ■1962年12月23日、山梨県出身。84年に新日本プロレスでデビュー。その後、80年代末にアメリカでグレート・ムタとして大ブレイク。凱旋帰国後は、闘魂三銃士の一角として、新日本プロレス黄金期を支えた。01年に全日本に移籍し、その後、社長に就任した。188cm、112kg。

武藤　そうですね。やっぱりレスラーにとって、酒とかっていうのは天敵だからな。ドラッグじゃねえけど、溺れやすいじゃん。でも、それも自覚次第なんだよな。俺もね、全日本に来た頃は接待続きで、一時期体重が123キロぐらいまで増えたことがあるんだよ。そうすると、やっぱり調子悪くなるし、いくら練習しても追いつかねえわけだよ。だからいまは、節制してオンオフを作って110キロぐらいまで落としてるけどね。

——夜の付き合いをしながら、コンディションを作るのも社長の仕事だ、と。

武藤　そういう自覚だよな。やっぱりレスラーはビジュアルも重要だし、試合するにはスタミナが必要だし。俺なんかは60分やることはないけど、ときには30分ぐらい試合しなきゃいけないときもあるし。年取っても〝窓際プロレス〟やってない自負がある連中は、そこでも勝負したいな、と思うわけだよ。そうすると、生活は自然とストイックになってくるよな。

——全日本プロレスとしては、今後、どういった方針でプロレスを行なっていきたいとか、そういう考えはありますか？

武藤　とにかく何がプロレス界にとってベターな道なのか、道なき道を探っていくしかないよな。そう言っても、三沢社長が亡くなられて、ウチもすでに何戦もしてるからね。止まってられないからさ。

——あとは8月30日の両国国技館を成功させるってことですかね。

武藤　もちろんそうだよな。メインは25年前に同じ釜を食ってた人間が、みんなそれぞれ違う道に行った中で、また25年ぶりに集まるわけだから。一つの確かめであり、感概深いものがあるよな。

——船木さんの復帰というのも大きいですよね。

武藤　まあ、その絡みが一番おもしろくなるよな。このマッチメイクは船木ありきで考えたマッチメイクだから。でも、船木の出場が決まらない可能性もあったわけだよ。そのときは、三沢社長のところにお願いに行こうかなって、ホントに思ってたんだ。

——そうなんですか！

武藤　やっぱり自分の25周年という区切りの興行だから、三沢社長に出てもらうっていうのは意味があることだと思ったし。で、あの人はきっと「ノー」とは言わない人だろうって思ってたしね。まあ、実際は船木が決まったから、話しには行かなかったんだけどね。

——そうだったんですか……。

武藤　でも、もう俺と三沢社長の夢の対決なんかもできなくなっちまったんだもんな。だからあとは、ノアも三沢社長が育てた若いチャンピオンが生まれたわけだからさ。俺と三沢社長の試合は実現しなかったけど、俺たちが育てた若いチャンピオン同士は、いつ闘う日が来てもいいように、全日本も若いチャンピオンを育てなきゃいけねえなって思うよ。

【09年6月29日／都内・全日本プロレス事務所にて収録】

『全日本プロレス
プロレスLOVE
in 国技館 Vol.8』
8月30日(日) 東京・両国国技館
開場15:00 開始16:00

決定対戦カード
[武藤敬司デビュー25周年記念スペシャルマッチ]
武藤敬司&蝶野正洋 vs 船木誠勝&鈴木みのる

チケット料金
プレミアムシート 15,000円／
特別A席10,000円／特別B席10,000円／
指定A席7,000円／指定B席5,000円／
2F特別席5,000円／2F指定席4,000円

お問い合わせ
全日本プロレス　TEL.03-3288-0610

——今回は三沢さんの事故を機に、
あらためてプロレスというものを考

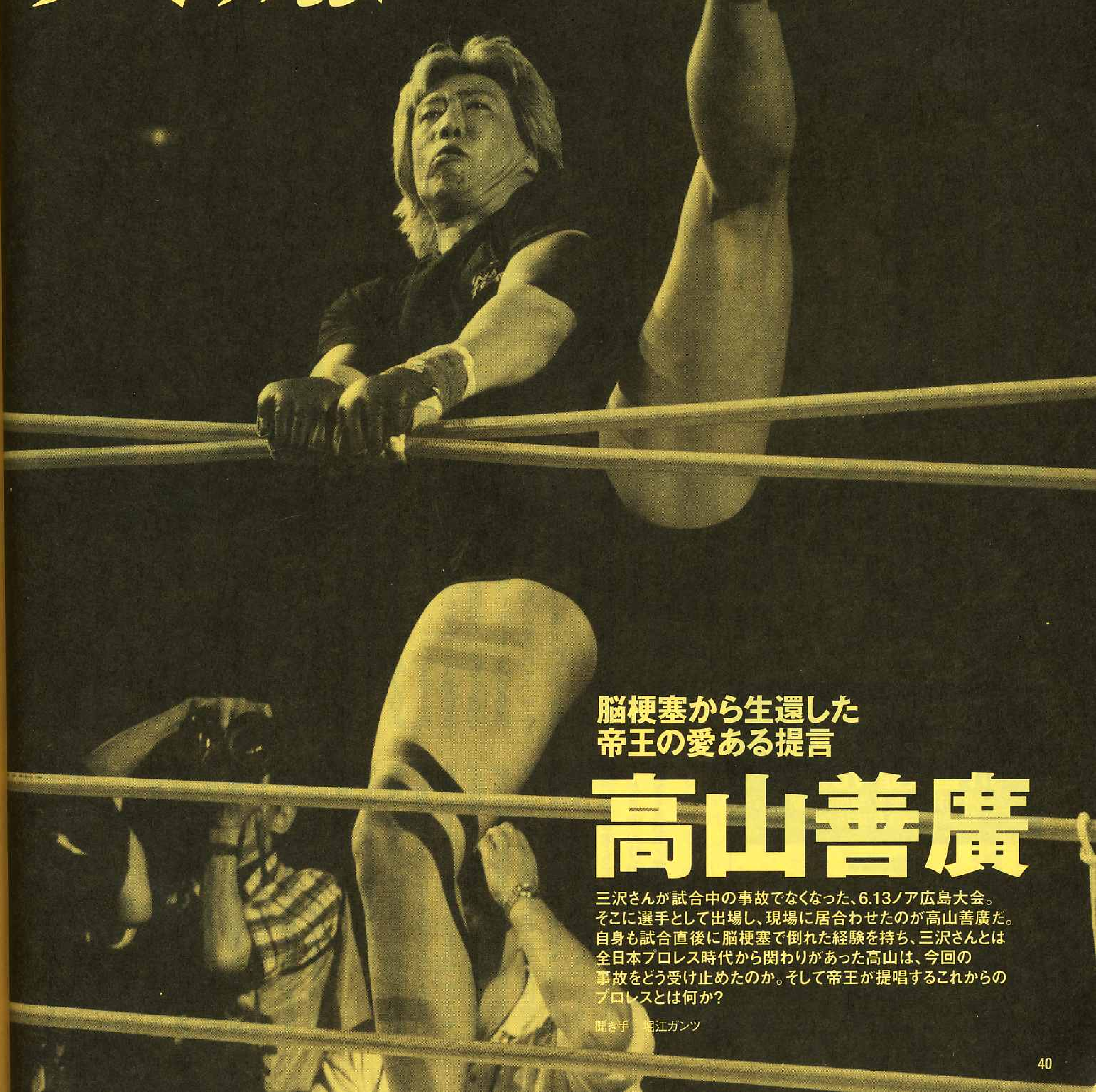
ったけど、ここ最近、三沢さんがずっ
と疲れてるっていうのは、みんな知

けですよね。
高山 日常だし、たぶん昨日痛めて

したよね。
高山 それもあって昔から身体には

ことはできない。元四天王なんかは
場外に落とすのなんてあたりまえに
やってるもんね。俺はあれ大嫌いな

俺は〝四天王プロレス〟が大嫌いだった



脳梗塞から生還した帝王の愛ある提言

高山善廣

三沢さんが試合中の事故でなくなった、6.13ノア広島大会。そこに選手として出場し、現場に居合わせたのが高山善廣だ。自身も試合直後に脳梗塞で倒れた経験を持ち、三沢さんとは全日本プロレス時代から関わりがあった高山は、今回の事故をどう受け止めたのか。そして帝王が提唱するこれからのプロレスとは何か?

聞き手 堀江ガンツ

三沢さんはここ最近、首がほとんど動かない状況で、下も向けなかった

——今回は三沢さんの事故を機に、あらためてプロレスというものを考えなければならないんじゃないか、と思って企画を組んだんですよ。

高山　トップの人が（リング上の事故で）亡くなったのは初めてのことだもんね。

——そうですね。そして、高山さんは当日その会場にいらっしゃったわけですけど。

高山　うん。普段あんまり他人の試合を観たりしないんだけど、あの試合はたまたま廊下にあったモニターで全部観てたの。

——あ、そうだったんですか。

高山　だから最後のバックドロップも観てるんだけど、へんな角度といえばへんな角度だし、普通っちゃ普通だし。そんなに「うわっ！」って思うような落ち方じゃなかった。だから三沢さんは当然起き上がってくると思ってたよね。

——これまで何度も投げられて、その都度、起き上がってきたわけですからね。

高山　そうそう。あのバックドロップよりあきらかにもっと危険な技でも起き上がってきてたから、起きてくるだろうなって思ってたら全然起きてこなくて、ビックリしたね。

——試合中は、体調や動きのおかしさみたいなものは感じました？

高山　試合中はモニターで観てただけだから、そんなによくわからなかったけど、ここ最近、三沢さんがずっと疲れてるっていうのは、みんな知ってたよ。

——コンディション的には相当しんどそうだった、と。

高山　しんどそうだったね。それはみんな感じてたと思いますよ。首が悪いのは昔からだし、これはトレーナーに聞いたんだけど、ここ最近はほとんど首が動かない状態になってたって。下向けなかったらしいから。

——えっ⁉　下を向けなかったら、受け身も取れないんじゃないですか？

高山　そういうのもあったかもしれないね。俺もね、下を向くのがけっこうしんどいときがあって、普通の人より可動域が狭いと思うんだよ。だけど、多少は動くからなんとかなってるけど、三沢さんはまったく動かないような状態だったらしい。

——首が動かないって、私生活にも支障をきたすぐらいじゃないですか？

高山　普通の人はそうでしょ？　僕なんか以前、首を寝違えただけで一日何もできませんでしたからね。

——その寝違えたのなんかより、はるかに重症なのが日常になってたわけですよね。

高山　日常だし、たぶん昨日痛めて今日動かなくなったとか、そういう状況じゃないから。気づかないうちにどんどん悪くなって動かないまでいっちゃったんだろうね。

——知らず知らずのうちに蝕まれてるっていう。

高山　あとは首だけじゃなくて、いろいろコンディションにも影響が出てくるしね。

ノアマットでは、生前の三沢さんとGHCヘビー級王座を懸けて、二度に渡る激闘を展開した高山。90年代に最高峰と呼ばれた四天王プロレスに勝つために、彼らとは別の方法論を選んだことで、今日の帝王があるとも言える。

——高山さんも含めて、レスラーはみんな騙し騙しやってるんだと思いますけど、身体に自信があるから、逆にどこまで自分が悪くなってるかわからなかったりするんですかね。

高山　俺は騙し騙しはやってるけど、身体に自信はないけどね（笑）。

——あ、そうなんですか（笑）。そういえば子どものころから喘息持ちでしたよね。

高山　それもあって昔から身体には自信ないの（笑）。だから身体に関しては、ちょこちょこメンテしてるし、今日も全日本のシリーズの途中だけど、身体を診てもらったりしたしね。ただ、三沢さんはそういうメンテはあまりしてなかったかもしれない。

——三沢さんは逆に身体の強さには自信があったのかもしれませんね。

高山　俺はちょっと悪いと思ったら、すぐメンテするからね。そんな俺でも脳梗塞の前は「この状況のまま試合を続けてたらヤバいな」っていうときがあったの。で、案の定、脳梗塞になったんだけど。

——それって兆候とかがあったんですか？

高山　脳梗塞の徴候はわかんないけど、首が固まっちゃってて、ヤバいかもしれないっていうのがあったよね。

——今日は何も起こらなかったけど、明日何が起こるかわからない、というような状態でやってる選手が多いわけですね。

高山　みんながどれぐらいそういう経験をしたかはわかんないけど、少なくとも三沢、川田、小橋、田上、秋山、この5人は経験してるんじゃないかな。あと蝶野さんも首悪いしね。

——身体がバリバリに動いた20～30代前半ぐらいにそういうプロレスを作り上げて、身体がボロボロになったいまでもそういう試合をしなきゃいけないんでしょうね。

高山　まあ、20～30代前半の動きは絶対してないけどね（笑）。でも、そういう流れを作ってきたから、いきなり馬場さん時代のプロレスに戻すことはできない。元四天王なんかは場外に落とすのなんてあたりまえにやってるもんね。俺はあれ大嫌いなんだけど。そういうことをやらなきゃいけないっていう使命感があったのかね、あの人たちは。

——それが自分のスタイルというか、自分のプロレスになってるんでしょうね。

高山　まあ、ああいうことを一回やっちゃったら、そこまでいかないとお客さんに「なんだ、今日は手抜きか」って思われたら嫌だもんね。

——やはりレスラーという人種は、お客さんの歓声のためには、危険な技でもやってしまうっていう部分はあるんですか？

高山　俺はちょっと違うけどね。自分がやりたかったらやるけど、お客さんが求めてても、自分がやりたくないことはやらない。それよりもお客さんが思ってもみないことをやって驚かせたいっていうふうに考えてるから。

——そのへんは四天王世代とちょっと考えが違うというか。

高山　たぶんね、あの世代のああいう試合を観たから、逆に俺は「やりたくない」と思ったのかもしれない。俺があれをやっても彼らのコピーでしかないし、コピーでは勝てないから。そういうのが意識の中であったんだと思う。

——いわゆる四天王プロレスのアンチテーゼでもあったわけですね。で、今回の事故があって、ああいったプロレスのスタイルも見直す時期に来てるんじゃないかと思うんですけど。

高山　いや、「スタイルを見直す」っ

ていうのはちょっと違うと思う。スタイルっていうのは、レスラー同士が闘ったうえでできたものだから、それを制限したらプロレスじゃなくなっちゃう。「これやったら反則負けです」とかさ。それじゃあアマレスと一緒じゃん。

——「パワーボムは腰の位置以上に持ち上げたらダメ」みたいなことになったら。

高山 そういうのはあっちゃいけないしさ。馬場さんも「リングの上は何をやってもいいんだ」って言ってたしね。だからリング上を制限するんじゃなくて、リングに上がる前にストップする機関が機能するかどうか。あと次の試合の前にちゃんとメンテして、体調をチェックするほうが大事だよ。

——リングに上がったら止められないけど、試合前なら止められる、と。

高山 ただ、それも興行として考えると、けっこう厳しいものはあるけどね。体調不良で出場停止なんてことになると、その人が観たくてチケット買った人は「なんだよ!」ってなるだろうし。

——三沢さんも団体のエースだからこそ、どんなに体調が悪くても休めなかった部分はあったんでしょうね。

高山 そうだね。あとは社長っていう立場がそうさせたのかもしれない。

——先ほどおっしゃられた身体のメンテっていう部分では、あまりにもそれが個人に委ねられすぎてるっていう部分もありますか?

高山 そういう部分がないとは言わないけど、最近はよくなったよ。新日本はだいぶ前から三澤(威)トレーナーがやってたけど、ノアも浅子(覚)さんがそういう資格を取って、試合前後に選手のケアをしてるから、だいぶよくなった。全日本にもトレーナーはいるしね。

——では、トレーナーがいても追いつかないぐらい、ダメージを受けてるっていうことなんですかね?

高山 いや、メンテの環境がよくなったから、いまの若いヤツはダメージの蓄積が少ないの。でも、昔さんざん無理してきたオジサン連中は、いまさらメンテしても遅いだろっていうのがあるよね。

——ああ、なるほど。全日本時代に壊れた部分は、いまさらやっても治らないわけですか。

高山 だって俺がいた頃まで全日本はトレーナー制度なんて、なんもなかったもん。

——なかったんですか! じゃあ、三冠戦のあととか、あれだけ首を痛めてるのに、付き人が首を引っぱったりしてたんですか?

高山 そうみたいよ。首の整体なんて素人がやったら危ないよね。

——危ないですよ。よけいに悪くなるかもしれませんよね。そういう状況があったんですか……。

高山 俺も全日本プロレスにちょっといたじゃん。あのときも首が動かなくなったけど、ホテルで寝るしかなかったもんね。

——自然治癒力頼りですか(笑)。

高山 うん。

——その頃に比べたら、はるかに改善されているんですね。ただ、当時の四天王はその時代にボロボロになってしまったという。

高山 そうなんだろうね。

——あとは巡業にドクターが帯同していなかったことを指摘されたりもしましたけど、これも難しい問題ですよね。

リング上では敵対しても、リング外での三沢さんは高山のよき理解者だった。高山の人気爆発のきっかけとなったPRIDE参戦は、三沢さんの男気と尽力なくしてはありえなかったのだ。写真は高山PRIDE参戦前のフリー会見のときのものだ。

いまは各団体にトレーナーがいるけど昔の全日本はそういう制度がなかった

高山 先生一人ついてもらうのはね、ぶっちゃけ、お金がそれだけかかるわけだからね。

——専門医を年間ずっと雇えるような団体って、正直ないですよね。

高山 あと、ネットの書き込みでね、「一人の先生を巡業連れてけないんだったら、各地方でプロレス好きの先生に来てもらえばいいんじゃないか」みたいなことが書いてあったけど、やっぱ一人の先生が選手を把握してないとダメだと思う。いきなり知らない人が来ても、その人の普段の状態を知らないから。そういう部分ではかなり難しいよね。

——普段の状態を知らない先生が診たら、ドクターストップになる選手が続出するかもしれないし、適切な処置は難しいですよね。

高山 俺の首が他人より動かないっていうのも、やっぱり首の骨が変形しちゃってて、普通の人とちょっと違うらしいんだよね。普段行ってる病院では「でもこれはこれで固まってるから、まあいいんじゃない?」って言われたんだけど、それを地方の先生が初めて診たら「なんだこの首は!」ってなるかもしれない。

——いつから骨が変形してるかわからないわけですからね。

高山 それで「こんなのダメだよ!」って出場停止になったらシャレにならないよね。あと一口にドクターを用意するっていっても、何科と何科を用意すればいいのかとかさ、そんなの完璧に揃えて巡業するのなんて無理じゃん、ハッキリ言って。

——そこが一日だけ来てもらえばいい、総合格闘技イベントと違うところですよね。だからさっきの試合スタイルの話とも重なるんですが、武藤さんなんかは「ドクターを全会場に帯同させるのは難しいけど、会社がすべきことの一つとしては、レスラーがリングで無理をしなくてもリングに立っただけでお客が盛り上がる状況を作らなきゃいけない」って言ってたんですよ。

高山 それは会社に頼るんじゃなくて、レスラー一人一人も考えなきゃいけないことだよね。昔、馬場さんが、俺が入場のときにトップロープをまたいで入るのを凄くいいって言ってくれたことがあって。その意味が、いま凄くわかるよね。とりあえず、まずはじめに高山のトップロープまたぎを観て、お客さんは第一段階満足するから(笑)。

——なるほど。ロープまたいだだけで、まずは〝お目当て〟が一つ観られるわけですね(笑)。

高山 だから、俺が何気なくやってたことだけど、そういうことって凄く大事なんだなっていうのをね、最近とくに思う。

——馬場さんなんか、馬場さんのデカさを観るだけで第一段階満足ですもんね(笑)。あとは猪木さんのガウ

危険な技をやらなくても、お客を満足させる方法はたくさんある

ンの脱ぎ方なんかもそうだし。

高山　ハンセンの「ウィー！」を一緒にできるとかさ、レスラーってそういう部分も凄く大事なんだよね。こないだWWEのHHHがプロモーションで来たじゃん。そのときネットのインタビューを見たんだけど、昔、ロックがピープルズエルボーを定着させる前、その練習をハウスショーのときに何回も何回もやってたんだって。それをほかのレスラーは控室でゲラゲラ笑ってたらしいんだよ。

——ロックはなんでおかしな技を使ってるんだ、と（笑）。

高山　でも繰り返し使ってるうちにお客がついてきて、ある日、大歓声に包まれた瞬間にピープルズエルボーは完成したって。やっぱり俺のロープまたぎやウィーと同じだと思う。あのロックのピープルズエルボー。一見、へんな動きを観るのがお客さんの楽しみになるんだよ。

——あのちっとも危なくない技が、どんな技よりも観客を喜ばせるようになったわけですよね。

高山　プロレスには、「いちいちそんなことしなくていいじゃん」っていう動きがたくさんあるじゃない。でも、そこがプロレスの良さであって、おもしろいところだよね。

——そして、そこまで認知させるためには、その人の技量がないといけないわけですしね。

高山　うん。

——ある意味、プロレスの虎の巻じゃないですけど、どうしたらお客がついてくるのかっていう、ノウハウはいろいろあるんでしょうね。

高山　それはあるけど、やっぱりすべての人に当てはまるとは限らないんだよね。その虎の巻の要素を全部やったとしても、スターになれないヤツはなれないし、現にそういうヤツはいただろうし。

——なるほど。オフィスがプッシュしてもダメな例って、いくらでもありますもんね。

高山　そういうことじゃない？　かと思えば、全然そういうんじゃなくて、急にファンが後押ししてスターになった人もいるし。

——じゃあ、それをどうやって自分で見つけるかっていう部分が重要なんですかね。

高山　そうだと思うよ。みんな先に成功した人の真似をしすぎるんだよ、失敗するヤツって。影響されてもいいけど、マネしてちゃダメだよ。

——新しいスターという意味では、三沢さんの事故があった翌日の博多大会で、高山さんが「もうオヤジたちじゃなくて、若いヤツらの試合を観てやってくれ」ってコメントしてたのが、凄く印象に残ったんですけど。あれは、やはり世代交代というか、新しいスターが生まれなきゃダメだってことを言ったわけですか？

高山　いや、そういう意味じゃない。あのときは何を言っていいかわからなかったし、メインで潮崎（豪）と力皇（猛）が（GHCヘビー級）王座決定戦をせっかくやるんだから、俺のコメントよりそっちを観てほしいなって、単純にそう思ったんだけどね。

——でも、ノアはいまこそ若い人間が出てこなきゃダメだって思いもあるんじゃないですか？

高山　やっぱり、いまだに小橋、秋山、三沢が看板だったからね。昔の全日本なんかは、その彼らが四天王プロレスで若いうちからトップを張ってたから、馬場さんが休憩前（のカード）にいけたもんね。

——そういえば、天龍さんたちが抜けたあと、最初の東京体育館では馬場さんがメインで身体張ってケガしちゃったことがありましたけど、若い選手が出てこなかったら、その後も馬場さんが上でやらなきゃならなかったでしょうからね。

高山　ああ、そうだね。あとあの頃は鶴田さんがいたからまだよかったよね。ハンセン、ゴディ、ウィリアムスとか外国人スター選手もたくさんいたし。ノアはそういうのがないから、難しい部分もあるんだろうけど。

——高山さんが潮崎選手らの世代にとっての〝スタン・ハンセン〟になるんじゃないですか？

高山　そうかもしれないね（笑）。

——では、最後に三沢さんについて少し聞きたいんですが、やはり高山さんにとっても三沢さんっていう存在は大きかったですか？

高山　大きかったよ、やっぱり。凄く大きかったね。一言で言い表わすと、知り合いが亡くなって初めて泣いたもん、俺。マジで。自分でビックリした。

——これまでお葬式とかで泣いたことはなかったんですか？

高山　うん。自分の祖父さんとか祖母さんとか亡くしてるし、知り合いも亡くなってるけど、葬式行って泣くことはなかったの。寂しかったり、悲しかったりはしたけど、泣かなかった。でも、今回ばかりは泣いちゃったもんね。

——涙が出て初めて、自分にとってそこまで大きな存在だと気づいたというか。

高山　亡くなった現場にいたっていうのもあったかもしれないけど、やっぱり三沢さんの存在っていうのは大きかったよ。普段は酒飲んでニヤニヤしてるだけのオッサンなんだけど、あの人が全日本の社長になった頃から、要所要所で器の大きさを見せてくれたからね。

——PRIDEに出場するときも、三沢さんのバックアップがあってこそだったわけですよね。

高山　PRIDEのときもそうだし、脳梗塞で倒れたときも、試合に出れない俺の収入を心配して「お金大丈夫？」って言ってくれたの。俺は芸能の仕事があったから「大丈夫です。自分で頑張ります。ありがとうございます」って言ったんだけど、そういう言葉をかけてくれるのとくれないのとじゃ全然違うじゃない。あの一言はホントに嬉しかった。

——大変だったら、ホントに資金援助をしようと思ってたんでしょうね。

高山　だって俺はフリーなんだからさ、本来ならほっといてもいいんだもん。しかも、新日本のリングで倒れたんだから。ノアのリングで倒れたなら、多少はそういうのもあるかもしれないけど、ライバル団体のリングで倒れた男まで気にかけてくれたんだからね。

——ホントの意味で選手のことを考えてた人なんですね。

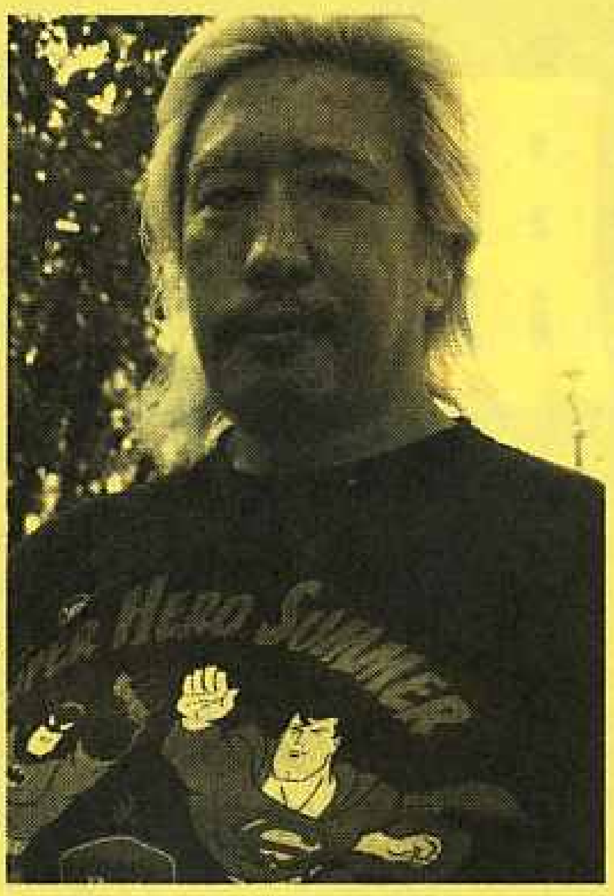
高山　最近は三沢さんが一線退いて、選手が引退後に仕事できるようなシステムに取りかかってたとかいう報道が出てたけど、あれだってホントに取りかかってたからね。実際、俺はその協力者だって知ってるし。

——そんな三沢さんが亡くなったのは、ノアはもちろん、プロレス界にとってホントに大きいでしょうね。

高山　だからこそ、残った人間には頑張ってほしいよね。とくに潮崎には、チャンピオンになったからには、頑張ってかつての全日本における三沢光晴のようになってほしいね。で、また武道館で超満員の連続興行ができるように頑張ってほしい。ホントにそれは思うよ。

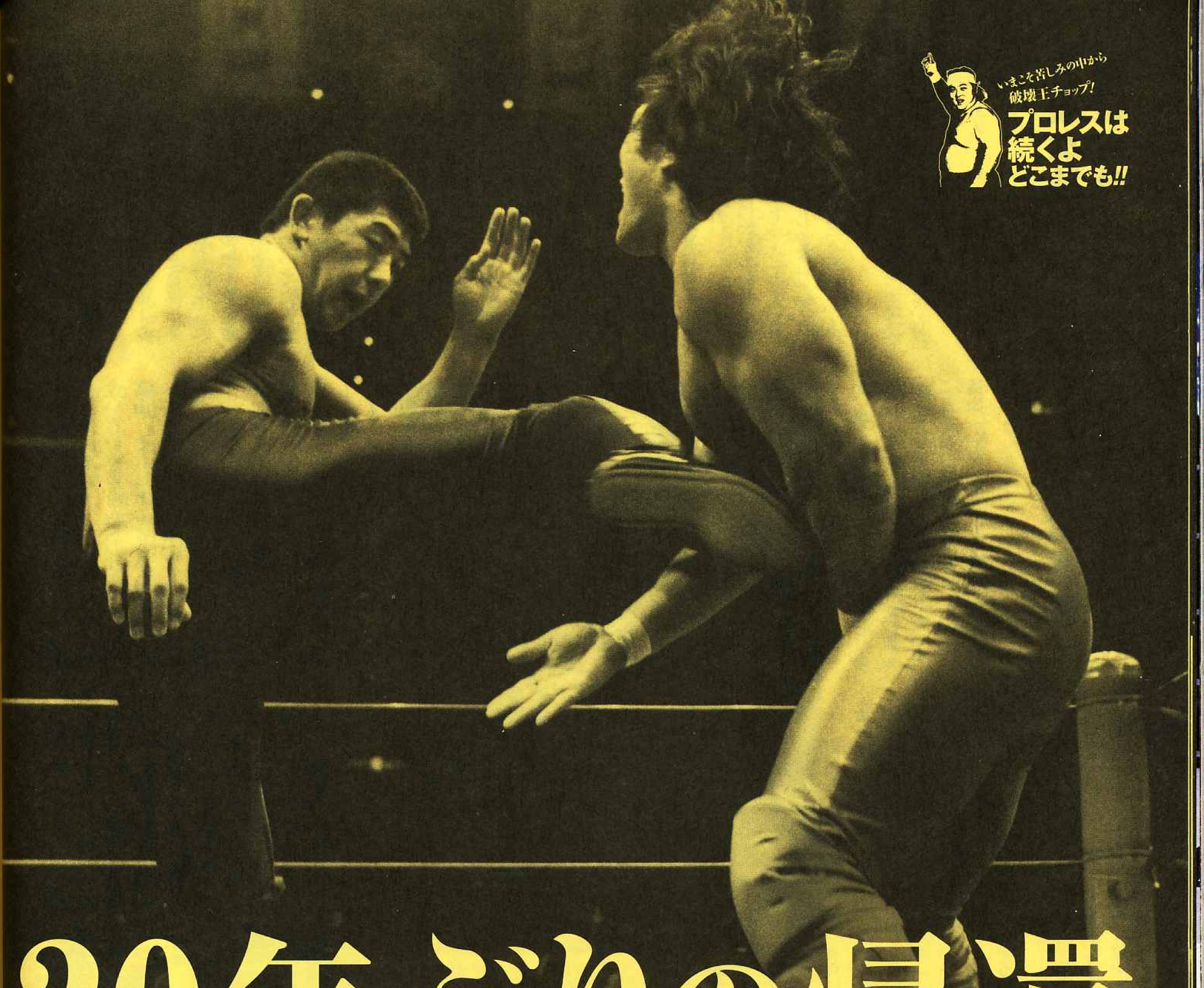
——わかりました。今日はありがとうございました。

【09年6月29日／都内・渋谷区『タールム』にて収録】



たかやま・よしひろ■1966年9月19日、東京都出身。92年にUインターでデビュー。97年には全日本プロレスに本格参戦し、ノアには旗揚げ時、所属選手として参戦。01年フリーとなったあと、PRIDE、新日本、全日本、IGFなどで大活躍。メジャー団体のシングルとタッグのベルトを総なめにしている。196センチ、125キロ。

——三沢さんが亡くなられたときに
もあったんですけど、自分としては
代わりに鈴木が入ってきたんだと思
思うんですが……。
船木　いや、とくに心境に変化はな
——デビューされてからもやっぱり
常に死というものは意識の中にあり



20年ぶりの帰還

～三沢の死に船木は何を思うのか～

「三沢さんの死が自分を止めることはありません」

船木誠勝

このたび武藤敬司の誘いにより、8月30日全日本・両国大会でプロレス復帰を決めた船木誠勝。しかし、その一方では三沢光晴さんがリング上で亡くなるという事故が起こった。プロレス復帰を控える船木はこれをどう受け止めているのか。船木のプロレス観にも迫った。

聞き手／ジャン斉藤　撮影／梅木麗子

「あれ、大丈夫なんですか？」って秋山（準）選手に聞きましたもん

―三沢さんが亡くなられたときにボクの頭に思い浮かんだのが、一つはちょうど公開初日だった映画『レスラー』のことと、もう一つは船木さんのプロレス復帰だったんです。以前『レスラー』についてインタビューしたときにノア中継打ち切りに触れて「自分もなんとかプロレス界のためになりたい」とおっしゃってましたけど、この事故をどう受け止めて、8月30日のリングに上がるんだろう、と。

船木　じつは2年前に総合格闘技で復帰するとなったときに、いずれはプロレスにも出るだろうとは思ってたんですよ。

―そういえば、ビッグマウスのリングでプロレス復帰宣言したこともありましたね。

船木　それで格闘技に復帰する3、4ヵ月前に、武藤さんとサムライTVの番組で対談する機会があったんですけど、武藤さんから「ウチのほうも協力してよ」という話があったんです。だから武藤さんから声がかかったらプロレスに上がろうとは考えてましたね。

―今回オファーがあったのはいつ頃だったんですか？

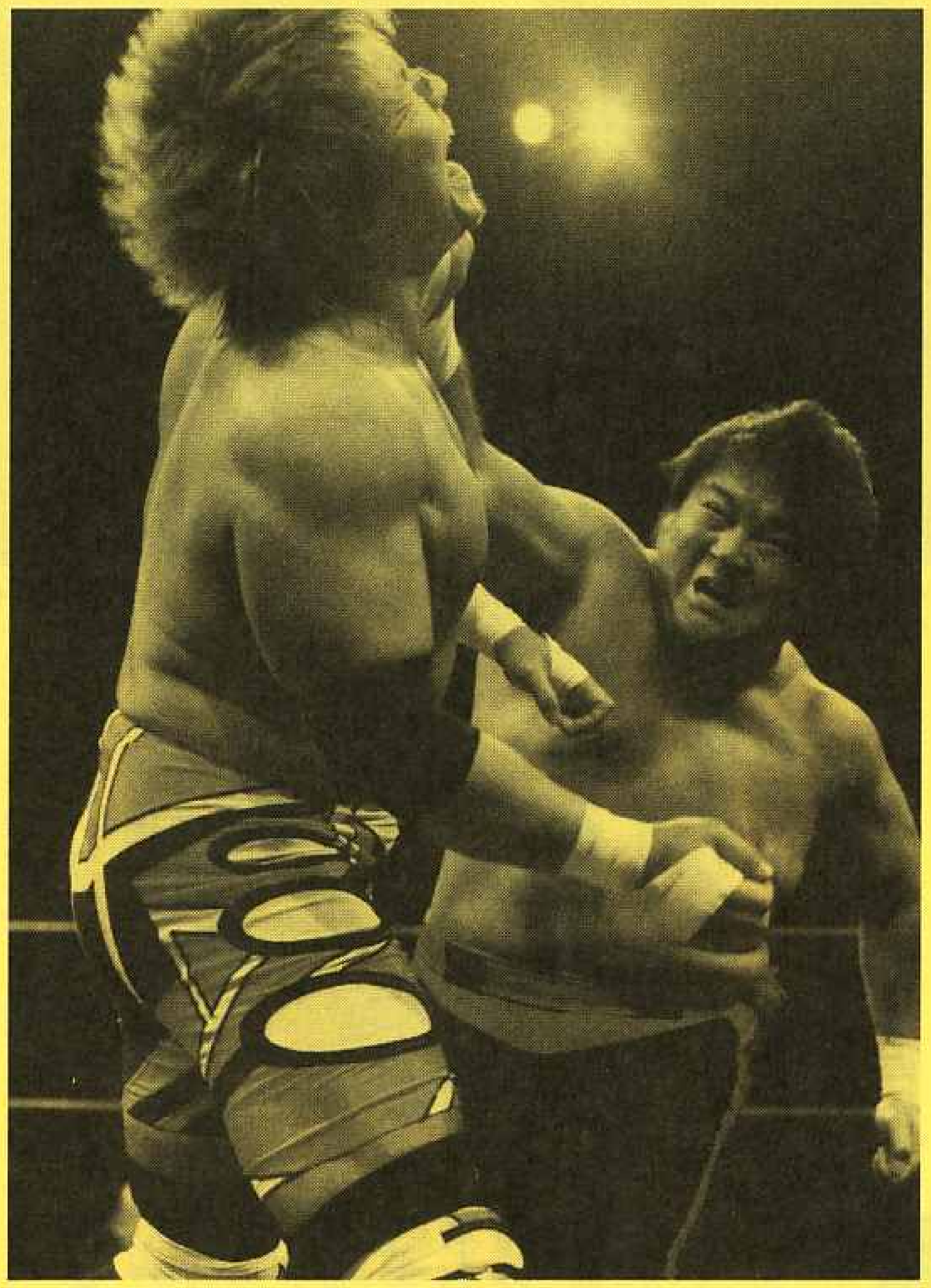
船木　正式に来たのは4月です。そのあと5月ぐらいに武藤さんと会って正式に決定しましたね。じつは「いつ武藤さんからオファーが来るんだろうな」と待ってたんですよ。いくつかほかのプロレス団体からオファーもあったんですけど、自分としては武藤さんが先だという気持ちがあったんですよね。そういうところはへんに自分の中でこだわりがあるんで。

―でも、武藤さんは船木さんがオファーを待ってたなんてことは……。

船木　知らないと思います（苦笑）。ただ、武藤さんならば、どんなオファーでも受けようと思ってました。で、出てきたカードがあれだったんで、意味があるオファーだなって。

―武藤＆船木vs蝶野＆鈴木みのるというカードですね。

船木　もしも自分がファンであれば観てみたいですし、橋本真也がまだ生きてたら、全員同期のカードになったと思うんですけど。橋本選手の代わりに鈴木が入ってきたんだと思います。



「恥ずかしがらずに、おもいっきりやれ！」が信条だった破壊王。船木が語る「ケガをしない法則」でいうと、なんでもおもいきりのいい破壊王のプロレスは正しかった！

―なるほど。そういう発表があった直後に三沢さんの事故がありました。最初に話を聞いたときはどう思われました？

船木　ビックリしましたね。その日の夜、たしか22時か23時ぐらいに柴田（勝頼）から「三沢さんが亡くなりました」ってメールがあって。それを見た瞬間に自分は「リングの上で死んだ」と思いました。別の事故とか病気ではないと思いましたね。

―そんな直感が。

船木　そのあとすぐにインターネットを見たら「意識不明」ではなく「死亡」と書いてあったんで、本当に死んだんだなって。ちょっと信じられない感じでした。

―これからプロレスのリングに挑むというときにこういった事故を耳にするというのは複雑な気持ちだと思うんですが……。

船木　いや、とくに心境に変化はないです。そういう事故がいままで起きていなかっただけで、プロレスには事故がつきものだとは思ってましたから。もう覚悟のうえですよ。自分が新日本に入ったときに練習生の契約書があったんですけど、「死んでも責任はとれません」みたいな項目もありましたから。

―それに判を押さないと入門できないんですか？

船木　だから押しました。

―あの当時、船木さんは未成年だったからお母さんに？

船木　押させましたね（キッパリ）。母親もそういうふうに言われたんですよ、「最悪、死ぬこともあります」って。でも「絶対に死なないから」って親を口説き落として強引に入門しましたけどね。

―15歳なのに凄い決意ですけど、そこまでしてレスラーになりたかったということですね。

船木　やっぱり自分が観てたときは本当にタイガーマスク全盛期で夜8時は『ワールドプロレスリング』を観るもんだと決まってましたから。強くてお金を稼いでるという職業がとにかくカッコよかったんです。

―であれば、最悪死んでしまうという契約書にも判を押せる、と。

船木　そうだったんでしょう。じゃなきゃたぶんその契約書を見たらビビってると思います。でも、なんかへんな自信がありました。突然ではないですけど、年数重ねていけば自然と猪木さんみたいになれるだろうって。

―デビューされてからもやっぱ常に死というものは意識の中にありました？

船木　いや、逆に考えなくなりましたね。ケガが多かったんで、死よりも先にケガが目の前に出てくるんですよ。だからケガをしなければ死にも近づかないだろうという感じですかね。

―そのために入門当時は受け身の練習は相当されるんですよね？

船木　最初は受け身ばっかりでした。それに大技は自分がデビューしたての頃は使ってはいけなかったんですよね。

―それを使えるようになったのはいつ頃ですか？

船木　長州さんたちの維新軍の大量離脱があったあたりから、徐々に前座も派手な技を使えるようになってきました。中堅が抜けちゃったぶん、自分たちが上に上がったんで。

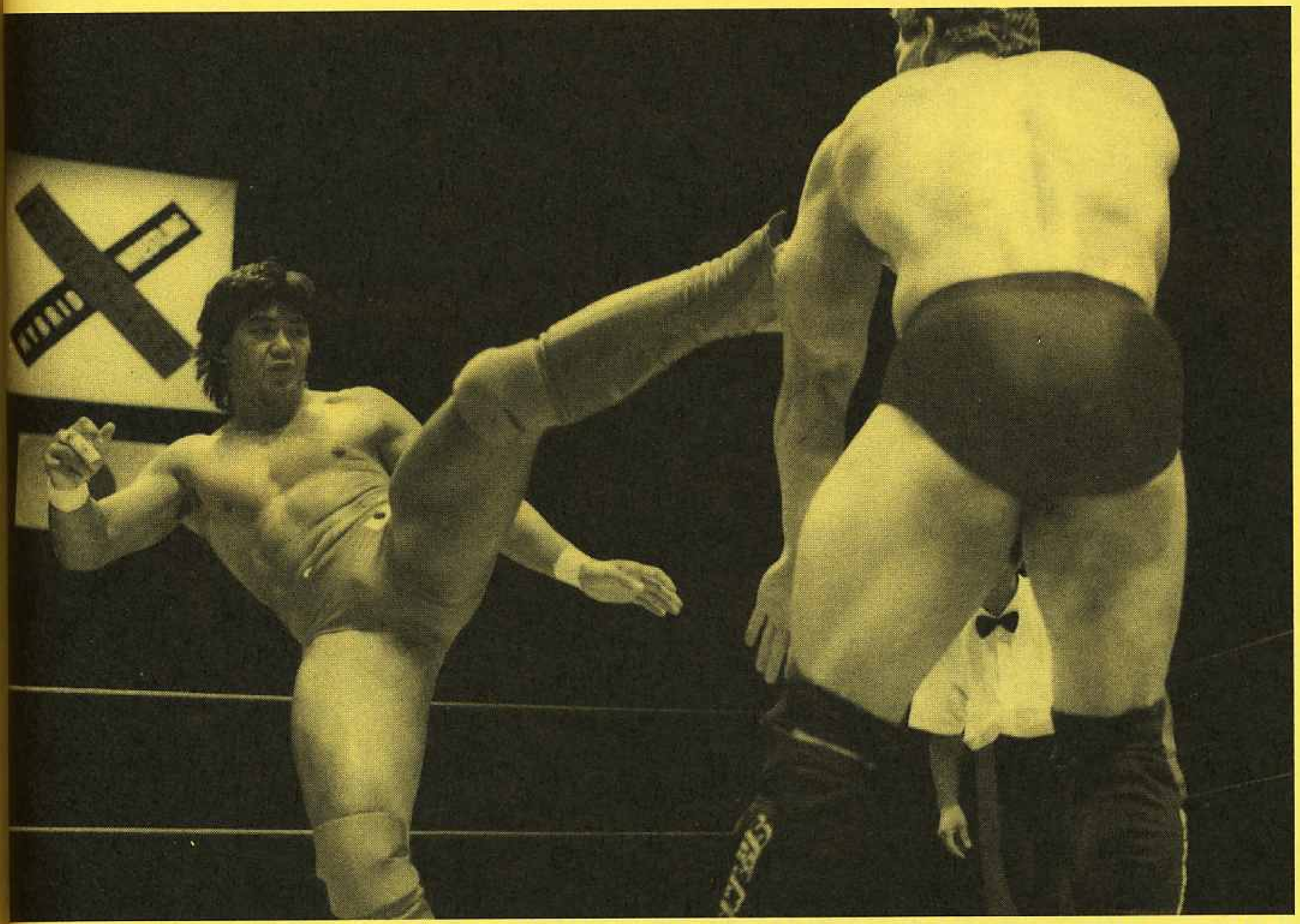
―そうすると、興行的に苦しいがゆえに試合でもっと派手な技でお客を引きつけないといけない、と。

船木　そういうことだと思います。興行の事情です。

―90年代の全日本プロレス、つまり四天王プロレスもそういった事情が少なからずあったと思うんです。あのプロレスってホントに過激だったじゃないですか。

船木　あのプロレスには単純にビックリしました。ビックリしたんで、一度映画『力道山』の韓国ロケがあったんですけど、そこで一緒だった秋山（準）選手に聞きましたもん。「あれ、大丈夫なんですか？」って。

―あ、船木さん自ら聞いたんです



「余分な要素をプロレスから省いたらどうなるか見てみたかった」という船木。そういう意味でもパンクラスは船木誠勝の壮大な実験の舞台であり、どちらにしても船木にとっては自分を表現するプロレスだったのである。

船木誠勝のファイター人生

1984年	・新日本プロレスに入門 ・当時、史上最年少の15歳でプロデビュー
1985年	・第一次UWF崩壊後、新日本プロレスに電撃復帰したUWF勢との対戦が注目を集める
1988年	・欧州遠征へ。ドイツ、オーストリアなどで活躍
1989年	・欧州から帰国後、第二次UWFに移籍
1990年	・12月の松本大会を最後に第二次UWF解散 ・ウェイン・シャムロックを相手に最後の大会のメインイベントを務める
1991年	・藤原喜明、鈴木みのるらと藤原組を設立
1992年	・藤原組分裂
1993年	・パンクラス設立
2000年	・ヒクソン・グレイシー戦で敗戦を喫し引退を表明
2001年	・俳優に転向、パンクラスの顧問になる
2007年	・『Dynamite!!』桜庭和志戦で現役復帰
2008年	・『DREAM.6』ミノワマン戦で現役復帰後初勝利
2009年	・プロレス復帰。武藤敬司とタッグを組み、蝶野正洋＆鈴木みのる組と対戦する

か。

船木　そしたら「ちゃんとした受け身があるんです」って教えてもらいましたね。でもそれもかなり危険な受け身でした。ちょっと間違ったらモロに受けるような感じですよね。

——船木さんが新弟子の頃は相手をケガさせることに対してはどう教えられたんですか?

船木　お互いさまですね。やるほうは本当におもいっきりやって、やられるほうはやられてもいいという覚悟を持って挑まないとダメだと思います。だから結局はケガをしたほうが悪いですよ。それは山本（小鉄）さんから言われてました。

——中途半端になってしまうのが一番危険だ、と。

船木　そうです。自分も後藤（達俊）さんのラリアートを食らって脳しんとうを起こして一瞬記憶が飛んだんですけど、やっぱり自分の記憶をたどっても怖いですよ、ケガする瞬間は。

——普通だったらトラウマになるでしょうね。

船木　でもそこで怖がりすぎるとケガをしてしまうんで、おもいっきりいってあとは相手に任せることが大事ですね。ロープに飛ばされて受ける技も本当に怖いですよ。相手の足が飛んできて、ちょっと間違ったら鼻に当たりますから。だから寸前まで蹴ってきてる足を見て、ギリギリで交わして胸で受けたり。それこそ橋本真也のキックとか凄かったですよ。一度、目で受けたことありましたから。

——キックを目で！　橋本さんってそういう意味では〝評判が悪い〟レス

木誠勝

それでも橋本真也との試合はあまり組まれないほうがいいと思いました

ラーだったみたいですね。

船木　おもいっきりやってましたからね（笑）。自分も前座のときは、たしか野上さんや橋本真也との試合が多かったですけど、本当に一歩間違ったら大ケガという瞬間はたくさんありました。でも、もし目に蹴りを受けたとしても橋本真也のせいではないんですよ。で、一度受けたら、次からは自分でうまく受けられるように調節しますからね。それでも橋本真也との試合はあまり組まれないほうがいいなと思いました（真顔で）。

——ワハハハハ!

船木　組まれたら組まれたでやりましたけど、ただ橋本真也は別格でしたね。だから外国人と橋本さんの試合はおもしろかったですよ。途中で本当に素手の殴り合いみたいになったこともありましたし（笑）。

——さすが破壊王ですねぇ（笑）。

船木　でも殴り合いが終わって目が腫れてても、最後は普通のプロレスに戻ってやってるんですよ。そういう世界だったんですよね。

——ちなみに、格闘技においても死というものは感じてますか?

船木　ありますね。直接、首を絞めたり、打撃で頭を殴ったり蹴ったりというのが一番危険ですから。でも、これもやっぱり死ぬというよりケガをしないことのほうが先ですね。ただ正直、闘ってる人たちは死ぬという感覚から遠のいているような気はします。というのは、格闘技はレフェリーが止めてくれますし、最悪セコンドがタオルを投げてくれますから。それに、死んだ人がいないこともあるからだと思います。だからこそ逆に注意しないと危ないんですよ。

——それに比べてプロレスのレフェリーって実質的には試合を止めないですよね。その両方を知ってる船木さんにとってその切り替えは難しいんじゃないですか?

船木　いや、難しいというか、昔に戻ればいいという感じですね。自分の中であまり違和感を感じなかったのは、一番若くて吸収できるときにプロレスを学んだというのが強いんですよ。だから感覚的にプロレスの試合となっても緊張感こそあれ、怖さというのはないですね。それに、自分の中で格闘技とプロレスがまったく別だという感覚もないんです。同じリング上での闘いだと思ってますし。

——船木さんであれば、船木誠勝を表現する場として一緒ということですね。

船木　そうですね。で、プロレスと格闘技というのが違うといえば違うんですけど、一緒といえば一緒なんだと思うんですよね。プロレスのいろんな要素をどんどん省いていったものが最終的に格闘技になる。で、格闘技にいろんな要素をくっつけていくとプロレスになると思うんです。それが余分なものと思う人もいるでし

ようし、余分なものがあったほうが楽しいという人もいると思うんです

——当時はファンもそうでしたよね。プロレスから格闘技に移行するダイ

橋本が出版されたり。『ハッスル』みたいなエンタメ路線が出てきたり。

船木　難しい時代ですよね……。日本自体が不景気なんで何が残るのか

んですよ。プロレスを始めてからいままでずっとこの業界を見てきまし

ょうし、余分なものがあったほうが楽しいという人もいると思うんですよね。それは観る人の好みですよね。とくにパンクラスのときは、どこかで自分がプロレスをやってたということが禁句みたいな感じになってた部分ってあったと思うんですよ。ちょうどあの頃はプロレスとパンクラスの概念を分けたい時期だったじゃないですか。

――要するにパンクラスはプロレスなのか、格闘技なのか。

船木 いまみたいに総合格闘技というジャンルがなかったですから。あの頃の自分は、ちょっと実験的なかたちで格闘技としてのプロレスをやってみたい気持ちが強かったんです。プロレスのショー的要素を省いたらどうなるんだろう? と。それが自分の中では最終的にパンクラスだった。あそこまで来たらちょっと戻れない何かはありましたね。しかも、自分が一番上の人間だったのであきらかにいまとは身分が違いますから。

――あの当時の船木さんが全日本みたいなプロレスをやりますというわけにもいかないですね。

船木 でも、自分の中ではこれもプロレスあれもプロレスなんですよね。急に格闘技に変えたという感覚はなかったんですよ。どんどんショー的部分を省いていったらパンクラスになったという。それを見てみたかっただけですね。

プロレスは20年間の時差ボケで格闘技は7年間の時差ボケです

――当時はファンもそうでしたよね。プロレスから格闘技に移行するダイナミズムを楽しんでいたわけですから。

船木 ただ、そうするとプロレスの可能性はどんどん減っていきますね。素っ気なくなってしまうというか。かなり観る人によっては凄くつまらない試合になるかもしれないです。とくに田舎に行くほど地方でやるとほとんどのお客さんはあっけにとられてうんともすんとも言わないですから。

――ヒールホールドなんて理解できないでしょうね。ましてや10年前ともなれば。

船木 だから全国を回るためには時間がかかるなあと思いましたね。格闘技的なものでは。

――でも、演者の船木さんからすると同じリング上の試合なんですよね?

船木 自分の場合は分けてないんですね。プロレスは20年間の時差ボケもありますし、格闘技は7年間の時差ボケもあるんです。

――時差ボケのせいで(笑)。船木さんが不在のあいだ、プロレス界ではいろんなことがありましたしね。デスマッチが出てきたり、ミスター高橋本が出版されたり。『ハッスル』みたいなエンタメ路線が出てきたり。そこに船木さんがひょっこりと戻ってくると、いったいどうなるかは凄く興味深いです。

船木 やっぱり15歳から20歳までの5年間のプロレスが基盤になってくると思います。そのあとに身につけた格闘技的なものや新しく挑戦することもありますけど、あくまでも基本は新日本時代の動きですよ。でも、その動きを観てる人ってもうなかなかいないでしょ?

ふなき・まさかつ■1969年3月13日、青森県出身。84年、新日本プロレスに入門。第二次UWF、藤原組を経て、93年にパンクラスを旗揚げ。00年ヒクソン・グレイシーに敗れ引退するが、07年『Dynamite!!』桜庭戦で現役復帰。182cm、85kg。

――はい。知らない人がほとんどでしょうね。

船木 新日本の若手時代にテレビで残ってるのも3試合しかないですし。だから逆に新鮮に映るかもしれないです。でも、そういう自分が復帰するから、プロレスはおもしろいという人もいるでしょうね。

――おそらく初めてでしょうね、20年のブランクがあって復帰するプロレスラーは。しかし、正直言って20年前にまさか格闘技もプロレスもこういう状況になってるとは思わなかったんじゃないですか?

船木 難しい時代ですよね……。日本自体が不景気なんで何が残るのかはわからないですよ。いろんなものがプラスされてるプロレスみたいなものが残るのか、いろんなものを省いた現実的な格闘技が残るのか。

――よく言われるのが、大技至上主義ではなくレスリングのかたちに戻すべきだという意見なんですよ。

船木 それはどうですかね。やっぱりプロレスは観る人に凄く左右されるものだと思うんですよ。つまり観る人が何を求めるかだと思います。そういう意味ではいまのファンが何を求めてるのかというのはちょっとよくわからないですね。

――三沢さんの事故があってプロレス界は変わると思いますか?

船木 どうでしょう。これはプロレスにかぎらず総合格闘技の世界でも一緒だと思うんですけど、大きな組織としてまとめる組織がないと選手は辞めるに辞めれないというのはありますよね。三沢さんがここまで闘わないといけなかったというのを考えても、個人商店みたいにノアはノアだけで回してるからですよ。一人スターがいないと会社が傾いてしまうというのは厳しいじゃないですか。でも大きな組織が援助してくれて、三沢さんが抜けても大丈夫な状態が作れていればよかったな、とは思います。

――そうですよね。プロレスってどこまでいっても危険だから、いくらライセンスが発行されてても……。

船木 危険は変わりないですね、そうならない環境がないかぎりは。スターってやっぱりなかなかできないんですよ。プロレスを始めてからいままでずっとこの業界を見てきましたけど、スターって作るものじゃないし、勝手に出てくるんです。もちろんスターになりたいと思って努力することは必要ですけど、時代の状況もありますから。

――そういう意味では三沢さんはずっとノアの看板でしたもんね。

船木 やっぱり一人スターができると、10年から20年一人に頼っちゃうんですよ。それもショービジネスが抱える悩みなんですよね。しかもプロレスも格闘技も団体が多くなったとはいえ選手が少ないですから。でも、だからこそスターって誰でもなれるチャンスがあるし、突然スターが生まれるかもしれないんですよね。で、自分が幸運なことは、橋本さんも含めて同期がみんなスターになったことなんですよね。じゃないとこんなかたちで自分がプロレスに戻ってくることもなかったでしょうし。

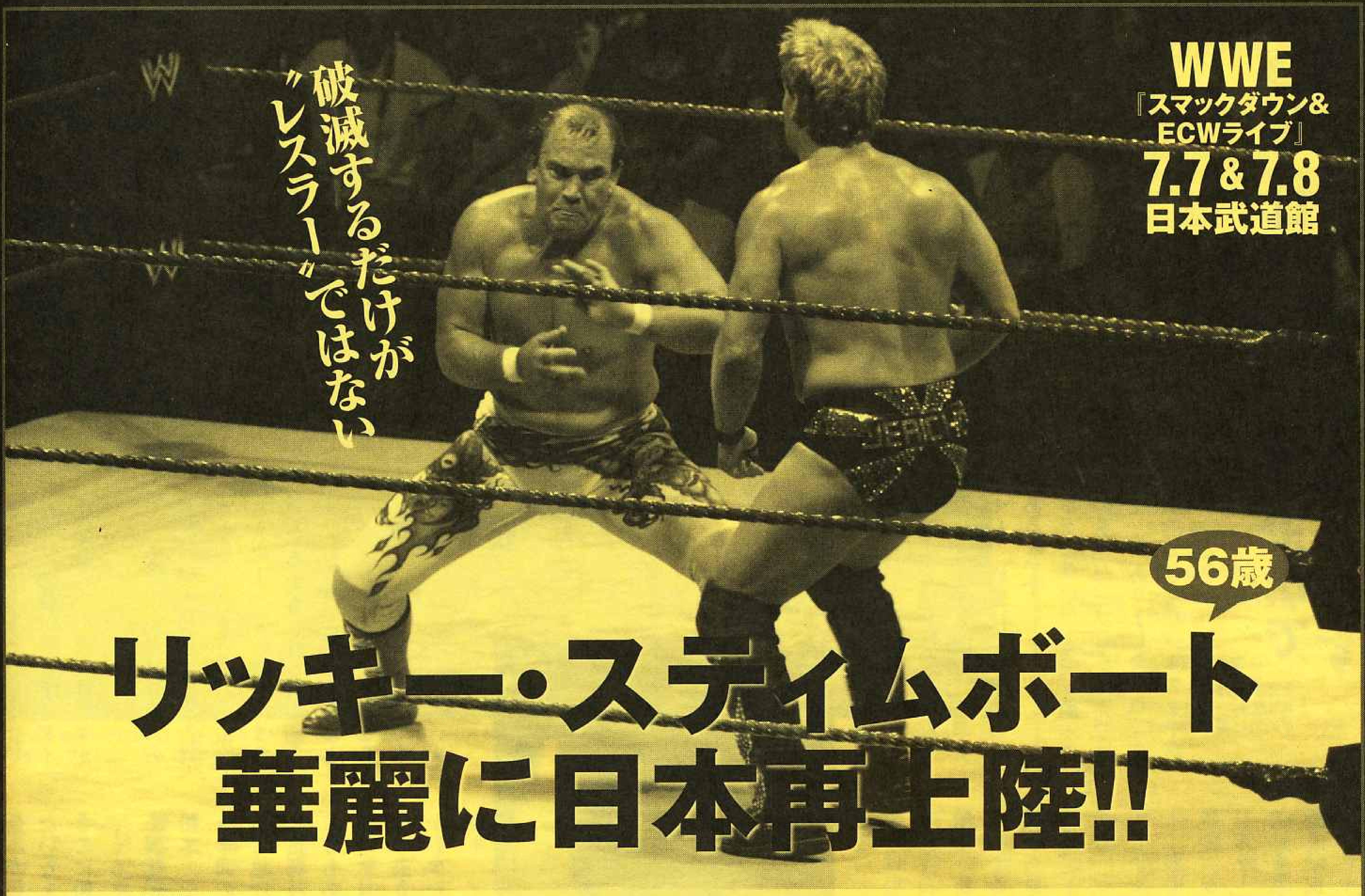
――ますます今回の復帰は意味があるように感じますよね。

船木 格闘技でもそうですよ。桜庭(和志)とか田村(潔司)は後輩なんですけど同い年だし、二人ともスターなんで、自分も一緒に輝けるんですよね。たまたま自分が中学校卒業してプロレスを始めたということでそういう特権が生まれたんです。

――なるほど、特権ですか(笑)。

船木 自分が格闘技をやる、プロレスをやるのは特権であり、運命なのかもしれません。その運命を受け入れて自分は自分のプロレスをやるだけです。

【09年6月29日/都内・玉川高島屋にて収録】



WWE
『スマックダウン&ECWライブ』
7.7&7.8
日本武道館

破滅するだけが"レスラー"ではない

56歳

リッキー・スティムボート華麗に日本再上陸!!

6月13日に急逝した三沢光晴さんの二代目タイガーマスクとも対戦した往年の名レスラー、リッキー・"ザ・ドラゴン"・スティムボートが7月8日のWWE日本大会で華麗に日本再上陸をはたした。

WWE殿堂入りをはたしたスティムボートは今年で56歳。黒髪がフサフサしてた往年のイメージからは遠くかけ離れたドリー・ファンクJr.ばりのハゲ方は衝撃的だが、試合では年齢よりもずっと若々しい動きを披露していた。同じ1953年生まれのプロレスラーには藤波辰爾がいるが、日本のドラゴンよりもこちらのドラゴンのほうが動きはよかったし、往年の逆水平チョップやコーナーからのダイビング・ボディアタックもかなりキレがあるからたまらない。

相手のクリス・ジェリコが現在ヒールということもあり、観客のヒートを煽りながらスティムボートの間に合わせたリスペクトを感じさせる試合運びで絶妙なサポートを行なったのもじつに見事。前夜のジェリコはレイ・ミステリオを相手に今年のWWE日本ツアーでのベストマッチを繰り広げ、まさにいまが旬といった感じで大活躍だった。

WWEファンにとってはそんなジェリコにばかり目が行ってしまう試合だろうが、やはりプロレスという大河ドラマの中に身を置いて考えれば、このスティムボートの活躍は嬉しかった。

かつて対戦した三沢さんはスティムボートよりも10歳も若くして試合中の事故で亡くなった。三沢さんが亡くなった当日に公開された映画『レスラー』では、80年代に一世を風靡したかつての人気レスラーが落ちぶれながらもプロレスにしがみつき続ける男の人生を描いて話題になった。現在、プロレスを取り囲む厳しい状況と微妙にリンクしながらも、スティムボートはいまなおリングに上がり続けている。

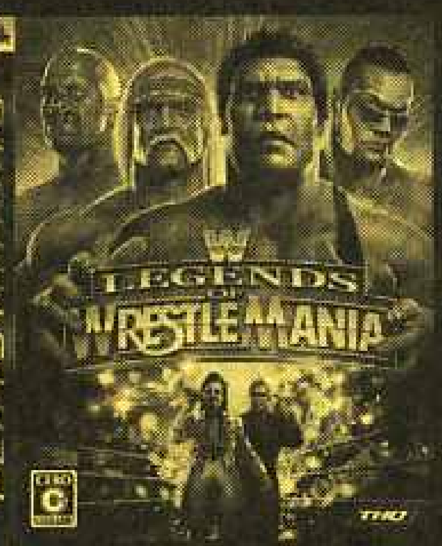
じつは、本誌前号（No・136）のお金特集でTAJIRIにインタビューした際にスティムボートのことを聞いていた。原稿ではカットしたが、40代で一度引退してWWEのエージェントになったスティムボートがなぜ戻ってきたのかという話だった。

「彼は引退して小さなショッピングコート（駐車場のある商店街のようなところ）を持ってて、そこの家賃収入もあるから食べていけるらしいんです。試合をするのは趣味みたいなものだと言ってましたよ」

どうやら現在のスティムボートは80年代に活躍した往年のアメリカンプロレスのスターがたどる悲しい結末とは無縁のようだ。老いても元気な姿を見せてくれるプロレスラーが増えてくれば、世間のプロレスに対する見方も少しはマシになるのではないか。

（坂井ノブ）

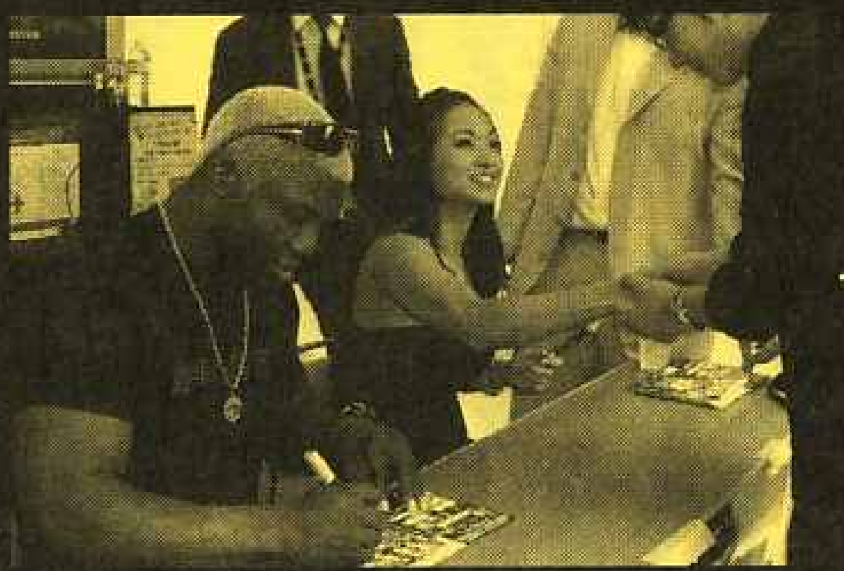
WWE日本大会の開演前には武道館でイベント開催! 『WWEレジェンズ・オブ・レッスルマニア』発売中



プレイステーション3、Xbox360用ソフト
「WWEレジェンズ・オブ・レッスルマニア」
定価／￥7140（税込）
絶賛発売中!!

WWE最大の祭典『レッスルマニア』25回大会を記念して80～90年代の伝説的なスーパースターやマネージャーが登場するWWEゲームシリーズが発売された。WWEの歴史を追体験し、伝説的な過去の名勝負に参加して、歴史に名を刻むことができるからマニアにはたまらない。7月8日には日本武道館でサイン&握手会が行なわれ、シェルトン・ベンジャミンとゲイル・キムがファンとの交流を楽しんだ。

[公式サイト] http://www.legendsofwrestlemania.jp/



All WWE programming, talent names, images, likenesses, slogans, wrestling moves, trademarks, logos and copyrights are the exclusive property of World Wrestling Entertainment, Inc. and its subsidiaries. All other trademarks, logos and copyrights are the property of their respective owners. © 2009 World Wrestling Entertainment, Inc. All Rights Reserved.
© 2009 THQ/JAKKS Pacific, LLC. Used under exclusive license by THQ/JAKKS Pacific, LLC. JAKKS Pacific and the JAKKS Pacific logo are trademarks of JAKKS Pacific, Inc. Developed by YUKE'S Co., Ltd. YUKE'S Co., Ltd. and its logo are trademarks and/or registered trademarks of YUKE'S Co., Ltd. THQ and the THQ logo are trademarks and/or registered trademarks of THQ Inc. All Rights Reserved. All other trademarks, logos and copyrights are property of their respective owners.

バルレスリング連盟設立会見

"幻"の統一コミッションはなぜ失敗したのか?

初代事務局長がGPWAの実態を激白!!

中村祥之

三沢光晴さんの死をきっかけに、元プロレスラーの馳浩氏が音頭をとるかたちで、全日本、新日本、ノアが中心になってプロレス統一コミッションの設立に向け動き出した。あれ? プロレス統一コミッションといえば数年前も同じような話題が出ていたような気もするが……。あ、GPWAだ!　というわけで、幻に終わった(?)GPWA構想を初代事務局長に直撃!

聞き手/ジャン斉藤　撮影/阿修羅チョロ　試合写真/平工幸雄

――今日はGWPA……あれ、GPWAでしたっけ⁉

中村　ちょっとちょっと、わかってないじゃないですか！（笑）。

――すいません。GPWAでしたね（笑）。今回、三沢さんの件があって、プロレス統一コミッションなどの話が出ているんですけど、そういえば、そういう機構って、ちょっと前にもあったような気がして。

中村　あったようなじゃなくて、ありますよ。

――そのGPWA事情に一番詳しい中村さんにお話を聞かせてもらえれば、と。

中村　いやいや、でも一番詳しくはないけど、一応、初代事務局長ですから（苦笑）。

――いまは違うんですか？

中村　いや、いまでもそうだと……、いや、わかんないな。追放されてるかもしれない（笑）。

――ダハハハハ！　そもそもGPWAはどういう経緯で発足されたんでしょうか？

中村　GPWAが発足した当初は、個々のメリットではなくて、加盟した各団体というか、全体のメリットを考えていたわけですよ。僕は生前、三沢（光晴）社長に会ってGPWAのときに最初にお願いしたのは、GPWAというものを使って、サッカーみたいに連盟にスポンサーをつける活動をさせていただきたい、と。そのうえで、GPWAで加盟しているところからノアというものが外れたら……、もうね、大変じゃないですか。

――大変でしょうね。

中村　だから、その件で三沢社長にお願いしたうえでGPWAというものを作った、と。それ以外にもいろんな提案は出ましたけど、ただまあ、実際に連盟を持ったとしても、結果の出ない世界というか。

――これまで前例がなかったわけですからね。

中村　それこそ、パチンコ好きならば誰もが知ってるようなチェーン店にも営業に行ったことは事実ですよ。

――パチンコ業界とマット界は密接な関係がありますけど、営業に行くだけではなくて、いいところまでいったと？

中村　一応、そこのトップの人間には会えた。興味は示していただいたんだけど、ちょっと、ご時世的に、それぐらいの時期からドンドン広告宣伝費っていうのが削られていったじゃないですか。だから、杉田（佳隆）っていうGPWA事務員みたいなのがいたんだけど、それが大会に10 0万円とかのスポンサーをつけたりはしてたんですよ。でも、それは大会レベルの話であって、僕らの目的とする連盟にスポンサーをつけるまではできなかった。そのあいだに、まあ自分のところの団体がガッタンガッタンになってきた、と（苦笑）。

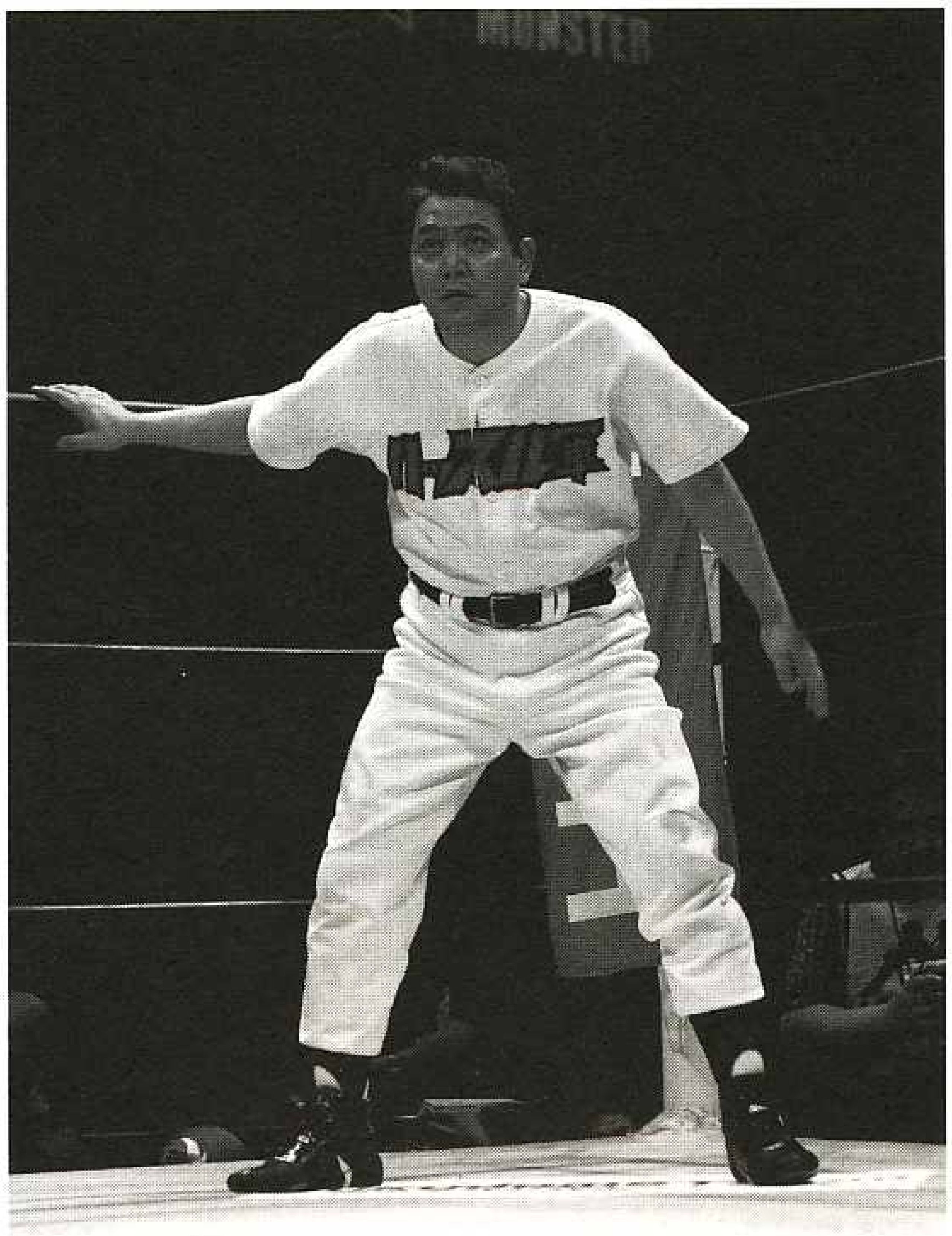
――ズバリ言って、ZERO1自体が大揺れだったわけですね（笑）。

中村　そうそう。そうなると、どうしても、自分の団体に力が入っちゃうんだよねぇ……。

――まあ、そうなりますよね。

中村　自分のところがあってのGPWAであって。GPWAをやりたいんだけど、母屋がガタつくと前に進まないじゃない。で、だんだんと尻すぼみになってきて。結論としては、自分のところがガタガタになって僕は出向させられた、と（笑）。短くかいつまんで話すとだけどね。

――そもそもGPWAには、プロレ



GPWA事務局長として、さまざまな団体に呼びかけをしていたという中村氏。しかし、同時期に中村氏は『ハッスル』では中村カントクとして島田二等兵らとやり合う毎日。中村氏は二つの顔の狭間でかなりの葛藤もあったことだろう。オイッス！

じつはGPWAのほかにGPWMっていうのもあったんです

ス界の発展のため、興行戦争を避けたりという目的もありましたよね。

中村　そうだね。いまでも、主要団体とか、そこから派生するいろんな協力団体は日程調整とかされてるんじゃないかな。その当時もライブドアのスケジュールカレンダーというのを使って管理してたんですよ。

――リアリティありますね（笑）。

中村　それをみんなが見れる環境にしてたの。で、いまは統一機構を作ってることで新日本、全日本、ノアっていう3団体が動いてるみたいだけど、その3団体でスケジュール管理をされているかはわかんないけど、のちのちは同じ環境でフェアに見れるようなものを共有したら役立つんじゃないかなと。みんながログインできて確認ができるっていう。

――GPWAではライセンス制も視野に入れていたわけですよね。

中村　もちろん。ライセンス制のことも当時から出てましたしね。ただ、これはノアの仲田龍取締役から出た言葉だけど、「現在デビューしてる者においては、全員にライセンスを発行しなきゃいけないでしょう」と。

――それは、たとえばインリン様であっても？

中村　そうそう。「それを規制することはできないじゃないですか」と。僕は仲田さんの言葉はもっともな意見だなと思ったけど、同調できない方々もいらっしゃるわけですよ。

――いらっしゃるでしょうね（笑）。仲田さんは、イメージ的にはもっと規制したほうがいいというようなガッチガチの考え方なのかと思ってましたけど。

中村　仲田さんは見かけとか、噂とかと違って、じつにフェアな感覚の持ち主ですから。

――仲田さんにも「プロレスラーはこうあるべき」というポリシーはあるんだけども、物事の道理として、みんな認めなきゃダメでしょっていう話ですよね。

中村　そうそうそう。だって、僕なんかは『ハッスル』では闘ってたりしてたじゃないですか？（笑）。

――そうか、中村さんもライセンスが発行されるかもしれなかった、と（笑）。

中村　いやいやいや、べつに俺はね、自分でライセンスがほしいとかはないけど（笑）。ないけど、自分での葛藤はありましたよ。『ハッスル』で試合に出てる人間がはたして、それを唱えていいのだろうかっていう（笑）。

――でも、10年前のプロレス界ならともかく、2000年を越えていろいろなことがあって、まだ異を唱える方々っていらっしゃるんですね。

中村　そりゃあ、いますよ。それに、仲田さんとか我々は業界どっぷりな人間だし、白黒つけることは自分たちからはできない立場だから。でも、外部の人たちの中では、そこはプロ

ジャン斉藤編集長から「この写真、トビラと一緒じゃん」と突っ込みがあったのですが、49ページの写真と見比べてください。会見出席者の顔の角度が故・冬木さんのスペシャルばりに微妙に違うんです。一応、言い訳をさせてもらいました。意図的です、はい。（担当・阿修羅）

としての線引きをキチンとするべきじゃないかという意見もある。まあ、そのあいだにGPWAの話し合いは私が参加してなかったのか、集会がなくなっていったのかは別にして、だんだんと話題に出なくなって現在に至る……、みたいな（笑）。

――事務局長不在の集会も開かれたりしたんですか。

中村　いや、それはわからないけどね。まあでも、今回の新しい協会設立の話に関しても、仲田さんがいらっしゃれば、そのベースとなるGPWAというものをベース化しちゃって、その上の次の段階に進むんであればいいことだと思いますよ。仲田さんはずっと新日本、全日本も入れて将来的には協会にしなきゃいけないって唱えてたから。そういった意味では一歩前進したかたちが今回の新機構の設立であって、GPWAっていうのは土台というか、提案書であった、みたいな。

――GPWAは提案書でしたか（笑）。GPWAもそれぞれの団体があってというかたちでしたけど、統一機構ができたとしても、やはり専任で動く人間がいないと厳しいんじゃないかとも思うんですよ。

“幻”の統一コミッションはなぜ失敗したのか？

中村　それはね、GPWAのときも同じで、たとえばGPWAに唯一雇われてた人がいるんですよ。

――先ほど言っていた杉田さんという方ですか？

中村　そうそう。杉田さんはもともとアントントレーディングにいて、そのあとは新日本プロモーションに勤めていたんだけど、そこも辞めてGPWA専任でやってたの。ただ、彼は彼でプロレス界のことを思って一生懸命動いていたのは事実なんだけど、結果を出せなかった。あ、思い出した。じつはGPWAのほかにGPWMっていうのもあったの。

――GPWM？

中村　グローバル・プロレスリング・マネージメントっていう法人を作ったんですよ。

――へぇ～、それは初耳です。

中村　杉田さんはGPWMの社員だったの。そこは小さな会社ですけど、ノアさんと僕を含めた4人で出資をして作ったんです。いまでもあるのかわかんないけど（笑）。

――そうなんですか（笑）。

中村　ただ、その中で、健介オフィスの北斗（晶）さんなんかには、「GPWAはわかるけどGPWMの意図がわからない」とか突っ込まれたりはしてましたよ。

――利益を目的にして作ってるんじゃないかっていうことなんですかね。

中村　そうそう。そういう疑いをかけられて。ただまあ、GPWMはノアさんの信頼できる方が代表取締役となって作った会社だったからね。

――いろんな突っ込みはあるにせよ、専任の人だったり、組織がないと運営していくのは難しいですよね。

中村　そうそう。でも、一人では結果を出すっていうのは難しいんです

GPWAとは？

初代会長にはノア社長（当時）の三沢光晴氏が就任し、2006年9月12日に発足会見を行なったGPWA（グローバル・レスリング連盟）。その目的と事業概要、加盟団体および加盟選手は以下のとおり。

【GPWAの目的】
グローバル・レスリング連盟（GPWA）は、将来的な統一組織（協会）の礎となるべく参加団体を統括し、世界的なレスリングの普及と振興を図り、あまねく青少年の健全な育成に貢献するとともに、世界の人々の心身の健全な発達に寄与することを目的とする

【GPWAの理念】
レスリングを通じて広く国際社会と交流し、諸外国との親善を深めて、世界の平和を希求する。
レスリングを通じて、青少年の健全な育成に寄与するとともに、あまねく世界の人々の心身の健全な発達に寄与する。
レスリングを通じて「喜、怒、哀、楽」を表現し、人間の本質にある「愛」と「勇気」を伝える。

【GPWAの事業概要】
参加団体の興行日程調整。
統一ルールの策定、管理、裁定委員会の設置。
プロレスラーの公認、公募、育成、研修、各種保険、引退後の支援等
審判の公認、公募、育成、研修等。
リングアナウンサーの公認、公募、育成、研修等。
共同道場の設立・運営、地域住民とのコミュニティ（レスリング教室、柔道教室等）。
レスリングの広報活動、新規ビジネス（芸能活動の支援、音楽ビジネス等）の企画・推進。
連盟主管の興行開催。

【加盟団体・五十音順】
IWAジャパン、Eldorado、KAIENTAI DOJO、健介オフィス、ZERO1-MAX（現・ZERO1）、DDT、BIG MOUTH LOUD、プロレスリング・ノア、EWA、ROH、WLW、WORLD-1

【個人加盟選手・五十音順】
菊タロー（フリー）、越中詩郎（フリー）、澤宗紀（バトラーツ）、鈴木みのる（パンクラス・ミッション）、高山善廣（高山堂）、NOSAWA論外（フリー）、冨宅飛駈（パンクラス・ミッション）、本間朋晃（フリー）、MAZADA（フリー）、宮本和志（フリー）、安田忠夫（フリー）、吉川祐太（バトラーツ）、マグニチュード岸和田（フリー）

よ。不可能に近いというか。
——何をもって結果というのもあるでしょうけども。
中村 僕なんかも、この業界で20年以上やってるけど、苦しいわけですよ。それが専任が一人では、やれることも限られるし。保険の話からライセンスの話、合同練習とか、いろんなことをやったけれども、結局、プロレス自体のパワーが下がってきてるときじゃない?
——どちらかというと、よくない方向にいってますよね。
中村 ハッキリ言えばそうだよね。そういうときに一人に任せっきりで結果を求めるのは僕は酷だなって思って。GPWMには限られた資源しかないわけだしね。ただ、そこで結果を出さなければ雇っておけないという理由もわからなくないんですよ。僕も一経営者だから。
——それは難しいところですね。
中村 そのあいだに挟まれて、「どうすればいいんだ?」って感じで杉田さんも辞めざるをえなかった、と。
——結局、辞められてしまったわけですか。GPWMの目的というのは利益を上げつつ、機構としての機能を兼ね備えるような組織ということだったんですか。
中村 そうだね。やっぱり、何をやるにもお金がかかるから、各団体に負担をかけるんじゃなくて、GPWMでしっかりしたかたちで管理をして、そこの利益を各団体に分配するというか。たとえば、ライセンスを作るにしてもカードがいるわけだし、レフェリー講習会を開くのにもお金がかかる。なんでもお金が必要

僕は設立前、GPWAの特使として新日本にも3回行きましたから

なので、お金をストックしていきながら、プロレス界に対する還元をしていこうという。いわゆる、お金の管理会社みたいな感じだよね。
——なるほど。
中村 でもやっぱり、スポンサーを取ろうとするとGPWAっていうものだけじゃ取れないんですよ。NPO法人でもなければ特殊法人でもないんで。だから、そのときにはGPWMっていうところでマネージメントして、管理はノアさんのキチンとした方にお願いをして、普通の会社みたいに運営していきましょう、と。
——GPWAを設立するにあたって、いろんな団体に呼びかけたんですよね?
中村 そうですね。全日本プロレスはわからないけど、僕は新日本にはGPWAを作る前に3回行きましたね。特使として(笑)。
——特使(笑)。
中村 3回行ったんだけど、2回行ってダメだったから、もう「作ります」と力道山OB会の岩沢(敏雄代表)にも報告に行きましたからね。それ

でも「中村、もう一回、新日本に行け」と言われて。
——新日本が加入しなかったのは、どういう理由なんでしょうか。

GPWA第1回興行として06年11月14日に行なわれた『Realize』後楽園大会。この大会は主催者発表で1700人(満員)の観客を集め、日本テレビがCSのG+で生中継し、地上波でも放送された。07年5月にはディファ有明でディファフェスタを開催するも、興行はそれ以降、開催されていない。

中村 どうなんだろうなぁ。……聞いた話だと、菅林(直樹社長)は聞き入れてくれたみたいなんだけど、まあ僕から言われるのが嫌だったんでしょうね。「中村ごときに言われたくない」みたいな(笑)。
——まあ、政治的がしがらみもあるんでしょうし。
中村 そうそう。やっぱり、会社っ

ていうのは株主が絶対権限を持ってるわけだから、大株主イコール、ユークスになっちゃうんだけど、その同意を取りつけることができなかったのかもしれないね。
——一応、全団体に声をかけたんですよね。
中村 一応ね。まあでも、全団体に声をかけられたかどうかっていうと、ちょっと微妙かもしれないなぁ。
——どこからどこまでが全団体かよくわからないですからね(笑)。
中村 そうでしょ。
——『ハッスル』とかには行かれたんですか?
中村 行った行った。俺、自ら山口(日昇)社長のもとにちゃんと行ったよ(笑)。
——ノアの仲田さんとかは『ハッスル』が入っていても問題はなかったんですかね?
中村 仲田さんはそんなことは全然気にしてなかった。「行ってもいいですか?」って聞いたら「どうぞ。ぜひ行ってください」ってことで。だから、結局、全日本プロレスは入らなかったけど、健介オフィスが入ったり、高山(善廣)さんや鈴木みのるさんが加盟したり、全日本に上がってる選手も加盟してましたから。
——そもそもGPWAを設立しようと思った動機というか、きっかけはなんだったんですか?
中村 まあ、このままじゃいけない、と。そのときはまさか数年後にノアのテレビ中継打ち切りがあるとは思ってなかったけど。
——たしか、GPWA主催興行も日テレで放映されてましたよね。

中村 そうそう。だけど、ノアにかぎらずだけど、時間帯がドンドン深くなっていったり、時間が短縮されたり、プロレス界にとっては非常によくない状況だったじゃない? その前後で『ファイト』もなくなるし、『ゴング』もいい噂を聞かなかった時期だったし、メディアが淘汰されていく時代だったから。
——明るい未来は感じられませんでしたよね。いまもですけど(笑)。
中村 だから、それじゃいけないっていう危機感もあったし、逆にいまじゃないとできないっていうか。このタイミングで、なんとかそういう組織を作って連盟にスポンサーをつけて、それこそテレビ枠を連盟で買って、それぞれの団体の情報だとか、いろんなものを流せるように頑張っていこう、みたいな。ホントに業界のためというのが主旨でしたよ。
——でも、そういう組織をしっかりとやるには、お金はもの凄くかかるわけじゃないですか。
中村 かかる!
——当時はスポンサー獲得のために作ったんじゃないかという噂も流れていましたけど。
中村 いや、全然それはなかった。組織を作ってからスポンサーをつけようって考えていたんで。でも結局、結果が出せなくなって、杉田さんも首が回らなくなった。で、給料が出なくなったら、ほかの仕事をせざるをえないですよね。
——まあ、そうなりますよね。
中村 これは僕も責められないと思って。僕が思うに、結論としてGPWAに足りなかったのは継続する資

“幻”の統一コミッションはなぜ失敗したのか?

本力だったなって。お金がなくなると、やっぱり、いろんな想像をしてしまって物事を悪いほうに悪いほうに考えるんですよ。

――噂好きな業界ですしね。

中村 ホントそう。たとえば、去年の春にウチとGPWA非加盟の新日本の対抗戦が始まったわけですよ。

――やってましたね。

中村 僕の記憶が正しければ、2007年の11月14日に突然降って湧いた話があるんですよ。

――いったい何が起こったんでしょうか？

中村 突然、力道山OB会の岩沢（敏雄）事務局長に事務所に呼ばれたんですよ。その前に大谷が永田選手の地元の東金での興行に出て、いわゆる業界バーターとしてウチの後楽園大会に出てもらった日なんだけど。

――業界バーター（笑）。

中村 その日の午後に突然呼び出されて、言われたわけですよ。「中村ぁ！」と。僕はいつも怒られるんですよ。OB会に行くと（笑）。

――そうなんですか（笑）。

中村 GPWAイコール、中村イコール、新日本プロレスの囲い込みじゃないんだけど、新日本プロレスは村八分みたいに見えたんでしょうね。

――なるほど。確かにそういうムードがあったような気がしますね。

中村 ムードはあったけど、こちらとしては善をつくして、三度も行ったものを蹴ったのは新日本だから。で、そのとき力道山OB会の事務所には菅林社長もいたわけですよ。

GPWA絡みで悪い噂がいっぱい立ってノイローゼになりましたよ

――力道山OB会というと、闘魂ショップを経営していて、新日本との関係は深いんですよね。

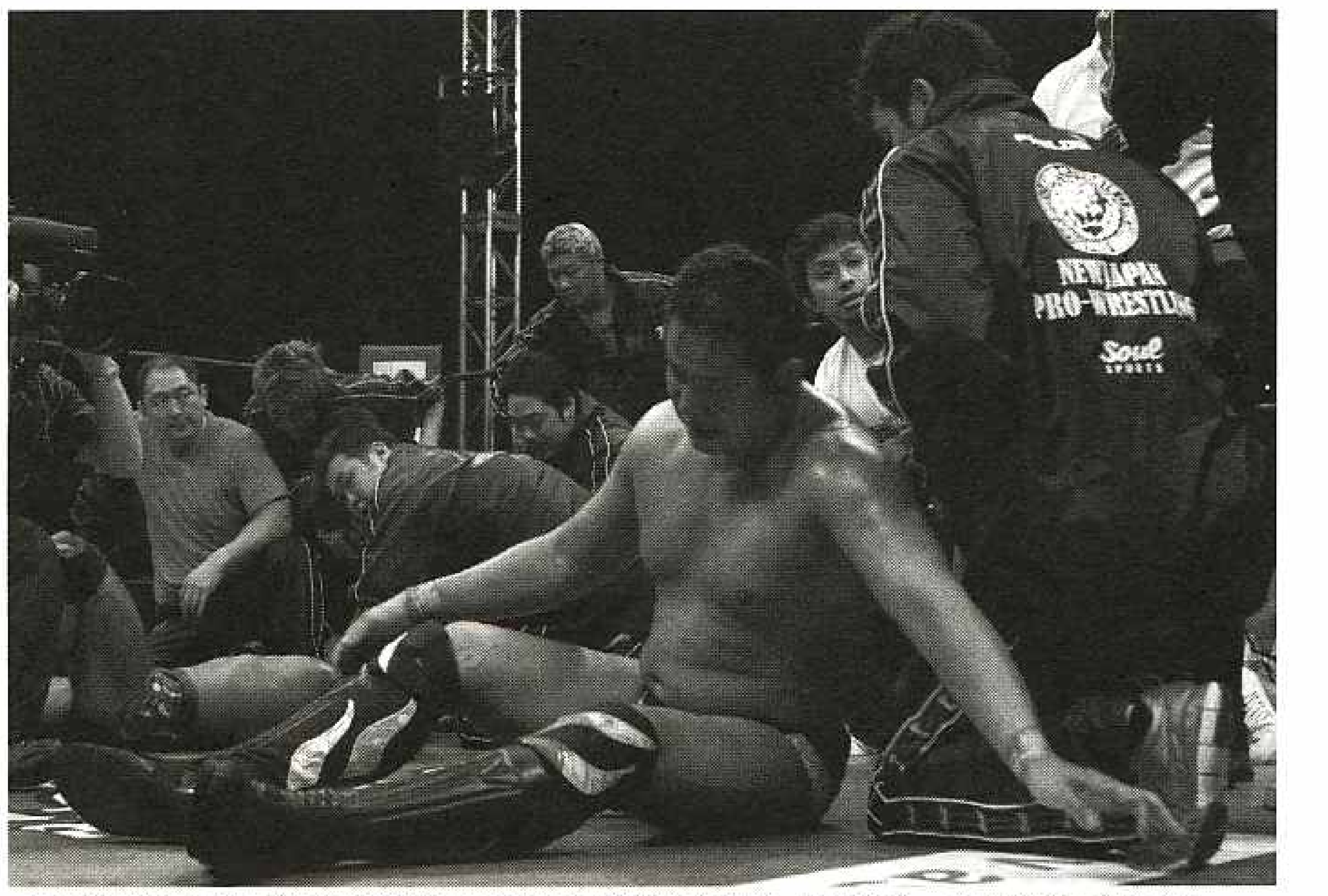
中村 そうそう。水道橋に闘魂ショップがあって、隣にチャンピオンっていう他団体のグッズを集めた店あって、その上の階に力道山OB会の事務局があるんですよ。

――ウチの読者はついてこれるかなぁ（笑）。

中村 「中村、おまえGPWAとやらで、新日本を潰したいのか？」といきなり言われて、「いや、ちょっと待ってください！」って（笑）。それは言いがかりで、べつにそんなことはないですから。

――潰すどころか、特使として橋渡し役を買って出てたわけですよね。

中村 そうでしょ。で、結局、そのときに言われたのは、翌年の1・4の東京ドーム大会を新日本プロレス大OB会祭りにするっていう話で。出ていった人間を全部集めよう、と。そこに「協力しろ」と。まあ、ウチはOBは大谷（晋二郎）と高岩（竜一）しかいなかったんで「わかりました」って出したの。で、それだけじゃ終わらなくて、これも話せば長くなるんだけど、新日本が藤波さんにもオファーを出したら断られた、と。それもZERO1は無我と交流してるから、おまえが断らせたんじゃないか、と。全部悪いのは僕になっちゃってたんですよ。



GPWA関連でさまざまな誤解が生じ、ZERO1勢のみならず、ドラディションの藤波辰爾のオファーまで中村氏が行なったという08.1.4東京ドーム大会。この大会をきっかけにZERO1と新日本は本格的な対抗戦へと突入。この時期からGPWAの活動が表面化することはなくなってきた。

――裏で糸を引いてやってるんじゃないかと疑われたわけですね。

中村 そうそう。で、最終的には「じゃあ、おまえが止めてないんだっていうんだったら、無我もおまえが交渉しろ」ってなって（笑）。

――凄い展開ですね（笑）。

中村 でしょ。それで、なぜか俺が交渉して二転三転しつつも藤波（辰爾）さんは出たんだよね。そういうのもあって、そこからZERO1と新日本との抗争が始まったんだけど、忘れもしない去年の3月2日ですよ。ウチが後楽園でノアさんが武道館の日ですよ。そのときに、新日本との対抗戦をブチ上げたんですよ。

――察するに、ノアさんからのクレームが入ったんでしょうか？

中村 クレームというか、新日本との対抗戦をノアにぶつけたみたいになっちゃって。でも、日程がぶつかっちゃってるっていうのは、だいぶ前からわかってたことなんだけど。

――ライブドアカレンダーでチェック済みでしょうね（笑）。

中村 そうそう（笑）。それに後楽園なんて、突然日曜日に取れるものでもないし、年間で取ってる中で、その日にたまたまノアさんも武道館でやっていた、と。ウチは後楽園の規模だけど、残券が一枚もないような状態になったんですよ。

――ひさびさの超満員興行となったんですよね。

中村 そしたら一部で、「ZERO1の野郎、ノアを裏切って新日本とやりやがった」って話になって（苦笑）。そうなると、こっちもう自主的に引かざるをえないよね。だって、俺、そんな他意ないもん。1月4日のバーターとして、3月2日に出てもらったわけだし、ウチにとっては後楽園は大箱だからね。

――まあ、そうですよね。

中村 そこで、勝負をしなきゃいけない。企業としての生命線だしね。だから、そのあたりから各方面から、あらぬ噂がいっぱい立っちゃって叩かれまくって。そしたら、俺の出る幕はないし、もう「はい！」って言うしかないよねぇ……。

――「おっしゃるとおりです」と（笑）。

中村 そうそう（笑）。そこでヘタな言い訳してもしょうがないじゃない。

――それぐらいの時期からGPWAの話題はあまり聞かれなくなって、同時にノアとZERO1というか、中村さんが揉めたんじゃないかという噂も耳にも入ってきたり。

中村 それがプロレス界であったりもするからね。「GPWAの中でやらないで、なぜ非加盟の新日本とやるんだ？」とか、そういうことをガンガン言われて。やっぱり、人間そうなったらノイローゼになるよね。

――え、ノイローゼだったんですか。

中村 そう。ホントにひどかった。俺としてはGPWAもなんとかしたいんだけど、自分の母屋に火がついたら、やっぱり母屋の火を消しにいくのが経営者として当然だと思うから。

――そうですね。

中村 俺はそこの母屋の火を消すことに精一杯だったから。最後は巡業バスにも火がついちゃったけどねぇ。

――まさに火祭りだ！（笑）。

中村 もう、それからは何もかも逆風になって。蝶野（正洋）さんのプレ

ミアムをファーストオンステージで協力したら、「中村は連盟を裏切って」みたいに言われるし、これも話せばもの凄く長くなるんだけど、両国国技館で3連戦やったプロレスエキスポも、どっかの新聞に「中村がA級戦犯だ」とか書かれたりしてさ、俺がやりたくてやってるものじゃないものまで「中村が悪い」みたいに言われて、もうね、気力減退でノイローゼ。

――実際に仲田さんとの関係は悪くなってしまったんですか？

中村　そう……みたいだね。いろんな話が説明されてないっていうことになっちゃって。確かに、仲田さんとかに対しても説明不足だったと思うんだけども、それを説明もさせてもくれないような風潮が流れちゃってたっていうのもあるし。確かに僕も仲田部長に直接説明に行けなかったのは自分の非ではありますよ。非ではあるけど、悪意は何もなかった。母屋の火を消すがためにしてたことが、みんなGPWAの反逆みたいにとられちゃって。でもホントに言えるのは私利私欲を求めるためじゃなく……、『ハッスル』だって会社のためにやってたしプレミアムだって会社のためだし、GPWAは組織のためっていう、区分けは自分の中でできてたんだけどね。

――なるほど。

中村　ただ、やっぱり、母屋の消火活動に一生懸命になりすぎて、「なんだ、せっかく作ったのに放り投げやがって」みたいに言われるのも、ある意味しょうがないというか。1年ぐらいノイローゼでしたからね。

――1年間もですか！

中村　今年の4月ぐらいからかな。もうプロレス界から離れようって思って。離れないと、もう死ぬなって。

――それぐらい深刻だったんですね。

中村　だって、10人中9人が敵だもんね。表では。でも裏ではみんな優しいメールくれるんだけどね（笑）。

――そこもこの業界ならではというか（笑）。

中村　そうそう。「本当はこう言いたいんですけど」とか「中村さんの気持ちはわかりますけど、ごめんなさい」みたいな。プロレス界は長いものには巻かれなきゃ死んじゃう、みたいなところもあるしね。

――そうなんですか。

中村　でね、今年の春でちょうど、この業界に入って20年経ったんですよ。20年同じ仕事をやってきた自負もあるし、いいことばっかり経験してるわけじゃないけど、次の目標が30年だと思ったときに「この先の10年、プロレス界で何ができるんだろう？」って考えたんですよ。

――その答えはなんだったんですか？

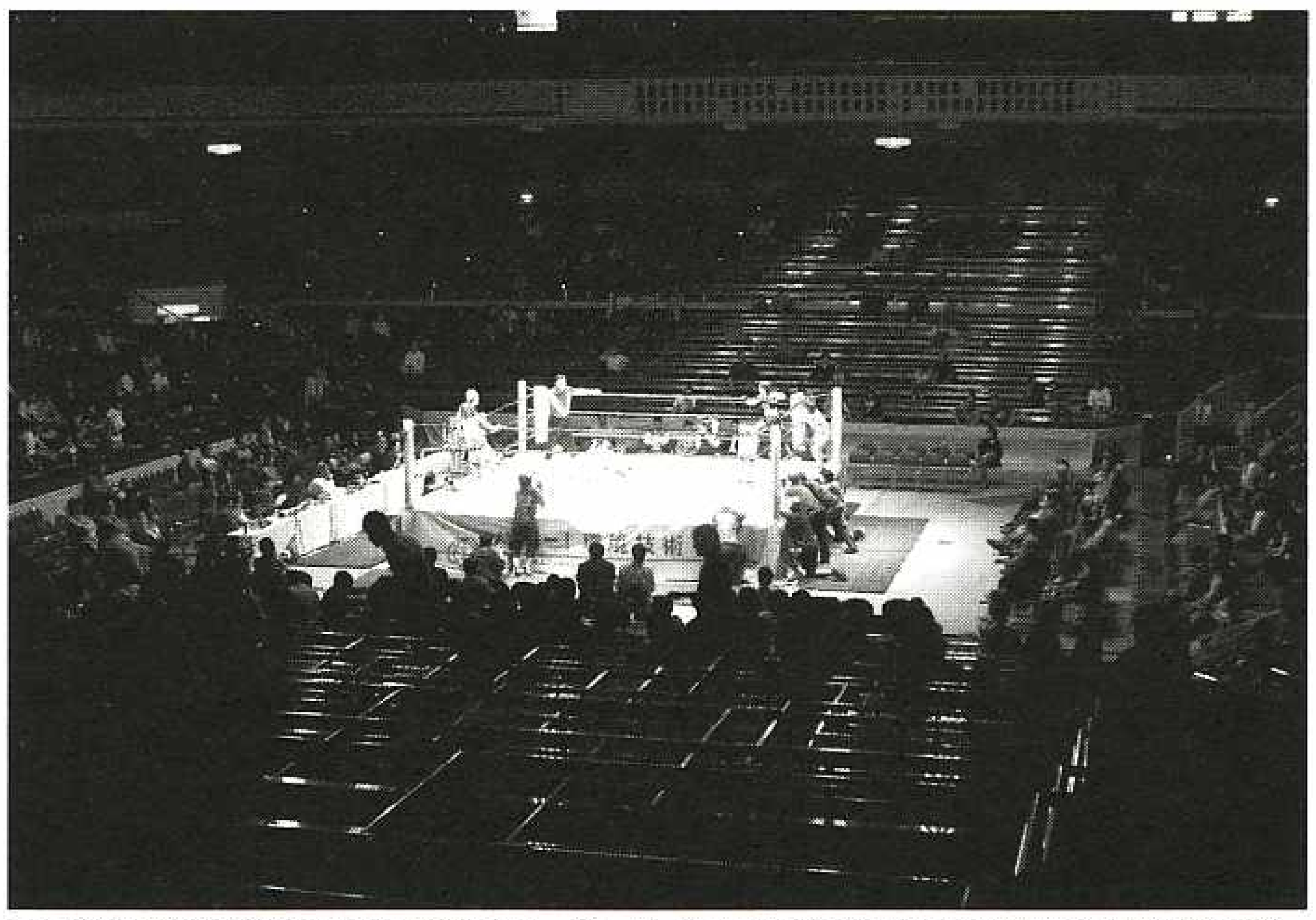
中村　結論としては、できることはない、と。

――何もできることはない？

中村　何もない！（キッパリ）。

――ダハハハハ！　……って笑いごとじゃない（笑）。

中村　もう、白か黒かって言ったら、ない！　そう踏んで、もう完璧に引こうと。俺はいまから何ができるのかって考えたときに協会に対してどうこうとか、そんなおこがましいことは言えない。……結局ね、プロレス界に何が必要かって言ったら、ぶっちゃけ言えば、気持ちはあるのよ。



ここ数年では断トツのズンドコ興行となってしまったのが08年10月24日&25日に両国国技館で3大会行なった『プロレスエキスポ』。大野禄太郎代表が直前に一度ギブアップ宣言をしたり、船木誠勝の参戦を計画していたなどの興味深いエピソードも語ってくれた中村氏。こちらはまたの機会に!

――プロレス界にはお金はないけど「気持ちはある」（笑）。

中村　そうそう。もの凄い気持ちはあるけど、何が足りないって言ったら、俺は組織の前に金だと思ったの。

――前回特集しましたけど、いまのマット界にはお金が足りない、と？

中村　そう。お金が足りない。お金が足りないんだから、いま僕はプロレス界以外で仕事を引っぱってこようと頑張ってるんだけど、まったくプロレス界とは関連していない方面からスポンサーになってもらって、それをプロレス界というか、まずはZERO1ありきだけど、還元できればいいなと思っていて。それが俺の仕事じゃねえかなっていう。

――いまやれることはプロレス界の中にはない、と。

中村　そう。だから、いま3団体の首脳でやろうとしてることっていうのは、会社で言えば総務部だったり、法務部だったりすると思うんですよ。

――なるほど。

中村　法をならしていく、決めごとを作っていく部署として3団体があると思っていて。でも、協会を立ち上げるにしてもスポンサーって絶対必要じゃない？

――お金はかかりますからね。

中村　俺はそこには入らないし、声もかからないだろうけど（笑）、俺は外回りしていきたいなって。三沢さんに最初に言ったのと一緒ですよ。「GPWAの名前を使って営業したい」って。プロレス界に足りないのはお金だなって、僕は割りきったんですよ。要は金！（キッパリ）。

――やっぱり金かあ。

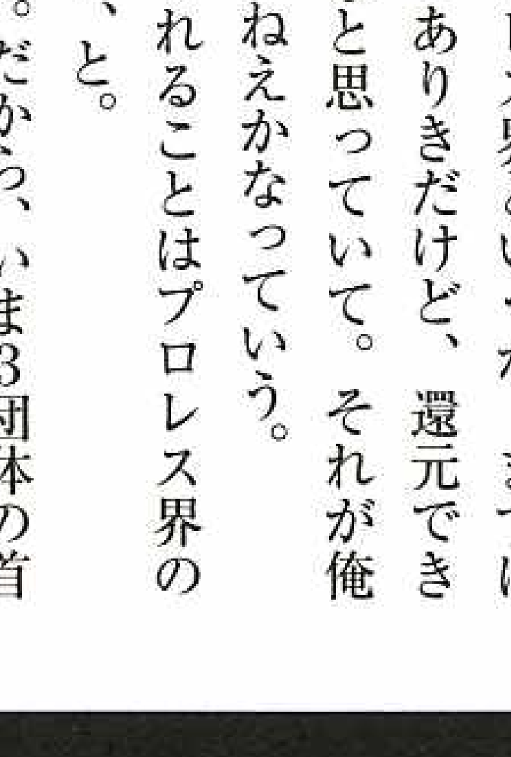
中村　金がなかったら何もできない。それを痛切に感じたのが先週の火曜日に行った、WWEのセミナーなんだよね。

――ブログにも書かれてましたけど、WWEジャパン主催のセミナーに行かれたみたいですね。

中村　エド・ウェルズGM（ゼネラル・

ノアに激震続く！

田上明新社長就任も百田光雄が退社&不満を爆発!!



ノアの激震が止まらない!?

三沢光晴社長の死去に伴なうノアの新人事が7月6日、都内事務所で発表された。新社長となったのは田上明。取締役副社長には小橋建太、丸藤正道の両名。森嶋猛は取締役選手会長に就任した。

田上の社長就任は三沢さんの株式を所有する筆頭株主の真由美夫人の意向が尊重されたかたちで、これまで取締役を務めていた百田光雄、永源遙、仲田龍、小川良成が相談役となることも同時に発表となった。しかしこれに異を唱えたのが前副社長の百田光雄。百田は新社長に小橋を推していたが、これが受け入れられず、翌日辞表を提出。田上新社長らは慰留を続けたが、百田の意思は固く数日後、辞表届けを受理。

12日に開幕したノアの後楽園大会に姿を見せた百田は全選手に挨拶を済ませると、報道陣を前に仲田氏や三井政司取締役営業部長、早川久夫常務取締役らを名指しで批判。百田自身は現役は続けたいとの意向のようだが、はたしてどうなるのか？　今後も方舟の行方からはガチで目が離せない。

“幻”の統一コミッションはなぜ失敗したのか?

マネージャー）のセミナーに行ったんだけど、プロレス界からは俺一人しか行ってなかった。

——それは何向けのセミナーなんですか?

中村　一般と、あとは早稲田大学のセミナー向け。7000円の講習料を払って話を聞きに行ったんだけど、やっぱり彼らがやってることはスゲェよ。凄いんだけど、金がなきゃできない!

——システム的なものは完成されてるけど、それをやるには、やはりお金が必要だと。

中村　そういうこと。もう、ホントにあれがトドメだったね。

——WWEにトドメを刺されましたか（笑）。

中村　自分がやってることは間違いないと思ったのもWWEをセミナーを受けてからだから。

——いままでのプロレス界のやり方を続けても、それこそお金を出してくれるところもない?

中村　ない!　ならば、自力で作り上げるしかないなって。新日本がユークスによって救われたようにね。だから、俺はプロレス界の外に出て、そっちの世界から組織を作る協力をしながら、そこの莫大な利益をプロレス界に投入してもらえるようなノウハウを作ったほうがいい、と。

——プロレス界でお金を作ろうと思っても無理ですか?

中村　無理とは言わないけど、僕にはできない。

——じゃあ、無理ですね（笑）。

中村　いやいやいやいや（苦笑）。いまの僕にはプロレス界において、お金を作ることはもうできない。キップを売ってお金にするとか、スポンサーさんに頭を下げて生きていくことは可能だけど、WWEみたいなことをしようと思ったら、そりゃあね、数億なかったら無理っすよ。だって向こうはキップの売り上げなんてアテにしてないもん。まったくアテにしてないとは言わないよ。だけど、ビジネスの中ではたいした割合じゃない。10パーセントにも満たない。

——WWEにとって興行は水ものじゃないわけですね。

中村　だから、ハッキリ言えば、そんな大きなショーをやる必要性なんてないんですよ。PPVの収益でビジネスを成立させてるから。

——UFCもそんな感じですよね。

中村　同じだと思う。だから、まったく日本で同じビジネスモデルが成立するとは思えないけど、このままなら間違いなくやられるよね。……もうね、やっぱ、金だよ、金!　金しかないでしょ（笑）。

——結局は金ですか（笑）。そういう意味でも、プロレス統一コミッションを設立するにしても、国が絡まないと無理なんじゃないかなって。

中村　だけど、森（喜朗）先生がトンパチな発言をしたっていうじゃない?

なかむら・よしゆき■1966年5月22日、東京都出身。専修大学時代、のちのジャパンプロレスとなるリキプロダクションでアルバイトを始め、ジャパンプロ崩壊後は新日本プロレスに入社。01年6月、橋本真也らとともにZERO-ONEを旗揚げ。その後はZERO1の親会社としてFOSを設立。中村祥之公式ブログは→http://nakamurayosiyuki.blog.players.tv/

——「プロレスは興行なのか、スポーツなのか」と。

中村　俺から言わせたら愚問にすぎないっていうね。だって、プロ野球だって興行じゃない?

何をやるにしても、プロレス界に足りないのは、やっぱりお金だよ!

——お金がなかったらやらないですよね。

中村　でしょ。そんなことを言ってる人たちに「プロレスを理解してくれ」とお願いするほうが間違ってる。プロレスはスポーツでもあり、エンターテインメントでもあり、いろんな要素を含んだものがプロレスなわけですよ。だから、プロスポーツ協会に加盟するとかしないとか、僕から言わせたら関係ないというか。作るんならプロレス独自のものを政治家抜きでキッチリと作っていくべきだと思う。文化として。それか、協会を作ってから国会に持ち込むとかね。そうあるべきじゃないかなと。そのためには……、お金だよ（笑）。

——結論はやっぱりお金（笑）。

中村　まあ、馳先生はこれから選挙でお忙しいとは思うけれども、ウチとかはほっといて、まずは3団体間での決まりごとを作るのが先決だよね。たとえば、会社で言えば定款みたいなものを文書化して定めるとか。いろいろとキツいとは思うけど。

——簡単にはいかないでしょうけど。

中村　でも、馳先生もプロレス出身だし、三沢さんの死を受けて社会的な面も含めて動いたんじゃないのかな。まあ、馳さんに先頭に立ってもらって、GPWAっていう組織もあったわけだし、多少は参考にしてもらえるところもあると思うし。ただ、全部の意見を聞いてたら、まとまるものもまとまらないけどね。

——とくにプロレス界は。

中村　GPWAの失敗の一つは、全部が全部の意見を聞きすぎて調整がつかなくなったっていうのもあるしね。

——船頭が多かったんでしょうね。

中村　そうそう。であれば、今回は3団体が船頭になって、全日本、新日本、ノアっていう主要な組織に同調する団体はそこにくっついていけばいいじゃない。

——そうですね。

中村　せっかく、いままで犬猿の仲と言われた主要3団体が集まるんだから、サミットみたいなものから始めて、決めごとを作っていくというのはいいことだと思うし、本心から成功してもらいたいよね。で、最終的には、みんなが一つの決まりをもって、協会になれれば一番いいんじゃないかな。失敗経験者としての意見を言うとね（笑）。

——失敗経験者としての貴重な意見、ありがとうございました!　GPWAの失敗を糧にして……。

中村　GPWA!

【09年6月30日／都内・ファーストオンステージにて収録】

ZERO1
『WRESTLER'S GRAND PRIX 2009 火祭り ~The Ambition for Glory~』

出場選手
Aブロック／大谷晋二郎、佐藤耕平、日高郁人、曙、植田使徒
Bブロック／田中将斗、崔領二、関本大介、黒田哲広、マグニチュード岸和田

試合日程
7月25日（土）東京・後楽園ホール
7月29日（水）新潟・万代シティパーク特設リング
7月31日（金）東京・芝 赤土公園特設リング
8月 1日（土）岐阜・可児市ZERO1ニックススポーツクラブ
8月 3日（月）愛知・Zepp Nagoya
8月 4日（火）大阪・松下IMPホール
8月 8日（土）東京・後楽園ホール

オフィシャルウェブサイト
http://z-1.co.jp/

馳　（秘書に向かって）カルピスくださ〜い。あと、おまんじゅう！

なきゃいけないと思ったんですね。
——それで各団体の幹部を招集され

もするんで。
馳　（無視して）だから社会現象とい

ポーツか、興行かと問われれば、我々は興行として生きている」というと

全日本プロレス、国際プロレス。
——昭和のプロレス団体はすべて加

三沢さんの悲しい事故から5日後——

統一コミッション設立に国が動いた!!

衆議院議員／元プロレスラー
馳 浩

統一コミッションやライセンス制度はホントに確立されるのか？ズバリ言って業界内だけの力では難しいところはある。そこで国の出番、馳先生のお力ですよ！議員会館の馳先生を直撃だ！

聞き手／ジャン斉藤（無党派層）
撮影／阿修羅チョロ（エサ次第）

口だけじゃなく行動を起こして レスラーを守る環境を作りたい

馳　（秘書に向かって）カルピスくださ〜い。あと、おまんじゅう！

──とてつもなく甘い組み合わせですね（笑）。

馳　今日はなんだ？

──プロレス統一教会のお話です。

馳　は？ 統一協会は宗教団体だろ。

──あ、間違えた！ 統一コミッションだ。

馳　大丈夫かよ、おまえ（笑）。

──べつに馳先生にツボを売りつけにきたわけじゃないですけど（笑）、統一コミッション設立の動きがプロレスファンから大きな注目を浴びてまして。

馳　あ、そうなの。

──はい。三沢さんの事故を受けて、先日行なわれた自民党の文教合同部会に新日本や全日本、ノアの首脳が招集されたじゃないですか。自民党の重鎮でプロレスファンの森（喜朗）先生も出席されて。どういった経緯でメジャー3団体の首脳が呼ばれたんでしょうか？

馳　俺は三沢の死を〝事故死〟と受け止めてるんだけど、こういう事故が二度と業界であってはならないと思ったんだ。三沢の家族のことを思うと気の毒でならないし、ノアという会社にしても三沢という大黒柱を失なって、今後の団体の存続やファンからの信頼ということを考えると本当に気の毒でしょうがない。そういう思いがあって、やっぱり何かやらなきゃいけないと思ったんですね。

──それで各団体の幹部を招集されたんですね。

馳　口で言ってるだけじゃさ、何か消えてっちゃうような気もするし。何か行動を起こして、実際にレスラーが守られるようにしなきゃいけないしな。もっとわかりやすく言うと、リングの上は無法地帯でいいんだけど、レスラー自身もファンもレスラーの家族も安心して試合に臨めるような最低限のルールをみんながわかるように作る、と。そういう調整するのが俺たち政治家の仕事だからさ。で、6月の18日に自民党の文部科学部会・文教制度調査会の合同会議を開いて、いわゆる社会問題としてプロレスを取り扱った。

──そういった席でプロレスがテーマにできるもんなんですね。

馳　うん。なぜ自民党に来てもらったかというと、じつは社会的な問題が起きたときには政策として関係する部会が関係者を呼んで話を聞いて、何かできることはないかと考えることもしてるんですよ。たとえば漢字検定も一つの社会的な問題だよね。

──へえ〜。あ、そういえばUFOの話題も取り扱ってましたね。

馳　あれは国防部会がやってんだ。「もしUFOが地球に攻めてきたらどうするんだ」っていうのは（笑）。

──いや、大事な社会現象です。一応ウチってUFOマガジンだったりもするんで。

馳　（無視して）だから社会現象ということなのよ。じつは日本プロスポーツ協会というのは文部科学省所管の外郭団体でね。だから文部科学省としては、加盟している団体に指導することができるわけです。強制力はないんだけど指導することができる関係性にあった。でも、その日本プロスポーツ協会からいまから数年前にプロレス団体が続々と退会しちゃったんだよ。

──どうしてですか？

馳　そこはいろいろと考えるところはあるんじゃないか。

──「日本プロスポーツ協会に納めるお金が払えないからじゃないか」という指摘はありますけども。

馳　その理由はわからない。「プロレスはプロスポーツなのか興行なのか」ということで団体の経営者の判断として、「お金の問題もあるし、プロスポーツか、興行かと問われれば、我々は興行として生きている」というところにウェーを置いたんだろうな。それで退会されたんじゃないの。

──う〜ん。

馳　日本プロスポーツ協会は年に一回、表彰式をやるわけですよ。そのときにアントニオ猪木さんやジャイアント馬場さんが出席したり、長州さんや藤波さんや鶴田さんが出席することによってほかのプロスポーツ団体と肩を並べるどころか、みんなが憧れを持って見られる機会だったわけだけど。

──そういえば、昔はそういったニュースがありましたねぇ。

馳　なんとなく「そんなことあったなあ」と思うだろ。

──ええ。以前はどのプロレス団体が加盟されてたんですか？

馳　かつて加盟していた団体は3つあったんですよ。新日本プロレス、全日本プロレス、国際プロレス。

──昭和のプロレス団体はすべて加盟されてたんですね。

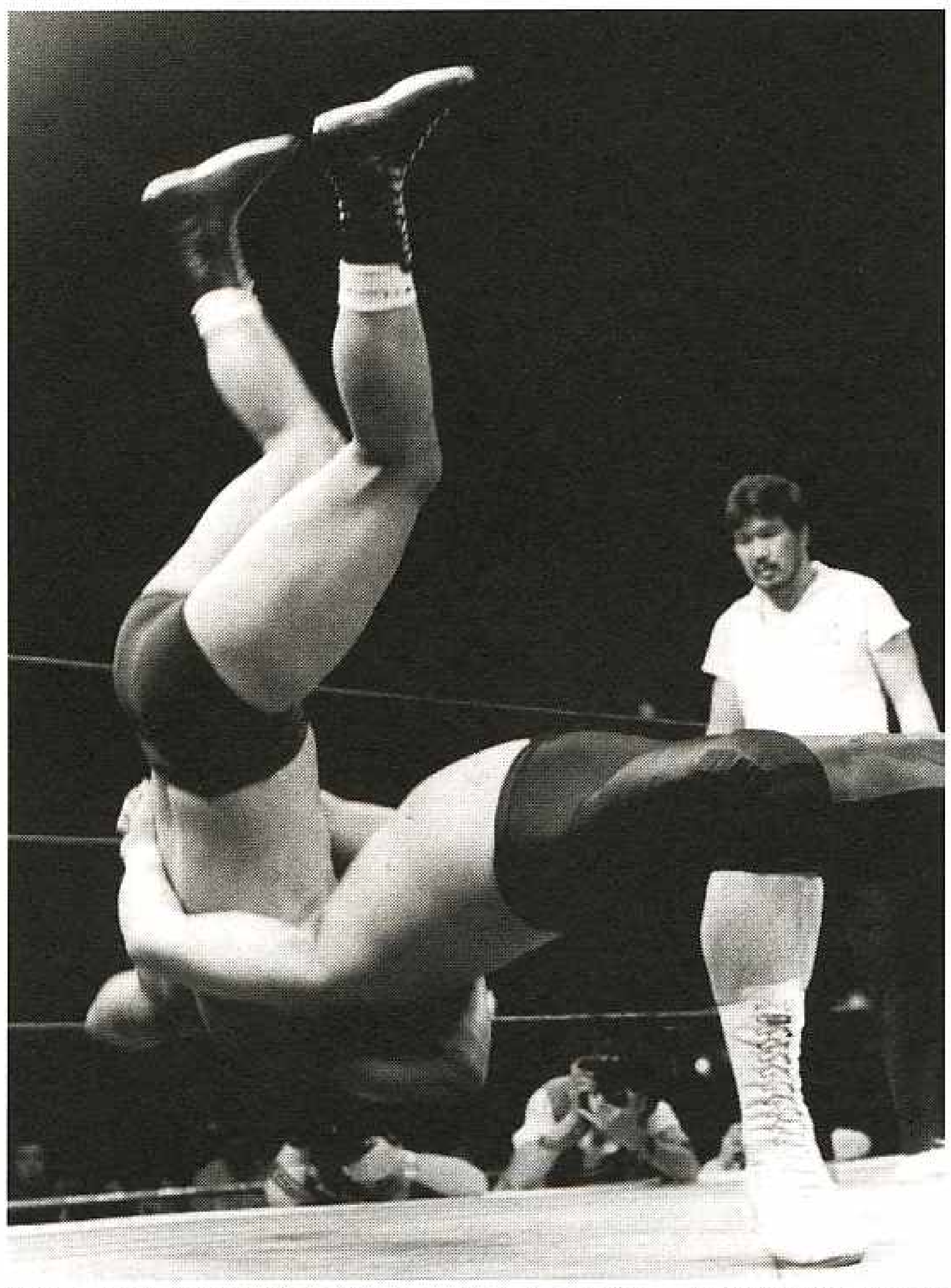
馳　で、ここで一つの問題が出てくるのは、プロレス場合は団体ごとに加盟してたんだけど、他の競技は〝協会〟として加盟してるわけだよ。簡単に言っちゃうと、ボクシングやプロ野球、あと大相撲やゴルフは一つの競技として加盟してるわけだ。けどプロレスだけは各団体が加盟してる。

──興行として参加してる、と。凄く特殊な例だったんですね。

馳　そういうこと。プロレスが興行なのかプロスポーツなのかっていう仕切りについて、俺が何かを言う立場にはありません。あなた方プロレス業界として考えてください。でも、リングの中は無法地帯でいいんだけども、選手を取り巻く環境はちゃんと整えてくれ、と。興行には必ずドクターや看護士さんがついて、すぐに病院に連絡がとれるようにしておく。試合前には簡単な問診をして、頭を打つことが多いから年に一回はCTスキャンを撮るとか、脳波を取るとか、心電図を取るとか、血液検査をするとか。流血戦もあるんだからエイズ等の感染症の問題もあったりするし。俺が言ってるのは最低限のルール作り。そしてまたプロレスのルールに関しては、各団体が登録をするというかたちにしてほしい。まったくルールがない団体もあるんでね。

──団体によって違ってきますね。

馳　それを団体が話し合って調整しろとは俺は絶対に言いません。リングの中は無法地帯でいいんだよ。で



新日本プロレス時代、後藤達俊のバックドロップを食らった馳は受け身を取り損ない、試合後に一時心肺停止状態に陥った。ドクターがいたため大事には至らなかったが、三沢さんの事故を聞いて馳のことを思い出した読者も多いだろう。

命が大事か、興行が大事か。そんなの命に決まってるじゃん

も選手がリングに上がる以上は、健康管理や自己の管理というものを最低限やって、その合意のもとで「どうぞお好きにやってください」という主旨があったんですね。

——そのプロスポーツ協会に加盟すると、どういうメリットがあるんでしょうか？

馳　一つめ、社会的認知度、社会的ステータス。だから俺はハッキリ言う。プロレスはプロスポーツ、エンターテインメントスポーツというジャンルとしてプロスポーツ協会に加盟すればいいと思うんだよ。二つめ、俺は文部環境副大臣時代、日本プロスポーツ協会を通じて「ドーピングのガイドラインを自主的に作りなさい」と要請したんですよ。つまり押しつけじゃなくて「自主的なガイドラインを作りなさい」という指示を出したんです。だから日本プロスポーツ協会に加盟している各団体は自主的なガイドラインを作ってる。それは健康管理とスポーツの公平性ということですよね。これはアマチュアであろうとプロであろうと必要なこと。ましてや選手の健康が害されることもあれば、「薬によって作ったホームラン記録はどうでしょうか」と。または「青少年に与える影響はどうでしょうか」と。つまりスポーツ界全体にまつわる問題のときにはこちらから指導ができるんですね。命令じゃないですよ、指導ね。

——プロレスの場合は、そういった問題に取り組む環境はないですね。ましてや各団体の足並みが揃ってないんですから。

馳　そこが一番大きいですよ。会合の席で森先生がわかりやすく言ったけども「プロレス団体の皆さん、あなたたち協調してこなかったでしょ」と。お互いに協調して最低限のルール作りをしてこなかった。それが今回の事故死につながっている。「あなた方、責任を感じてないんですか？」と。みんなドキッとしてたけど、森先生はそういう意味で言ったんですよ。

——馳先生から見て、各団体の安全性の認識は低いと思われますか？

馳　各団体にコーチもいれば先輩レスラーもいればトレーナーもいる。試合のあとに「ここはこうしたほうがいい。あんなムチャなことをしてはいけないよ」という指導はしています。間違いなく各団体がしています。けれどもそれを目に見えるかたちで確認するのがライセンス制度じゃないですかね。俺はそう思ってるんです。

ライセンス制度の導入は大きな議論を呼びそうだ。実際に導入されたらコンディション面で"失格者"が続出するのはメジャーリングだという指摘もある。あと泰葉はどうでもいいからインリン様には絶対に発行しろ（なぜか命令形）。

——ライセンス制度って昔から望まれてることだと思うんですけども、どこからどこまでがレスラーとして認めるんだという話になってきますね。

馳　それを一言で言っちゃえば、合意なんですよ。つまり、一つの団体の「これでいい」という判断ではなく、いくつもの団体の先輩レスラーやコーチやトレーナーが見て「これなら大丈夫じゃないか」ということを積み重ねることが合意だと俺は言ってるんですよ。数字とかペーパーテストとか、そういうことを言ってるんじゃないんです。この業界には少なくとも30年近くもプロレスに携わってる人たちがいるわけ。技術的なこと、受け身の大切さやタイミング、フォームなんかをわかってるわけですよ。そこで主要団体が一堂に会して「この程度の基礎体力がないとリングに上げるのはまずいな」という合意のもとでライセンスを発行して、それがあるがゆえに試合前に健康管理をする。

——そうすると、試合前にドクターストップがかかってしまうケースもあるんですね。

馳　じゃあ二者択一ですよ。命が大事ですか、興行が大事ですか、と。そんなの命が大事に決まってるじゃん。そういう判断をできるような体制をとっておくことが必要なんじゃないですか。俺が言ってるのは最低限のルール作り。生か死か。それが今回の三沢選手の場合には、もしかしたら俺が言ってることとまったく関係ない次元で死んだかもしれないけども、疲労の蓄積というのは目に見えないものだからね。一年に一回はライセンスの更新があったりする、あるいはCTスキャンを撮ったりする、定期検査をしておくということになれば、ダメージは激減させることはできたかもしれない。まあ、俺は無理して上がろうとして、最後には長州さんにゲンコツで殴られて泣きながら休んだこともありましたけども。みんながみんな先輩がゲンコツしてくれて休めるわけじゃないじゃない。

——無理にでも上がらなきゃならないって選手はたくさんいますし、「ここで休んだら興行に穴が開いてしまう」というケースが多かったでしょうね。

馳　うん、あると思いますよ。ただ、まさしく命が大事か興行の穴が大事かっていう。それはお客さんだって理解してくれますよ。一試合二試合休むことよりも、選手が死んだこととどっちがファンにとってマイナスなの？

——言うまでもないですね。

馳　でしょ？　これはね、業界が20〜30年前からやっておかなければならなかったこと。今回の三沢選手の事故死ということはですね、業界の先輩方が成すべきことを成しえてこなかったということのツケが回ってきたところも否定できないと思うんだな。べつに馬場さん、猪木さんが悪いというんじゃなくて、馬場さん、猪木さんを取り巻く人たちや、選手会長なんか選手自身も含めて、最低限のルール作りを怠ってきたうえでの三沢の死があると思います。ましてや三沢選手自身、今年の3月と5月にライセンス制度について取り組んでいたわけですから。俺はそのことは3団体が集まったときに初めて聞いた。自分も業界のOBとして、いまやらないと、いまこういうことをファンの皆さんにも理解していただかないと、第二、第三の事故はまた起こります。それどころかいま裁判になってるよね、練習中のダブルインパクトで死んだ事件で。

——インディー団体の新人レスラー

がダブルインパクトの練習台になって亡くなった事件ですね。

——いまは芸能人もリングに上がる時代じゃないですか。ライセンス制

て無理がたたったんだろうな」と思ってたよ。で、12時前の第二報で「亡

で、あんなの毎日のようにやってたんだから、プロレスラーってスーパ

って、次にその他の小さなプロモーションも含めて決めていく。『週刊

俺が言いたいのは安全管理
表現を規制するつもりはない

がダブルインパクトの練習台になって亡くなった事件ですね。

馳　女子プロでは13年前にプラム麻里子さんが亡くなった。新日本では福田（雅一）くんが試合中に、権瓶（広光）くんが練習中に亡くなっている。その事故を受けて検証をしてこなかったツケが回ってきたし、それは今後とも起こりうる話ですよ。自分もレスラーであったし、心肺停止の事件を起こしてるから、やっぱりそれは言わざるをえない。そこらへんはファンの皆さんにもわかってもらえれば嬉しいんだけどね。

——ウチはダブルインパクトの件は、どちらかというと「プロとはどうあるべきか」という視点で報道したんですね。それは「彼らはプロなのか」というふうにも読めるんですけど。

馳　おまえがいま言った論点で記事は書けるじゃんか。本人たちはプロレスだと思ってやってるんだよ。でも、そうは思えない関係者やファンだっているってことだろ。

——そこは見下してるわけじゃないですけど、「何をもってプロなのか」を考えさせられる事件ですね。

馳　肝心なことは、臭いものにふたをしないことだな。報道すればね、ファンの皆さんが「あんなのプロレスもどきなんだから扱うな」って反響が来るかもしれないし。「よくぞ言ってくれた」って声が挙がるかもしれないし。

——いまは芸能人もリングに上がる時代じゃないですか。ライセンス制度ができた場合、「その線引きはどうなるんだろう？」という興味はありますけど。

馳　リングの中は無法地帯でもいいの。インリン様が上がろうが、曙と試合しようがご自由にやってください、と。ただ健康管理の部分。そういうこと。

——でも、メジャー団体やマスコミはそこに線を引きたがるじゃないですか。馳先生は元レスラーとして気にならないですか？

馳　え～っとね、やっぱりプロレスって楽しいじゃん。

——ダハハハハ！

馳　何がおかしいんだよ（笑）。

——いやいや（笑）。

馳　あのね、プロレスってハレンチなんだよ。いいじゃんか、べつに泰葉が試合しても。でも、泰葉が試合するとしても安全管理はしっかりしろよ、と。何をやるかなんて規制するつもりはまったくないよ。

——先生の考えはよくわかりました。最後に三沢さん個人のお話をうかがいたいんですが。

馳　うん、どうぞ。

——第一報を聞かされたときはどう思われました？

馳　第一報が入ったのは6月13日の夜11時ぐらい。そのときは病院に運ばれたという話だったから「疲れて無理がたたったんだろうな」と思ってたよ。で、12時前の第二報で「亡くなった」と知らされた。そこから寝られなかったよ。背筋が寒くなるような感覚。「あの三沢がバックドロップで死ぬのかよ。何があったんだよ」って。

——ちょっと信じられなかったですね。

馳　ホントに。俺が倒れたのもバックドロップの受け身の失敗だったけど、三沢の場合には明確に受け身は取れてるはずだからね。相手の動きに逆らってるわけでもないから。で、直感的に勤続疲労という印象はあったよね。

——以前と比べてプロレスのあり方は相当変わってきてますよね。30分を超える激しい試合はザラというか。

馳　天龍同盟ができた頃からそういうスタイルになってきたんじゃないの。

——80年代後半ですね。

馳　ジャパンプロレスが全日本からいなくなって天龍同盟ができたあたりから過酷なマラソンマッチが増えたよね。しかもただマラソンしてるだけじゃない。障害物競走をしながらのマラソンマッチだから。そうして首、肩、ヒジ、腰、ヒザを蝕んでいったんだろうなあ……。

——マラソンマッチが増えていくことによってプロレスラーのあり方も変わってますか？

馳　疲れが残るよね。間違いなく残るだろ、そりゃ。やっぱり疲労の蓄積と回復力は年を取れば衰えるのはあたりまえだよな。1週間に一回あんな試合ができればまだいいぐらいで、あんなの毎日のようにやってたんだから、プロレスラーってスーパースターだなって思うよ。どのプロスポーツよりも過酷といえば過酷だし。天龍同盟から始まって、小橋、田上、三沢、川田、秋山、大森あたりがやってた試合っちゅうのは、ちょっとマネできないな。

——できないですか。

馳　俺はできるよ。俺や蝶野や武藤はできるけど。橋本はできなかっただろうな（笑）。

——橋本さんのプロレスもなかなかマネできないというか（笑）。

馳　橋本はああいう試合をしないほうがいいしね。そこは自分の表現の仕方だから。逆に俺たち新日本プロレスのスタイルは誰にも負けないと思ってたから、べつに彼らのマネをする必要はなかった。そこはプロだから。プロはオリジナリティが大事なわけ。

——なるほど。プロスポーツ協会のライセンスができたとしても、プロレスはずっと危険なままですよね。

馳　プロレスは危険ですよ。危険だからこそ観てて楽しいんだから。危険じゃなきゃ意味ねえじゃんかよ。危険だからこそできる人は限られてるんだから。選ばれた人、努力をした人しかできないんだから。

——協会ができるとして、馳先生がコミッションの初代会長をやられる可能性はあるんですか？

馳　俺はそういうことを言う立場じゃないの。武藤、仲田龍さん、菅林さんら業界のリーダーであることは誰もが認められているその3者で決めればいい話。まず3団体の合意があって、次にその他の小さなプロモーションも含めて決めていく。『週刊プロレス』に住所と電話番号を載せている団体に声がけをしてね。

——あとはいかに3団体が動いていくかなんですね。

馳　そうですね。

——そういうきっかけ作りを馳先生や森先生がした、と。

馳　はい。森先生は誰よりもプロレスファンだから。今度の7月5日も全日本プロレスを観に来るけど。……前みたいに何も起きなきゃいいけどなあ。

——あ～、TARUが森先生に絡んで問題になったんでしたっけ。ま、リング上は無法地帯ですから、気にしない気にしない（笑）。

馳　TARUが公務執行妨害で逮捕されるぐらいで終わればいいなあと思うけど（笑）。命を失なうようなことがリングの上であってほしくないね。以上！

【09年6月30日／都内・議員会館にて収録】

はせ・ひろし■1961年5月5日、富山県出身。ロサンゼルスオリンピックにレスリングで出場。一度は国語教師になるが、ジャパンプロレスに入団。90年代新日本プロレス隆盛の立役者の一人。現役中に衆議院議員に当選、現在は3期目を務めている。なお、今回は誰も森喜朗に絡まなかったので馳先生も一安心の模様です。

——今日は三沢光晴さんの訃報を踏
てなかったですから。場合によって
高岩　僕の辞めた理由なんてくだら
高岩　あの、べつに僕は大谷とは仲
全に独立したんですけど。そういえ

待遇悪化、危険なファイトスタイル……
マット界を取り巻く
〝環境問題〟を激白！

直視できない
プロレスの現実

"ジュニアの超竜"
高岩竜一

昨年12月、ZERO1を電撃退団した"ジュニアの超竜"高岩竜一。
持ち前のパワーを武器に現在もフリーとして活動しているが……
そこには目をそむけたくなるようなプロレス界の現実が横たわっていた!?

聞き手／鈴木佑　試合写真／平工幸雄

社長の頃の橋本さんは満足に練習もできてなかったですから

――今日は三沢光晴さんの訃報を踏まえて、いまのプロレスを取り巻く環境について……。

高岩　（さえぎるように）いやぁ、ホント、ビックリしましたよ！　「え、亡くなった⁉」って頭が真っ白になりましたからね。僕はGHCジュニアのチャンピオンに二回なってますし、三沢さんには凄くお世話になりましたから。実際に試合もさせてもらいましたしね。

――リング外で三沢さんとの接点は？

高岩　一回だけ飲みの席でご一緒させてもらいました。お酒とお姉ちゃんが好きで、いい兄貴分っていう感じの方でしたよ。本当に惜しい人を亡くしましたよ……。

――今回の三沢さんの一件は単なる事故というよりは、もっと根深い問題があると思うんですよね。プロレスを取り巻く環境が悪化してきたことにも原因があるというか。

高岩　あぁ、なるほど。確かにプロレス人気が落ちてきた中で、三沢さんも社長業が忙しくて満足なコンディションじゃなかったって話は聞きましたね。

――高岩さんは実際に橋本（真也）さんや大谷（晋二郎）さんという、社長との二足のワラジを履いているレスラーを身近で見てきたわけですが、両立はきつそうでしたか？

高岩　橋本さんは満足に練習もできてなかったですから。場合によってはアップもせずにいきなり試合に出たりもして。

――ムチャしますねぇ。

高岩　やっぱり練習しないとケガしますよ。大谷もZERO-ONEの経営が厳しい中で金策に走ってる部分もあるでしょうし、「大丈夫なのか？」って心配ですよね。いまの時代は社長業とレスラーの両立は難しいと思いますよ。だからって、名前だけを貸すっていうわけにもいかないんでしょうけど。

――高岩さんはあえてZERO1ではフロントに入らなかったって言ってましたよね。

高岩　まぁ、向かないというか、レスラーと両立できるほど器用じゃないですし。せいぜい若手のコーチを務めるのが性に合ってるというか。

――高岩さんが新日を辞めたときはまだプロレス人気も低迷する前だったと思うんですよ。環境的にも恵まれていたというか。それなのにZERO-ONEに移籍した理由というと？

同じ社長レスラーとして、心身をすり減らしながら闘い続けた三沢さんと破壊王。01年のZERO-ONE旗揚げ戦に三沢さんは参戦して破壊王と初対決、マット界に新たなうねりを予感させるものとなった。しかしその二人は、いまはもうマット界にはいない……。

高岩　僕の辞めた理由なんてくだらないことなんです。大谷だったら長州さんとの確執とかありましたけど、僕は単純に新日での試合に刺激を感じなくなったってだけで。当時はライガー&サムライ&カシンvs金本&大谷&高岩っていう6人タッグを、3年くらい毎日やってましたから。それにあの頃はまだプロレスも盛り上がってたし、新日を辞めても充分に食っていけるっていう気持ちもあって。そういうときにたまたまZERO-ONEの話があったんです。

――それは橋本さんからお声がかかって？

高岩　いや、僕が勝手に行っちゃったんですよ。単純に冒険がしたかったっていうか、誰にも相談はしなかったですし。

――大谷さんにもですか？

90年代の新日ジュニア戦線を席巻した大谷&高岩の同期タッグは、初代IWGPジュニアタッグ王座に君臨するほどの名コンビだった。しかし、高岩のZERO1退団の際、大谷は強く引き留めようとはしなかったという。そこには大谷の経営者としての苦悩も垣間見られる。

高岩　あの、べつに僕は大谷とは仲がいいわけじゃないですよ（笑）。悪くはないですけど、普通の関係というか。まぁ、ずっとタッグを組んでたからそう見る人は多いですけど。

――当初、ZERO1と新日はつながってたんですよね。

高岩　そうなんですよ、新日の衛星団体というか。僕がZERO-ONEに入った次の日が新日の契約更改だったんですけど、橋本さんが「新日と契約してこい」って言うんですよ。だから「あれ、俺ってZERO-ONEに入れるんじゃないの？」って思ったんですけど、「あぁ、つながってるってことなんだな」って。でも、すぐに橋本さんと新日の関係がダメになったから、結局ZERO-ONEは完全に独立したんですけど。そういえば、なぜかZERO-ONEの最初の給料の入金が遅れたんですよ。それで驚いて新日に電話したら、「もうあなたはウチの選手じゃないですよ」って言われて「あぁ、すいません」って謝った記憶がありますね（笑）。

――ダハハ！　ZERO-ONEと関係性の強かった『ハッスル』についてはどう思ってました？

高岩　僕も一回だけハードコアマッチで上がりましたけど、『ハッスル』に対して思うところはべつに何もないですよ。そもそも僕はエンタメ色が強かろうがなんだろうが、プロレスはなんでもありだと思ってますから。ただ自分のスタイルに合うかどうかというだけで。

――それは新日入った頃からそういう考えですか？

高岩　はい。90年代の新日のジュニアって、スタイルの違う他団体の選手がよく参戦してたじゃないですか？　そうすると彼らは知り合いもいないし、「どうしたらいいんだろう？」って肩身の狭い思いをしてるわけですよ。だから僕は自分から話しかけるようにしてましたね。

――団体の垣根はなかった、と。

高岩　それに僕もいろいろ他団体のことも聞きたかったですし。あの頃はいまよりインディーとメジャーの差が明確でしたけど、インディーでも僕より有名な選手もいたし、個人的にはインディーに対してどうこういうのはなかったです。普通に石井（智宏）ちゃんや奥村（茂雄）やTAJIRIくんと仲良くなって。

――でも新日っていうプライドはあ

ZERO1では給料が3割カット、次に半分、またその半分……

ったんじゃないですか?
高岩 それは多少ありましたけどね。僕、20代前半の頃によく他団体を観に行ってたんですよ。それは選手の交流の輪を広げるとともに、会場で「あ、新日の高岩だ!」ってファンに言われるのが快感だったからなんですけど(笑)。
——その当時の新日のレスラーでインディーを観に行ってた選手は珍しかったんじゃないですか?
高岩 僕くらいじゃないですかね。FMWやW★ING、屋台村プロレスとかにも行ってましたよ。ほかの新日のレスラーには内緒にしてましたけどね、何か言われるかと思って。あの頃は記者にも「雑誌に載せないで」ってお願いしてましたし。
——90年代の新日はドームツアーに両国7連戦と、いまと比べて相当勢いがありましたけど、羽振りもよかったですか?
高岩 そうですね。僕は劣等生だったんでほかの同期たちに比べれば少なかったと思いますけど、それなりにもらえてましたね。ギャンブルやったり、あとは実家が貧乏だったので月に10万くらい送ってましたし。いまはこっちが10万送ってほしいくらいですけど(笑)。
——当時はそのくらいもらってたってことですね。
高岩 「俺がこんなにもらっていいのかな?」みたいな感じでしたよ。

ヤングライオンを卒業したといっても当時は下っ端のほうだったのに、20代半ばでおそらく●●●●万くらいもらってましたから。
——前座でそんなに! 景気のいい話ですね~。
高岩 だからあの頃のトップの人は凄くもらってたと思いますよ。契約更改のときに年俸のリストがチラっと見えるんですけど、普通に●●●●万とか書いてあるんですよ。「誰だ? これ」とか気になりましたけどね(笑)。
——ZERO-ONEに移って年俸は下がりました?
高岩 いや、逆に移籍して次の年なんかは上がりましたよ。会社の業績が悪くなったのは橋本さんと別れてからですね。橋本さんのスポンサーはもちろん橋本さんについていきますし。その頃からガンガン給料が落ちていって、まずいきなり3割カット、次に半分、またその半分……みたいな。
——うわ~、それはきつい落ち方ですね。
高岩 頭がおかしくなりましたよ(笑)。だから生活レベルも下げないといけないし、まずタクシーや車を使わなくなりましたね。電車どころかチャリンコ移動が多いですよ。200~300円の運賃ももったいないですからね。
——コーチだった高岩さんレベルで

そんな状態だったら、ほかの若手レスラーなんて……。
高岩 いやぁ、相当厳しいですよね。ZERO1にかぎらずですけど、いまって20代前半で辞めていく選手も多いですから。現在のプロレス界の状況だと引き留めることもできないですし。
——高岩さんはZERO-ONEを辞める直前にいくつかの要望を会社に出したって言ってましたね。
高岩 要望っていうか、もはや捨て台詞でしたね。給与面はもちろん、練習環境のこととか。結局わかり合えなかったですけど。たぶん、僕自身がZERO-ONEに合わなくなってきたんですよ。橋本さんが亡くなって大谷がトップになってから、日高(郁人)や田中(将斗)がマッチメイクをやりだして、だんだんと「俺ってなんなんだろうな」って部分が多くなってきて。道場もなくなったのに何がコーチだって思ってましたし。
——モチベーションが下がってきたわけですね。
高岩 そうですね、給料も下がって試合も少なくなって。ちょうど去年の新日との対抗戦の頃からドーンっとテンションが落ちてきて。で、こんな感じで気が緩んじゃったからか、試合中にエルボーを自爆して全身が麻痺するくらいのケガをしたんですよ。あの瞬間は「うわ、死んだ!」と思いましたね。
——危なかったですねぇ……。そのときは試合を休んで?
高岩 いや、それでも休めないんですよ、給料が下げられちゃいますから。
——そ、そうなんですか……。

高岩 その翌月に新日のジュニアのリーグ戦の参戦も決まってたので、「会社にいくらか取られてもこれはおいしいな、なんとしても出なきゃ」って身体にムチ打って。あのときは病院に行くお金もなくて、しょうがないから知り合いに借りて行ったんですけど。
——レスラーは保険にも入りにくいっていいますけど。
高岩 だからいまライセンス制度とかの動きがありますけど、まずそういうところから整備していかないとダメですよね。まぁ、現状は夢物語に近いと思いますけど、大企業なりがプロレスを囲って、そこに所属するレスラーを社員扱いにすれば社会保険や労災が多少なりともつくでしょうし。
——ちなみに新日のときに稼いだお金はプールしてなかったんですか?
高岩 使っちゃいましたね。人におごったり、親に多めに仕送りしたり。べつに僕は金使いの荒い人間じゃないですし、借金という借金はマンションのローンくらいなんですけどね。だから不甲斐ないですけど3~4年くらい前から嫁にも働いてもらってますよ。全盛期にもらってた額と比べると、いまは月で●●●万くらい違いますからね。
——そんなにですか!?
高岩 たぶん、年間じゃ普通に●●●万くらい下がってますよ。当時は同年代の平均的なサラリーマンよりははるかに稼いでたと思うんですけど、いまはその逆ですよね。あのときはこういう時代がずっと続くと思ってたんですけどね……(シミジミと)。
——プロレスを取り巻く環境の変化でいうと、技がエスカレートしすぎて危険だという論調も多いですよね。そういう意味でいうと、高岩さんの試合もボム系や垂直落下系が多いですけど……。
高岩 (さえぎるように)ああいう技は、危ないけど危なくないんですよ。
——え? どういうことですか?
高岩 結局、受け身がしっかりして

高岩といえばジュニア特有の華麗な空中技ではなく、デスバレーボムや高岩ドリラーなど豪快なパワー殺法が持ち味。ときにはトップロープはもとより、エプロンサイドからも容赦なく相手をポイ捨て! ア、アブネェ!

プロレスでケガするのはケガしたほうが悪いって意識しないと

ればいいんですよ。昔、馳さんに言われた言葉があるんです。僕もいま若い選手たちに伝えてるんですけど、「プロレスでケガをするのは、ケガをしたほうが悪い」と。いま、こういうことを言うと不謹慎に思う人もいるかも知れないですけど、誤解を恐れずに言えばプロレスっていうのはそういうものなんですよ。そう意識しないとダメなんですよ。

――確かに三沢さんをはじめとする四天王プロレスも、当事者同士ではケガをしたほうが相手に謝ってたらしいですからね。

高岩　プロレスで相手をワザとケガさせようと思って技をかける選手はいないですよ、信頼関係の競技ですから。そりゃ、人間だから技をミスすることもありますよ。でも、そのミスにも対応できるようなコンディションにしとかないとダメだって、レスラーは思わないと。とは言っても、相手をケガさせたときは落ち込みはしますけどね。

――高岩さんの試合スタイルって、けっこうクラッシャーっていうイメージが強いんですよね。たとえば金本（浩二）さんや佐藤（耕平）さんのノドが潰れたのも高岩さんのラリアットが原因って言われてますし。

高岩　南条（隼人）選手のアゴを骨折させたりもしましたしね。当時は怒られましたよ、僕もいま若い選手があぁいう試合をしたら怒りますし。やっぱり"壊し屋"っていうイメージに一番拍車をかけたのは、ホッシー（星川尚浩）の件でしょうね。

――高岩さんとの試合で星川選手が、急性硬膜下血腫になってしまった一件ですね（04年10月27日）。

高岩　あのときはもの凄いショックでしたよ、手術にも立ち会いましたし……。あの試合は札幌だったんで、ホッシーは現地の病院に入院したんですけど、僕も1ヵ月くらいそのまま残りましたからね。何ができるわけじゃないですけど、毎日見舞いに行って話しかけて。

――現在の星川さんの容態はどうなんですか？

高岩　自宅でリハビリしていて、もう少しで立てるか立てないかくらいですね。まだ歩くのは難しいみたいですけど、普通に話はできますよ。最近は前ほど見舞いに行けてないのが申し訳ないんですけどね……。

――逆に星川さんがケガをしたときは、高岩さんが周りから心配されたんじゃないですか？

高岩　（齋藤）彰俊さんの場合と一緒ですね。でも、割りきらないとダメですから。ずっとブルーにしてたって何も解決しないですよ。そのままの精神状態でリングに上がったら自分も相手もケガしかねないし、とにかく闘って元気な姿を見せないと。

ZERO-ONE旗揚げ時より、高岩とともにジュニア戦線を盛り上げてきた星川。だが星川はその高岩との金網デスマッチで、金網最上段からの雪崩式パワーボム、連続ラリアットを受けて昏睡状態に。その後、ZERO1・MAXでは星川の激励チャリティー興行を開催している。

――いま、三沢さんの件を踏まえて、過激になる一方のプロレスの試合スタイルを見直さないといけないんじゃないかっていう風潮もありますけど、どう思いますか？

高岩　う〜ん……（熟考）。ただ、そのスタイルを好きなプロレスファンがいるかぎり、みんながみんな見直したりするっていうのは無理でしょうね。結局はファンが選ぶことっていうか。僕が若手の頃に投げっぱなしジャーマンが流行りだしたんですよ。当時はそれが出たら試合は終わってたのに、いまは単なるつなぎの技ですから。技の進化に歯止めをかけるのは難しいと思いますよ。まぁ、しょうがないって言い方が正しいかはわからないですけど。

――ひと昔前の新日の前座は殴り合いと逆エビ固めくらいでしたよね。

高岩　そういう前座の試合があって、ジュニアの華麗な試合があって、メインをヘビーの試合が締める。それが理想的だとは思うんですけど、いまのプロレスは第1試合から、その団体の色になってるんですよね。だから前座からピョンピョン跳びはねる団体も全然珍しくない。それがファンの求めるものであれば、いろんなスタイルの団体があってもいいとは思いますけどね。

――そうなると、とにかく命の危険だけは冒すなって感じですかね。

高岩　でも、ほかのプロ競技、それこそ格闘技じゃないサッカーやプロ野球にしたって選手は死んでますよね。比率で言えば、プロレスもそんなには変わらないと思うんですよ。むしろボクシングのほうがリング禍は多いわけですし。まぁ、プロレスだとプロレスごっことか、世間的に野蛮なものっていう先入観があるからインパクトが強いのかもしれませんけど。

――高岩さんもケガは多いほうですか？

高岩　やっぱり20年近くやってれば肩を脱臼したり、ヒザ壊されたりいろいろやってますよ。最近でいうと、6月の試合中に頭打ってイビキかいちゃったことがあったんですよ。意識が戻ったときは救急車の中でしたから。その2日後に三沢さんが亡くなられたんで、「うわぁ、俺でもおかしくなかったのかな……」って、ちょっと怖くなりましたね。

――2日前にそんなことが……。あ

国内外で起こった主なリング禍

プラム麻里子

97年8月15日、JWPでの試合。尾崎魔弓にライガーボムで叩きつけられ、そのまま意識不明の重態に。開頭手術は成功したが、翌日に容態が急変、急性硬膜下出血ならびに脳挫傷による急性脳腫脹で死亡。日本では初めて起きたリング禍となる。享年29。

門恵美子

99年3月31日、アルシオンでの試合。吉田万里子の腕に下から技を仕掛けようとしたところをバスターで叩きつけられ、後頭部を強打。そのまま昏睡状態になり、開頭手術を受けたが9日後に死亡。同年2月にアジャ・コング戦でデビューしたばかりの将来有望なレスラーであった。享年23。

福田雅一

00年4月19日、新日本プロレスでの試合。柴田勝頼がエルボードロップを叩き込んだ直後に動きが鈍くなり、倒れ込んでそのまま意識不明に。開頭手術を受けたが、急性硬膜下血腫により5日後に死亡。男子では国内初のリング禍となった。享年27。

オーエン・ハート

99年5月23日、WWEでの試合。入場の演出で天井からワイヤーで吊り下げられて降りてくるところを、そのワイヤーが切れたために10メートル以上の高さから転落してリングに叩きつけられた。病院に運ばれたが同日死亡。享年34。

ゲーリー・オブライト

00年1月7日、米国のインディー団体WXWでの試合。対戦相手のコリー・ステューデントにジャーマンを仕掛けようとしたところ、逆にスタナーを浴び、直後に心臓発作を引き起こし急死。晩年は糖尿病を患い、コンディション悪かったと言われている。享年36。

いまはプロレス以外にも何かやらないとって考えてますよ

と試合スタイルでいうと、高岩さんは3年くらい前にヴァンダレイ・シウバとやりたいって言ってましたよね。けっこう唐突な感じはしましたけど。

高岩 ありましたねぇ。一回くらい極限まで絞ってカッコいい身体になって、ケンカしてみたいなって思ったんですよ。で、やるなら強い相手、同じ体重くらいならシウバかなって。「どれくらいもつんだろ、逃げ回って3分くらいはいけるかな」とか（笑）。

ーーそんなうしろ向きだったんですか（笑）。

高岩 いや、でも真面目にやりたいと思ったんですよ。あの頃は年齢的にも「いまが最後のチャンスだな」って思いましたし。ＭＭＡ人気が上がってきた頃だったから、その流れに乗っちゃえっていうかＭＭＡを逆に利用してやろうと思って。

ーープロレス自体が利用されましたもんね。

高岩 プロレスの環境が悪化したって話でいえば、ＭＭＡも無関係じゃないですから。でも誰も食いついてくれなかったですね（笑）。会社にも「いままで築き上げてきたものを失うのか？」って言われましたし。さすがにいまはもうやろうとは思わないですけど。

ーーいまは大日本プロレスの道場で若い選手の練習を見てるとか？

高岩 そうです。大ちゃん（関本大介）が「ウチに若いの入ったんで練習見てくれませんか？」って連絡くれて。自分も道場で練習できるし、ちゃんこも食わせてもらえるのでありがたいことですよ。それに若いヤツと一緒に練習すると、こっちも頑張ろうってなりますしね。教えることによって自分が忘れてたことも思い出すんで。

ーーいまの練習のメインは大日本の道場で？

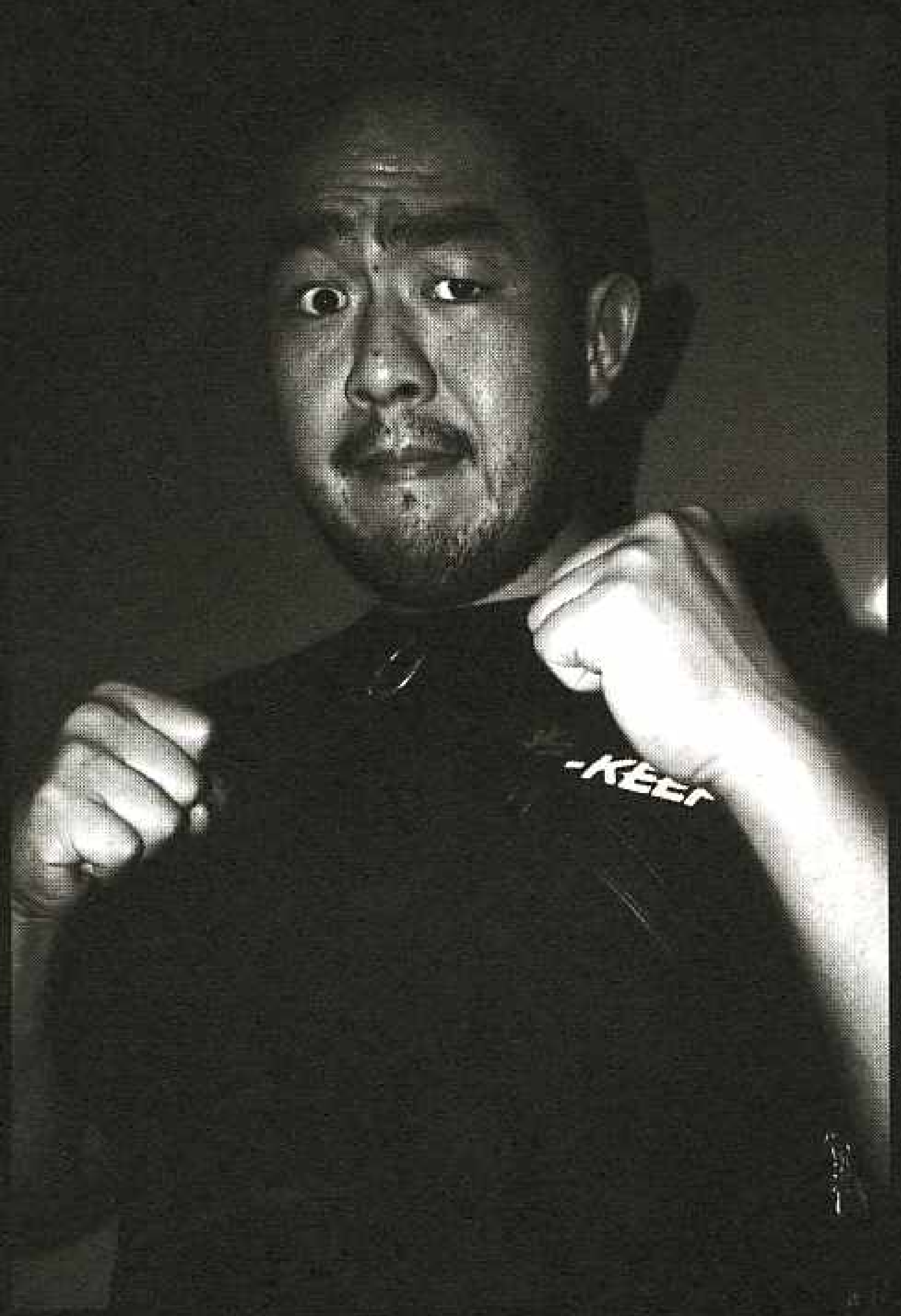
高岩 はい。朝9時には起きて合同練習に行って。朝早いですけど、レスラーにとって練習も試合同様に仕事ですし。

ーーどれだけプロレスを取り巻く環境が厳しくなっても、練習はプロとして欠かさない、と。でも、いまレスラーがバイトするのが珍しいことじゃなくなっちゃってますよね。

高岩 確かに練習時間を削ってまでバイトするのはどうかなとも思いますけど、それもしょうがないですよね。まずは生活しなきゃどうしようもないんだし。僕もバイトとまではいかないまでも、タニマチからお小遣いを引っぱり出したりしますしね。

ーーそれは夜のお付き合いというか？

高岩 飲みに行って終電がなくなるとタクシー代をもらって、始発まで待って電車で帰るとか（笑）。



たかいわ・たつひと■1972年7月5日、京都府出身。92年7月21日にvs小島聡戦でデビュー。96年から新日本のジュニア戦線で頭角を現す。01年1月に橋本真也率いるZERO-ONEに移籍。新日本の同期である大谷晋二郎とともに同団体を支えてきたが、08年12月に方向性の違いを理由にZERO1を退団。現在はフリーランスとして活動中。

ーータクシー代を浮かせる、と（笑）。

高岩 でも、ぶっちゃけＺＥＲＯ－ＯＮＥ時代にバイトやったこともありましたよ。

ーーえ、そうなんですか⁉

高岩 数えるほどしかないですけど日雇いで。まぁ、いい社会経験になるかなくらいの感覚で、一瓶組長の経営するクラブのガードマンを付き合いでやったんですけど。実際、いまも何かしらプロレス以外にやらないといけないのかなとか考えますよ。僕はフリーですし、固定の給料がないですから。それに、給料はそんなに望まないので一度くらいは会社員をやってみたいなって思ったりもしますしね。そうすれば社会保険にも入れますし。それと並行してプロレスもできればベターですけど。

ーーたとえば今後のこととかはどう考えてますか？

高岩 よくニュースなんかを見るんですけど、派遣村とかあるじゃないですか？ ああいうのを見てると食っていくぶんにはなんらかの仕事はあるなって思ってますけどね。みんな仕事がないとかウダウダ言ってるのは、仕事を選んでるからだと思うんですよ。仕事がないわけないですよ。食べようと思うぶんにはいくらでも職なんてあるんですから。

ーーいま、どこかプロレス団体に就職しようとは思わないですか？

高岩 いや〜、それはないですね。結局、新日を辞めてＺＥＲＯ－ＯＮＥを辞めて、いろいろと思う部分があるんですよね。プロレスを20年近くやってきて、いま業界全体がこういう状況になってるのを眺めてると、先々のことを考えてしまうというか。人生一回きり、仕事は60くらいまでって考えたときに、まだ残された人生のほうが長いわけですから。

ーープロレスはその歳まで続けるのは難しいですものね。

高岩 それに若いこれからの選手のことを考えたら、もう俺らくらいの年代のレスラーは徐々に引っ込んだほうがいいのかなとは思いますし。

ーーう〜ん、今日はプロレスの環境を考える中で、何かよくするための提言みたいなのを聞ければと思ったんですけど……なかなか現状は厳しいですね。

高岩 そうですね〜。ちょっと思うのは、新日はお金があったときに、新木場１ｓｔＲＩＮＧみたいなハコを作っちゃえばよかったのになって。

ーー常打ち会場ですね。

高岩 そうすればそこでコストもそんなにかからないで興行も打てるし、練習もできるわけだし。やっぱり道場やそういう場所がないと、選手同士の関係性が作れないんですよ。プロレスはアマチュアの試合みたいにいきなり試合で肌を合わせて一発勝負とかじゃないんだから。プロレスはほかのスポーツに比べると、もっとお客さんが感情移入するものだと思うし、毎日肌を合わせることが重要なんですよ。

ーーなるほど。いま、高岩さんがプロレスをやるうえでの一番のモチベーションってなんですか？

高岩 やっぱり若い選手を鍛えてやろうっていう気持ちですかね。せっかくこうして関わってるんだから、若いヤツをこれからどんどん鍛えたいですよ。で、ビッグになったときにコーチ料を返してもらおうかなって。まぁ、先行投資です（笑）。

ーーその先行投資を回収できるように、今後もリングで活躍することを期待してます！ 最後に……新日本に最近現われたブラックタイガーの正体って高岩さんですよね？

高岩 何を言ってるんですか？ 僕はデビューしてからずっと素顔で勝負ですよ（ニヤリ）。

【09年6月28日／神奈川県・某所にて収録】

いまこそ苦しみの中から

プロレスは続くよどこまでも!!

理論派の“職人”たちが語る

命懸けで生き残るプロレスの“技術”

年々アクロバチックさを増し、行き着くところまで行ったとも言われるプロレス技の数々。
しかし、プロレスの技術とは、はたしてそういった派手な大技ばかりなのだろうか。
ここではプロレス界の理論派を中心にした論客たちに、現在のアクロバチックなプロレス、
そして広い意味でのプロレスの技術について、掘り下げてもらった。

――今回、三沢さんが試合中の事故でお

――どうしてこういう風潮になったと思

――上の試合がエスカレートしたという

イング・ボディアタックとかやってまし

るわけでさ。

〃東洋の神秘〃が解き明かす プロレスのカラクリ

〃王道プロレス〃の知られざる真実とは!?

ザ・グレート・カブキ

日本プロレスでデビューしてから98年の引退まで、34年にわたってプロレス界を渡り歩いてきたザ・グレート・カブキ。選手として活躍する一方で、マット界の名伯楽として多くの選手を育成してきた。そんな稀代のプロレス職人が考える現代のプロレスの問題点とは?

聞き手／堀江ガンツ

プロレスの型が崩れてきたのは馬場さんが原因かもしれない

聞き手／堀江ガンツ

——今回、三沢さんが試合中の事故でお亡くなりになったわけですけど、カブキさんはこの訃報をどういったかたちで知りましたか？

カブキ 知り合いが広島から電話をかけてきて、心肺停止状態だって聞いたんですよ。信じられなかったね……。いろんなストレスが溜まって、受け身を取り損なったのかもしれないね。ここ最近はコンディションも凄く悪かったみたいだし。そういえば昨日、（齋藤）彰俊がここに来ましたよ。

——あ、そうなんですか。昨日はノアの後楽園大会がありましたけど、そのあとですか？

カブキ うん、菊地（毅）と一緒にね。あいつの気持ちを考えると、たまらないだろうって思ったからハグしましたよ。「頑張れよ、おまえが一生懸命やることが三沢への恩返しなんだからな」って言ってね。

——そうでしたか……。それにしても、あれだけ受け身がうまいと言われた三沢さんが試合中の事故で亡くなられたということは、やはりいまのプロレスは危険すぎる部分があるんですかね。

カブキ そうだね。いまは飛んだり跳ねたりが多すぎると思いますよ。それにトップロープを使って危ないことばっかりやって……。それを抑えられない、いまのプロレスというのはなんなんだろうってことだよね。

——どうしてこういう風潮になったと思いますか？

カブキ たとえば日プロ（日本プロレス）の頃だと前座は技を規制されてたんですよ。やれてもボディスラムくらいで、あとは腕を取ったら離さずに一点集中で攻めるような寝技の攻防ばっかりでさ。もし第1～3試合あたりでブレーンバスターなんてやろうもんなら、「てめぇ、顔じゃねえ！」って控室で先輩にブン殴られたからね。そういう不文律みたいなのがいまは崩れてきちゃってますよね。

カブキと彰俊は、かつて90年代の新日マットを席巻した平成維震軍の同志。職人気質のレスラーが集まった軍団の中でカブキは、自慢の長髪をスキンヘッドにしたうえ、ペイントを頭部にまで描いていたことも。まさにプロ意識の塊！

——上の試合がエスカレートしたというより、下の試合から崩れてきたというか。

カブキ というよりは、それを崩した人がいるのよ。「おまえらね、やれるんだったらなんでもやっていいんだよ」（ジャイアント馬場口調で）ってね。

——えっ、崩した人って馬場さんなんですか!?

カブキ そう。全日時代、前座が大技を使ったときに俺が「ふざけんな、この野郎！」って怒ったんですよ。そうしたら馬場さんが「おい、できるんだったらやらせればいいんだよ」って言ってさ。元を正せばそのあたりからプロレスのかたちがおかしくなったのかもしれない。

——〝王道〟と呼ばれて、プロレスの型を守ってきたと思われていた馬場さんが、じつは違ったわけですか。

カブキ うん。やっぱり若手は若手の試合をしないとダメだよね。いまは第1試合からメインまで同じような内容だから、大会にメリハリがないわけ。そうするとお客さんだって飽きちゃうでしょ、「また一緒だよ」って。逆に言えば、上の試合につれて前の試合と違うことをしないといけなくなるわけだから、より技も過激になっていく。だから、結局はレスラーが自分自身の首を絞めてることになるわけよ。

——馬場さんが前座でも「なんでもやっていい」ということを言い出したのはいつ頃なんですか？

カブキ 三沢とか越中（詩郎）が若手の頃にはもうそういう風潮だったからね。

——確かに三沢さんは新人時代からフライング・ボディアタックとかやってましたね。

カブキ あと、一つの原因としてはジャンボ（鶴田）の存在もあるかもしれない。馬場さんがジャンボにはデビューしたての若手の頃から大技を使わせてトップレスラーにしたから。

——そういった中で誰もが大技を使うことがあたりまえになってきたというか。

カブキ 結局、それでもともと大技だったものも次第に大技に見えなくなったっていうのはあるよね。せっかくいい技であっても下手なレスラーまで「俺だってやれるわ！」みたいにごまかしながら使ってさ。だから首いったりするのよ。

——自分のものになってないのに使うというか。

カブキ ジャーマンにしろ、どういうふうに入れば一番綺麗に投げられるとか考えずにやったりね。たとえば投げる前にヘッドロックで締め上げて、なんかの拍子にバックに回ってフッと投げるから綺麗に決まるんであって、足を攻めてたヤツが急にジャーマン決めたっておかしな話でしょ？ ザ・デストロイヤーだって相手の足を徹底的に攻め続けるからこそ、最後の4の字固めに説得力が出てくるわけでさ。

——確かにそうですね。

カブキ いまのレスラーは試合の中でそういう理由づけを見せてないよね。それは結局、レスラーのコレにしかすぎないのよ（セ●●リの仕草をしながら）。とりあえずお客さんにカッコよく見られたいっていうかね。いまのプロレスはそればっかりだよ。

——自己満足の世界になってしまってる、と。

カブキ たとえば俺がバカの一つ覚えみたいに毒霧やってたって、全然意味ないでしょ？ お客さんをジラして期待感を持たせるから効果があるわけでさ。そういう意味じゃ一番よくなかったのは（アブドーラ・ザ・）ブッチャーと（タイガー・ジェット・）シンだね。

——一流のヒールと言われた二人が、ですか？

カブキ なぜかっていうと、場外でガチャガチャやるのは一番簡単な試合なんですよ。なんのために四角いリングがあるのか考えないと。そこの中で攻防があるからおもしろいんであってね。だから場外乱闘にしろ、理由づけのない大技ばかりの試合にしろ、考えてないっていう意

コーチとしてのカブキ

カブキは70年代の素顔時代に古き良きアメリカンスタイルを身につけ、80年代にはカブキに変身して全米で一時代を築いたプロレス職人。そのキャリアで学んだプロレスの極意を全日黎明期から若手レスラーに授けてきた。

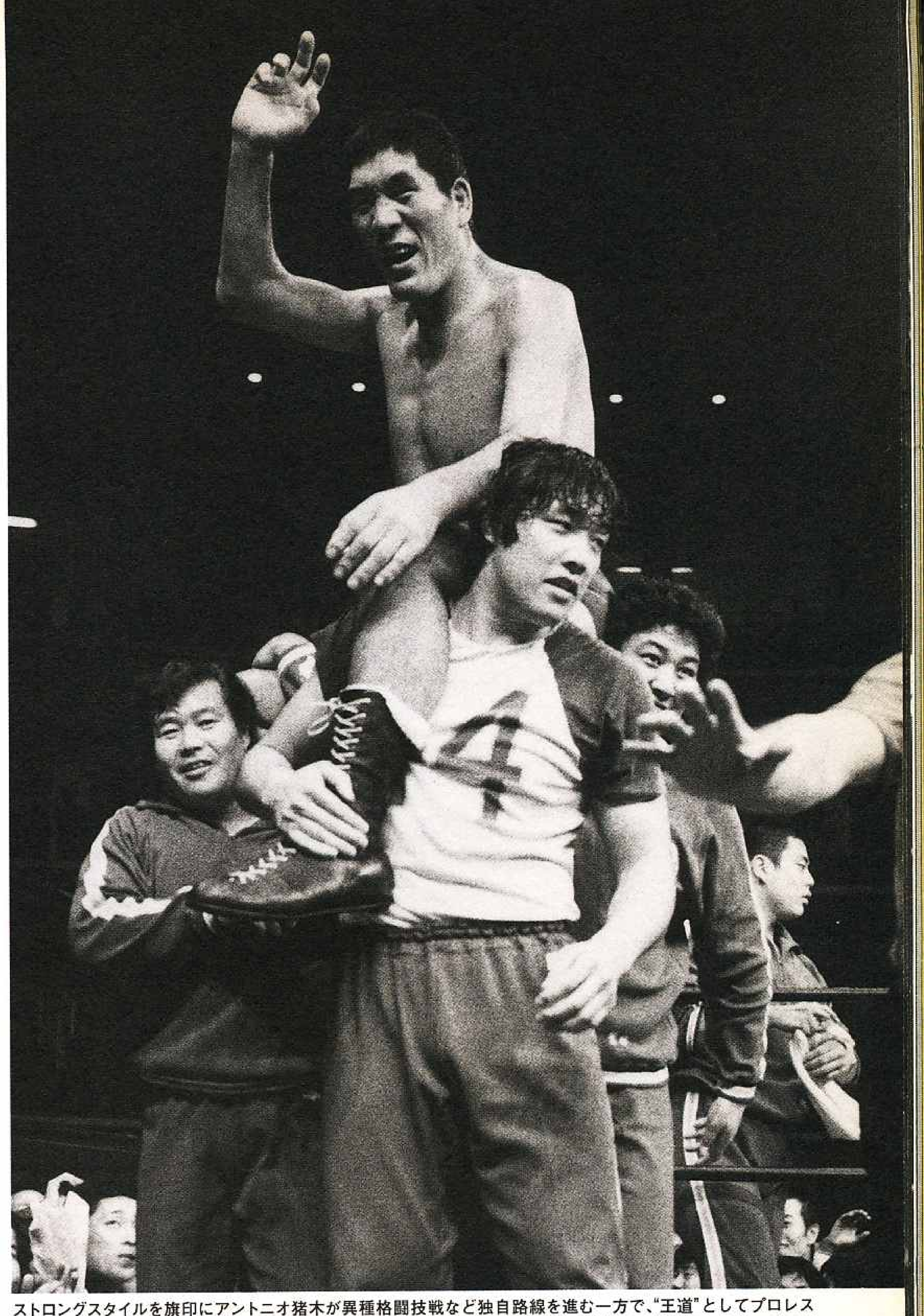
カブキが最初に全日で指導したのは大仁田厚、ハル薗田、渕正信の三羽ガラス。それ以降も天龍源一郎や輪島大士、田上明といった相撲からの転向組、ほかにも三沢光晴に川田利明、小橋建太とその名前を挙げれば枚挙に暇がない。ちなみに田上についてカブキは「ナマクラだった（笑）。徹底的にタイミングとリズムを教えたよ。そうすれば身体も大きいし見映えのいいレスラーになるから」。ノアの新社長もカブキの前ではかたなし？

カブキは96年にはIWAジャパンのコーチに就任。インディー選手たちの壁となり、試合後にいつも「今日は少ーしだけ頑張ったぞ」と言うのが恒例に。この親指と人差し指のジェスチャーつきで「少ーしだけ」というのがカブキの決めセリフとなった。

74ページから登場するウルティモ・ドラゴンもカブキに影響を受けたレスラーであり、「いまのプロレス界にはああいう人が必要」と語っている。全盛期に比べれば身体こそ小さくなったものの、まだまだその背中から学ぶことは多そうだ。

味では簡単なんだよ。
——ある意味、楽をしているというか。
カブキ　自分が考えるのもあたりまえだけど、お客さんにだってもっと考えさせないと。いまのお客さんは試合をボーッと観て、空中殺法とか派手な技の瞬間だけ「おぉ、飛んだ飛んだ」って楽しんでる感じがするよね。グラウンドの展開は時間潰しみたいにさ。これじゃダメなのよ。なんのためにロープがあって、なんのためにリングがあるかってことなんだから。俺なんかはブッチャーやシンとやっても、外でやるのは大嫌いだからすぐにリングに戻るわけ。そうするとあいつらはヤな顔をするんだよね、「フ●ッ●・ユー！」って（笑）。
——ちゃんと自分のプロレスをやるわけですね。

カブキ　やっぱり足だったら足だけ、腕だったら腕だけの攻防で試合をもたせないと。というよりもプロならもたせなきゃ（キッパリ）。
——確かにいまのプロレスは技も多彩で高度だと言われますが、昔のほうが一つ一つの技にリアリティがあった気がします。
カブキ　それは理にかなってるからだよね、緊迫感もあったし。大技連発の試合っていうのは身体的にはキツいだろうけど、それは地に足の着いたレスリングができないってことなんだから。昔は練習にしろ、受け身に始まって受け身に終わってたんですよ。でも、いまの選手に「受け身の練習しろよ」って言っても、「そんなことより大技を教えてください」って返事したりするんだから。ＩＷＡジャパンで教えてたときも最後はそんなだったしね。
——選手の意識もいまと昔じゃ違うというか。
カブキ　それといまのプロレスは、会社のあり方にも問題があると思いますよ。やっぱりプロを名乗るレスラーならば、道場があって練習ができて、それで試合に出てお金をもらえるっていう仕組みじゃないと。バイトやりながらプロレスやるなんて無理よ。学生プロレスやお笑いの西口プロレスだったらいいよ。だけどお客さんから高い金取って見せるんだったら職人じゃないとね。この仕事は片手間じゃ絶対に無理（キッパリ）。
——ほかの仕事をしつつ、好きだから趣味でプロレスをやってるみたいな意識だと、自分のやりたい大技しかやらなかっ



ストロングスタイルを旗印にアントニオ猪木が異種格闘技戦など独自路線を進む一方で、“王道”としてプロレスの本質を守っていたと思われた馬場さんだったが……。ちなみにカブキは全日時代、その凱旋帰国シリーズでテレビ放映権料を除く興行収益が、馬場さんが欠場したにもかかわらず全日本設立以来初の黒字になったとか。

俺のトラースキックは首に入れるから相手はケガをしない

たりするのかもしれないですね。
カブキ　相手のことを考えないでね。こういう投げ方をしたらどうやって落ちるかとか、それは練習の中で理解することなんだから。自分が技を受けて初めて「危ないな、ケガするな」ってわかるっていうかさ。
——俗に“四天王プロレス”と呼ばれる試合の原点は、天龍同盟と鶴田さんやカブキさんたちの試合だってよく言われてますけど、じつはあの頃の試合で危険な技ってそんなにないんですよね。
カブキ　うん。でも、天龍の攻撃でも危ないときがあったんだよ。天龍が俺をボディスラムで投げてから、腰のあたりをおもいっきり蹴ったの。そうしたらこっちは脚がビーッってしびれて立てなくちゃってさ。下半身不随になったらどうしようと思ったくらいだよ。それでこっちもカチーンときて、しびれが取れてから同じように天龍の腰のところバーンって蹴っ飛ばしたのよ。
——サッカーボールキックをお返ししたわけですね。
カブキ　「この野郎、こういう攻撃したらどうなるか思い知れ！」って。そうしたら天龍も同じようにしびれてた（笑）。そうやって覚えていくんだよね。それから天龍も腰じゃなくて背中を蹴るようになって。
——身をもって教えた、と。昔のレスラーはお客さんに単純な技でもその凄さを伝えるのがうまかったと思うんですけど、いまは頭から落とすようなパッと見で危険とわかるような技を出して「凄いでしょ？」って伝えてる感じがするんですよ。
カブキ　そうそう。だからいまのレスラーはお客さんに媚を売ってるんだよ。昔はレスラーがお客さんを教育してたの。「この技はこう効くんですよ」とか「こうやって腰を攻めて最後にボストンクラブで決めるんですよ」ってね。いまは「この技どうですか？　凄いでしょ？」っておうかがいを立てるみたいだよね。お客さんも「あー、凄い凄い、はいはい」みたいなさ（笑）。それで相手をケガさせてりゃ世話ないよね。
——カブキさんのアッパーカットやトラースキックも見た目はエグく入っているように見えるのに、それでアゴを骨折した選手っていないですよね。
カブキ　いないいない！　もちろんアゴに入れたらいっちゃうよ。でも、俺は首に入れるから。それは暗黙のルールでね。だけどたまにキックが急所に入ったりすると「ガッデム！」とか言われるのよ。「アイ・ギブ・ユー・レシート？」（レシートあ

カブキの経営店には三沢さんの写真が飾ってある。昨年11月に開催されたカブキの還暦記念興行に三沢さんはゲストとして登場。若手時代に世話になったカブキに祝辞を述べた。三沢さんの義理堅さを物語るエピソードだ。

プロレスのカラクリ

このままだとプロレスが別物になって戻れなくなっちゃうよ

げようか?」」とかね。そうするとシュートになっちゃうんだけど。

——暗黙の了解を破ると。

カブキ　レスラー同士は目でモノを言うから、故意なのかアクシデントで入ったかってのは相手の目を見ればわかるから。あと、技の見せ方でいえばいつも使ってる技にしろ、わざと使い方を変えたりね。たとえばお客さんがトラースキックを期待してる場面で、わざと別の技を使って意外性を見せる。それでグッグッと引きつけておいて、ここぞってときにパーンとトラースキックを出すから「ウォー!」って盛り上がるわけ。

——お客さんを引っぱるわけですね。

カブキ　まずはお客さん本位で考えて、何を望んでるのかを肌で考えていかないと。だから毒霧吹くときでもタイミングってあるんですよ。あれはゴム風船の中に毒霧の素を入れてタイツの中に隠してるんだけど、試合が始まって10分くらい経って「そろそろだな」ってときに、相手をトラースキックとかで場外に落とす。するとお客さんの目はそっちにいくのよ。

——やられた相手のことが気になるからそっちを見ますよね。

カブキ　そう。ところが2、3秒したら俺のほうに「なんかやるんじゃないか?」って視線が戻ってくる。そこでレフエリーと押し問答をしたりすると、またお客さんの視線はスーッと相手のほうに「上がってこれるんだろうか?」っていく。そのスキにこっちはタイツを直すようなフリして〝素〟を取り出すわけ。

——へ～、そうするとリング上で堂々とタイツから取り出してるのに、観客はカブキさんのその仕草に気づかないわけですか。

カブキ　取り出したら、今度はパンチなんかを中心に攻めて、それをグッと手に握りながら試合するの。それでタイミングを見計らって、口を拭うふりをして素を口に含むわけ。

——タイツからすぐに取り出して口に入れてないから、まさかそのタイミングで口に入れているとは思わないわけですね。

カブキ　これで準備万端だから、今度は相手に攻めさせる。で、相手がトップロープに上がって、ライトと相手と自分が一直線になったときが毒霧を噴射する狙い目。

——そこまで考えてるんですか!

カブキ　もし相手がトップロープに上がらなかった場合は、自分がリングの真ん中で大の字になる。そうするとライト、相手、自分が一直線になるから、そこで覆い被さってきたときに毒霧をフーッと噴き上げる。そうすると色がスーッと抜けるの。ライトがないと色も映えないしね。

——なるほど～。毒霧はどういう角度で吹いたら、一番観客に見えるかまで考えてるんですねえ。

カブキ　これは一つの例だけど、いまの若いレスラーでそこまで考えてる選手がどれだけいるかってことだよね。いまは自分だけがよければいいってレスラーが多すぎる。それとみんな勘違いしてるけど、リングに登場するまでがパフォーマンスで、試合は別物なんだから。リングに上がったらガンガンやらなきゃ。ガーッと首を絞ったり腕を取って逃がさないようにして、「これでギブアップさせるんだ」っていうような気迫が伝わってこない。いまは相手を倒したらパフォーマンスばっかりでさ。「違うだろ、相手がうしろに倒れてるんだから攻めろよ!」って思うよ。そういう悪い風潮の元祖はジャンボなんだけどね。

——ジャンボさんが元凶ですか(笑)。

カブキ　ジャンボは試合中なのに、相手に背中向けて「オーッ!」ってやるでしょ? だからよくうしろからバーンって反撃されてたけど(笑)。

——ああいう試合中のパフォーマンスがあると、闘いにリアリティが薄れるというか。

カブキ　ジャンボと天龍の違いはそこなんだよね。なんで天龍が勇ましく見えたかっていうと、必ず相手を見てたでしょ? それが格闘技の本質なんだから。構えだってそうだよ。俺は「相手と離れてるときでも必ず片手は上げとけよ、じゃないとダランとして格好悪いから。必ず相手を見つめてないとダメよ」って若いレスラーにはよく言ってたよ。それができて試合をちゃんと作れれば、技なんて危険なものを使う必要はないんだから。

——カブキさんの全盛期なんてフィニッシュは正拳突きでしたもんね。相手が頭から落ちるんじゃなくて、カブキさんがセカンドロープから飛び降りるという。

カブキ　それも相手が弱ってて、もう終わりだよっていう試合展開だからこそ説得力があるんだから。要はセオリーよ。それができないから大技を何発も繰り返さないといけなくなっちゃうんだから。

——カブキさんから見て試合の組み立てや見せ方がうまいと思ったレスラーは?

カブキ　やっぱりリック・フレアーやハーリー・レイスとかね。(ブルーザー・)ブロディや(スタン・)ハンセンもうまかった、やっぱり相手を引き出すよ。パンチ一つとっても違うしね。昔のレスラーはみんなそれぞれ個性があったね。

——プロレスはいまこそ昔から学ぶ部分が多そうですね。

カブキ　だから、やっぱり思うのは第1～3試合はガチガチでいいんですよ。技もせいぜいボストンクラブとかスモールパッケージとか地味なのをやるくらいでさ。そういう技でフォールを取っていくような試合をしていかないと難しい。前座のガチガチがあるから、メインの大技が映えるんだから。このままだとプロレスが別のものになって、戻れなくなっちゃう。

——そういった意味で原点に戻るべきなんでしょうね。

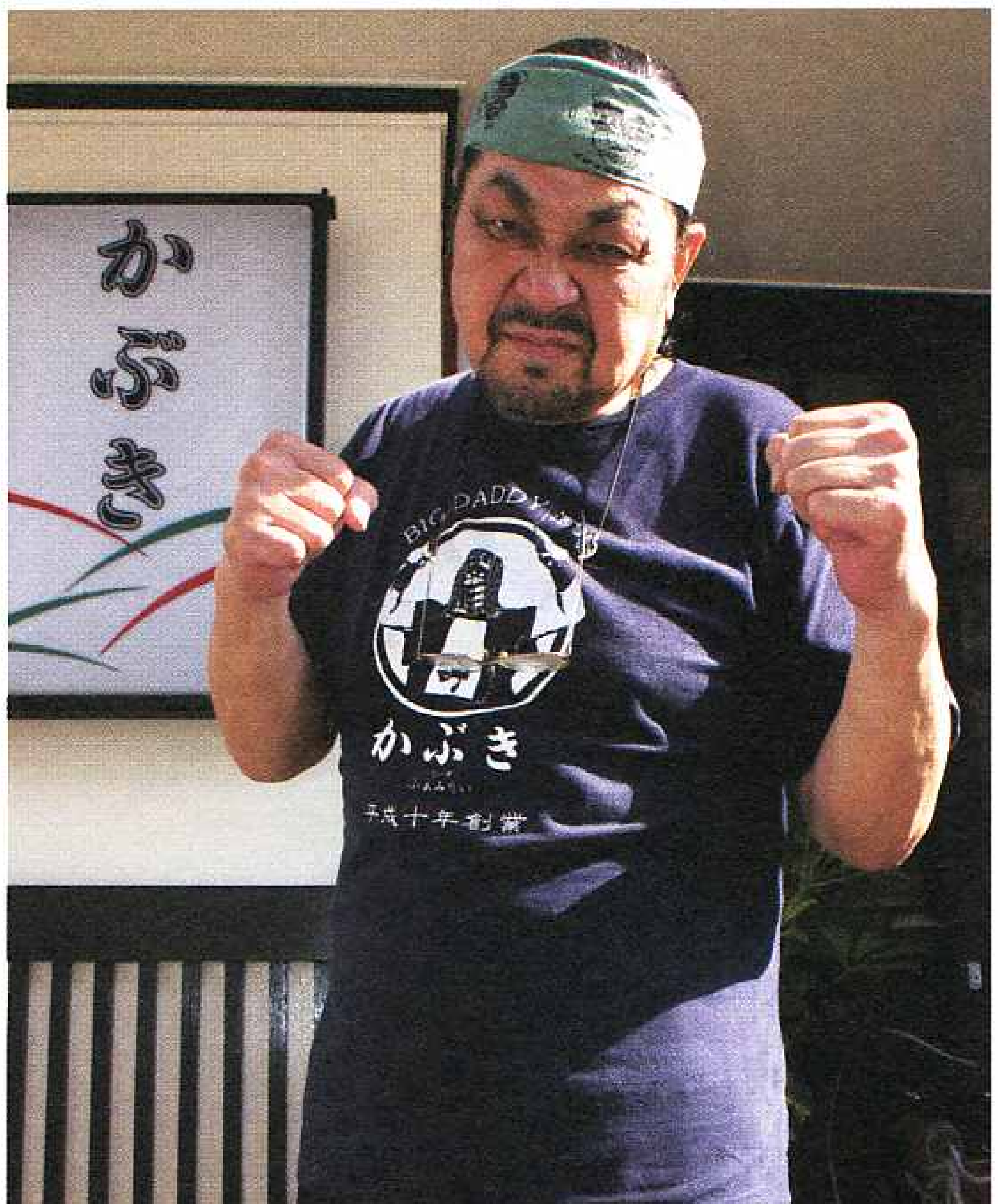
カブキ　おそらくいまの選手は、プロレスにどれだけの人間が携わってるのかわかってないよね。マスコミや興行会社、どれだけの人がプロレスで食ってるのかっていう自覚がない。てめえだけがよければいいっていうさ。いま俺がこういう商売やってるのも、プロレスに食わしてもらってるみたいなもんだもんね。お客さんでもウチに来てプロレスの話をするのが楽しみで、今回こういう悲しいことがあってもここに飾ってある三沢の写真を見て慰められるファンっていうのがいるんだしさ。

——三沢さんの事故があったからこそ、これを機にプロレスをなんとかしないといけない時期に来てるわけですね。

カブキ　でも、これは周りがいくら言ってもダメなんだよ。レスラー一人一人が自覚していかないと。プロレスが本当に好きであれば、そこは頭使って考え直さないと。俺はよく「プロレスラーはバカじゃできない、利口じゃできない、中途半端じゃなおできないんだよ」って言うんだけどね(ニヤリ)。

——プロレスの奥深さを感じさせる言葉ですね。今日はありがとうございました。

【09年6月23日/都内・『BIG DADDY 酒場 かぶき うぃず ふぁみりぃ』にて収録】



ざ・ぐれーと・かぶき■1948年9月8日、宮崎県出身。1964年10月31日、高千穂明久としてvs山本小鉄戦でデビュー。81年にザ・グレート・カブキに変身、大人気を博した。日プロ、全日、SWS、WAR、平成維震軍、フリー、IWAジャパンと渡り歩いた一匹狼。98年の引退後は、東京・飯田橋で『BIG DADDY 酒場 かぶき うぃず ふぁみりぃ』を経営。181cm、110kg。

ションクラブに入会。93年からはア

谷垣　でも、どの作品でもみんなフ
ランケンシュタイナーばかりやって

界もプロレス業界みたいになってま
すねえ。昔は剣友会は別にして、2～

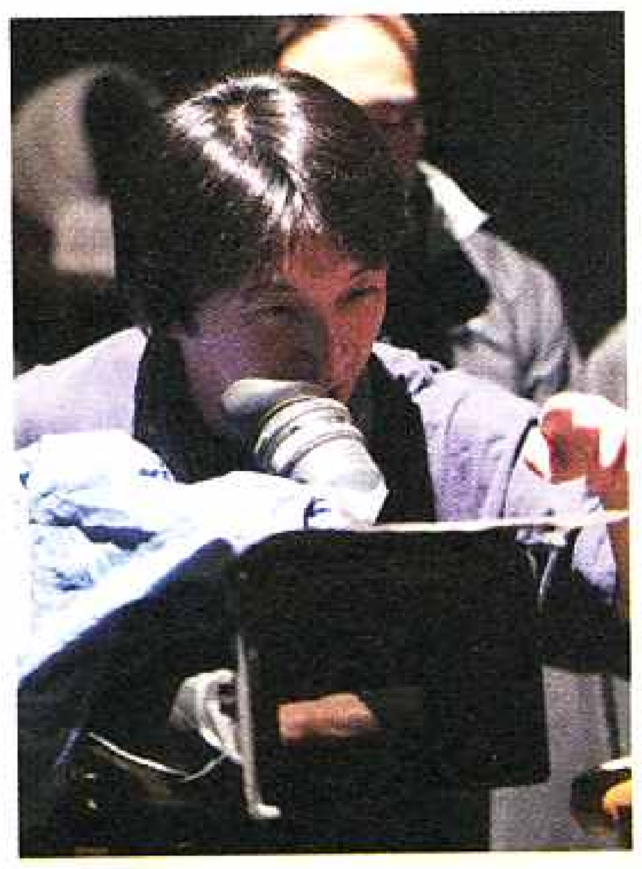
生き方してたから、医学は専門では
ないですよね。香港映画で『ツインズ・

をみるのが「30歳」なんじゃないか、
と。そのあとは役者の道にいくのか、

“命懸けの職業”からプロレスを考える!!

スタントマンの技術論

「スタントマンで30歳を超えて正座ができるヤツはインチキだって言います」



アクション監督／香港スタントマン協会会員

谷垣健治

聞き手／ジャン斉藤　取材協力／高橋ターヤン

日々我々が目にする映画やドラマで、命知らずなアクションを披露するスタントマン。インパクト満点のアクションでドギモを抜くスタントマンという職種は、日々己の肉体を危険にさらし、ケガとの闘いを続けるという意味でもプロレスラーや格闘家とも共通する職種と言えよう。

そんなスタントマン出身者として、いま日本で最も著名なアクション監督の一人となったのが、本インタビューに登場する谷垣健治氏だ。ジャッキー・チェンに憧れてスタントマンを志し、倉田保昭率いる倉田アク

スタントマンの世界はプロレスに通じるところは多い

ションクラブに入会。93年からはアクションの本場である香港に活動の拠点を移して、いまでは香港スタントマン協会の唯一の日本人会員としてワールドワイドな活躍をする。そんな谷垣氏に「スタントマンとは何か?」を聞く中で見えてきたプロレスとの共通点とは? このインタビューからプロレスの新たな可能性も見えてくる!?

——プロレスって「スタントマンのメロドラマ」っていう言い方をされることがあるんですけど、実際スタントマンがどんなに過酷な職業かはあまり知られてないですよね。

谷垣 確かにボクらのやってることって、プロレスに通じるところは多いです。アクションシーンを撮るときに、昔のジュニアヘビーのビデオとかを観て参考にしたりすることはありますね。たとえば『真・三國無双4』のアクションシーンなんかでも、スタントマンが実際に動いたものをCGにしてるんですが、趙雲がコルバタとかやったりしてますからね(笑)。

——コルバタというと、相手の首や身体に巻きついて回転しながらホイップする技ですね(笑)。

谷垣 あと一時期、フランケンシュタイナーが凄く流行ったことがあって。10年前くらいかな。

——あの大技は確かに見栄えはいいですね。

谷垣 でも、どの作品でもみんなフランケンシュタイナーばかりやってるから、いいかげん飽きちゃって(笑)。それくらいプロレス技を参考にはしてるけど、じゃあ、プロレスラーがアクション映画で凄く見えるかといったら、それはまた別の話だと思うんだけども。いい悪いじゃなくて、リズムが違いますから。

——いくら通じるところがあるとはいえ。

谷垣 ボクね、『カンフーくん』っていう映画をやってたんですけど、主人公のカンフーくんが『ハッスル』に出たことがあるんですよ。

——そんなことがありましたねぇ。

谷垣 それで本番前にみんな一生懸命練習、というかリハーサルしてたんだけど、実際に全部通しでやるんじゃなくて、ステップだけで動きを確認してるんだよね。あとは全体的な構成の打ち合わせとか。それを見て「この人たち、本番前のスタントマンみたいだ」と思ってね。やっぱり作り方というかギミックはアクションに似ている感じはします。似ているといえば、こっちの世界もプロレス業界みたいになってますねぇ。昔は剣友会は別にして、2~3くらいしか団体がなかったんですけど、いまはどんどん独立細分化していって、仕事を取るために危険な仕事をダンピングしてやるところもありますから。

——はぁ~。そんなところまで。

谷垣 20年ほど前、『座頭市』の映画撮影中に死亡事故が起きたことがあったじゃないですか。

——撮影中に真剣を使って斬られ役の俳優が亡くなられた事故ですね。

谷垣 あのときにアクション関係者の組合みたいなものができて、いろいろと話し合いがあったそうです。「最低賃金は決めましょう」とか安全面のこととか。そもそも、ボクらはケガしたって「ガマンすっか」っていう生き方してたから、医学は専門ではないですよね。香港映画で『ツインズ・エフェクト』っていう作品の中で、ボクと一緒に2階から宙返りして落っこちたヤツがね、頭から地面に刺さったことがあって。で、倒れたまま動かないんです。脚は感覚がなくて、腕はちょっと触っただけで電流が流れたような激痛らしく、もう動けなくて。ボクらはどうしたらいいかわかんないから、とりあえず救急車を呼んで。あとで聞いたら無理に動かさなくてよかったみたいなんです。「へタに動かしたら、半身不随だった」って言われて。

映画『カンフーくん』のPRも兼ねて実現したカンフーくんの『ハッスル』参戦。このとき試合前のリハーサルを通して谷垣氏はあらためてプロレスとアクションの共通点を確認したという。

——命懸けですねぇ……。

谷垣 だからボクらの世界では「スタントマンで30歳を超えて正座ができるヤツはインチキだ」って言います。つまり、スタントマンという職業をちゃんとやってきたら、身体が壊れてあたりまえなんですよ。で、おそらくプロレスだって「身体のどこかが麻痺してなかったらインチキだ」っていう世界でしょ?

——30歳を超えたレスラーは、どこかしらは身体が悪いもんでしょうね。

谷垣 ボクもね、話をしてたら急にね、右手が勝手に巻いてくることとありますもん(右手をさすりながら)。

——そういう状態なんですか……。スタントマンには何歳になったら引退みたいな決まりってあるんですか?

谷垣 そういう決まりはないですけど、ボクの実感ではスタントマンの黄金期って30歳前後ですね。つまり、体力は落ちてるんだけども経験値がある。経験と体力が最も美しい合致をみるのが「30歳」なんじゃないか、と。そのあとは役者の道にいくのか、それとも裏方に回るのか。本当は25歳ぐらいで決めとかないとキツイですよね。

——25歳で?

谷垣 やっぱり、ずっと長くできる仕事じゃないですから。ボクが言うのもアレですけど、ちゃんと考えないと(笑)。ボクはいまアクション監督をやらせてもらってますけど、40歳を超えたセンパイに「あのビルから落ちろ!」なんて言えないじゃないですか。それに勘違いされやすいですけど、この世界って身体を張ることだけが仕事じゃないんですよ。

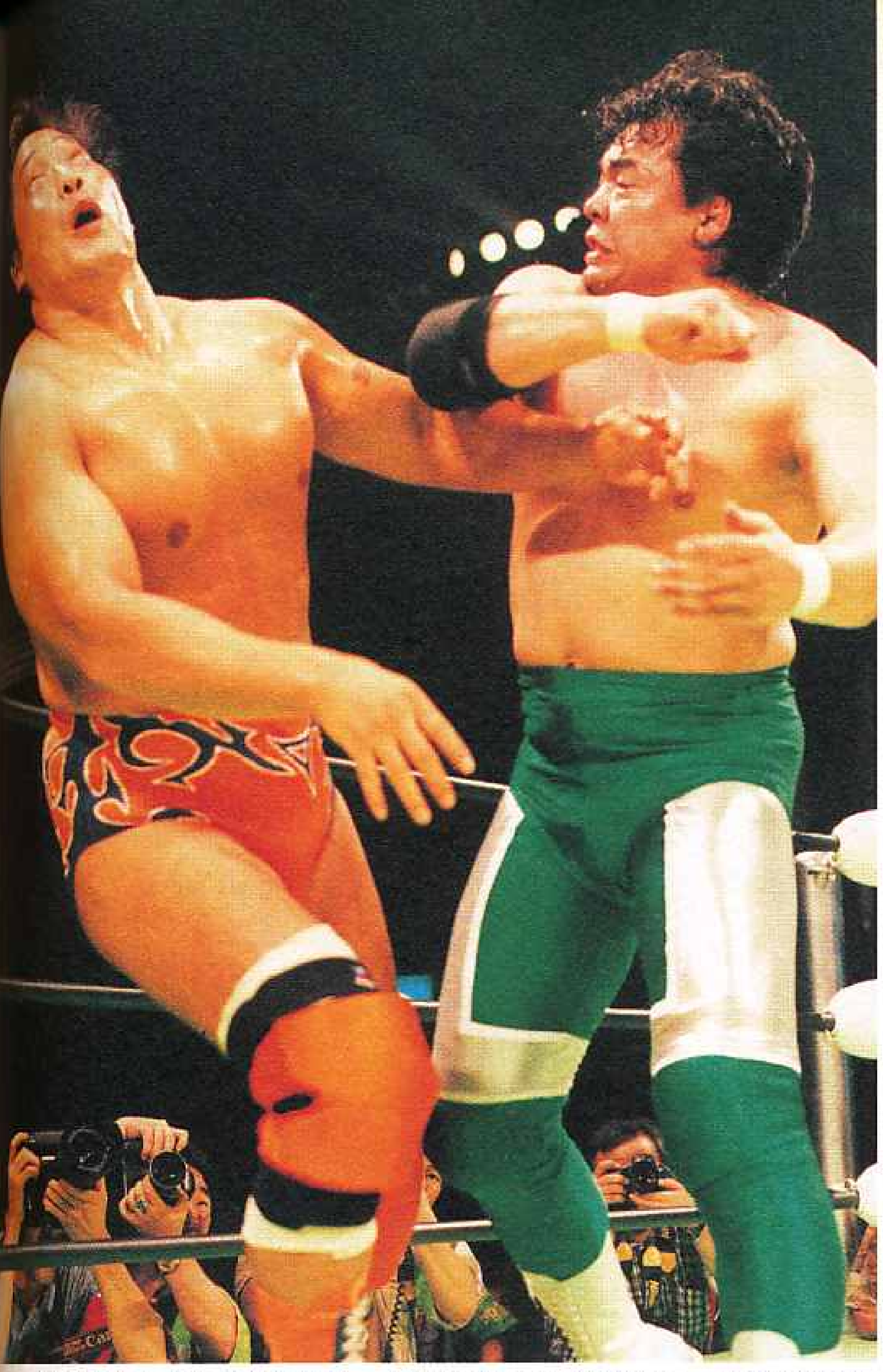
——といいますと?

谷垣 スタントって、一般的なイメージってたとえば、「高いところから落ちる人」とかじゃないですか。でも、たとえば香港の現場では、アクション監督がいて、その下に武術指導、もしくは動作指導、動作設計とも言われる人がいる。で、そこに副武術指導がついて、吹き替え、つまりスタントマンがいるわけですね。副武術指導というのは、アクション監督や武術指導についていろんなことをセッティングして取り仕切る人。そこに動作指導とか武術を指導する人がいて、その中心にアクション監督がいるという感じですね。

——ちゃんとした組織になってるんですね。

谷垣 そうですね。言うならば、これ全体で一つのクルーとしてアクションシーンを作るんですね。だから「スタントマンは勇敢だ」とか言われたら、「もうちょっと脳みそも使ってる

アクションにおける〝表現〟って危険なものだけじゃないんです


谷垣氏をもうならせた三沢vs小橋のとてつもない表現！　今回の事故を受けて、プロレスの表現はどこへ向かうのか。

よ」って言いたい（笑）。

——身体だけじゃないぞ！と（笑）。

谷垣　ボクらには「危ないことをやる人たち」っていうイメージがあって、それはある一面では本当なんだけども、あとの半分は安全かどうかを判断する職業なんですよね。やっぱりスタントを立てずに役者さんにやらせなきゃならないときも出てくる。そうなったとき、それが安全かどうかっていう判断は経験値に基づくものが凄く大きいですからね。

——役者さんもプロの指導なら安心できますよね。

谷垣　ボクらってのは、仕組みがわからないものに関しては信用しない性質というか。言ってみたらね、このイスだっていきなり壊れるかもしれないわけじゃないですか。だからいちおうチェックしないと気が済まないんです。このイスがどんな材質かもわかんないのに、頭からぶつかるなんてことできないわけですから。

——たとえば、いまここの喫茶店でアクションシーンを考えるとしたらどうしますか？

谷垣　そうですねぇ。そこの階段からこのテーブルに落ちるとしましょう。そこで考えるべきことは、このテーブルに殺傷能力のあるものは一切、置かないということですね。割れたらケガしそうなコップとかは全部どかします。その代わり、安全なプラスチックの容器には水を溜めておいたりとか、雑誌にパウダーをまぶして重ねて置いたりとか、テーブルに切り込みを入れておいてワイヤーで引っぱったりとか、「落ちる」という行為をより派手に見せる効果は用意しますね。

——は、早い（笑）。

谷垣　それでも絶対にケガしないわけじゃないけど、なるべくリスクを回避して、派手に見えることを考えます。日本でスタントマンやってた頃はパッド（サポーター）なんか身体に入れるのは根性なしっていう感覚があったわけですよ。で、香港に行ってビックリしたのは、もうみんな身体中にパッドを入れまくってる。要は万全にした状態でおもいきりやる！と。たまに「今回のアクションは武器は全部ホンモノを使いました！」とかっていう、よくわからん本格指向があったりするけど、ホンモノなんか使ったら怖くて芝居にならないじゃないですか。

——確かに。

谷垣　だからボクらはニセモノの武器を使って、そのぶんおもいっきりやります。スタントマンって、ケガの可能性を最小限に留めたうえで、おもいっきり危ないことをやってみせる職業だと思いますから。「死ぬ気でやります！」なんてヤツは危なくて使えない（笑）。

——やはりプロレスと同じで「危ないことをやりつつ、ケガをさせてはいけない」というのが一つのポイントなんですね。

谷垣　そこは凄く矛盾してますけど……、アクションもプロレスも結果論になっちゃうと思うんですよ。

——結果論？

谷垣　もちろん、死人が出たら映画の撮影自体が止まっちゃう。だけど、ちょっとぐらいだったら、「大丈夫か⁉」って言いながら「いいショットが撮れた」って思ったりすることがあるわけですよ。もっと噛み砕いて言うと、ボクらも見慣れたリアクションは望まなくて、ちょっと事故っぽいものを期待してるんですよ。〝事故〟じゃなくて〝事故っぽいもの〟。わかります？

——つまり、ホントのアクシデントかと思わせるシーンのほうがおもしろく見えるということですね。

谷垣　うん。ちょっとミスってヘンな体勢で落ちたりすることが、逆にインパクトがあるっていう。プロレスだってそうでしょ？　いつもよりちょっとムチャした感のほうがお客さんは燃えるわけじゃないですか。

——正直、そこは否定できないですね。

谷垣　そこで本当に死んじゃったら元も子もないっていうことなんだけども、人っていうのは残酷だから。プロレスだってもの凄い角度でバックドロップを決めるのをみんな待ってるわけですよ。だから、ボクはアクションにも「事故っぽさ」を求めてます（キッパリ）。もちろんそれを俳優には要求しませんけど。

——事故っぽく見えて、それがホントの事故にならないことを求められる世界。難しいなあ……。

谷垣　でもまあ、アクションの〝表現〟ってそれだけじゃないですけどね。昔、『あ、‼　一軒家プロレス』のアクションを担当したことがありますけど、監督が橋本真也さんに「5分くらいカメラを回しっぱなしにするんで、プロレスラーの皆さんで好きにやってもらったらどうですかね？」って言ったんですよ。そしたら橋本さんが「そういうのは決めてもらわないと困るよ。やりっぱなしで良く見えるわけねえじゃん」って言ってて、「ああ、やっぱりそういう人なんだ。ちゃんと見え方を考えてるんだ」って感心して。

——さすが破壊王ですね。

谷垣　そうやってこっちが納得してたら、あの人が言い出したのが、「でさ、ブルース・リーとか、そういう感じでやりたいわけよ」ってことだったんだよね（笑）。

——さすが破壊王！　ブルース・リーが好きなだけですね（笑）。

谷垣　「むしろサモ・ハン・キンポーだろ！」って思ったけど（笑）。でも、橋本さんの言葉や演技を見てよくわかりました。何がわかったかというと、「傷があるレスラー」と「傷のないレスラー」では、芝居が違うなって。私見ですけど。たとえば、同じく出演していた葛西（純）さんと橋本真也では決定的に違うなって思ったのが、葛西さんって撮影現場でもムチャっぽいことをするのが得意で、「ここに当たると危ないですよ」って言ってるところに、わざとぶつかりにいったりすることで活きる人なのね。で、橋本さんってやっぱり新日のリンピオ（＝ベビーフェイス）だったわけだから。ということは、表情も含めての自分の表現力で生きてきた人なんですよね。葛西さんは自分の身体に傷を増やすことで表現をしてきた人。葛西さんがどうっていうんじゃないけども、橋本さんには芝居っ気が凄くあったなあ。

——たとえば三沢さんは、どんな技

スタントマンの技術論

リアリティがあるかどうかで リアルかどうかは大事ではない

も受けることが凄味の一つだったレスラーですよね。

谷垣　そうですよねぇ。あの人は器械体操の出身だからか、受け身が凄くうまかったですよね。数年前にベストバウトになった三沢vs小橋を会場で観てたんですけど、「こんなことずっとやってたら、身体もたんぞ……」って思うくらい凄かったですもん、やっぱり。

――だから観客は熱狂してて。

谷垣　しますよ！　でもね、アクションの世界でいうと、それはいずれ別の表現のほうにシフトしないとやっていけないですよね。だって、ジャッキー・チェンがそうじゃないですか。いまのジャッキーが『ポリス・ストーリー』みたいなアクションを続けてたら確実に死んでますよ！

――た、確かに。

谷垣　でも、当時のジャッキーには「今度はどんだけ危ないことをしてくれるんだろう」っていう興味しかなかったでしょう？

――ジャッキー作品って、失敗シーンのメイキングが見どころの一つでもありましたもんね。

谷垣　だから、失敗すればするほどおもしろくて、ケガすればするほどおもしろいってところがあったんだけど、年齢とともにやっぱりシフトしていきますよね。この映画で3階から落ちたら、次は4階から落ちなきゃダメになっちゃう。次は5階から……っていうのは違うと思うんですよ。しかも香港でいうとお客さんが成熟してきたから、昔は「10階からもの凄い落ち方をしたから、興行収入が上がる」ということがあったんだけど、いまはそんなことないわけです。そこに〝ちゃんとした理屈〟を人々は求めてくるようになる。

――なぜビルから落ちるのか、と。

谷垣　お客さんは単純な殺し合い、危ないシーンを観てるんじゃないってことです。意味もなく落ちていくヤツなんかには誰も興味を持たないですよ。やっぱり、お客さんからお金を取って興行にしてる以上は、そこに何かしら表現がないとボクはダメだと思いますね。

――そこは〝痛み〟の見せ方が問われるんですねぇ。

谷垣　やっぱり猪木さんにしても「ホウキを相手にしても名勝負にできる」って言うじゃないですか（笑）。ジャッキー・チェンだってそうだと思いますよ。ジャッキーのアクションはね、受けのアクションなんですよ。受けの達人。最初は相手をおもいきり活かして、最後は自分が活きるということなんですね。

――まさに風車の理論というか。

谷垣　ブルース・リーの場合でいえば、彼のアクションって、映画全体でそんなに多くないし、けっこう短いでしょ。一瞬で勝負がついちゃう。でもその前に〝拳握りしめ〟の表現があるからブルース・リーが凄く見えるじゃないですか（笑）。

――そうですよね（笑）。

谷垣　だから肝心なのはアクションの派手さじゃないんです。ドニー・イエンっていう、僕の師匠のようなアクション俳優がおもしろいこと言ってたのは、「人は一つの拳から始まって、その拳はいろんな派手なものに発展していくけど、結局最後は一つの拳に戻ってくるんだ」と。「しかし、その拳というのは最初わけもわからず出していた拳ではなく、一周して帰ってきた拳には多くの智恵や経験や、いろんなものを備えた拳になっている」ということを言ってて、ちょっと哲学的な言い方だけど凄くわかるなあと思ったんですよ。「拳を突き出す」っていうのは、単純だから誰でもできますよね。子どもでもできるし、女性でもできますよ。ただ、誰にでもできることだからこそ差が出るっていうか、味があるというか。結局、一流の人はその差でお金を稼いでると思うんですよ。

どうすれば観客に“痛み”が伝わるか。ページの都合上、大幅にカットしたが、谷垣氏の技術論には感心するばかりだった。本当に!

――プロレスの場合も、チョップやパンチの見せ方でレスラーの力量が問われますね。

谷垣　結局、ボクらの仕事はリアルに見えるかどうかなんですよ。リアリティがあるかどうかで、リアルかどうかはあまり大事ではない。そして昔はその倒れた方でよかったけど、いまはもっと地味に倒れないといけなかったりするし。観る側も蓄積があって、その時代によってリアリティの違いがあるんですよね。

――いまの観る側の蓄積に合わせるとしたら、どういうふうにプロレスを見せますか？

谷垣　そうですねぇ……。ボクはやっぱりね、楽しいプロレスがいいなあ。最近666（トリプルシックス）とかよく行くんですけど、ボクはおもしろいと思いますよ。そこはキャラですね。キャラの強さをもっと表現したらいいんじゃないですかね。

――動きで見せるのは……。

谷垣　動きは大前提だと思うんですよ。大前提なんだけども。それと第一試合からメインまで全部、同じになっちゃいけないですよね。オープニングとエンディングのアクションが一緒じゃつまんないじゃないですか。そこの棲み分けは大事だと思うし、映画の最初から最後までずっとアクションシーンばかりでもつまらないでしょ？

――ホントにおっしゃるとおりですね。いやあ、アクションって、身体だけを使ってるんじゃないですねぇ。

谷垣　いやいや、頭もちゃんと使ってるんですよ。そこ、強調しといてもらえます？（笑）。

【09年6月25日／新宿・某喫茶店にて収録】

たにがき・けんじ■1970年10月13日、奈良県出身。倉田アクションクラブを経て、現在は監督、アクション監督、指導、スタントコーディネーターとして、香港や日本で活動中。ブログ→http://kenjitanigaki.cocolog-nifty.com/blog/

ジャッキー・チェンのスタントマン神話

世界中のスタントマンが憧れるスタントの神様、それがジャッキー・チェンだ。ジャッキーはカンフー映画スターとして登場するも、84年の『プロジェクトA』ではカンフー映画という限定されたジャンルからの脱却を図るべく、ウィットに富んだ自転車チェイスや、いまや伝説となっている時計台からの落下スタントなど、壮絶きわまりないスタントに次々と挑戦。新たなファン層を獲得することに成功した。さらに『ポリス・ストーリー』は、オープニングの2階建てバスでのスタントから、クライマックスのデパートの7階からの落下スタントなど、ジャッキー自身が「最高傑作」と評するほど完成度の高いスタントで埋めつくされた快作となった。その後も『サンダーアーム』でのスカイスタント、『クーロンズ・アイ』での爆破スタントとバラエティ豊かなスタントを売りとする映画を次々と製作。また映画のラストで、スタントのNGシーンを追加することによって、実際にジャッキーが危険なスタントにチャレンジしていることをアピールするだけでなく、そのスタントシーンをもう一度観るために多くの観客が映画終了後も帰らないという珍現象を巻き起こすなど、80年代に大ジャッキー旋風を巻き起こしたのだ。（高橋ターヤン）

究極龍かく語りき「受け身を取るだけがプロレスじゃない!」

闘龍門校長の世界プロレス文化論

ウルティモ・ドラゴン

世界を股にかけて活躍、さまざまなプロレスのエッセンスを吸収してきたウルティモ・ドラゴン。その独自のプロレス哲学をもとに闘龍門を設立、マット界に多くの逸材を輩出した。そんなウルティモ校長が語るプロレス復興のためのキーワードとは?

聞き手　堀江ガンツ　試合写真／平工幸雄

――ウルティモさんは今回の三沢さ
――それだけ近年の日本の試合スタ
年は試合スタイルに向けられてたと
ときには「これはそこまで気合い入
ます。

聞き手　堀江ガンツ　試合写真　平工幸雄

日本もメキシコのようにライセンス制度を整備したほうがいいと思う

——ウルティモさんは今回の三沢さんの訃報はどこで聞きましたか?

ウルティモ　日本にいるときでしたね。最初に関係者から「非常に危険な状態だ」という連絡があったんですよ。それから1時間くらいしてから亡くなったというのを聞いて、もう「嘘だろ⁉」っていう感じでしたね。

——ほぼ即死に近かったわけですが、こういった例って、世界的に見てもなかなかないですよね。

ウルティモ　有名なトップレスラーがリング上で技を食らってというのはちょっと記憶にないですね。WWEでオーエン・ハートの事故がありましたけど、あれは試合中というよりは、演出上のアクシデントでしたし。今回の件はメキシコでも大きな話題になってましたね。

——メキシコはリングサイドにマットを敷いてないぶん、より試合の危険度が高いと思うんですが、それでもこういった事故は起きてないですか?

ウルティモ　僕は直接会場にはいなかったんですが、15年くらい前にオロという若くて有望な選手が試合中に心臓発作で亡くなったことがありましたね。そのもっと前にも、場外で打ちどころが悪くて亡くなったレスラーがいたというのは聞いたことがあります。ただ、三沢さんのようなトップ中のトップがというのは初めてでしょうね。

——それだけ近年の日本の試合スタイルが危険になってるということでしょうかね。

ウルティモ　そういう面もあるでしょうね。スペイン語では〝エボルシオン〟っていうんですけど、世界的に見ても日本のプロレスは90年代くらいから独自路線というか、大きな変化が起こったと思うんですね。いわゆる四天王プロレスと呼ばれる究極ともいえるようなスタイルが確立されて、世界中に認められるようになって。

——あのスタイルは世界から見ても革新的なものであった、と。

ウルティモ　海外に住んでいる身としては、ここ10～20年の日本の試合スタイルは、ファンからよりもレスラー間での評価が高かったように思います。「よくあんなことできるよな」っていうかたちで。

——同業者が驚くほどの試合内容だったわけですね。

ウルティモ　以前から日本のプロレス界は来日するレスラーに対して手厚い待遇をするという意味で、外国人にとって〝凄い国〟という認識があったんですね。その〝凄い〟がここ数年は試合スタイルに向けられてたと思います。僕なんかも90年代の日本のジュニア戦線で活躍してたこともあってか、いまだに世界中の若いレスラーたちから『YouTube』で観たとか話しかけられて、リスペクトされてるのが伝わってきますから。

——三沢さんは世界中のプロレスマニアからリスペクトされている存在だったわけですよね?

ウルティモ　だからファンは「あのミサワサンが?」って思ってるでしょうね。ただ不思議なもので、プロレスの試合中のケガというのは意外とファンや関係者が「危ない!」って思うものよりも、「え、なんであんな技で?」っていうような簡単な動きが原因になることが多いんですよ。それは「この技は危ないな」という受け身の場合は気合いが入って、逆に簡単な技のときには「これはそこまで気合い入れなくても大丈夫かな」と油断してしまうことで引き起こされるものだと思うんですけど。

——なるほど。

ウルティモ　実際に今回の試合映像を観たわけじゃないですけど三沢さん自身、もしかしたらバックドロップの受け身を取るときに普段と違うような感覚があったのかもしれないですね。長年培ってきたキャリアもありますし、ある程度は身体が本能的に動くと思うんですよ。でも三沢さんは満身創痍だったがために、あまり反応できなかったのかもしれない。

——今回の悲劇の要因の一つとして、90年代からあまりにもリスキーな試合をしてきて身体がボロボロだったということも考えられますよね。

ウルティモ　あれだけハードな試合を46歳になっても続けていたというのは、体力的に相当きつかったと思いますよ。でも、ノアの社長であり看板レスラーとして団体を引っぱっていかなきゃいけない。コンディションが悪いのは本人が一番わかってたと思うんですよ。でも休めない立場だから無理して上がって。小橋(建太)さんがああいう状態っていうのもありましたし、さまざまなものを一人で背負ってたのかもしれない。だから原因は一つじゃないってことですよね。いろんなことが重なってこういうことになってしまったというか。

——最近はプロレス界に統一コミッションの設立、ライセンス発行の動きがありましたけど、今回の件をきっかけにさらにその気運が高まってます。

ウルティモ　ライセンスの発行はいいと思いますよ。メキシコでもライセンス制度は整備されていて、レスラーは1年に一回は必ず精密検査を受けるように義務づけられてますし。

——メキシコのライセンスはどのように発行されるんですか?

ウルティモ　政府のスポーツ省がプロレスとボクシングのコミッションを管轄してるんですが、最低限のテストがあってそれに合格するとライセンスが発行されるという仕組みですね。それとメキシコの会場には必ずリングドクターが待機してるんですよ。日本の地方大会だとリングドクターが整備されてないのはザラですからね。日本はプロレス先進国だったのにそういう部分では非常に遅れてるというか。メキシコは昔からそういう部分はしっかりしてましたね。

——ちなみにドクターの経費はプロモーターが負担するんですか?

ウルティモ　もちろん。試合前のチェックといっても血圧を測ったり聴診器をあてたりとか、ほんと基本的なことなんですけどね。だからドクターがいれば必ずケガや事故が防げるということではないでしょうけど、何もないよりはいいと思いますね。たとえば血圧で異常な数値が出ても、レスラーなら出場するって言ってしまうもんなんですよ。それを止められるのはドクターだけですし。

——メキシコ国内には5000～6000人のレスラーがいるとされてますが、全員ライセンスを所持してるもんなんですか?

これがメキシコのライセンス。まずルチャリブレ協会に尿や血液検査の診断書を提出。さらに隣接の医務室でも検査を実施。そのあとにコミッショナーの署名、メキシコ政府の証明印をもらってようやく発行。適当と言われるメキシコにあって、非常にきっちりしてるのだ。

闘龍門校長の世界プロレス文化論

ど、ここ数年の僕はそんなに受け身
回毎回やってたら観客に飽きられる
ャー団体もインディーも、僕の中で
な人なんですよ。猪木さんとお話を
――海外に出てレスラーとして自我

偉人は早く亡くなる運命なのかも。三沢さんは力道山に次ぐ伝説になる

ウルティモ　基本的には全員持ってます。というよりも、持っていないと試合ができないんですよ。メキシコではプロモーターが興行の許可をコミッションに届け出るときに、出場選手のライセンス番号を提出するんですね。なので、ライセンスがきちんと更新されていないと出場できないというわけです。

――今回の日本のライセンス発行に向けての動きは、プロレス業界内のみならず馳さんや森元首相など政府も関与するかたちで進行する動きもあります。

ウルティモ　過去の例を見ても、それぞれの団体レベルで動いたところでなかなか厳しい問題ですからね。そういった政治家レベルで話が進むのはいいことだと思います。

――ここで問題になってくるのが、ライセンス発行の基準をどう設けるかですよね。

ウルティモ　それは非常に難しいですよね。日本にはいろんな団体があって、それぞれ独自のスタイルがありますから。たとえば大日本プロレスから蛍光灯を取り上げることはできないと思うんですよ。そういう団体のカラーは簡単に変えられるものではないですし。

――メキシコのライセンス制度の中には選手への補償もあるんですか？

ウルティモ　これはあくまでも個人的な見解ですが、レスラーに補償は必要なのかなとは思いますけどね。極端なことを言ってしまえば、補償がほしいんだったら普通のサラリーマンになったほうがいいだろうし。ただメキシコに関していうと、レスラーの労働組合があるんですよ。だからレスラーがケガしたときにちょっと面倒をみたり、ギャラなしで選手がチャリティー興行に出場して、収益金をそのレスラーにそのまま渡すというのも珍しくないですね。

――それはいい制度ですね。

ウルティモ　だから日本でも新日とかノアとか団体関係なく、そういう組合みたいなシステムがあるとおもしろいんじゃないですか？　何か問題が起こった場合には組合として団体にかけ合うこともできますし。

――ライセンスという話になると、団体単位ではなく業界単位になるわけですしね。

ウルティモ　統一コミッションにしろ、プロレスを公平な立場で見れる政治家が関わるのがベターだと思いますよ。やっぱり代表は馳さんが一番適任じゃないですかね。ご本人もプロレスが危険だということをかつて経験してるわけですし。意外と観客はレスラーがどんな危険な体勢から落ちても立ち上がってくるから、本当は大丈夫なんじゃないかって考えてると思うんですよ。でも、実際ダメージは蓄積されていきますからね。そういうことを理解してる人がコミッションに携わるべきですね。

90年代のジュニア戦線でサスケらとともに活躍したウルティモ校長は、世界中のファンや関係者から尊敬を集める存在。ちなみにWWEで選手名が技についているのはアサイ・ムーンサルトとフジワラ・アームバー（脇固め）のみ！

――レスラーはたとえ激しい闘いをしても次の日には普通に試合に出たりするので、観る側からすれば「ダメージはないんだろうな」と思ってしまう部分はあるかもしれませんね。

ウルティモ　やる側であるレスラーも、観る側であるファンもマスコミも、プロレスに関わるすべての人々がそういう風潮にしちゃったんじゃないですか？　誰がそういうふうにしたとかじゃなくて、いつからかそういう流れになってしまったというか。プロレスにかぎらず、世の中って一旦そういう流れができてしまうと、事故でも起こらないかぎり止まらないですよね。だからこそ三沢さんの死を無駄にしてはいけないというか、これから日本のプロレスをどういうふうに引っぱっていくかを残された人たちで考えていかないといけないわけで。

――これを糧にすべきだ、と。

ウルティモ　今回、三沢さんは若くしてお亡くなりになったわけですが、個人的にはあと何年かしたら力道山先生に次ぐ伝説になるんじゃないかって思ってるんですよ。どのジャンルでも偉人というのは早く亡くなるじゃないですか？　マイケル・ジャクソン、ジェームス・ディーン、ブルース・リー、アイルトン・セナ……。本当に凄い人というのはそういう運命なのかもしれませんね。

――ウルティモさんは日本のプロレスは試合スタイルを変えていく必要があると思いますか？

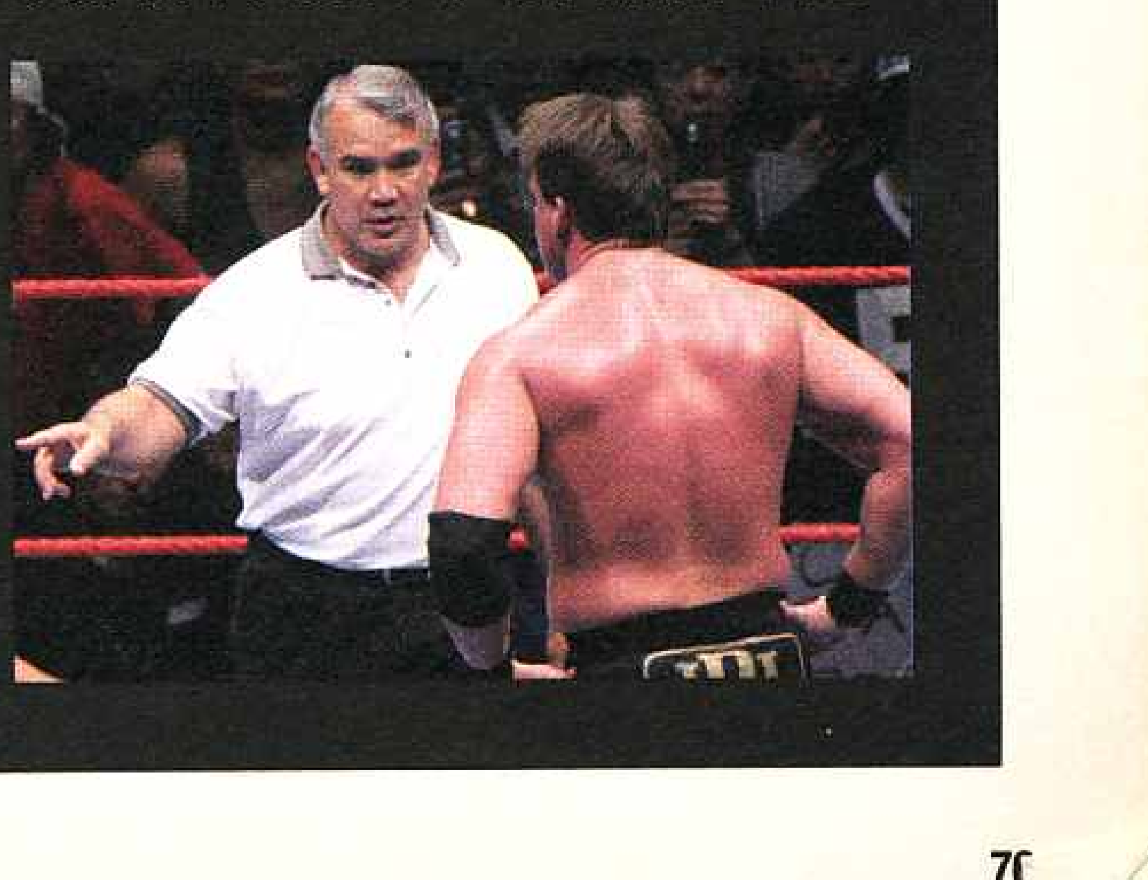
ウルティモ　僕が理想とするプロレスのスタイルとしては、大技を使うのはフィニッシュだけでいいと思うんです。いまの日本のプロレスは技がエスカレートしすぎていろいろな問題を抱えてると思いますけど、困ったら昔の力道山先生や馬場さんや猪木さんの映像を観て、クラシックなプロレスを思い出せばいいんですよ。答えはそこにあるはずですから。ただ、こういう流れを軌道修正するのは難しいことでしょうね。今回の件を踏まえて、見直すいい機会だとは思いますけど。

――不可能ではない、と？

ウルティモ　見せ方次第ですかね。自分もジュニア8冠王者のときなんかは無茶な空中技をやってましたけ

先人から学べ！ エージェントとは何か？

WWEの乱闘場面などでレフェリーとともに選手を分ける元レスラーの姿を見かけることがあるが、その人物こそがエージェントである。もともとエージェントとはプロスポーツにおいて選手を管理する代理人的な職種であり、WWEではレスラーの試合構成を手助けするためにアドバイスを送るのが主な仕事となる。チーフを務めるのはパット・パターソンであり、ほかにもサージェント・スローター、ディーン・マレンコ、アーン・アンダーソンなど、現役時に試合巧者として鳴らした選手がエージェントを務めている。最近ではリッキー・スティムボートが、エージェントを務めながらリングでもレスラーとして活躍中である。



闘龍門校長の世界プロレス文化論

いまのプロレスを見直すには昔の人の話を聞くことにヒントがある

ど、こ数年の僕はそんなに受け身を取ってないでしょ？（笑）。

——確かに（笑）。

ウルティモ　いまの僕は受け身を取るだけがプロレスじゃないと思っていて、じゃあ今度はそこでどんな見せ方をするかということが重要になってくるんです。レスラーはキャリアを重ねるとともに、自分の体力を踏まえながらどういう試合をしたほうがいいか考えたほうがいいですよ。やっぱり健康が一番ですから。

——かつて闘龍門ではプロレスの進化の過程で削ぎ落とされていった、両者リングアウトのような不透明決着も普通に取り込んでましたね。それを考えるとプロレスの表現技法はやり方次第ではほかにもありそうですね。

ウルティモ　もっとプロレスを簡単に考えればいいのに、日本人は難しく考えてしまってるんですよ。「もともとプロレスとはどんなものだったのか？」、その歴史をヒモ解いていけばおのずとヒントは隠されてると思いますよ。

——温故知新ですね。

ウルティモ　僕は山本小鉄さんにプロレスのイロハを教えてもらって、そのあとにザ・グレート・カブキさんに凄い影響を受けたんですね。たとえば僕はアサイ・ムーンサルト（ラ・ケブラーダ）という技を一時期毎日やってたんです。でもカブキさんが「毎回毎回やってたら観客に飽きられるよ。自分も身体がきついだろ？　やれるときだけでいいんだよ」ってアドバイスをくれたんですよ。カブキさんの考え方は、いまの日本のプロレスにとって非常に大切なことだと思う。あの人はいわゆるアメリカで一番クラシックなプロレスを体験してきた人ですからね。ああいう人を業界は戻す必要があると思いますよ。

——本当のプロレスのエッセンスというか。

ウルティモ　「プロレスって何？」ってことですよね。いまの日本のメジャー団体もインディーも、僕の中では昔のプロレスとはちょっと違うというか、別のものになってきてると思うんですよ。自分の中で理想とするプロレスとは違うので、観ていてもおもしろく感じないですし。

——なるほど。

ウルティモ　いまのプロレスを見直すためには、昔の人の話を聞けばヒントはたくさんあるんですよ。アメリカだとWWEあたりは引退した古いレスラーをエージェントとして残しますけど、日本のプロレスは残さない。そこが問題なんじゃないですか？

——キーワードは過去にある、と。

ウルテイモ　いま、猪木さんに対して批判的な人って多いですよね？　でも、やっぱり一時代を築いた偉大な人なんですよ。猪木さんとお話をさせていただいて凄く嬉しかったのが、僕の考えてることとまったく同じことをおっしゃっていて。リングネームのつけ方一つにしても似たような意見だった。だからなんでこんな凄い人が近くにいるのに、日本のレスラーはもっと教えをあおごうとしないのかなって不思議でしょうがないですね。

——まだまだ学ぶものは多いわけですね。

ウルティモ　あと、僕はメキシコや中南米、それにイタリアなどラテン諸国に行くと凄くエネルギーが〝充電〟されるんですね。新しいものを見たり触れたりすることがパワーにつながるわけで、それを日本に持ち帰って試合で〝放電〟すると。でも、いまの日本のレスラーは外の世界にあまり触れないので、考えが凝り固まっちゃってる思うんですよ。正直、日本のレスラーでいまオーラのある人って少ないでしょ？　武藤（敬司）さんとかほんの数人で。それはやっぱりそれだけのパワーがないんですよ。

——煮詰まってきてるというか。

ウルティモ　僕も日本に2～3年いたらそうなると思いますよ。やっぱり環境を常に変えて、いろんな価値観に触れないと。ずっと同じ環境に身を置いていたら、感覚が麻痺してきますよ。僕なんかはほとんどいつも違う相手とやらないといけないわけですよ。国も会場も観客も言葉も違うし、常に自分を緊張させておかないといけない。そういうところに身を置くことも、プロレスをやるうえでは大切なことだと思いますね。

——海外に出てレスラーとして自我が覚醒する、と。

ウルティモ　プロレスという人前に立つエンターテインメントの仕事をしている以上はファンを引きつけないといけないのに、いまはオーラのないレスラーが多いと思いますね。技術うんぬんも重要ですが、それ以前にそういう部分を考えたほうがいいと思いますよ。昔、ルチャリブレの産みの親であるサルバドール・ルッタロスが残した言葉の中に、「プロレスラーになる前にプロレスラーみたいに見せろ」というのがあるんですよ。これは「いくら強くてもそこらへんにいる一般人と変わらないようではレスラーには見えないよ、やっていけないよ」ということなんですよね。

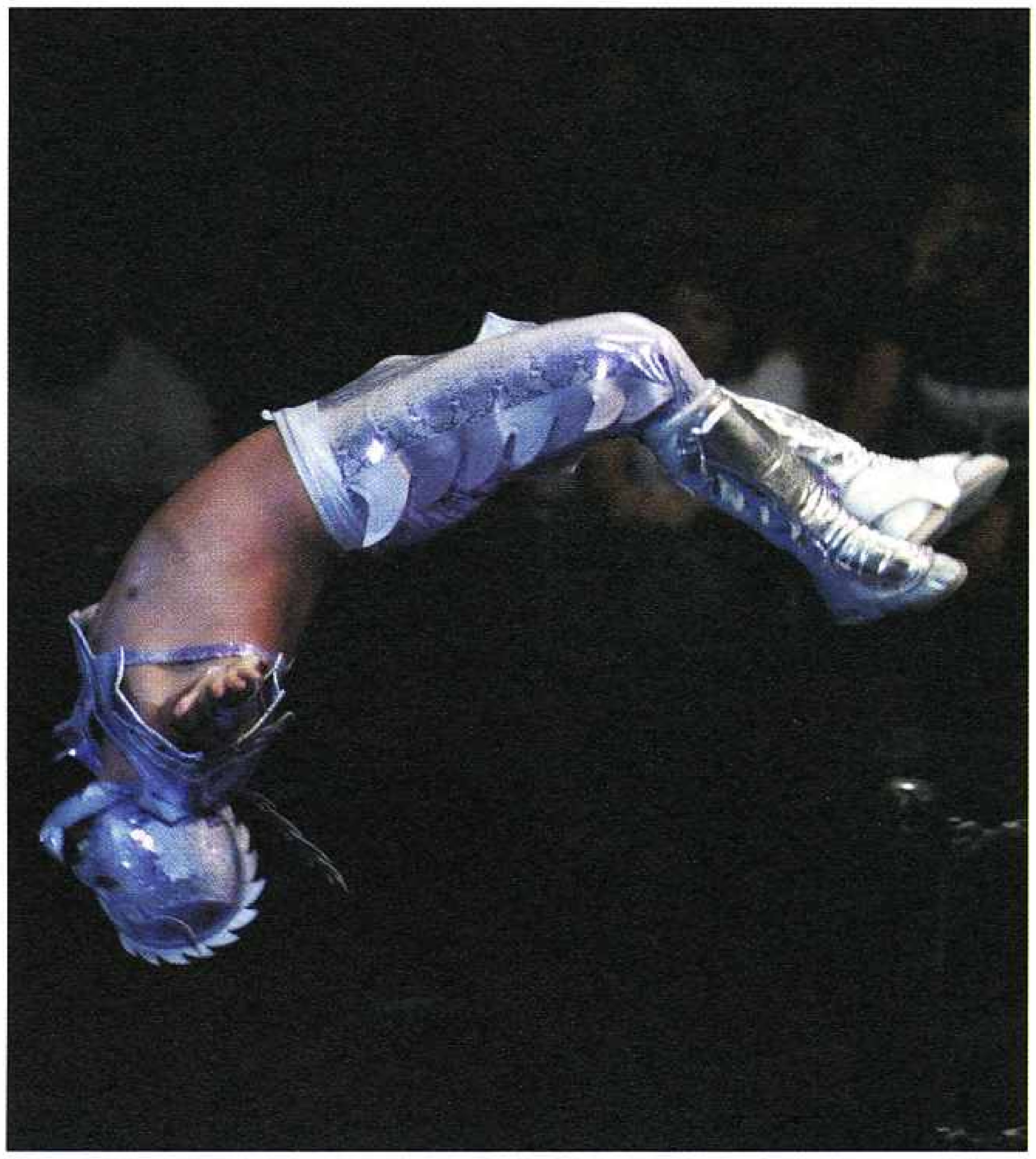
——プロとしての根本的な心構えというか。

ウルティモ　プロレスは街の喧嘩を見せるわけではない。リング上は夢の舞台でなくちゃいけない。そこにお客さんはお金を払うわけじゃないですか？　もちろん技も大切だけど、それ以外のプラスアルファを考えないと。たとえばミル・マスカラスは普通の人間には見えないですよね。あんな人は街を歩いていない（笑）。

——確かに（笑）。

ウルティモ　アントニオ猪木やジャイアント馬場だって普通に道を歩いてないですもんね。僕はそれがプロレスの原点だと思うんですよ。レスラーを名乗るのであれば、いまこそその原点を見つめ直すべきだと思いますね。

【09年7月3日／都内・某所にて収録】



Ultimo Dragon■1966年12月12日、愛知県出身。本名・浅井嘉浩。87年に単身メキシコに渡りデビュー。91年にマスクマン、ウルティモ・ドラゴンに変身。97年からプロレスラー養成学校「闘龍門」をメキシコに設立し、数多くの人材を輩出している。172cm、85kg。

“危険”だけがプロレスじゃない！ いまこそレスリングの“本質”に立ち返るときでしょうね

UWFスネークピットジャパン代表 宮戸優光

三沢光晴さんの事故を受けて、いま一度、プロレスの試合のあり方が問われている現在。高度で危険さを増し“進化”したプロレスは、これからどうなっていくのか。「プロレス」の四文字にあくなきこだわりを持つ、UWFスネークピットジャパン代表の宮戸優光に、あらためてこれからのプロレスについて聞いてみた。

聞き手／堀江ガンツ

―― 三沢選手がリング上での事故で亡

してレスラーもそういう声に対抗するが

一杯の血が出ても平気な顔してる人種な

うか。

いまのファンは危険なことや派手なこ

いまのプロレスは確かに危険だが はたしてそれは進化と言えるのか

——三沢選手がリング上での事故で亡くなるという大変なことがあったわけですが、宮戸さんはブログでも三沢さんの事故について少し書かれてましたよね？

宮戸 いや、事故というよりも三沢さんという人についてですけど。本当に残念なことでした。

——プロレス界にとっていろんな意味で、大きいというか。

宮戸 うん。いまのプロレス界の中で三沢さんというのは、そこにいるだけで何かを放っている存在感、雰囲気を持った数少ない一人だったから。その方の事故ですからね、非常にショックだし、悔しい気持ちが僕なんかにもありますよね。

——その存在感が大きかったからこそ、いろんな負担が三沢さんにかかりすぎてしまい、今回の事故が起きてしまったようなところもあったような気もするんですが。

宮戸 やはり社長としての責任、さらにリングでファンの期待に応えなければならないという気持ちがあったからこそ、無理を重ねて、ああいうことが起こってしまった部分はあったでしょうね。だから今回の事故も最後の技だけが危なかったというより、ボロボロだった身体を考えたら、これまでも常に危なかったということでしょう。

——これまでたまたま事故が起きなかったという言い方もできますよね。

宮戸 これは三沢さんのことだけじゃなく、いまは誰かがしたり顔で言ったことを聞きかじって、プロレスというものを、簡単なものであるかのように決めつけてしまっている現状がありますよね？ そしてレスラーもそういう声に対抗するがゆえに、必要以上に自分たちを危険なかたちで追い込んでしまっている。そういう環境ができてしまっているな、という感じはしましたね。

——それもあってか、年々危険度が増している感じはあります。

宮戸 三沢さんという、あれだけのキャリアがあって、受け身も素晴らしいと言われている選手にああいうことが起きてしまう。それはやはり、普通の選手だったらとっくに辞めてるような状況でリングに上がってたってことでしょう。なぜ、そこまで身体が壊れてしまったのか。おそらく身体がボロボロという意味においては、いまのプロレスと呼ばれるものは総合とかの比じゃないと思う。

——プロレスはケガをしていても、リングに上がり続けなきゃいけない部分がありますからね。

宮戸 だから、長くいまだに現役をやってるプロレスラーは、「よくリングに上がれるな」って思う人いっぱいいますよね。

——歩くのも大変そうだったり、首がまったく動かなかったりという選手はいますよね。

宮戸 そうそう。日常生活を送ることすら支障がありながら、その状況に慣れてしまっている。普通のスポーツ選手にとってヤバい状況が普通の感覚になっている、ちょっと特殊な人種なんですよ。

——壊れているのがあたりまえみたいな（笑）。

宮戸 だって普通の主婦だったら、たとえば包丁で指を切ってもビックリするけど、レスラーっていうのは額からコップ一杯の血が出ても平気な顔してる人種なんだから。リングの試合だって、毎日、交通事故に遭ってるようなもんですからね。だから、いい悪いは別として、レスラーというのは、自分の身体がいまどういう状況になっているか本当の意味では気づかないんですよ。

——屈強であるがゆえに、過信してしまう部分があるわけですね。

宮戸 だからそういう意味において、やはり第三者的な、医師なりなんなりがストップをかけるっていうのは、ときとして必要かもしれない。ただ、その医師の診断も、一般の人を基準にしたら、レスラーの半数以上がドクターストップになる場合だってありえるでしょう。

——普通のスポーツ基準で言えば、ドクターストップや引退勧告になる人が何人もいるわけですね。

宮戸 そうそう。そういう普通の基準でやってたら、業界自体が成り立たなくなるから、そのへんが難しい部分ですよね。

——プロレスには長い歴史がありますけど、いまみたいな頭から落ちるようなバンプの繰り返しを、40歳すぎてやってる人がたくさんいるような時代って、初めてなわけですからね。例がないですよね。

宮戸 ないね。そして、そこがいまのプロレス界の問題点でもあると思う。

——そこが問題ですか？

宮戸 うん。いまリングで展開されているものは、猪木さんなんかも言われている本来のレスリング、闘いとしてのプロレスとは違うと思う。しかし現実にはそのプロレスより、いまのプロレスというもののほうが危険性は高いと思う。ただ、危険だからといって、それが本当にプロのレスリングなのかといったら、はなはだ疑問符はついてしまうわけですよ。

——プロレスが変質してしまったというか。

宮戸 そうですね。でも、それが「プロレス」であるというふうに、いまや認識されているから、レスラーはよりハードなもの、あるいは危険に身を晒さざるをえない。ただ、それはプロレスの本質からは、ずいぶん外れてきていると思う。だからこそ、やはりプロのレスリングであるということに立ち返るべきでしょうね。逆に言うと、みんなレスリングで見せられないから、よりサーカス的、スタント的な危険を冒すことで魅せていくという方法に頼らざるをえなくなっているというのも、いまみたいなプロレスになった一つの要因があるように僕は思います。

——いまのプロレスは、昔より危険度は上がっているけれど、レスリングの進化とは言えないのかもしれませんね。

宮戸 レスリングそのものの進化とはちょっと違うでしょうね。やはりさっき言ったとおり、三沢さんを含めた数少ない存在感のある人たちに代わる若い世代が育ってない、もしくは育てていないという問題もありますしね。だから、いつまで経っても40代以上の選手に頼らなければいけないし、必然的に若い選手と40代以上の選手が絡まざるをえない。若い選手はいまのスタイルから入っているから、レスリングで魅せるなんていう発想もないし、結局、より危険な、ハードに見える方法で40代以上の選手ともやるしかないわけですよ。

——若いうちは身体もまだ壊れてないし、危険なことができるわけですからね。

宮戸 できるというか、そこに頼らざるをえないのでしょう。レスリングではなく、危険なことにトライして自己主張しようとしてくる。であれば、「古い世代がレスリングで試合を引っぱればいいじゃないか」って思う人もいるだろうけど、いまのファンは危険なこと、派手なことをやるのがプロレスだと思い込んでる節があるわけですから、そういうファンのニーズを考えると、どうしてもそちらに付き合ってしまう。結局できる人がいたとしても、そういった悪循環に陥っていると思うんですよね。

——なるほど。ファンのニーズに応えた結果でもある、と。

宮戸 ただね、はたして本当にファンはそういうプロレスを求めているのか？ という疑問もありますよ。いまプロレスファンと呼ばれている人たちが、いまの危険な技がたくさん出るプロレスに満足しているんだろうかと考えると、やはり昔と比べて動員も落ちてるわけでしょ？

——単純にプロレスファンの数は激減してますよね。

宮戸 逆に古いプロレスのビデオなんか見せると、その時代を知らないファンもおもしろいと思ったりするわけですよ。

——猪木さんやタイガーマスクの試合は、頭から落としたりしませんけど、いま観ても引きつけられますよね。

宮戸 だから、ホントに質の高いレスラーがレスリングで魅せることができれば、僕はけっしていまのファンがついてこれないとか、あるいは新たなファンが開拓できないなんてことは絶対にないと思うんです。

——いまのプロレスは複雑だし、大技がたくさん出すぎて、一般の人が観てもちんぷんかんぷんだったりしますもんね。

宮戸 だから原点に戻るっていうのは必要だと思いますよ。それはレスリングに戻る、闘いに戻る。いまある〝危険〟というのは、レスリングにおける危険というより、サーカス的な危険を冒しているわけで。レスリング本来、格闘技本来の危険性とはちょっと違う部分だと思いますから。

――極論すれば、ベクトル的には電流爆破なんかに近い感じがするというか。

宮戸　まあ、あれはまた違う危険ですけど、サーカスあるいはスタント的な危険とレスリングの危険も違うんですよ。それにレスリングというものが常に必ずしも危険とはかぎらないしね。しっかりとしたレスリング技術の攻防があれば、そこに凄さはあると思うし、芸術があるしね。たとえば、ピンピンしている相手を一瞬にして丸め込んで動けなくしてしまうとしたら、これなんかは危険ではないけれど、まさに芸術じゃないですか。

――まさにプロの技ですよね。

宮戸　レスリングにはそういった違う凄みや素晴らしさがたくさんあるのに、危険や痛みだけを売り物にするというのは、プロレスリングという道からするとちょっと違うと思いますよ。レスリングというのは闘いですから、ときとして命懸けの試合があるかもしれない。でも、それはレスリングの闘いという自然な流れの中で起こることであって、あえてそこへ踏み込んで、危険を見せ場にするというのは、僕は違うと思います。

――ファンも危険なことや、残酷なことが観たくて会場に来てるわけじゃないと思いますよね。

宮戸　そうだと思うんですよ。たとえば、いまのジュニアヘビー級の試合なんかを観ると、どう考えても危ない試合をしていますよ。あれはもう間違いなく、総合なんてものより危ないと思う。

――ちょっと足を滑らせたら大事故が起きてもおかしくない試合がたくさんありますよね。

宮戸　いや、投げ技一つにしたって、落ちる角度少し違っていたら終わりでしょう。それこそ首や頭なんていうのは、1センチ、5ミリの単位で受け身を取り損ねただけで大事に至ることもあるわけですから。危険なことをやっているのは間違いないんですよ。ただ、いまのプロレスがホントの意味で評価をされていないということは、その危険は申し訳ないけど、実にはなっていませんよね。

――危険の対価に合ってないというか。

宮戸　そう、対価としては、ホント残念ながら評価されてない。もっとレスリングの本質に戻るべきだと思いますけどね。

――だいたい、いまみたいなプロレスに変わったのって、ここ20年弱ぐらいですよね？　90年代に入ってからですから。

宮戸　そうですね。もう20年になっちゃうのか。

――それまでは、ハイスパートレスリングなんて言われながらも、そこに至るまでの攻防で引きつけていた気がするんですよ。

宮戸　そう。レスリングによって引きつけていたし、観ている側はレスリング、そしてレスラーに引きつけられていたんです。でも、いまは引きつけようとして、何かやろうとするからね。

――なるほど。客を引きつけるために危険なことをあえてやって。

宮戸　そうそう。以前はお客さんのほうがレスリングに引きつけられていたのに、いまはレスラーのほうが引きつけようとして「これでどうだ?」「これでどうだ?」ってエスカレートしていくから……。

――へんな話、バナナの叩き売りの「もってけドロボー」状態になってるというか（笑）。

宮戸　ただ、それは本当に命懸けでやってるわけだからね。プロレスという名において、命懸けの危険な領域に踏み込んでいる努力と勇気は凄いと思う。そういった意味では、間違いなく昔のレスラーより身体を張ってる。それなら、いまの危険なことを平気でやるような選手たちが、レスリングの本質にそのエネルギーをぶち込んだら、これは凄いものが生まれるんじゃないかと思うんですよね。

――なるほど。努力や身体を張ることの量を変えるのではなく、ベクトルを変えるというのは必要かもしれませんね。

宮戸　やっぱりね、若い選手がエネルギーの突っ込み方をちょっとわからなくなって、いまのようなスタイルになってるんだと思う。たとえば（ミスター）高橋本であるとか、わけのわからない人たちの書いた、そういう類の本が、逆に選手たちをリードしちゃってるというかね。そういう本を読んで入ってきたようなレスラーも多いわけです。だからプロレスとはそういった本に書かれているようなものなんだ、という認識の中で行なわれている部分を僕は多分に感じるんですよ。

――高橋本的な価値観の中で生まれたレスラーが増えている現状もあるわけですね。

宮戸　でも、プロレスとはそんなもんじゃない。プロレスの本質というのは、もっと別のところにあるわけですよ。その原点をもう一度見直してほしいし、そこに気づいた人たちだけでも、そこに立ち返る努力というか、考えを持ってもらいたいな、という気がしますね。

――へんな話、どこかの団体がそういうスタイルに立ち返って、それが成功したら、他団体にも波及していく可能性がありますよね。

宮戸　そうかもしれない。逆に言うとね、20年前にいまみたいなプロレスが出てきた原因は、やはりUWFであり、Uインターであった部分もあると思うんですよ。UWFでレスリング、闘いで魅せるプロレスが脚光を浴びた中で、そこに対抗するものとして、違うかたちの危険なプロレス、別の部分でハードなプロレスとして生まれた部分もあるんですよ。

――それはあるでしょうね。UWFや総合格闘技とは別の凄さを見せるという。

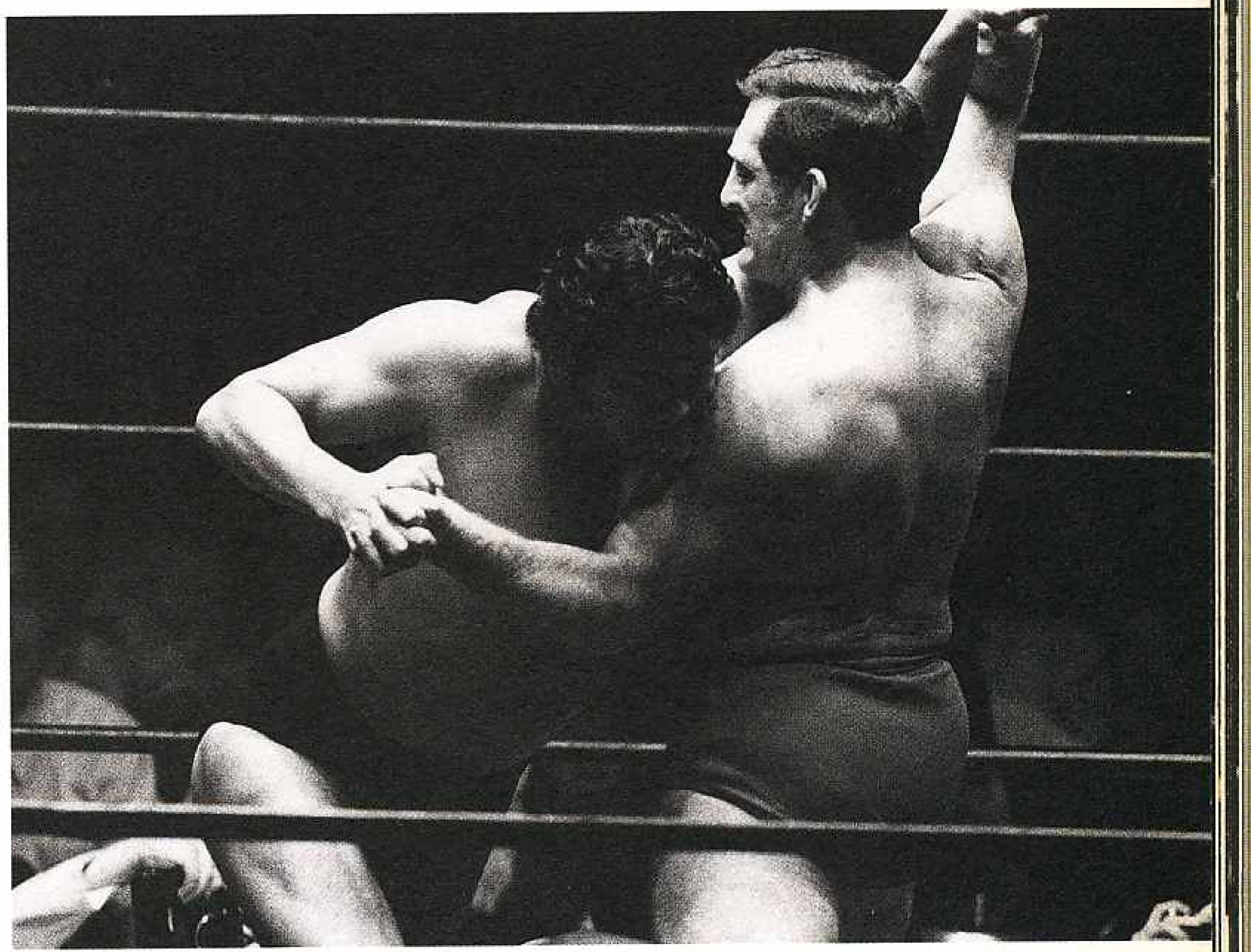
宮戸　そういう対抗の仕方は間違いではないんでしょうけど、よりサーカス的な危険でハードという部分だけが進んで、本質がなくなってしまったというか、本質を捨ててしまったんでしょうね。

――なるほど。90年代以降、いろんな団体がそれぞれ進化して、危険な技の究極、空中殺法の究極、デスマッチの究極など、いろんなものが生まれましたけど、その反面、もともとあったプロレスの本質が抜け落ちちゃってるわけですね。

宮戸　そう、なくなっちゃったんですよ。だからいまこそ、そういったレスリングの本質を見直し、立ち返るときなんじゃないかと思います。何度も言ってますけど、いまの選手たちは昔よりも危険でハードなことをやってることは間違いないんだから、そのエネルギーをレスリングの本質にぶつけて、ホントの意味で「プロレスって凄いんだ！」っていうものを見せてほしいですね。

【09年6月24日／都内・UWFスネークピットジャパンにて収録】

レスリングの本質にエネルギーを注げば凄いものが生まれる



馬場、猪木の時代はもちろん、四天王プロレスが開花した90年代までは、限られた大技の中で競われてきたプロレスの試合。今後のプロレスの鍵は、じつはかつてのプロレスの中にあるのか。

みやと・ゆうこう■本名・宮戸成夫（しげお）。1963年6月4日、神奈川県出身。85年に第一次UWFでデビュー。第二次UWFで取締役に就任し、"Uインターの頭脳"として、団体を牽引。95年にUインターを退団後、99年に「UWFスネークピットジャパン」を設立。後進の指導にあたる。ジムは7月31日まで入会金半額キャンペーン中。

"レスリングの本質"に立ち返る

レスラーと芸人

浅草キッド

「レスラーは芸人なんだよ！」というザ・グレート・サスケの名言を持ち出すまでもなく、その生き様において、レスラーと芸人の共通点はこれまでたびたび語られてきた。今回、映画『レスラー』が公開され、その公開初日に三沢光晴さんの悲しい事故が起こり、いまあらためてレスラーの生き様がクローズアップされる中、芸人とレスラーについて、おなじみ浅草キッドの二人にそれぞれ話を聞いてみた。

聞き手／堀江ガンツ

博士　じつは俺、今回、三沢さんの追悼文とか、いろいろコメントを求められたりしたんだけど、いままで一切断ってたんだよね。まあ、この取材は、三沢さんの話だけじゃないってことで。

——それは、どういった理由からですか？

博士　これまで、さんざん〝猪木信者〟を名乗ってきてさ、亡くなってから急に三沢さんを語るのは申し訳ない気持ちがしてね。まあ、三沢さんとは一度お会いして、サムライTVのインタビューで、ジックリお話ししたこともあるんだけどね。やっぱり実際に会った感想は、人間的に〝厚い人〟だった。すべてを飲み込み、引き受ける、親方気質っていうかね。みんなが言う三沢光晴という棟梁、リーダーへの評価は世評と変わらないし、会う前以上にますます敬意を感じたね。

——イメージどおりの人でしたか。

博士　やっぱり多弁を弄せず、黙って、より過激にプロレスを続けていく気概、ジャイアント馬場の〝遺産〟と〝負債〟を共に受け継ぎながら、親分道をまっとうした男らしさとかさ。ノアの大所帯を率いてね、しかも満身創痍にもかかわらず、常に第一線、休むことなくトップで闘っていたわけだから。ある意味、森光子の凄さと変わらないもの。

——少数精鋭のほうが、もっといろんなことができたでしょうね。

博士　そういう、団体を率いる古き良き親方の生き残りであるし。だからというわけじゃないけど、三沢光

水道橋博士

『レスラー』の価値観は実体験でわかるけどTAJIRIの言うことも俺はわかるな

かねてから映画『レスラー』に注目し、三沢光晴さんとは同い年という水道橋博士。今回はかつて明日なき芸人の日々を送った博士に、いまの視点でレスラーの生き様を語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ

晴の訃報っていうものを聞かされたときは、旧型のプロレスというジャンルの終焉を告げられたような気持ちになったなあ。

——そこまでの気持ちに。

博士　ちょうど三沢さんが亡くなった日にね、俺は子どもを連れて宮戸（優光）さんのジム『UWFスネークピットジャパン』に行ってたんだけど、そこで今度プロレスの練習生になる15歳のアキラくんっていう子とひさびさに会ったのね。俺はその子が6歳の頃から知ってて、9年前、俺がジムに入りたてで、俺より弱そうなのは、このアキラくんと、上智の大学院にいたっていうウラナリ・メガネの井上くんだけなのね。その井上（学）くんが、いまパンクラスの世界王者であり、あんな小さな子どもだったアキラくんが、宮戸さん直々の猛トレーニングを耐え抜いて、井上くんと一緒に毎日〝プロ練〟やりながら、いまやプロレスラーになろうというところまで成長してて、じつのところ、そのジムに、ずっと流れてきた時間とか体感して、その息吹きに感動したんだよね。

——レスラーの〝新しい命〟を目のあたりにして。

博士　そう。いまどきプロレスラーになろうという少年がいて、そこには、俺が少年時代に憧れたビル・ロビンソン先生がいて、UWFの宮戸さんがいて……。そこからつながった遺伝子というか、バトンタッチを見ながら、プロレスの未来に思いを馳せていたところで、その夜、三沢さんの訃報を聞かされたからね。

——谷底に突き落とされたような気持ちになった、と。

博士　あと、その日は『レスラー』の公開初日だったわけでしょ？　だからあの映画を公開日に観て、三沢さんの訃報を知った人は、どんな気持ちなんだろうって思わずにはいられなかったね。

——リンクしすぎですもんね。博士は『レスラー』はいつご覧になられたんですか？

博士　俺は内覧用のDVDで公開する前に観たんだけど。この映画については、町山（智浩）さんが「今年度ナンバーワン！」って言ったときから、もの凄い期待値が高くて、もうハードルが上がったね……。

——満点とはいかなかった……？

博士　いや、もちろん号泣ものの傑作で、魂に響く映画ではあったんだけど……。モヤモヤもしてたの。でも、『kamipro』でTAJIRIが言ってた「あれはレスラーの一部の姿であって、どん底しか描いてない。もっとハイクラスも描いてほしい」っていう気持ちもわかるのね。あと「これを観てプロレスラーに憧れる人はいないんじゃないか」っていう船木の発言を聞くと、俺もそういうところに引っかかったのかもしれない。それにね、自分には、〝生きていく場所はここしかなく、死ぬ場所はここしかない〟っていうリングって、芸人にとっても舞台と一緒だからね。やはり、同じプレイヤーとしては、複雑な思いを感じるよ。

——あまりにも悲惨な現実のみを見せられた感がありますか。

博士　それは年齢的なこともある。
結局、あの〝変装免許証事件〟とか起こ
価値じゃないぞ」って、あの頃の俺
告が入らないとか言って苦悩してん
スモデルもあるんだよ。もちろん、

虚しさや切なさや悲しみの中にも再生の物語があることを俺は信じたい

博士　それは年齢的なこともある。俺が三沢さんと同い年でね、長年、プロレスを観てきた。一方で芸人を20年以上やりつつ、私生活では3児の父ってところもあるだろう。やっぱり、いま辰吉丈一郎なんかを見てても、昔は、その終わらない物語、挑戦をやめない気持ちがシンクロしていた、つまり〝生きていく場所はここしかない、死ぬ場所はここしかない〟って思い込み、そのものに共感してたのね。でも、いまは、辰吉の将来や健康を気遣うし、父親である粂二（くめじ）さんの側から見てしまったり、息子の寿希也に想いを馳せたりするわけじゃない。やっぱ、一緒に物語を現在進行しているというより、なんか、行く末を心配する側にいるんだよね。もはや、自分自身が長い思春期を終えている、危険な旅には出られない、そういう歳なんだなとは思うけどね。

――いまは、破滅的な生き方に100パーセント共感できない、と。

博士　それは「今日、死んでもいいんだ！」っていうふうな破天荒な気持ちが萎えてるからね。20代、30代のとき、この映画を観ていたら、もちろん全身全霊で共感しているし、実際、芸人としてもそういう志向をしてたんだけど。

――若いときは、笑いのためにはなんでもするみたいな生き方だった、と。

博士　そんなにカッコいいもんじゃないけど。昔は、〝テレビでは本当のお笑いはできない〟とか思って、「社会彫刻的なインパクトのある笑い」を目指そうとか若気の至りで思ってて、結局、あの〝変装免許証事件〟とか起こしてさ。でも自分じゃ、あれは本気でおもしろいと思って、実際、警察に捕まるのを楽しみだと思ってたわけよ。

――で、実際に捕まって、長期の謹慎処分になったんですよね（笑）。

博士　捕まる前も、ホントに自宅をガサ入れされてても、「よし、明日の新聞の一面に俺は載る！」とか本気でワクワクしてるわけじゃん。極端に言えば、何かしでかしても、獄中記をものにしてやろうとか思ってたもん。

――笑いのために身体を張ってた、と。

博士　そのためには自分の評判はどうなってもいいみたいな。風俗界の〝登頂家〟として、すべての最高峰にチンコでビッケルを打つんだみたいなバカな理想を持って、それの集大成の本を包み隠さず書くとかさ、そんなこともなぜか本気で思うわけじゃん（笑）

――修行時代はそういうのが凄くあったわけですよね。

博士　あった。でも、いまなら「違う違う、おまえがやるべきことは、もっとテレビでおもしろいことをすることなんだ」って言うよ。「おまえ、そんな犯罪スレスレのことやってもダメだよ。オマエの思っている『東スポ』の一面を何回取るかが芸人の価値じゃないぞ」って、あの頃の俺に言ってやりたい（笑）

――やっぱり家庭を持つと、まったく価値観が変わるんですかね。

博士　それは、「家庭」ってことには限らないね。ランディ（ミッキー・ロークの役名）だってさ、妻を捨て、子どもと別れてもそういう世界観になっていったわけじゃん。そこでも薬を打ちながら、バーの便所でセックスする……あれはTAJIRIも「あんなのダメだよ」って言ってたじゃない。でも、そっちのほうがイイっていう価値観に対して否定もできないのね、俺は。それは「わかるよ」って思うし。だから、ともにわかる、いまや二つともその価値観は。やはり、レスラーが観ても、この映画は複雑な気分になるでしょ。リアルだから忍びないよ。むしろ『ロッキー』のように、ちゃんと主人公の出口を描いてくださいっていう気持ちもわかるな。

――底辺だけを描くと、あまりにも救いがない、と。

博士　たとえば、『LEON』の創刊編集長である岸田一郎の日常を追った、『情熱大陸』があってさ、一方で『kamipro』の阿修羅チョロの日常を追った『情熱大陸』、このドキュメンタリーが二本あるとして、岸田さんは、ルイ・ヴィトンかなんかの広告が入らないとか言って苦悩してんだよ。で、チョロは、マッスル坂井の原稿が入らないとか言って苦悩してんだよ（笑）。チョロのほうが俺には圧倒的におもしろいし、ボンクラとしても共感するんだけど、あまりにも夢がないじゃない（笑）。どう考えても、将来なりたいと思うのは、一般的には、岸田さんの生活のほうでしょ。

――確かに、チョロには憧れませんね（笑）

博士　でも、大好きなプロレス業界の中で、いまも輝いているわけだよ。俺が20代で無職ならチョロにだって憧れるよ（笑）。で、プロレス界は〝チョロの日常〟的なこと、たくさんあるわけだからね。このリングがじつのところ、世界に突き抜けていない、みたいな。三沢さんの死も、世間からは、中小企業の社長の過労死的な扱われ方もするわけだから。

――ニュースとしてプロレスの業態を説明されて。

博士　そうなると、プロレスという異端の職業が、ホントに命脈を保てるかどうか、みたいなところもあるしね。リングで〝輝きたいの〟の衝動とか、ロマンだけで上がっていいのかって。一方では、アメリカはWWEが、プロレスを巨大な産業にしてきたわけだから。ちゃんとビジネスモデルもあるんだよ。もちろん、そこには、いろんなドーピングなんかの犠牲者も死屍累々だけどね。

――マット界がこんな状況だからこそ、滅びの美だけじゃなく、光明も見いだしたいというのはわかりますね。

博士　うん。俺は、大真面目に、そういう再生の物語をわりと信じてるから。だって『マッスル』観ても、それがアングラ劇だと規定して、行き場がない袋小路になっていく儚さよりも、むしろ、これほどのおもしろさは絶対、メジャーに突破口を見つけるハズだって妄想するのよ。

――『スマスマ』に出られるって言ってましたね。

博士　三沢さんの死や映画の『レスラー』を覆っている、虚しさや哀しさ、やりきれない切なさの中に居続ける表現っていうのは儚くも苦しい。でも、現実のミッキー・ロークは、あの明日もないレスラーを演じることによって、役者としての輝ける未来をもう一度、自分で作り出したわけだから。そこをもっと語りたいなって気はする。誰もが、もう一度再生できるよ、立ち上がれるよっていう部分をね。それに、じつはプロレスラーは、あのミッキー・ロークが伝えた世界観を毎日ライブで表現できているわけでしょう。一生を通して、人生を劇場として観客に表現しているというか、そういう称賛をされてもいいじゃない。プロレスファンにとっては、いまこそ、三沢にアカデミー賞であり国民栄誉賞ってことだもん。

【09年7月2日／都内の某喫茶店にて収録】

――玉ちゃんは、Webの日記で映画『レスラー』を絶賛してましたね。

玉袋　うん、あれはよかったよ。ラストシーンなんてまいったね。泣けたよな。あれ観たあと俺さ、自分の本棚からこれ引きずり出してきたから（と、本を鞄から取り出す）。

――『週刊ゴング』編集部が作った『レスラーベスト1000』（笑）。

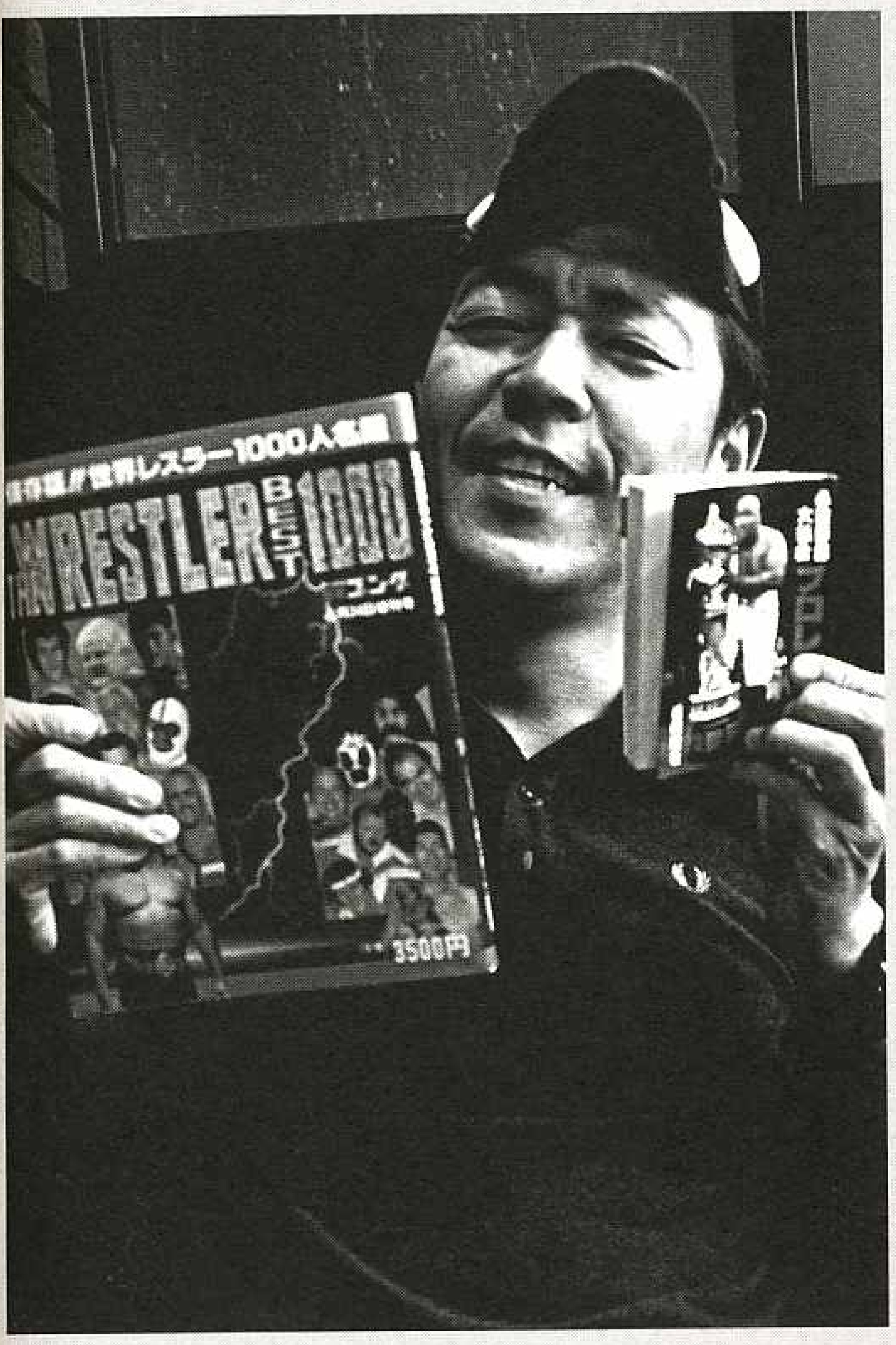
玉袋　あとはガキの頃に買った「豆だぬきの本」とか引きずり出して、昔のレスラー一人一人の写真を見ながら、自分なりにレスラーたちの物語を頭ん中で作ってたんだよ。

――ディック・マードックやアドリアン・アドニスなんかのリアルなストーリーを妄想してましたか（笑）。

玉袋　この『レスラーベスト1000』の中には、やっぱり1000通りの『レスラー』があるわけだからさ。たぶん、映画のミッキー・ロークより、もっとシビれるストーリーの人はいっぱいいたと思うんだよね。ガキの頃はそんなこともわからずに、ただプロレスを観ていたんだけど、『レスラー』を観たことで、プロレスラーに対する〝戻し〟がきた。あらためてプロレスラー稼業、プロレス渡世っていうのを考えさせられたよな。

――『レスラー』を観たことで、これまで観てきたプロレスやプロレスラーへの深みが増したというか。

玉袋　そうなんだよ。アントニオ猪木で『レスラーを』撮ったらどうなるんだろう、とかな。で、また三沢さんが亡くなったのが『レスラー』の公開初日とバッティングしてるところが、凄いものを感じたな。



玉袋筋太郎

芸人がお笑い終身刑
なのと同じで
レスラーもプロレス終身刑
なんだよな

お笑い界の映画好きとして知られ、男の生き様に一家言持つ玉ちゃん。今回はお笑い芸人の世界とプロレスの世界を、映画『レスラー』を通じて、たっぷりと語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ

――現在進行形の『レスラー』というか、映画以上に壮絶ですもんね。

玉袋　三沢さんは自分のレスラー人生を貫いたってことなんだろうな。ノアの選手たちが『レスラー』を観たらどう思うんだろうとか、ちょっとそこは考えるね。俺なんかも他人事じゃなかったよ。『レスラー』観て、プロレスラーの生活っていうのは、芸人に通じるもんがあると思ったから。江頭2：50なんてカクタス・ジャックとか、映画に出てきたネクロ・ブッチャーみたいなもんだろ。「おまえ、まだクレイジーバンプをとり続けるのか！」っていうね。あと、あの映画の中にプロレスのドレッシングルームのシーンがあるけど、あれなんて『お笑いウルトラクイズ』の楽屋とまったく一緒だよ。

――プロレスの控室は『お笑いウルトラクイズ』の楽屋に通じますか（笑）。

玉袋　だってよ、熱海の海にクレーンで吊られたバスごと沈められる「バス吊り下げアップダウンクイズ」をやる前の、みんなの「死ぬかもしれねえ、それでも行くぞ」っていう覚悟みてえなもんとかさ。あの雰囲気が一緒なんだよ。

――世間からナンセンスと思われることに命を懸けてしまう（笑）。

玉袋　あとはゴキブリホイホイで使う粘着でベタベタになったりしてさ、あれは粘着が全然落ちねえんだ。あれを落としてる芸人の姿がなんとも『レスラー』なんだよな。アゴ（勇）さんとかジミー（大西）ちゃんとかが、みんなでお互いの粘着を落としたりするわけよ。あれなんて、ドレッシングルームで血だらけのレスラー二人がいたわり合ってるシーンと一緒だもんな。もちろん『浅ヤン』の「江頭グランブルー」なんて、『レスラー』そのものだと思うしね。

――『レスラー』ラストシーンみたいですよね。

玉袋　「死んじゃうよ！」っていうことの連続だもん。『レスラー』ではミッキー・ロークがスーパーでバイトしてるシーンも良かったな。哀愁に満ちててよ。でも、レスラーも芸人もそういう姿は客には見せないというね。ゴージャスな格好してるヤツが電車で通ってちゃいけねえわけだから。そういうのも大事じゃない。レスラーは冬でも半袖、ウドちゃんは普段でもバカとかさ。ホント、プロレスと芸人、一緒なんだよな。『レスラー』の控室見て、ホントにそう思ったよ。

――和気あいあいとしながらも規律と緊張感があって。

玉袋　そうそう。『レスラー』では試合の打ち合わせをするシーンがあるけど、やっぱりお笑いもそうだからな。「じゃあ、たけし軍団がこうやって振るからダチョウ（倶楽部）は突っ走れ」って打ち合わせしたのに、そのお約束がわからなくて松村（邦洋）が出て殿（ビートたけし）に怒られたりね。

――そんなことが（笑）。

玉袋　あったんだよ。『お笑いウルトラクイズ』で、熱い鉄板の上でタップダンスするっていうやつがあるんだけど、鉄板は熱いはずなのに、あいつリアクション忘れちゃって

映画『レスラー』で観たプロレスの控室は『お笑いウルトラクイズ』の楽屋と一緒だったよ

さ。周りが「おい、リアクション！」って言ったら、思い出して「あちっ！」ってやりだして。殿が「バカヤロー！　ダチョウと軍団がやってきたことを、おまえは全部ぶち壊してるんだよ！」って怒ってさ。やっぱりプロレスと一緒で組み立てがちゃんとしてないとダメなんだよな。

——去年、熱湯コマーシャルで〝小島よしお事件〟とか問題になりましたよね（笑）。あれも熱湯のリアクション忘れて。

玉袋　ああいう失敗はレスラーとしてはやっちゃダメなんだよな。やっぱり芸人は信頼関係だからな。もちろんレスラーもそうだと思うし。芸人もプロレスラーも、〝リング上〟が私生活まで浸食されてるところが『レスラー』だなって思うんだよな。こういうさ、プロレスの舞台裏とか仕組みなんかを出すのはノアは嫌がると思うけど、ノアにだってホントはしびれる話があるわけだもんね。三沢光晴を描いた『レスラー』っていう映画ができたら、もの凄くいいストーリーになると思うよ。

——それは観たいですね！

玉袋　男の哀愁もあるし、悲しさもあるだろうし。それでも強さや誇り高さなんかもあってさ。最高だと思うよ。レスラーの人生っていうのは、薄っぺらじゃねえよな。だからミスター高橋さんなんかは、プロレスの仕組みだけを書いちゃったけど、そうじゃなくて、『レスラー』みたいにリアルな人生、背負ってるものを描いてくれたら、プロレスというジャンル、そしてレスラーというものをあらためてリスペクトするきっかけになると思うよ。

——「プロレスは強い！」とか「八百長じゃない！」とか連呼するより、『レスラー』一本見せたほうが、よっぽど一般の人にプロレスラーの凄さは伝わりますよね。

玉袋　伝わる！

——打ち合わせがどうのこうのなんて、そんなたいしたことじゃないし。

玉袋　たいしたことじゃねえよ！　それはお客のためにやってることなんだから。寄席の楽屋だってそうだよ。「今日どうする？」ってさ、「あの人がこの話やったから、俺はちょっと外すわ」ってあるんだよね、ネタ帳が。そうやってかぶらなくしたりね。隠語なんかもあって、やっぱり通じてる部分があるんだよ。プロレスラーを辞められない人が多いけど、俺たちもいつまで芸人を続けるんだっていったらさ、辞められねえんだもん。潰し利かねえから。芸人終身刑とはよく言ったもんで、お笑い終身刑だから。逃げ出せねえ、手足に鉄球ついてる状態だよ。でもそうじゃないとやれないんだよな。

——プロレスラーもそうなんでしょうね。

玉袋　だろうな。レスラー終身刑だよ。たとえ終身刑から逃れようとしても、スーパーの惣菜売り場で働いてるところをファンに見つかったりしちゃうんだから、指名手配犯だよ。一生、プロレスがついて回るんだよ。

——芸名も一生、玉袋筋太郎ですしね（笑）。

玉袋　一生こんなリングネームだぜ。高崎山猿吉の気持ちがわかるよ、俺は（笑）。でも、芸人もレスラーもそうやって背負って生きていくことで、哀愁や味が出てくるからな。そういった人がもっと増えてくればいいけどね。いま芸人の世界でもさ、パッと出ちゃってるヤツが多いけど、味があるヤツもいるよ。U字工事が叩き上げで育てば嬉しいし、ナイツなんかは寄席というリングで、お笑い終身刑をまっとうしようとしてるしな。

——レスラーとか芸人が背中に貼り付くとシビれるわけですよね。

玉袋　しびれるよな。上島竜平さんなんかいいレスラーだし、うちの殿なんて最高のレスラーだよ。だから、今回の映画『レスラー』なんて、俺の生涯観てきた映画でベスト10に入ると思うけど、やっぱ40歳すぎて、芸人キャリア20年をすぎて観たってところで、また味わいが違うっていうのもあるんだろうな。いろいろ消えてった芸人とかさ、ダメになっちゃった芸人とか見てきたから。死んじゃった諸先輩方もいるしね。たとえば、ウガンダさんなんかは、カレーを〝飲む〟ことがクレイジーバンプだったわけだから。

——身体が悪くても、やっぱりカレーを出されたら飲まなきゃならない。

玉袋　そう。飲まなきゃダメなんだよ。あの歳でもまだ脱ぐのか、井手らっきょっていうのもいるしね。

——何年選手なんだ、と（笑）。

玉袋　まだそのフィニッシュホールドを出すのか、と。それでもやるか、たけし軍団というね。あれはいいなあ。だから一時は軍団の兄さん方のそういうお仕事とかも、「違う」とか思った瞬間があったんだけど、『レスラー』を観たら、「やっぱりあれがいいんだ」って思い直したよ。バカバカしいことをやり続けるっていうのは、いいんだっていう。

——『レスラー』を観て、あらためて〝原点〟の素晴らしさを再確認しましたか（笑）。

玉袋　だってよ（『レスラーベスト1000』をパラパラめくりながら）、このケンドー・ナガサキさんの写真なんて、普通の人が見たら「バカだなあ」と思うぜ。なんでこんなことしてるんだって。

——ダハハハ！　頭剃って顔にペイントして剣道着姿で、アメリカまで行って何をやってるんだって（笑）。

玉袋　わけわかんねえよな。でも、いいよな。みんな昔のレスラーはピッカピカに光ってるよ。

——この姿で、世界中を旅してリングに上がってるわけですからね。

玉袋　凄いよね！　寅さんの要素まで入ってるんだよ。凄い世界だよ、プロレスって。四角いジャングルだよ、ホントに。

——映画をきっかけにしてプロレスラーっていう人種を知れば知るほど愛しくなる感じは出てきますよね。

玉袋　そうなんだよ。だからいま、プロレス観戦からちょっと離れた自分を責めてるよ、俺は。『レスラー』によって、また新しい見方が見つかったよな。それまでに何十年かかってんだって話だけどな。

——子どもの頃から見続けてるわけですね。

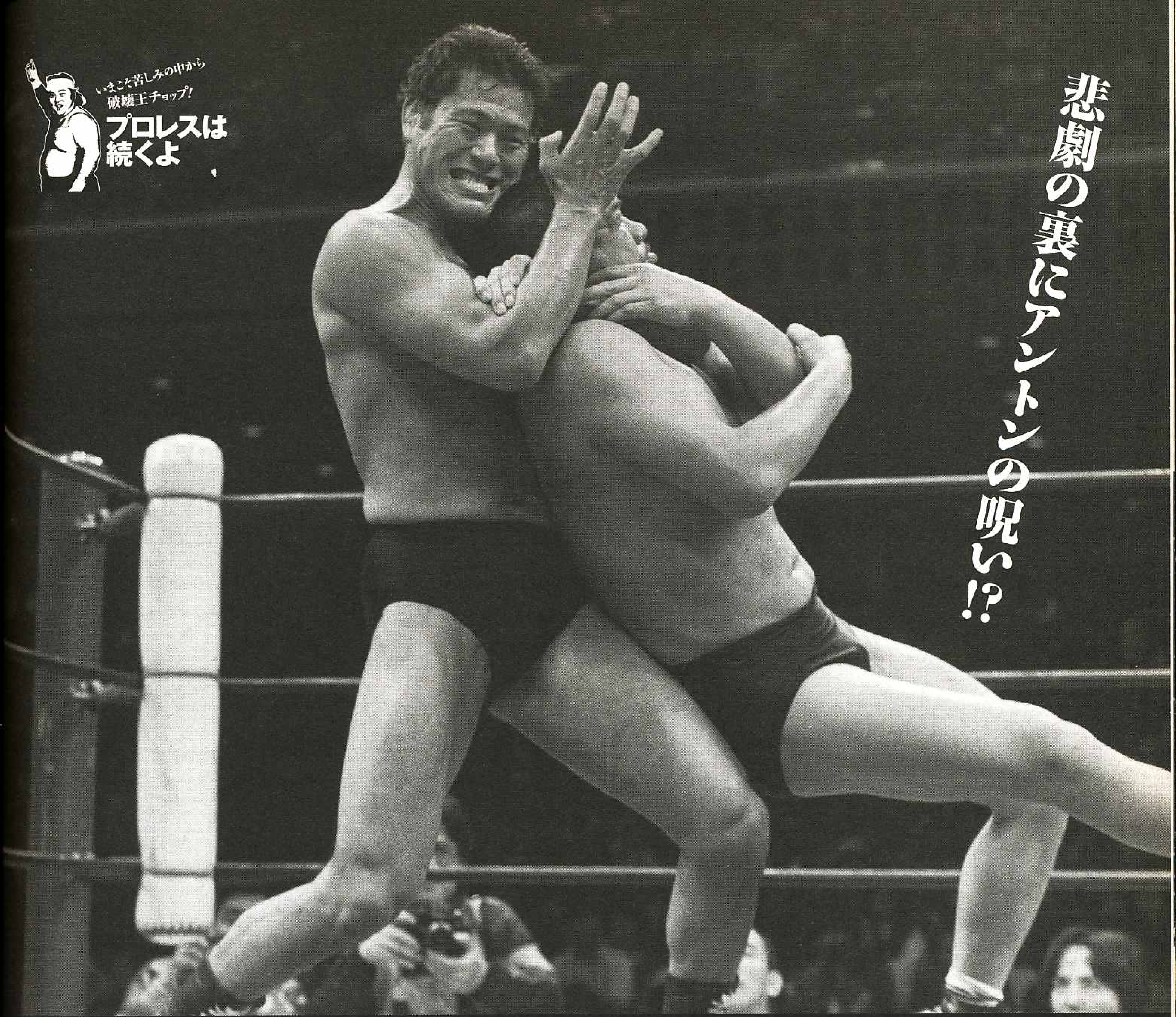
玉袋　「豆たぬきの本」なんて、40歳すぎてから引っぱり出してきてよ。これ初版いつだよ？　昭和55年だぜ！　これを捨ててねえんだから。捨ててたまるかってんだよ。

——ある意味、自分の原点であり、このときの気持ちは忘れてませんもんね。

玉袋　忘れるわけねえよ。こういう本を読んでワクワクしてた少年が、いま歳を重ねて『レスラー』を観るっていうね。プロレスって長い読みものだよな。永遠に終わらない連続ドラマだよ。ありがたいジャンルだって、あらためて思ったよな。

【09年7月2日／都内の某喫茶店にて収録】

いまこそ苦しみの中から
破壊王チョップ！
プロレスは続くよ



悲劇の裏にアントンの呪い⁉

「三沢の死の引き金は猪木にある」

文筆家であり、音楽家

菊地成孔

三沢さんとは同世代にあたる本誌論客の菊地氏。
毎回鋭い論説を展開している稀代のクリエイターは、
今回の訃報をいったいどのように見たのか？
そこには三沢さんと最も相容れない存在とされる
"燃える闘魂"の影が……⁉

聞き手／ジャン斉藤

——菊地さんは今回の三沢さんの訃
の力を試合で出してるかどうかはま
こと自体がそのまま説得力になるわ
ですか⁉
王プロレスのルーツは天龍革命の試

天龍革命からノアに続く流れは ある種〝過労死プロレス〟というか

——菊地さんは今回の三沢さんの訃報をどのように受けとめましたか？

菊地　まず、ワタシはアスリートじゃないしスポーツ経験もほとんどないので、選手の健康管理に関してはほぼ知識がないんですね。それを前提にさせてください。

——了解しました。

菊地　たとえばボクシングだと、頭部にダメージが溜まるとパンチドランカーになるとか、試合で選手がどのくらい亡くなってるとか、競技としての危険性が我々素人でもそれなりの尺度で実測しやすいと思うんですよ。

——確かにダメージがわかりやすい部分はありますね。

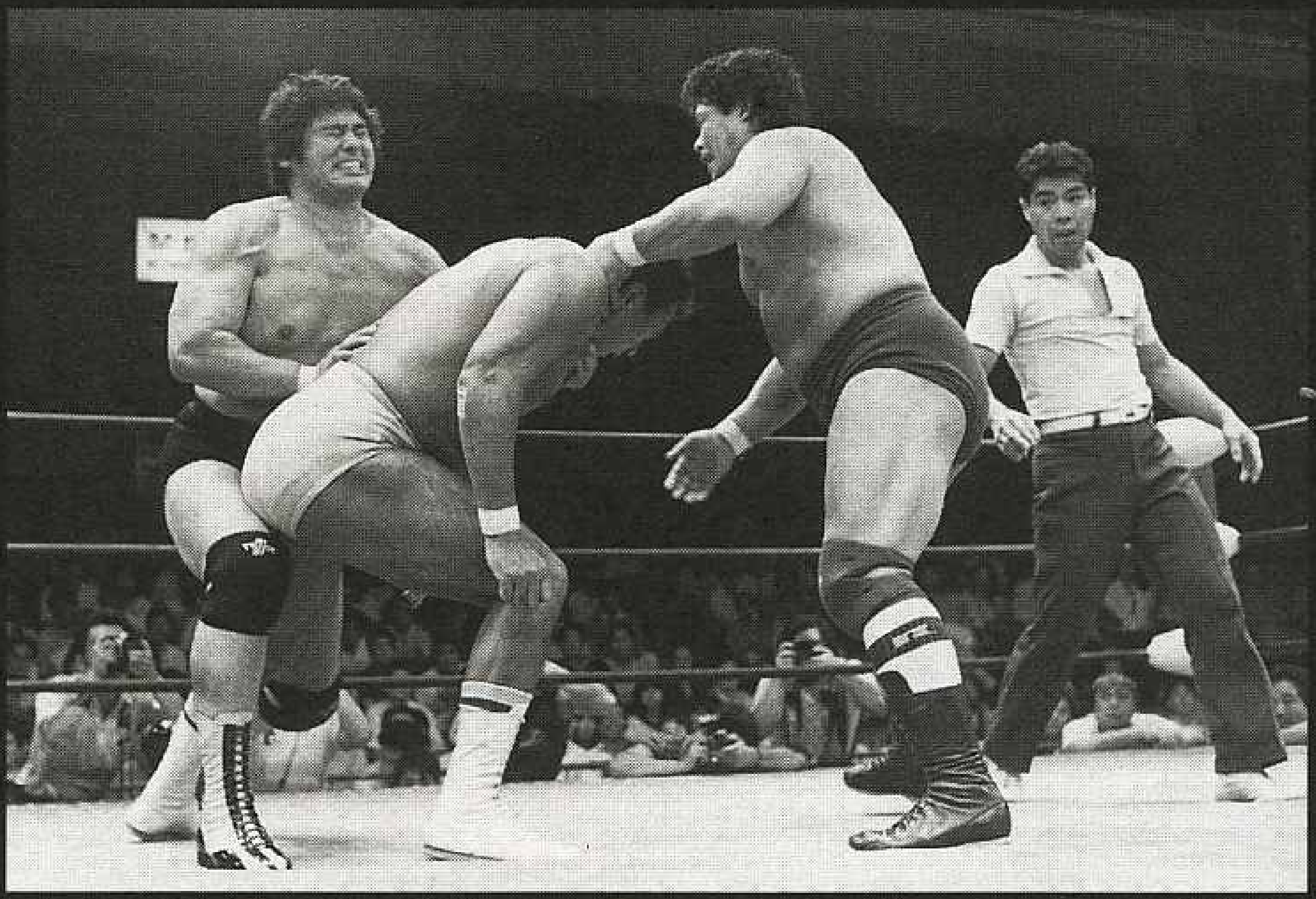
菊地　それに対してプロレスのダメージの蓄積量は、メタレベル、つまり空想になるしかない。パイルドライバーを全然痛くないと思ってる人もいれば、とてつもないダメージがあると計測してる人もいて、要するに個人によって認識はバラバラになるわけです。

——バラエティ番組などでスポーツ選手のパンチ力を計測する企画があって、プロレスラーはけっこう上のほうにランクされますけど、それはダメージの〝証拠〟にはなりえないですよね

菊地　確かにレスラーの身体で体重を乗せてパンチしたら、そりゃ数値は出ますよね（笑）。でも、実際にその力を試合で出してるかどうかはまた別の話だというところが、プロレスの奥深いところであって、本気でやったら殺せちゃうような力を持ってる人間が殺さないようにやってるジャンルがプロレスであり、格闘技とはまったくベクトルは逆なわけですよね。その技の威力を空想でしか実測できないところが、複雑な構造を持つプロレスの凄みであると同時に、「実際のダメージ」はプロレスの中でもトップ級の謎なんじゃないかな、と。

——たとえば三沢さんで言えば、相手の顔や身体に腫れができないエルボーはどこまで痛いのかという部分ですね。

菊地　でも、一般の田舎のお婆さんが生まれて初めて三沢さんのエルボーで相手の顔が歪んでるのを観たら、死んでしまうんじゃないかくらいに感じると思いますよ。あるときから〝説得力〟という言葉がプロレスを批評するうえで出てきた。この言葉は含蓄がある。リアルスポーツにとって、競技を見せること自体がそのまま説得力になるわけですが、プロレスは説得力を自主的に作り上げたり、観るほうが空想して見立てたりする。アートですよね。5キロの加重を10キロに見せながら、実際には2キロで処理するヒロ斉藤はうまいとか（笑）。ボクシングは呂律が回らないとか、網膜剥離とか、言ってみればストレートです。



天龍同盟は「地方大会でも決して手を抜かない」をテーマに、その激しく熱いファイトでファンの共感を集めた。天龍が輪島大士の顔面をリングシューズで容赦なく蹴る姿を見て、前田日明が衝撃を受けたのは有名な話。

——そうして観る側もボクシングは危ないんだと認識する、と。

菊地　これはあまり一般的には知られてないかも知れませんが、プロのクラシックバレリーナは引退する頃にはその多くが車イス生活なんですよ。

——あ、そんなにハードな世界なんですか!?

菊地　あのジャンプは非常に負荷がかかるんです。だから、引退したバレエダンサーが車イスで表に出ればわかる話なんですが、美に準ずる人たちだからその姿を見せることをよしとしない。よく、舞台のエンディングの挨拶でバレエの大先生だけがイスに座ってる光景を見かけることがあると思うんですが、あれは立てないっていう理由があるんですよね。

——そのくらいの覚悟をもってやってるわけですねぇ……。

菊地　そこはボクサーと同じですよね。「壊れてもかまうものか」っていう。世の中には食べれば食べるほど身体にいい食べ物や、やればやるほど身体にいい踊りがあれば、その逆もたくさんあるわけです。ジャンクフードも食べ続ければ身体を壊すということがわかってても食べる。ピアノにしろ、クラシックの演奏をやり続けていれば必ず身体を壊しますし。だいたいヨーロッパが起源とされるものは続けると身体によくないんですよ。キリストに対する愛情だけに磨きがかかり、身体は壊れる。信仰なしでやると、あまりに利回りが悪いです（笑）。プロレスはまあ、バレエやクラシック音楽とはあまりに違うけれども「アマレスとボクシングからできた芸能」と無理に考えれば、ヨーロッパ起源と言えなくもない（笑）。

——なるほど（笑）。

菊地　そもそもワタシがプロレスに対して「これでいいのかな？」というある種の危機感を抱き始めたのは、天龍革命からなんです。

——そういう声は多いですね。四天王プロレスのルーツは天龍革命の試合だっていう。

菊地　「あ、これ、ひょっとして、プロレスの説得力に、初めてボクシング型の説得力が加味されたかもしれない。いまはみんな元気だけど、これを何十年も続けた結果まで見せるんだろうな」と。全日本からノアへと続く流れも、それは止まらなかった。言葉を選ばざるをえませんが、ある種〝過労死プロレス〟というか。

——過労死プロレス！

菊地　単純にヘビーウェート、ハードヒットというのは第一にその場の説得力がありますが、もう昔みたいに60までプロレスやってもピンピンしてて「勲章は額の傷とヒザが壊れてるだけだ」みたいなことは無理だし、それではいかん、と。何十年後に、第二の厳しい〝説得力〟が……だから三沢選手の訃報を聞いたときは、「とうとうこの日が来たか……」って思いましたね。そういう意味で非常に重かったですよ。世間ではたとえば、ガン告知された歌手が治療よりもツアーを選んで死んだといったことがあったときに、引き延ばされた覚悟の自殺とか、殉死とかいろんな言い方をしますが、三沢選手もこうした言葉に忠実なケースになったと思いますね。

——これ以上にない説得力ですよね。

菊地　僕はそれと逆の説得力、というか、要するに古典的な純プロレス側の説得力としてレガースがあったと思うんです。UWFがレガースを着けたキックこそ本物で、アマレスシューズを履いたレスラーのキックは偽物という記号を作ったじゃない

ですか？　あれこそ見事にプロレス的なギミックというか（笑）。

――ホントは逆ですからね（笑）。

菊地　いい意味でのペテンであって、プロレスの癒しの側面ですよね。これが最新だったんじゃないかなあ。あちゃんとしたギミックの。

――こっちも安心して観られるというか。

菊地　でも、ギミックではないほうのリアルな説得力は悲壮で、観る側としては感動もするけれど痛ましさもあるわけですね。痛ましさは凄い魅力だけれども。そもそも「生き急ぎ」とか言って、ロックンロールみたいにバーっと暴れて若くして死ぬという美学がありますが、あれとも違うんだもん。何十年もかけるのよ。「ロックンロールからブルースへ」ですよね。そもそも天龍革命までの全日の選手は、新日の選手よりも長生きすると思われていた。

――新日は"過激なプロレス"と称されてましたね。

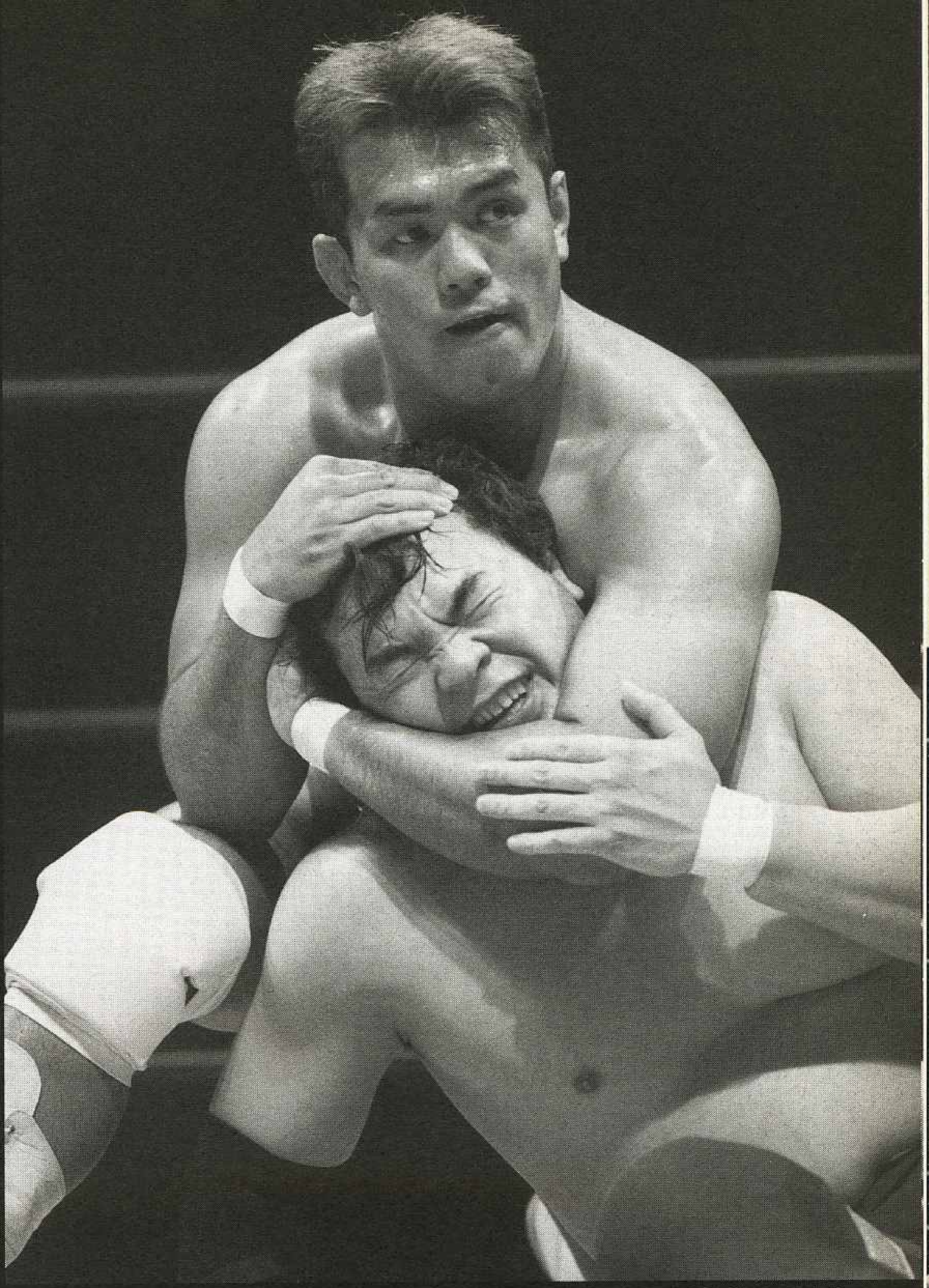
菊地　いみじくも猪木さんが「10年もつ選手生活が1年で終わってしまうかもしれない」って言いましたけど、あの言葉自体が"過労死プロレス"の定義そのものよね。1年でもたなくなるということは、まあ「オレはロックンローラーだ」と。でも、猪木さんはいまでもお元気で（笑）。

――「元気ですかーっ！」（笑）。

菊地　だからロマンチックな見方をすると、猪木という優秀な悪魔みたいなものが言葉を吐いたが、悪魔だから責任は取らない。全日〜ノアという天使が、その言葉を地上に放っておいてはいけないとばかりにつかんだというイメージがあります。

――猪木さんの発言によって、無意識に全日側がスイッチを入れてしまったというか。

菊地　あの頃、猪木さんは"過激なプロレス"をやっていると言われ、片や全日ではジャンボ鶴田が休憩しながらプロレスをやってると言われていた。ある意味それは正しかったけれ



キャリアとともにファイトスタイルを動きの少ないものに変えていくレスラーが多い中で、たとえお腹のたるみを指摘されようとも最後まで四天王プロレスを全うした三沢さん。苦痛にまみれた表情で悲壮感を漂わせながら闘う姿に、ファンはさまざまな思いを馳せたものだ。

猪木という優秀な悪魔の言葉をノアという天使がつかんでしまった

ども、猪木さんの「過激」は試合の中の加重キログラム数ではなかった。肉体的なダメージでは、どっちもどっちだったわけです。天龍革命というのは、猪木という悪魔の言葉を浄化するかたちで、真っ正直に受け継いだと思いますね。

――天龍革命の試合は観ていて痛かったですよね。「これはホントに入れてるんじゃないか？」とか。

菊地　それでも、その入れてるかどうかはやっぱりわからない。「でも、巡業やってるんだし、見せるテクが上がっただけじゃないか？」とかね。キリがない。奥深いですよ。

――いろいろと観る側に想像させるわけですね。

菊地　昔は力道山のチョップで『朝日新聞』が本気になってたんですから。ひょっとしたら初期のK―1のアーネスト・ホーストのKO劇だって、20年後に観たら笑ってしまうかもしれない、というような想像と同じですよね。そういうことを考えるのもプロレスの喜びであって。最近はプロレスを毎週テレビでチェックするほど刮目してはいないのでイメージになってしまうんですけど、昭和のレスラーは「プロレスはこういう仕事なんだ」ということを意識して、相当な負い目と誇りが混ざった、深いアンビバレンスが内面にあったと思うんですよ。そこに我々も魅せられていたわけです。でも、最近のレスラーは同じことをやっていても、もっとデジタルな感じがしてならないんですよね。見せてるダメージと本当のダメージが違うという複雑なことをやってるにもかかわらず、そのアンビバレンスに対して耐性ができたのか、若いレスラーは割りきってやってるイメージがありますね。

――若いレスラーにはプロレスに対するコンプレックスは感じられないかもしれないですね。

菊地　だから単純に、いまの若いレスラーが過労死的に亡くなってしまうことはあまり想像できません。ワタシは昔のレスラーはこのアンビバレンスを背負って非常に大変だったと思うんです。それがレスラーの本懐であり、魅力の源泉だった。「カムアウトはアンビバレンスの苦しみを消したけど、アンビバレンスの魅力は消した」ということですよね。いずれにせよ、猪木起源ですね。ミスター高橋本と猪木さんの「このままだと10年もつ身体が〜」発言は、一直線につながっています。

――はぁ〜、行き着くところが猪木さんだったとは。

菊地　それまでにも猪木さんは人の心を折ることで自殺に追いやったとか、使い物にならなくしてきたとか、廃人にしたとか悪魔的な行ないをしてきて、それが高橋本や今回の三沢さんの件まで一直線につながってるような気がするんですよね。

――確かにこれまでにも佐山聡や前
からでしょうけど、殉死をきっちり
座で悪役ファミリーみたいな試合で
れない。でも違いますよね。これまた
彰俊選手も本来はそれでいくべきな

三沢さんがリング上で亡くなったのは パラダイムシフトになるかもしれない

——確かにこれまでにも佐山聡や前田日明にしろ、猪木さんの言葉によって惑わされた人は少なくないですね。

菊地　全日が過労死プロレス化して、最近で言えばまず小橋建太が腎臓を壊した。それが過労とどのくらい関係あるかはわからないですけど、一人の人間の身体のことだから無関係とは言えないでしょう。その前には高山善廣の脳梗塞もあってホップ、ステップ、ジャンプといった感じで、今回の三沢さんの件がこれ以上にない説得力を持ったというか。彼らは身を挺するということの崇高さを実行した人たちですよね。先ほど、最近の若い選手はアンビバレンスに対して割りきって見えるということを言いましたが、世代的にいえばちょうど三沢選手のところが境だと思うんですよ。ワタシも同世代なんですけど、猪木さんのあの発言を中学生くらいで聞いた年代というか。三沢選手って、あるときからずっとつらい顔してるんですよね。楽にやってる感じがまったくない。ここ何年も試合中にいつも首を振ってましたし。

——今回も試合を観た人はゴング前から様子がおかしかったとは言ってますね。

菊地　三沢さんの死があまりにも人の心に迫ってくるのは稀代の名選手であったとか、これからノアはどうなるのかとかいろいろな事情があるからでしょうけど、殉死をきっちり見せたからですよね。人は誰だって死ぬまでの時限爆弾を抱えているわけだし、拡大解釈すれば、人の死はすべて過労死であると言えます。それをたった46年間で象徴的に見せた。これが本当の愚直なまでの「過激なプロレス」ですよ。あれが他団体のレスラーが事故で亡くなったということであれば、「プロレスは受け身を取り損ねたらおっかないんだな」とかいうかたちで終わってたと思うんですよ。

——それはアクシデントだったということですね。

菊地　一種の突然死というか。まあ事故死ですよね。三沢選手の死も、「事故死」と捉える人はいると思うんですが、あきらかに違った。プロレスは痛みという説得力を我々の空想の中で補完するしかない複雑なジャンルですよね。ほかの競技と比べてもう一個係数が多いだけで、まったく別物になる。三沢選手の殉死は殉死が持つ美しさがあります。しかし、猪木さんの発言がパンドラの箱を開けたと思うと、業の深いジャンルだなあと思いますね。

きくち・なるよし■1963年6月14日生まれ。音楽家、文筆家。ジャズミュージシャンとして活動する一方、音楽、映画、料理、ファッションなどの著作多数。『kamipro』の論客としても知られ、谷川貞治FEG代表のキャッチフレーズ"谷川黒魔術"の産みの親でもある。格闘技批評に『サイコロジカル・ボディ・ブルース解凍』（白夜ライブラリー）。

菊地成孔

——しかし、普通は40を超えると前座で悪役ファミリーみたいな試合でお茶を濁すものだと思うんですけど、46歳にしてメインで30分も闘うのはきついだろうなっていうのはありますよね。

菊地　台所事情がそれを許さなかった、という捉え方もあると思うんですが、あきらかにそれを超えてますよね。過労というのは、メンタル面もシンクロしたときがヤバいですよね。一線を越えたら必ずシンクロするんだけど。

——すべてをプロレスに捧げたというか。

菊地　ワタシはミスター高橋本はけっこうな転換にはなったと思うんだけど、さっき言ったようにアンビバレンスという葛藤は消えればそれでいいということではないし、ほとぼりが冷めたら本をリングで引き裂いて試合をし、元のプロレスに戻れる道も残っているという意味において、さほどの爆弾だと思いません。三沢選手の死は一見、高橋本に対するストレートな反論、つまり「プロレスは八百長ではなく、ガチなんだ」というメッセージに解釈されやすいかもしれない。でも違いますよね。これまたさっきも言ったように、猪木さんが開けたパンドラの箱の中身という意味では一緒です。三沢選手がリング上で亡くなったということは、ですから業界全体のパラダイムシフトになるかもしれない。

——いままでに試合で亡くなった人については「プロレスは本当は危ないんだよ」というファンタジーになってた部分があると思うんですけど、三沢選手の場合はそれだけでは捉えられないというか。

菊地　たとえば馬場さんやジャンボ鶴田さんが亡くなったことに関しては、何か深い謎があるわけよ。味は濃いけど、個人の人生としてまとめることができる。三沢選手の死はストレートで解明性が高い。ジャンル全体に投げかけられちゃってますから、なんらかのかたちでマット界のみんなが反応していくんじゃないかと思いますね。その反応を刮目して見ていくしかないですよね。

——専門誌を見るかぎり、いまはみんな口が重たいですね。齋藤彰俊はキャラとして「死神」をモチーフにしていて、最後のバックドロップは「死神バックドロップ」という技なんですが、今後それは表だって言えないかもしれませんね。

菊地　古典的っていうか、村松友視さん的に言ったら、本当はそれを売りにしていかないといけないんですけどね。プロレスはユーコン・エリックの耳削ぎニードロップやキラー・カーンのアルバトロス殺法にしろ、そういうアクシデントをリング上に持ち込んできたジャンルというか。彰俊選手も本来はそれでいくべきなんだけど、いまの世の中じゃ無理ですよね。

——こうして話すのもギリギリというか、「不謹慎だ」と本当に怒る人もいるでしょうし。

菊地　いまは彰俊選手も必死だと思いますけど、PTSD（心的外傷後ストレス障害）も含めた、今後の彼の心の中に起きることについてはちゃんとケアしてあげたほうがいい気はします。ケアなく、自分で乗り越えるのが一番いいですけど。繰り返しになりますが、今回の件の一番の特徴は短いスパンじゃないんだということですね。ゆっくりゆっくり長い時間をかけて、過労死プロレスの答えが20年後に出てしまった。

——しかもそういうプロレスは浸透してしまっていて。

菊地　もう後戻りはできないでしょうね。急性のものならなんとかできたでしょうけど、そもそも総合格闘技の誕生も猪木さんが開けたパンドラの箱の中身という見方をすれば、かなり根の深い慢性的なものです。多くの方が言葉を失なうというのはショックもありますが、事態に対して自分の立場を表明できないということですよね。もしもジャンルを守りたかったら、とてつもないヒールが出てきて「あいつは最後の最後に受け身に失敗した。しくじりやがって、ヘタクソが」と言うしかないです。文字どおりこれは、命懸けに対する命懸けの回答であって、おおいなる尊敬に値します。

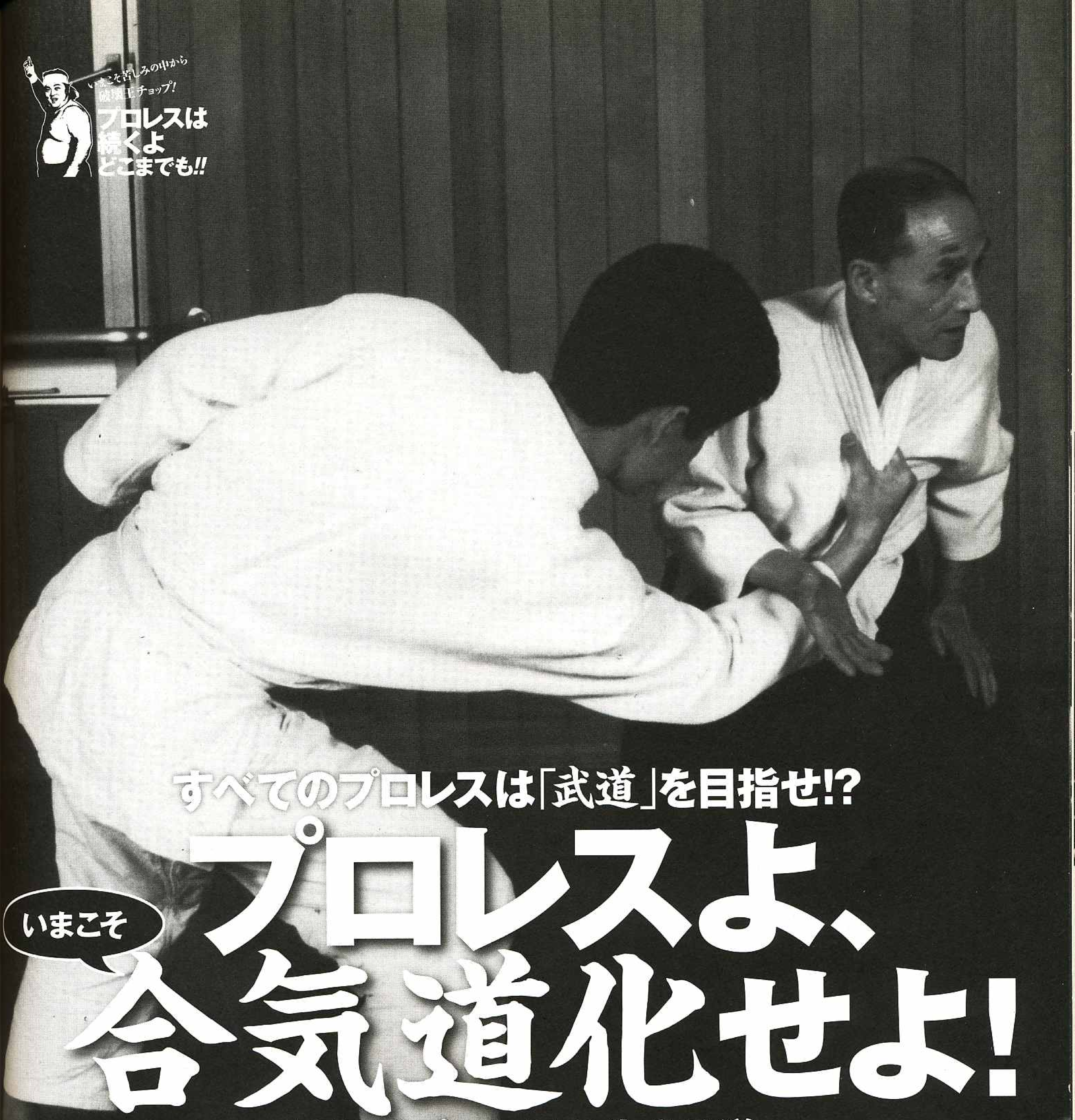
【09年7月1日／都内・菊地氏の事務所にて収録】

大槻　前号の「お金特集」は素晴らしかっ

飲み屋みたいなところにいたんだけどさ、

も、最後はあんな結末になって……。

い技を?」と思いながら観てたんですよ。



すべてのプロレスは「武道」を目指せ!?

プロレスよ、いまこそ合気道化せよ!

—これがプロレスの生きる道—

迷える"プロレスファン"

大槻ケンヂ

ミスター高橋本以降、迷える"プロレスファン"としてプロレスを観てきた大槻ケンヂは、三沢光晴さんの事件をどう受け止めたのか。そしてこの事件を受けてプロレスが向かうべき道を導き出してもらった。オーケンが提唱する「合気道プロレス」とはいったい?

聞き手／ジャン斉藤　撮影／タイコウクニヨシ

大槻　前号の「お金特集」は素晴らしかったですね！

——ありがとうございます！

大槻　いやあ、ホントに興味深かったなあ。まさか三宅綾があんな人生を送っていたとは……。あれはミュージシャン版「お金特集」もやりたいぐらいですよ！

——あ、それはおもしろそうです。

大槻　バイトしながら音楽やってる30～40代はかなり多いですからね。しかしさ、レスラーも格闘家も副業当然の時代なんですねぇ。

——かつてのレスラーは身体を張ってでもそれに見合った収入があったわけですけど、いまはちょっと厳しい時代ですね。大槻さんのようにプロレスファンを卒業する人はいるけど、なかなか新入生が入ってきませんし。

大槻　ちょっとちょっと！『ｋａｍｉｐｒｏ』でのオレの肩書きが「元・プロレスファン」になってるみたいなんだけどさあ、ぶっちゃけいまも新日とか必ず録画して観てるんだよ。いまでもちゃんとプロレスファンです！

——では、現役プロレスファンから見ていかがしょう、いまのプロレスは。

大槻　凄くのどかだなあって（ポツリと）。

——どんな印象ですか（笑）。

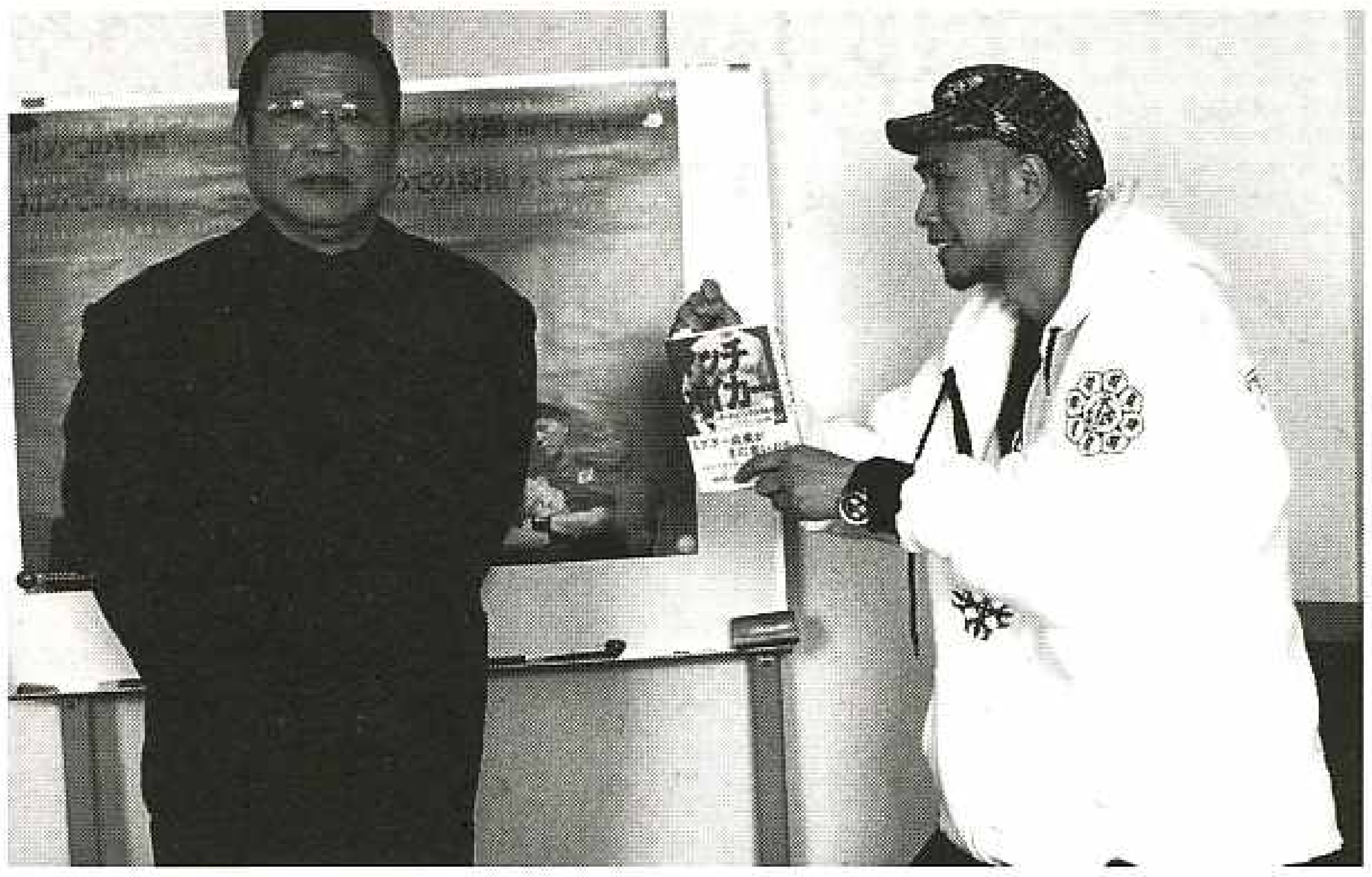
大槻　プロレスは昭和で癒される。このあいだも中西学が棚橋（弘至）をアルゼンチンバックブリーカーでかなり長いこと担ぎ上げてね。なんだかそれを見てると、倉敷の美観地区を歩くような癒され方だったもんね。だから、そういう三丁目の夕陽的な感じで観てます！

——どういう意味なんだ（笑）。

大槻　でも、やっぱり三沢さんの死はショックでしたね。ちょうど大阪のプロレス飲み屋みたいなところにいたんだけどさ、そこで橋本vs武藤の試合が流れてたんですよ。それを観ながら「ああ、橋本も死んじゃったなあ……」みたいな話をしてた矢先でしたよ。

——そんな場所で第一報を聞きましたか。

大槻　正直、どう思っていいかわからなかったですねぇ。しかもバックドロップをかけた相手が齋藤彰俊だって聞いて「これから齋藤彰俊はどうするんだろう？」と考えちゃって。『ｋａｍｉｐｒｏ』でも話題の『レスラー』で、ランディ（ミッキー・ローク）と最後に闘った中古車屋のオッサンのことまで気になりましたよ。



ミスター高橋本以降、プロレスと距離を置いていたという大槻ケンヂ。そんなオーケンはいまなおプロレスの見方について「ファンは何を楽しんでるの？」と、さまよっているのだ……。

——あの中古車屋のオッサンは、かつて一世を風靡した悪役レスラーで、いまは引退して事業家になってるんですよね。

大槻　そうそう。あの気のいい中古車屋のオッサンが10年ぶりにランディとメモリアルマッチをやるじゃないですか。で

年齢を重ねたらあのスタイルは厳しい。やっぱりそこは馬場さんを目指せばよかった

も、最後はあんな結末になって……。

——いくら映画のこととはいえ残酷ですね、よく考えると。

大槻　ランディはいいよ、それが本望なんだから。でも、あのオッサンにそんなつもりないでしょ！

——中古車屋の経営だってあるし。

大槻　そうだよ！　かつて同僚だったレスラーに車を売る約束もしてたけど、それもどうなったことか。だから、あのオッサンのその後というのを凄く考えるようになったよね。それと三沢さんの件とはケースが違うけど、これから齋藤選手だってたいへんですよ。そもそも齋藤彰俊はノアに拾われたところもあるでしょ。

——三沢さんの勧めもあってノア所属になったそうですね。親分肌の三沢さんらしいというか。

大槻　でね、じつはオレ、一度だけ三沢さんに会ったことがあるんですよね。三沢がまだ全日にいたときだけど、年末に鍋を食べるというテレビの収録があったんですよ。田上や川田もいたかなあ。そのときに若いヤツに「オメエも飲め」みたいなちょっとした〝かわいがり〟が始まろうとしてたんですよ。見ていてぜんぜんオッケーな範囲だと思ったんだけど、ところが三沢さんがね、「やめておけ」ってボソっと言うんです。「こういうのは親御さんが見てるから、この場では楽しいかもしれないけど、親御さんがかわいそうじゃないか」ってパッとやめさせたんですよ。それを見たときに「あ、この人は絶対に上に立つべき人だな」って思いましたね。

——それも三沢さんらしいですね。

大槻　オレ、新日、ＵＷＦ、ＦＭＷが好きだったから、全日って「リアルでもデスマッチでもないのにどうしてそこまで危ない技を？」と思いながら観てたんですよ。

——どんどんエスカレートしているような印象がありました。

大槻　若い頃はいいんですよ。でも、年齢を重ねたら厳しいスタイルだよね。やっぱりそこは馬場さんを目指せばよかったのかなあ。

——馬場さん？

大槻　だって、かつては32文砲とかやってた人ですよ。あの馬場さんが！

——あの巨体で宙を飛んでいたんですよねぇ。

大槻　でもそれができないとわかってから、馬場さんはだんだんと達人系にいったじゃないですか。あの姿こそね、ボクが理想とする合気道プロレスなんですよぉ！

——合気道プロレス！　単行本『八百長★野郎』でプロレスの見方として大槻さんが提唱されたスタイルですね。

大槻　ええ。要するに、馬場さんのように達人になればなるほど、自分が動かずとも相手が自ら飛んでくれる、と。あれは一種の合気道なんだよね。そういう意味では馬場さんは「気」を使ってたんでしょう！

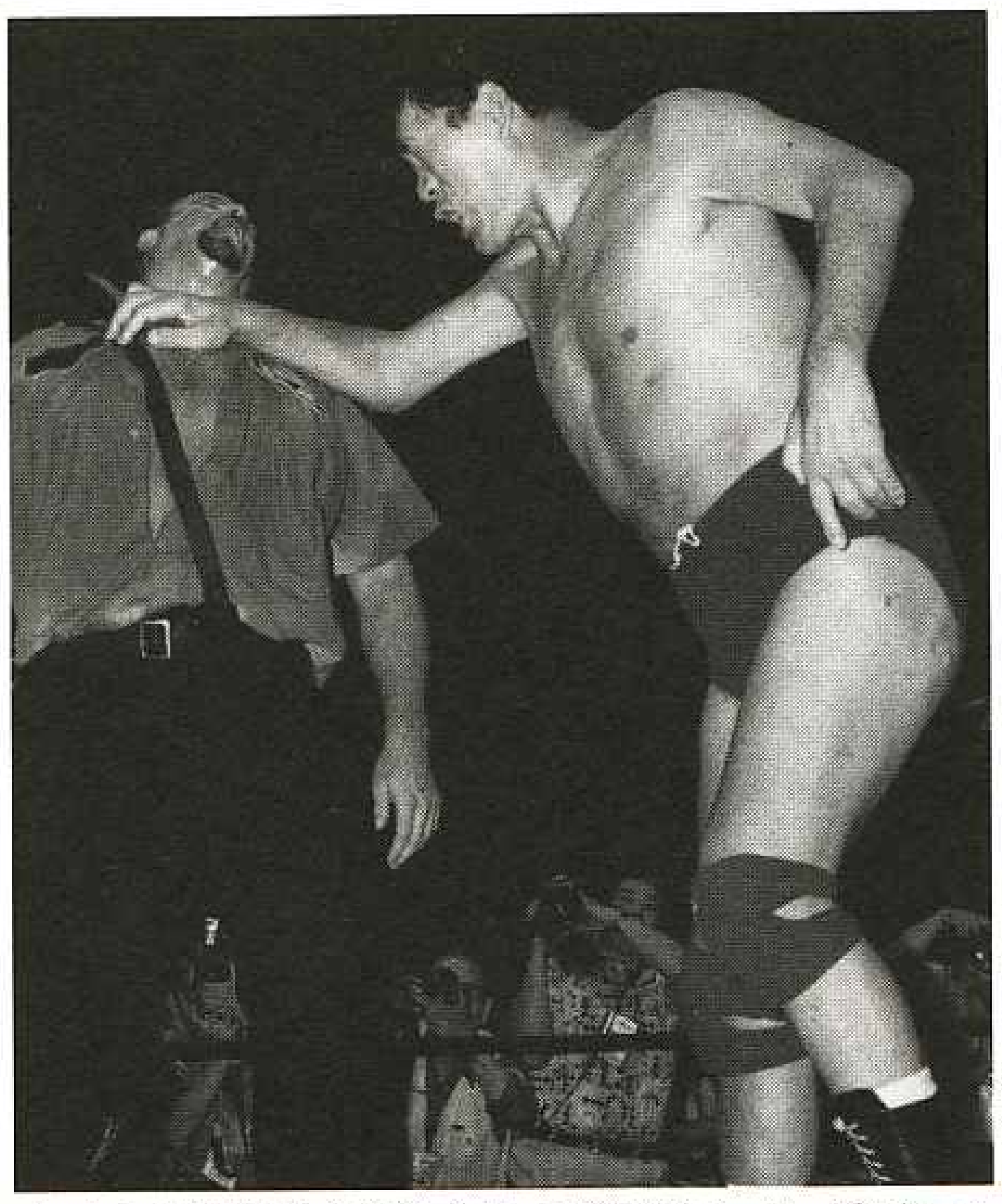
——馬場さんは「気」の使い手だった!!

大槻　というより、「気」的な状態が使えて見えるような風格があったってことです。だから身体が動かなくなったら、ほかのレスラーも合気道化すべきなんです。神秘系な達人になっていけばよかったの。でも、できないんですよね。だって「若い頃キツいことやってきたオレが、なんであんな動きをしないといけないんだ」というプライドがあるから。

——馬場さんが合気道に切り替えられたのはどうしてなんですかね。

大槻　やっぱり言ってしまえば容姿がフリーク的だったからだと思いますよ。もとも

と神秘系と思われてるって自覚があった。
——確かに馬場さんはもう歩くだけで銭が取れますよね。
大槻　だから、馬場さんはなんだかんだ言って自分がフリークとして見られることに対して腹をくくってたんですよ。それによって合気道プロレスができたんですよ。やはりね、オレの提唱を実現するためにここはもう一度『kamipro』でも合気道プロレスの説明をしといたほうがいいんじゃないですか？
——ぜひお願いします。
大槻　えー、そもそも合気道というのはですね、武田惣角が……。
——あ、武田惣角からですか（笑）。
大槻　はしょったほうがいい？　そうだねぇ、合気道にもいろいろとありまして、最近は〝リアル合気道〟というものも存在するんですよ。いわゆる実戦型の合気道。
——リアルな合気道！　合気道そのものを考えたくなる名称ですねぇ。
大槻　もういまのプロレスと同じで流派が分かれちゃってるんだよ。それからこのあいだ武道雑誌を読んでいたら〝サンボ合気道〟っていうものも発見してね！
——サンボなのか合気道なのか（笑）。
大槻　そこはハッキリしてほしい！　あとおもしろいのは、西郷四郎の流れを汲むとされているものはちょっとルチャリブレに近いんですよ。要するに複雑怪奇な関節技になっていて、最後はへんなふうに相手手を絡めとって、最後に先生が扇子をパンと広げたりするんですよ。
——カッコいいなあ。
大槻　西郷四郎にルチャを見た！　俺は!!
……で、なんの話だっけ？
——合気道プロレスの説明です（笑）。
大槻　そうだ、そうだ。え～っと、まず「武」というものには3つの要素がありまして、それは「武道」「武術」「武芸」からなるんです。この3つが合わさって「武」なんですが、かつてのプロレスはこれが三位一体だったんですね。ところが、アルティメット大会が行なわれ、レスラーが格闘家にコロコロ負ける現実が起こってからこの三位一体が効かなくなった。で、プロレスラーはどれかに決めなきゃいけなくなったんですよ。そうして「武術」に決めたのが髙田延彦や安生選手だったんですけど、それが返り討ちになっちゃった、と。

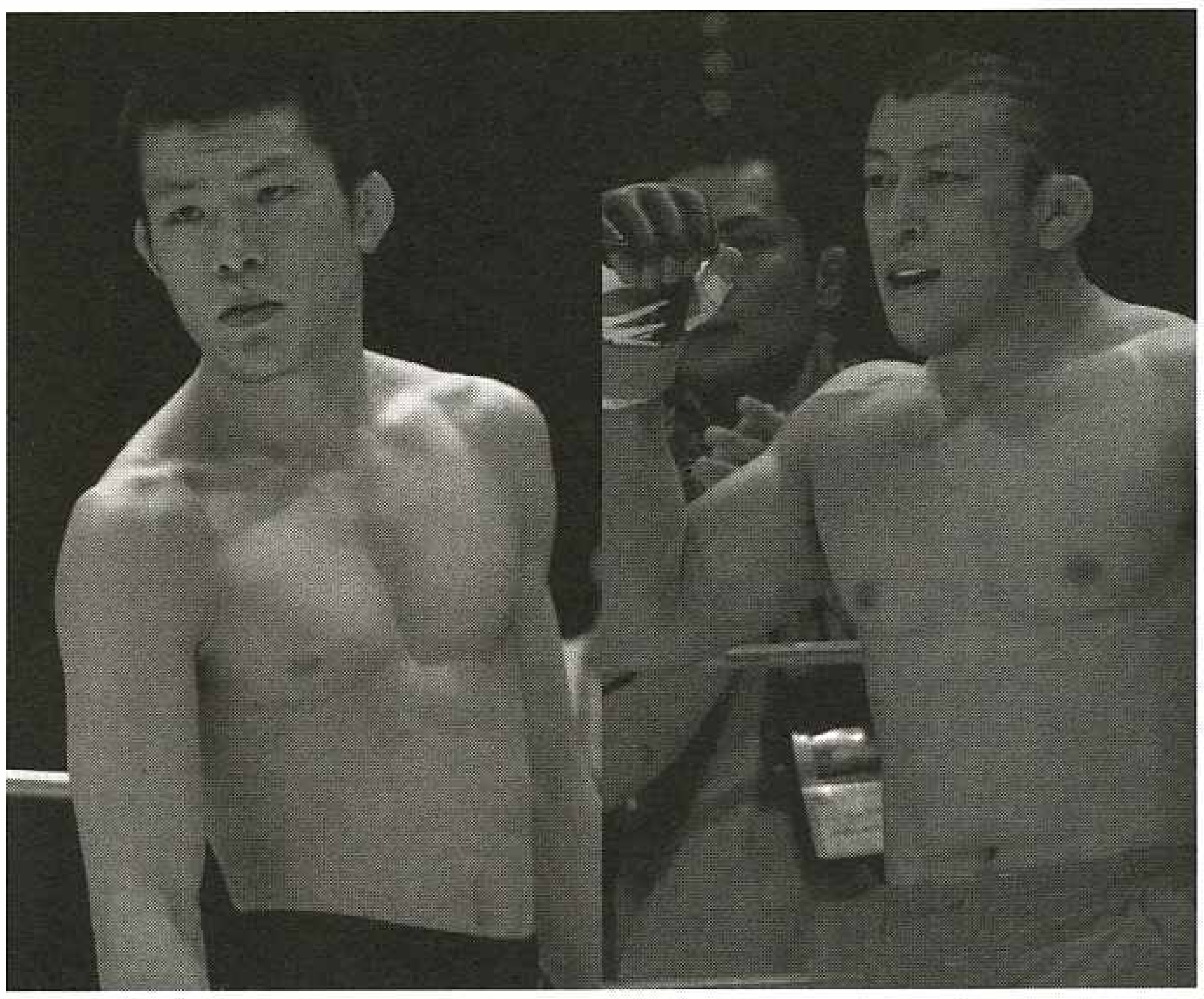

オーケンの提唱する合気道プロレスが本当なら、ロープに振ったレスラーが戻ってくるのは「催眠術だ」と言った馬場さんの発言はあながち間違ってはいなかったのか!?

——コテンパンにやられちゃいましたねぇ。
大槻　じゃあ、どうすればいいか。そうなったときに別のところでは「武芸」を選択したんですね。でも、思い違いで「芸だから笑わせればいいんだろう」という考えでできたのが『ハッスル』だったんです。しかし、その『ハッスル』も7月消滅説も出てきました！
——『ハッスル』の先行きは不明ですねぇ。
大槻　つまりいまのプロレスは「武術」でダメ、「武芸」もダメだった。そうしたらもうね、残った「武道」に向かうしかないんですよ！　要は、心と身体を鍛える情操教育としての「武道」ですね。

要は公民館でちびっこ相手にプロレスを教えればいいんですよぉ！

——じょ、情操教育（笑）。
大槻　ここ、笑いどころじゃないよ！　なぜかというと、プロレスというのは技をかける側とかけられる側の相互理解があって成り立つものですよね。で、勝敗もぶっちゃけ決まっています。だから勝つほうと負けるほうによって調和が生まれる。これはまさに情操教育ですよぉ！
——な、なるほどぉ。
大槻　そして、この理念は何かというと合気道に一番近いんです。でね、この発想をどう青少年の教育に結びつけるかというと、要は公民館でちびっこ相手にプロレスを教えればいいんですよぉ！
——公民館で！（笑）。
大槻　そう。子どもは飽きっぽいから、自由な攻防はまだ置いておいて、最初はテキサスクローバーホールドだったり、シャイニングウィザードだったり、技を一つずつ型として教えていくんです。で、あんまり運動神経ない子には4の字固めとか、身体能力が高い子にはフランケンシュタイナーとかを教えるんです。で、ある程度できるようになったら、たまに体育館とかで技の演舞会を開くんですよ。まさに合気道。
——はあ。
大槻　その模範試合として、プロレスラーが来るわけ。つまり、技と技を連結して、しかも自由に攻防していくとこういうふうになりますよという見本としてね。そうやって武道としての手順を踏めばみんながプロレスの凄さを知ることになって、バッと裾野が広がるじゃないですか。なんだかんだ言って、結局ちびっこを取り込まないと広がらないですから。
——いまなら小学生がやってるプロレス団体はありますね。
大槻　いやいや、それはもうプロにしちゃってるでしょ。そうじゃなくて、アマチュアスポーツとしてのちびっこプロレスを公民館レベルの武道としてやらないとダメなんです！　ちびっこがテキサスクローバーをやる!!　と。
——テキサスクローバーじゃなきゃダメってことはないですよね？（笑）。
大槻　そこはかまいません！　どうも技の名がテキサスクローバーしか出てこないんだけど（笑）。子牛の焼き印押しでもいいよ。
——でも、ぶっちゃけ業界からも世間からも公民館プロレスというのはハードルが高い気がしますけど。
大槻　プロレスってもうモチベーションを持って観るのさえ難しくないですか？　だってもうあらかじめ勝敗が決まってることを知ってて観るというのは見立ての心が必要でしょ。でもさ、中西がアルゼンチンバックブリーカーで棚橋をギリギリやってるのと、青木真也が一瞬で関節を極めるのを比べたら、頭の中で整理できないですもん。見立てきれんよ。
——う～ん。そこをどう消化するかは人それぞれでしょうけど。
大槻　言うまでもなく、多くの人はプロレ

スはガチじゃないことはわかってると思うんだよね。そうなると何を求めて観ているのかが問われてくるんですよ。モチベーションが。
――やっぱり身体を張って技を受けてるというような部分なんでしょうかねぇ。
大槻 ………。
――あ、黙ってしまった（笑）。
大槻 いやあ、それは身体を張るということで言ったらさ、ビルの屋上からムササビみたいな感じで滑空っする人いるじゃない。あっちだってぜんぜん身体張ってると思っちゃいますし、何より総合の人だって身体を張ってるもん。
――プロレスだけのアピールポイントではないってことですか。
大槻 それに三沢さんが亡くなったということで、あんまり身体を張るのもどうかと考えちゃうよね……。身体を鍛えた二人が闘っているけど、あらかじめ勝敗は決まっている。そうなるとボクはもう合気道としてしかプロレスは見られないですね。で、合気道として見たらプロレスはけっこうおもしろいよ。あれだけ身体を鍛えた人がパンツ一丁で派手な合気道技をやって、しかもマイクアピールもあるわけだから、つまりプロレスってのはエンタメ合気道なんですよ！ これ結論でしょ？
――え～、もうちょっと考えさせてください（笑）。たとえばプロレスの本場はアメリカですが、向こうにもそういう合気道的なものってあるんですかね？
大槻 あのね、アメリカじゃないけど、おもしろいのがロシアにシステマというものがあるんですよ。これがかなり合気道的な動きをするもので、合気道の基になった大東流合気柔術的な動きもあるんです。
――ロシアといえば、ヴォルク・ハンやアンドレ・コピィロフはリングスのスタイルにあっさりと適応してましたよね。
大槻 だからきっとルーツをたどると、どうもロシア革命のときに日本からけっこうジャグリングの大道芸人が何人かロシアに行ったのがきっかけなんじゃないかと思うんだよね（急に小声になって）。
――そんなにさかのぼりますか。
大槻 この大道芸人があまりにも芸が凄いんで、いまのロシアやヨーロッパに伝わるジャグリングの礎を作ったという説があるらしいです。で、もしかしたらこの大道芸人と一緒に何人か合気の達人が武芸者として一緒に行ってたんじゃないかと思うんだよね。だからやっぱりプロレスの源流に合気道が（もっと小声になって）。
――合気道プロレスというより合気道陰謀論だ（笑）。



「川尻や青木がG1に上がったら……」と想像すると、確かに格闘技ファンも注目せずにはいられない！ しかし、そう考えるとプロレスとはいったいなんなのか？ ますますその核が見えなくなる。

大槻 （無視して）もうね、プロレスをエンタメ合気道として抜本的に改革したほうがいいですよぉ!! だっていま正直みんなプロレスに興味がないと思うもん。
――う～ん、確かにいまの世の中、いろんな娯楽があふれてますねもんね。
大槻 それにプロレスは大変だ、キツイ、お金がないというけれど、武道なら宗教法人化も夢じゃないんだよ。
――なんとか突破口を見つけたい。
大槻 ……あと逆にさ、逆にもう一回プロレスラーが「武術」を目指してみるのはどうですか？
――プロレスがもう一度真剣勝負の世界に打って出る！
大槻 そう。本当はそれを一番ファンは望んでるんだもん。で、団体名はさ、『玉砕』ってどうですか？
――イヤな団体名（笑）。
大槻 もう一回「武術」を志して、とにかくオレたちは格闘技の団体に打って出る、と。今日はＤＥＥＰだ、明日はＵＦＣだとか言いながら。でもたぶん出るたびに負けて、最初はプロレスファンや業界マスコミから非難を浴びるでしょう。「でも結局注目されてるのはオレたちじゃないか！」となるよ！ 中には勝っちゃう選手とかいるだろうし、そうなるとプロレスファンは号泣ですよね！
――確かに注目は集まりますけど……。
大槻 もしくは前号の『ｋａｍｉｐｒｏ』によると、多くの格闘家はまだ食えないからバイトをやってるわけでしょ。だったらそのバイトの時間をプロレスに充てたらいいのでは？ だってコンビニやりながら総合やるよりも、プロレスをやって総合の練習をするほうがなんか強くなりそうですよ。はっ、これだ！
大槻 ――これでしたか！（笑）。
大槻 なんでこんなことに気づかなかったんだろう！
――でも、両者では身体の作り方が違うから、二足のわらじは厳しそうですよ。
大槻 コンビニよりは多少近いでしょ。
――た、確かに（笑）。
大槻 でもやっぱりエンタメ合気道として公民館ですよ。で、格闘家も合気道プロレスの旗振り役になってもらえたら！
――確かに青木真也や川尻達也がＧ１クライマックスに出れば、盛り上がりそうですね（笑）。
大槻 合気道Ｇ１！ 中年レスラーにも優しい、格闘家もチャレンジできる、情操教育にも最適！ プロレスはエンタメ合気道に行くか、『玉砕』を作るか、格闘家がプロレスするかの三択を迫られてるね？ どお？
――いいんじゃないでしょうか。さすが「元・プロレスファン」です（笑）。
大槻 元じゃないですって！ ボクはいまもプロレスを愛してますって！ 新日録画してるもん！（笑）。

【09年6月30日／都内・某所にて収録】

おおつき・けんぢ■１９６６年２月６日、東京都出身。１９８２年に筋肉少女帯を結成し一世を風靡。バンド解散後はロックミュージシャンと並行して作家としても活躍。しばらくプロレスと距離を取っていた感があり「元・プロレスファン」と思われがちだが、本人いわく、いまでもれっきとした「プロレスファン」。

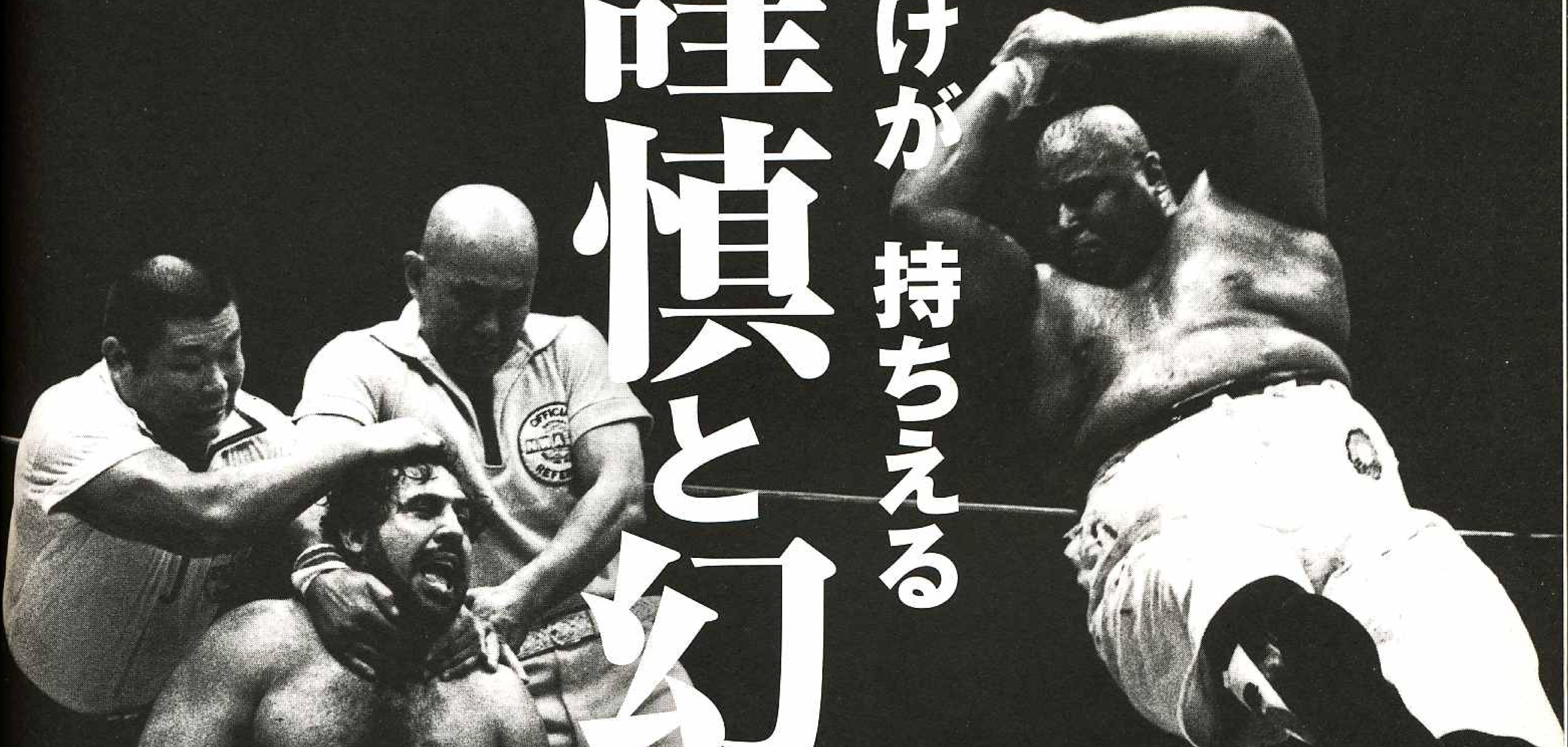
――今回の三沢さんの事故を受けて、プ

ったらもうなんの魅力もないでしょう。

にやっていればよかったでしょうけど。

にしかボクは見えないんですよ。もちろ

プロレスだけが持ちえる不謹慎と幻想



ドキュメンタリー作家 森 達也

小人プロレスのドキュメンタリー作品のプロデュースやグレート東郷の伝記の執筆、最近ではNHKで特集されたプロレス番組のホストを務めた森達也氏。プロレスが持ちえる“影”の魅力に惹かれる森氏が考える三沢さんの事故、そして真のプロレスの姿とは――？

聞き手／ジャン斉藤

毎日のように危険なことをやっている もっと死人が出ても不思議じゃない

――今回の三沢さんの事故を受けて、プロレス界ではライセンス制度発足の動きが出てきてるんです。

森 それはコミッショナーかなんか作って？

――はい。団体関係者出席のもと自民党で会合が行なわれて、元首相の森（喜朗）さんも発言してるんですね。

森 なんて？

――森さんが言うには「スポーツなのか興行なのかハッキリしろ」と。

森 なるほどね（苦笑）。興行かスポーツかで言えば、そこをハッキリできないのがプロレスでしょう。ハッキリしたらプロレスじゃなくなっちゃう。プロレスは光を当てられちゃダメなジャンルなんですよ。光から逃げて闇に闇へと向かわないと。

――闇夜が似合うジャンルですか（笑）。

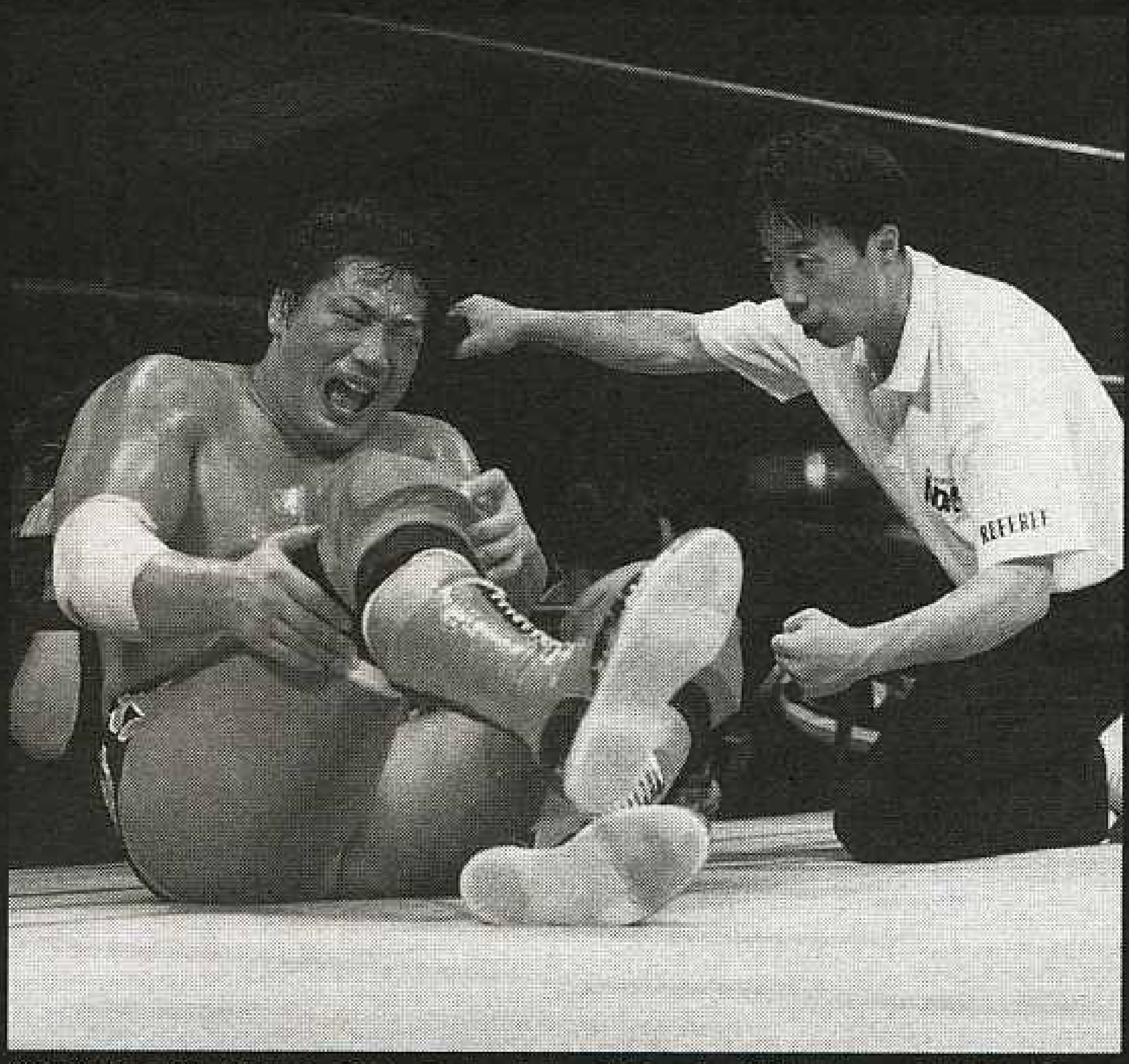
森 もちろん事故は再検証されるべきだし、安全を守るためにやれることはやるべきです。でもそれでライセンスだのコミッションだの、そういうシステムの中にプロレスを入れようとするのはちょっと違うと思うんだけどね。安全管理という意味合いなら、違うやり方を模索してほしい。だって、そもそも勝敗に意味がないスポーツなんかほかにないでしょ。

――プロレスにおいて勝敗は一つの要素にしかすぎないですね。

森 プロレスは興行でもあり、見世物でもあり、スポーツでもあり、エンターテインメントでもある。それがプロレスの魅力なんだから、単なるスポーツ扱いにしちゃったらもうなんの魅力もないでしょう。反則が5カウントまで許されるスポーツなんてほかにないんだから。

――ただ、いまの世の中って、やけに潔癖主義というかそういう曖昧さを嫌うところはありますよね。

森 やっぱり二元化が進んでるじゃないですか。白か黒か、正義か悪か、みたいなね。そういった雰囲気の中で、プロレスの曖昧なところを指して「だからこういう事故が起きたんだ」みたいなことを言われちゃうのかもしれないけど。この曖昧なところがおもしろいんだよ。それにプロレスがいまの状態でライセンス制度をやったところで、ジリ貧に変わりないでしょう。猪木さんや馬場さんが現役だった頃にやっていればよかったでしょうけど。



満身創痍で闘い続けるプロレスラーたち。森氏いわく「数年に一人は死ぬぐらいのことは、じつは覚悟しておくべき」という現実がいまここにあるのだ。

――団体や選手が乱立しているところもありますからね。

森 これまでプロレスで4人亡くなられてるんだっけ。一つのスポーツで4人の事故死って多いほうなのかな？

――ボクシングなんかだと毎年のように亡くなられてますね。

森 そうなんだ。それは知らなかった。じゃあ、ボクシングのほうこそ危ないじゃないですか。ヘンな言い方だけど、プロレスも死んでいてもおかしくないよね。毎日のように危険なことをやってるわけだから。

――「一歩間違えれば……」というような事態は起こってるでしょうね。

森 もっと死人が出ても不思議じゃないと思うんですよ、ホントに。総合はどうなの？

――修斗のアマチュアで一件ありましたが、日本のプロ興行ではまだ事故が起きてないです。

森 総合に死亡事故がないのはなぜでしょう？

――ボクシングやプロレスと比べて耐久スポーツじゃないとか、いろんな理由は挙げられますけど、まず確実に言えるのは興行数の問題ですね。プロレスやボクシングに比べて行なわれる試合数が少ないから、大事故が起きる確率も少ないと。

森 なるほどね。考えようによっては、これだけレスラーがいて、これだけ日本中で興行をやってて、それで数年に一人死ぬぐらいのことは、じつは覚悟をしておくべきなんだろうね。

――数年に一人は……。

森 その危険を承知でレスラーはリングに上がってるし、ファンは声援を送ってる。冷たい言い方かもしれないけれど、リングで選手が死ぬのはしょうがないことにしかボクは見えないんですよ。もちろん三沢さんの死を悲しむべきことだけど、プロレスが危険だなんていまさら騒ぐべきことじゃない。だって今回、三沢さんが亡くなったから「あ、危険なんだ」って思ったわけじゃない。選手やファンも「きっといつか誰かが……」ってことを思ってたはずだし。

――そうなんですよね。

森 それに三沢さん本人も言ってたわけでしょ。「もしかしたら死ぬかもしれない」と。半分は本音だろうし、だって、それがプロレスなんだもん。プロレスは痛みを客に伝えるのが仕事なんだから、死と隣り合わせなのは、それはもうしょうがないですよね。

――あとはやる側でどれだけ安全面の確保ができるかという話でしょうね。

森 うん。もう少しメンテナンス関係をね、年に一回は健康診断を受けるとか、それはやったほうがいいでしょう。

――森さんは映画『レスラー』のインタビューで「プロレスの魅力はドサ回り」とおっしゃってましたけど、今回の件ってまさにドサ回りの最中の出来事なんですね。

森 そうだよね。

――でも、いまはそのドサ回り自体もなくなりつつあるんですよ。

森 お客さんが入らないから、そういう状況もしょうがないんじゃない。進化論じゃないけど、そうやって自然淘汰されて適者生存が起きるのは、寂しいけどしょうがないですよ。「ボクは好きなのに、なんでみんなは興味を持たないんだろう」ってことは世の中にいくらでもあるからね。映画だってそうですよ。

――プロレスも一つの文化である以上、盛者必衰はある意味あたりまえなのかも

プロレスだけが持ちえる
不謹慎と[illegible]

しれないですね。

森　まあ、プロレスも完全に消えることはないでしょう。でもボク自身は、東京ドームに6万人もお客が入って、華やかなスポットライトが当たって、ゲストにタレントを呼んでってていうのはどうも違うと思ってるから。だからもう逆にそのほうがいいや、ドサ回りでって。

——地方の青果市場や駐車場でやってるような風景。

森　そうそう。もうそれでプロレスは充分。それを年に一回ぐらい見に行ければさ。そうやって楽しむものだよ、本来のプロレスは。

——お祭りの見世物的な感じですね。

森　うん。ただ、そうなったときは選手も興行も自然淘汰されてるはずだから、それなりに落ち着く位相があると思います。いまは選手も団体も数が多すぎるんですよ。

——それだけで食える人ってホントに少ないみたいですし。

森　業界として成り立ってない。いろんな業界があるけど、「ほとんどの人が副業を持ってます」っていうのは、まずないでしょう。それはもう業界のあり方としてちょっと危険なわけで。

——新人がバイトをやってるんならまだしも、ベテランがそうだと明るい未来は見えないですねぇ。

森　だからいまのプロレスって、劇団の養成所に近いですよ。40～50歳の劇団員でバイトしながら芝居をやってる人はいっぱいいますから。

世間は〝死〟というものを美化する プロレスだけはへんに美化しちゃダメだ

——自分はまったく詳しくないんですが、そういう方々は「いつか芝居だけで食べてやろう」と思ってるんですか?

森　そこはやっぱマスコミですよね。彼らの言葉でマスコミって「テレビ・映画」なんですけど、そこで一発当てようとしてる。大杉蓮さんもずっとアングラ芝居をやっててマスコミに出たのは40を超えてからでしょう。そういうチャンスがまったくないわけじゃないんだよ。劇団をやってる連中も、「芝居が好き」っていうのがまずあるんだけど、おそらく小劇団で一生終わっていいとは誰も思ってない。プロレスの場合だって「ビッグになって……」という野望があると思うんだけど。

以前より"Death"を名乗っていた斎藤彰俊は、自身のブログで「Deathを続けて名乗ることを、どうぞお許し下さい」と触れ、現在の心境を綴っている。今回の件で彰俊を責めるファンはどうかしているし、嫌がらせをするヤツは終わってる。

——船木誠勝や橋本真也だって、食うためにプロレスラーになってますし。この事故によってプロレスが大きく変わったりすると思いますか?

森　予測だけど、たぶん変わらないでしょうね。うん。変わらないし、変わってほしくない。まあ、さっき言ったように、もうちょっと医療関係で気を使うとかね。それぐらいはしてほしいと思うけども、プロレスそのものが大ヒールになっちゃえばいいと思います。

——大ヒール?

森　日本社会における大ヒールに。だって大の男が裸になって、結末が決まってるのに殴り合ってお金をもらうんだよ。最初からもう世の中の常識に反してるんだよ。こういう事故があったからってそこで世間の常識にあてはめてはいけないし、いまこそ世間に「バ～カ!　これがプロレスだ」って言わないと。

——な、なるほど(笑)。

森　世間の常識に迎合するのはプロレスの得じゃないでしょう。プロレスにとってなんのメリットもない。たとえば、世間って〝死〟というものを美化しますからね。政治家でもタレントでもどんな人間に対しても。

——どれほどゴシップにまみれたマイケル・ジャクソンに対しても。

森　だからここでプロレスの意地を見せて美化させないようにしてほしい。そこで気になるのは齋藤彰俊が今後どうなっていくかでしょうね。

——齋藤彰俊の自宅には、今回の件の嫌がらせが凄いらしいですね。

森　齋藤さんの胸のうちはもの凄くつらいと思う。でも、プロレスラーという仕事なんだもん。プロとして胸を張ってほしいよ。プロレスマスコミだって、ここでへんに美化しちゃダメですよ。プロレスはイビツで不健全な世界だ、逆に「こんな危険なことをやってるんだ」ってアピールをしたほうがいい。世の中の常識からすると、それは死者冒涜だと思われるかもしれないけど、三沢さんの死を利用したほうがいい。〝プロレスの常識〟からすれば「こんなに凄いことをやってるんだ!」ってアピールするしかない。

——その斉藤彰俊のキャラクターは「死神」で、死神バックドロップという技を使うんですが、それをなかなか活字にしづらいっていう状況はあるんですよね。

森　そんな状況は三沢さんが怒るよ。プロレスがダメになるよ。

——昔のプロレスには、「ニードロップで耳をそぎ落とした」とか「パイルドライバーで相手が死んだ」とか、そういうファンタジーがプロレスの凄みとなって成り立ってたと思うんですけど。この事故を受けてどうファンタジーが変わっていくのかは気になります。へんな話、挑発の常套句である「ぶっ殺すぞ!」だって、もう叫べないかもしれない。

森　強引にファンタジーにするしかないでしょう。もう、ムリヤリにでもファンタジーにするしかない。不謹慎、冒涜だと思われるかもしれないけど、不謹慎なのがプロレスなんだから。

【09年6月29日／千葉・浦安にて収録】

もり・たつや■1956年5月10日、広島県出身。映画監督、ドキュメンタリー作家。オウム信者達の日常を追うドキュメンタリー映画『A』を制作するなど、テレビから抹殺されたテーマを取り上げ、海外からの評価は高い。著者も多数。

1993年の女子プロレス

「いまは身体はガタガタ。でも、だましだましでできるプロレス界もよくないと思う」

“最狂団体”のトップを張った 女子プロレスラーの代償

豊田真奈美（現・魔波）

『1976年のアントニオ猪木』著者の柳澤健氏による好評連載『1993年の女子プロレス』。
アジャ・コング、ライオネス飛鳥、井上京子に続いて登場するのは“飛翔天女”豊田真奈美（現・魔波）。
難易度の高い各種オリジナルホールドやゾンビのような打たれ強さを武器に90年代の全女マットで大活躍した豊田が
“最狂団体”の知られざるエピソードを激白！ よっしゃ、行くぞ〜ッ!!（豊田調）。

聞き手／柳澤健　構成／阿修羅チョロ　試合写真／平工幸雄

——いままで、この連載では、ライオネス飛鳥さん、アジャ・コングさん、井上京子さんにお話をうかがってきましたが、豊田さんにインタビューするのは難しいかもしれないな、って勝手に思っていたんですよ。

豊田　昔はそうだったかもしれないけど、おばちゃんになるとベラベラしゃべるようになるんですよ（笑）。若い頃はかわいかったなぁって。

——そうですか（笑）。デビュー当初、スイートハーツ（豊田と下田美馬のタッグ名）の頃は下田さんが試合前のインタビューでも、かなりしっかり話をしていたのに、豊田さんはほとんど話しませんでしたよね？

豊田　そうですね。私、カメラがあると凄い緊張するんですよ、何しゃべればいいかわかんなくて。それにあの頃は、先輩の圧力とかも凄かったから、こんなこと言ったら先輩になんか言われるんじゃないかとか、目をつけられてしまうんじゃないかとか。面倒くさい世界なんで（笑）。

——大変ですね。豊田さんは下田さんや三田（英津子）さん、山田（敏代）さんたちと同期で、いわゆる昭和62年組ですよね？

豊田　そうですね。そもそも私の同期は最初7人いたんですけど、いまでも続けてるのはそれぐらいですね。

——豊田さんにとって同期とはいいものですか？　それともライバル？

豊田　うちの同期はみんなバラバラなんですよね。いまだに自分は自分、みたいな（笑）。でも同期がいたから我慢できたこともいっぱいあるし。

——上下関係はどうでしたか？

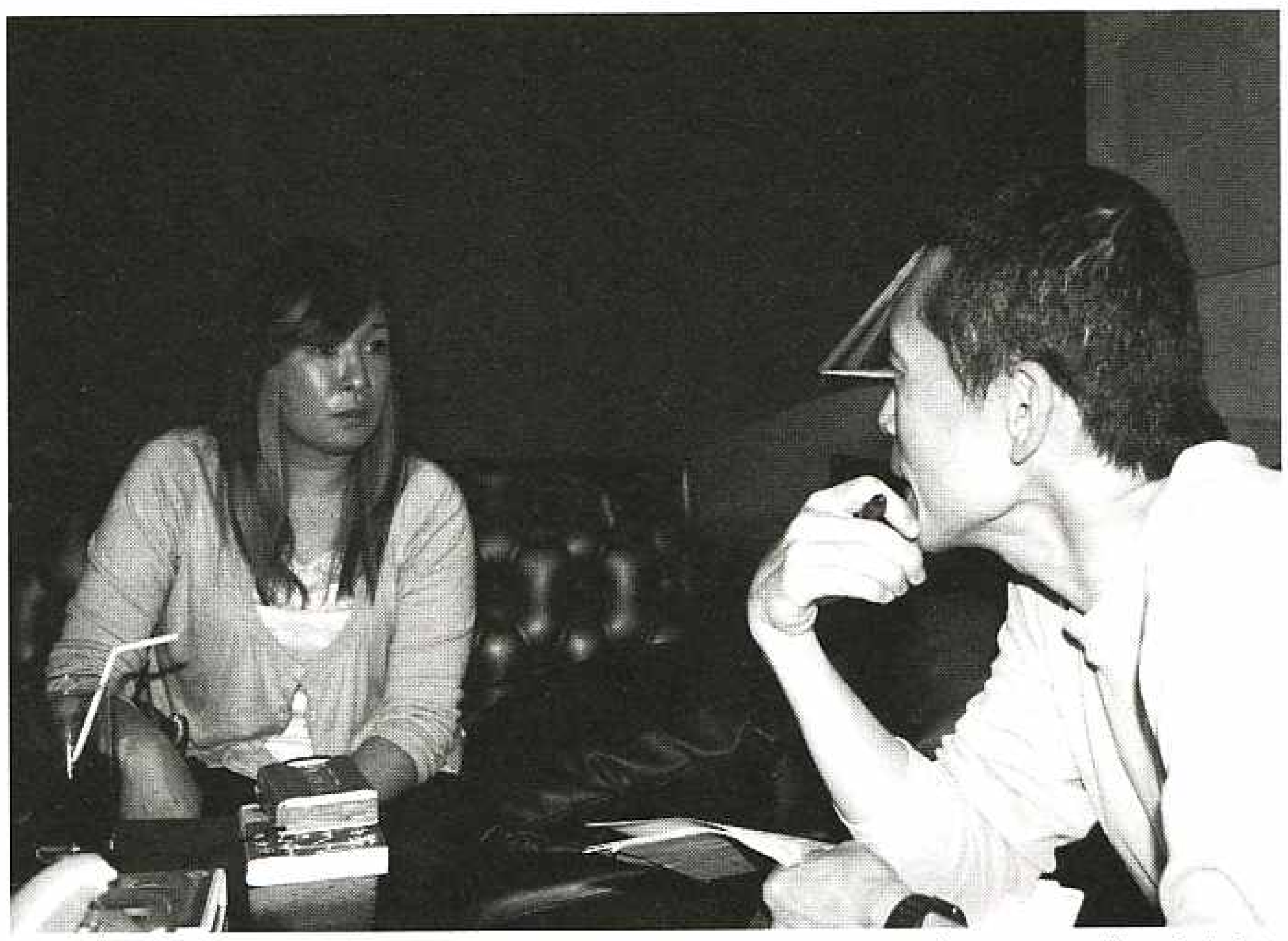
豊田　女ばかりの世界だからいじめられて、とかあるじゃないですか。自分もいじめられてたかもしれないですけど、覚えてないんですよ（笑）。

——えっ、覚えてないんですか？

豊田　「どうにかなるだろ」みたいな感じで、いじめられても、あまり気づいてなくて（笑）。でも、こういう幸せな性格だから残れたんじゃないですかね。やっぱり、あの頃の全女って並の神経じゃ残れないと思うし、残ってる人はみんな特殊ですよ（笑）。

——そうかもしれませんね（笑）。

豊田　一年後輩の（井上）貴子や（井上）京子もアクが強いじゃないですか。あと吉田（万里子）なんかはボーッとした性格だから残れたんだろうし（笑）。



全女時代は女子プロ界のトップ選手として一世を風靡した豊田だが、現在はOZアカデミーを中心に活躍するも試合数は激減。「全女時代の未払金がもらえてたら、こんなに苦労しないのに」と苦笑い。

——豊田さんの昔のインタビューを読ませていただいたのですが、山田さんには練習でも試合でも、いつも先に行かれてたと言ってますけど、それは本当のことなんですか？

豊田　そうですね。（山田は）ルックスもいいから人気もあったし、かといって実力で勝ちたいと思っても絶対勝てなかったんですよ。山田は先輩にも勝っていたから毎日試合もあったし。その頃の全女は人数多いから、試合に負けると2～3日試合に入れてもらえないんですよ。

——シビアなんですね。

豊田　そういう意味で、試合の数でもドンドン離されていって「負けたくない」と思っていても差がついちゃって。でも、そのあいだに山田が首をケガしたじゃないですか。そのあいだに自分がガッと上がった感じなので。山田にはかわいそうだけど、自分とっては「いまだ」って感じでしたね。

——いまがチャンスだと？

豊田　そうですね。山田がケガから復帰する前にハワイで合宿があったんですよ。その頃はテレビもついてたんですけど、なぜか波打ち際で山田とスパーリングをさせられて（笑）。

——そのほうが絵になりますからね。

山田（敏代）とは数えきれないほど取っ組み合いのケンカをしました

豊田　自分はそれまで山田に勝てなかったこともあって、必死に押さえてたときにちょうど波がきた。山田が「離せ」と言ったのに、自分は必死になってるからわからなくて。で、波が引いて山田が起き上がった瞬間、「離せって言っただろ！」って凄く怒ったんです。それを現地の人が見て、「あれは女のケンカじゃない」と騒ぎだしたこともありましたね（笑）。

——山田さんとはタッグでも活躍されてましたけど、その時期にもそういうモメごとがあったんですか？

豊田　山田とは、ホントに数えきれないぐらい取っ組み合いのケンカをしてましたよ。

——えっ、そうなんですか!?

豊田　山田と組んで歌を唄っている時期もあったんですけど、歌のコーナーの直前にも取っ組み合いのケンカをしてたこともあって。そのときに、当時のマネージャーから、「今日からもう唄わなくていい」って言われた。その日から唄わなくてよくなって「ラッキー！」みたいな（笑）。

——どうして取っ組み合いのケンカにまでなるんですか？

豊田　同期だからなるんじゃないですかね。言いたいことも言えて。自分と山田は「ワー！」って取っ組み合いのケンカをすれば男のケンカみたいにさっぱりしてるんですよ。ネチネチしてなくて、やるだけやったらストレス発散できるみたいな。

——そんな関係だったんですか。あと、豊田さんといえば、あのエグいドロップキックが代名詞になっていると思うんですが、最初からあんなにエグかったわけではなく、徐々にああいうとんでもないものになっていった印象があるんですけど、何かきっかけがあったんですか？

豊田　ドロップキックは付き人をやっていた山崎五紀さんに教えてもらったんですよ。五紀さんに教えてもらったドロップキックは凄い綺麗だったと思うんですよ。でも、自分は雑なので自己流でやってるうちに雑でエグい感じになっていって（笑）。

——対抗戦あたりの頃は、ホントに「うわっ！」って声が出そうなくらい凄いドロップキックを出してましたけど、どうしてあんなにエグくなっちゃったんですか？

豊田　それは、やっぱり〝全女が一番〟だからですよ（笑）。

——対抗戦用にいつもより当たりをきつめにしてたということですか？

豊田　対抗戦だからエグくしたというわけじゃないんですよ。全女って当たりがハードじゃないですか。

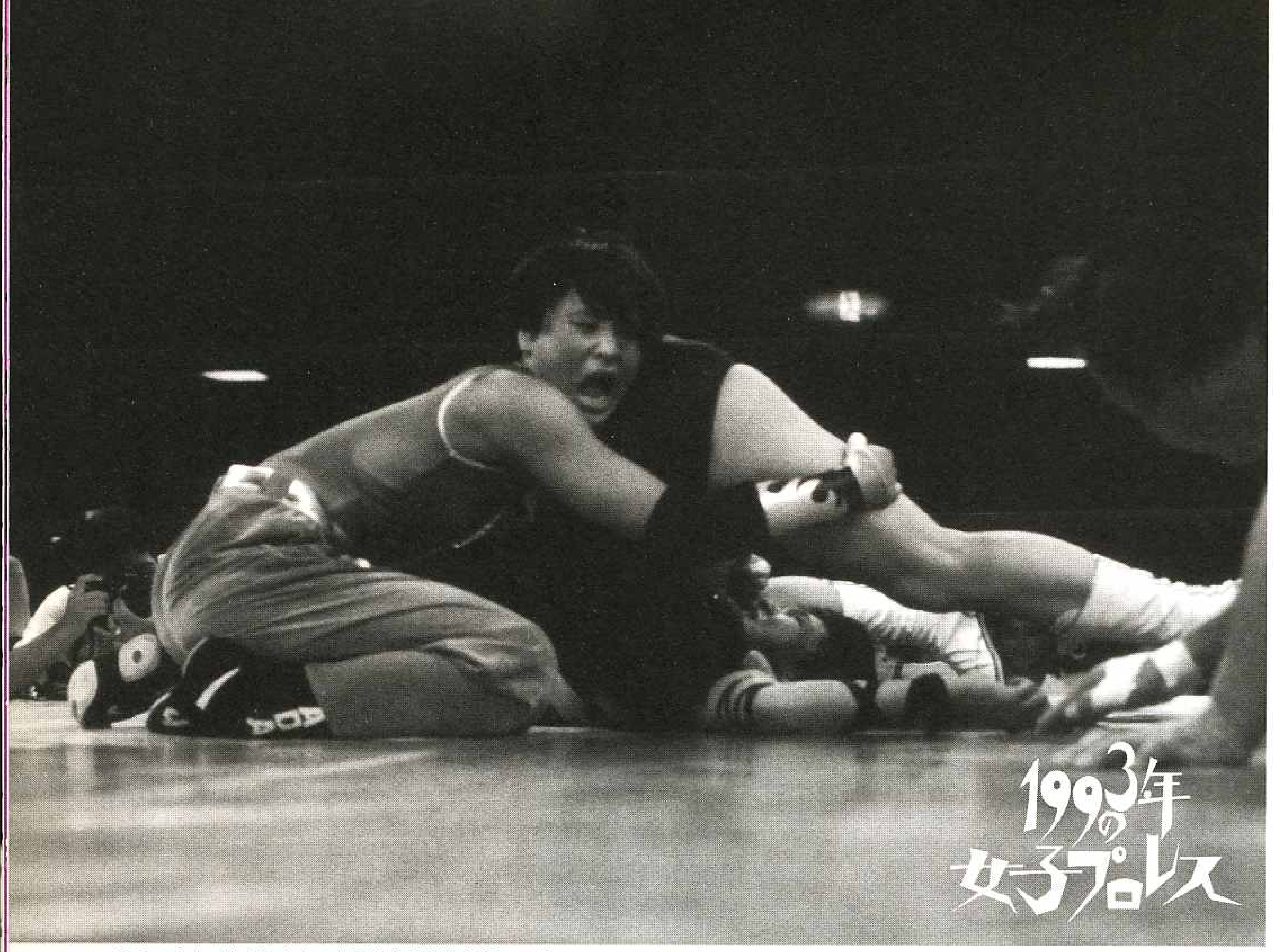
——もの凄くハードだと思います。

豊田　だから、対抗戦を意識してというのは私的にはまったくないんです。有名なところでは対抗戦の最初（92・11・21川崎大会。豊田＆山田vsダイナマイト関西＆尾崎魔弓）の尾崎さんにやったドロップキック。あれだ

って、最初から凄い〝やる気〟だった
挨拶代わりだったんですよね。いま
——でも、川崎の試合はホント凄か
かった」と号泣してましたが、どうい
がする、と（笑）。対抗戦が始まった

豊田　女ばかりの世界だからいじめ
――豊田さんの昔のインタビューを
――そのほうが絵になりますからね。
トレス発散できるみたいな。
んにやったドロップキック。あれだ

豊田真奈美



92.8.15全女・後楽園大会で山田敏代と前代未聞のベビーフェイス同士の髪切りマッチを行なった豊田。大熱戦の末、山田を下した豊田だったが、試合後に場内から「やめろ」コールが発生。ハサミを受け取った豊田は自分の髪の毛をバッサリ。その後、山田は潔く自分で髪の毛を切り落とした。

って、最初から凄い〝やる気〟だったみたいな感じで受け取られているんですけど、実際にはあれも、やる気でやったわけじゃないですし。

――あのドロップキックは凄かった。試合が始まってすぐの一撃でしたけど、尾崎さんの動きはあきらかにおかしくなっちゃってましたからね。

豊田　べつに狙ってやったわけではなく、自分を印象づけさせるための挨拶代わりだったんですよね。いまだに尾崎さんに言われますけど、「アンタ、やる気でやったよね」って（笑）。

――アハハハ！　あの試合は、山田&豊田組のベストマッチだったと思うんですけど、その後の山田&豊田組の試合は、正直言って、あまりおもしろくなかったんですよ（笑）。

豊田　そうだと思いますよ。基本的に山田とは息も合わなかったし。

――でも、川崎の試合はホント凄かったです。

豊田　あの試合は、たぶん初めてお互いの息が合ったんだと思う。（他団体の選手や観客に）全女を見せるために意気投合できた試合だった。

――全女の選手たちは多少なりとも他団体を馬鹿にしてた部分があったと思いますが、実際に試合をしてみて、そういう意識は変わりました？

豊田　ハッキリ言って馬鹿にしてた部分はあったかもしれない。だって、そもそも全女しかなかったし、そこで選ばれて、残ってきた自分たちはエリートだと思ってたんですよ。でも、対抗戦で尾崎&関西と当たったとき「違う世界もあるんだな」ということがわかって、ドンドンやっていきたいという思いになりましたね。

――フィジカルエリートではないけれど、この人たちも一生懸命やってるな、という感じなんですか？

豊田　「なかなかやるじゃん」みたいな。「でも、自分たちのほうが上だけどね」って感じで（笑）。

――素晴らしい（笑）。対抗戦の中で全女が一番売り出したかったのは山田&豊田のペアだったと思います。ところが北斗さんが「おい、神取！」とアピールを始めたあたりからおいしいところを持っていくようになり、話題の中心が北斗さんに移ってしまい、山田&豊田のペアの重みは徐々に下がっていったと思います。団体対抗戦が本格的にスタートした93年4月の横浜アリーナ大会で、山田&豊田組はFMWのコンバット豊田&工藤めぐみ組とメインで闘いました。試合後に、豊田さんは「うまくいかなかった」と号泣してましたが、どういう気持ちだったんですか？

豊田　あまり覚えてないんですけど（笑）、自分たちがメインを任されたのにセミ（北斗vs神取）に持っていかれた悔しさだったのかもしれない。やっぱり、自分が一番注目されたいじゃないですか。

――それはそうですよね。FMWの豊田&工藤組とは噛み合わなかったように見えました。

豊田　噛み合わなかったですね。二人とも全女を辞めた選手ですけど、自分たちにとっては先輩であることには変わりはない。そういう部分でのやりにくさというのもあったかもしれない。尾崎&関西は自分たちの先輩じゃないからこそ好き勝手できたっていう部分はあったでしょうね。

――なるほど！　対抗戦の前の豊田さんは、90年のジャパングランプリで先輩の堀田（祐美子）さんを破って優勝して、その後、赤いベルトを巻いていたブル中野さんに挑戦したじゃないですか。あのジャパングランプリは豊田さんが一番ガッと伸びた時期だと思うんですけど、「私の時代が来た！」という実感はありましたか？

豊田　いや、あのジャパングランプリは、北斗さんのケガがなければ優勝できなかったと思うんですよ。運も実力のうちなんでしょうけど、それがあったからこそ自分は一気に上がれたと思ってるんで。もしかしたら、あのときに北斗晶のアクシデントがなければ、私はここまでこれたレスラーじゃなかったのかなって。

――山田さん、北斗さんのケガがあったからこそ自分はのし上がった気がする、と（笑）。対抗戦が始まった頃は山田&豊田のペアが多かった。でも、徐々にタッグからシングルプレイヤーとしての活躍が目立つようになり、京子さんやアジャさんと凄い試合を連発するようになるわけですが、豊田さんから見た京子さんはどういう相手だったんですか？

豊田　私は天才だと思った。悔しいけどうまかった。でも、京子は私のこと大嫌いだと思うの。

――そうなんですか（笑）。

豊田　私も京子のことがあまり好きじゃなかったけど、なんか試合になると波長が合うんですよ。プロレスがうまいなと思う。ここまでうまいと思った人はあまりいないけど。

――京子さんにお話を聞いたときに、京子さんは豊田さんのプロレスを〝わがままプロレス〟と呼んでいました。「ミサイルキックもどっから飛んでくるかわからないし、こっちが合わせないといけないから大変」と楽しそうにおっしゃってました（笑）。

豊田　そんなこと言ってたんだ。向こうが合わせてくれてたから「うまいな」と思ったんだろうね（笑）。

――アジャ様はどうですか？

豊田　アジャ様も京子と並んで天才だなと思う。

――アジャ様とやるときと、京子さんとやるときの違いはありますか？

豊田　やっぱりアジャ様は、何もかもぶつけていけたって感じ。何をやっても受け止めてくれるみたいな、好き勝手できましたよね。京子はうまくて私は雑なんだけど、やっぱり自分のほうが上というのを見てもらいたかったかな。

豊田真奈美

――豊田さんの試合は危険すぎて、正直「この人アタマがおかしいよ」と思うところもありました（笑）。無茶なことばかりしてましたよね。

豊田　私とアジャ様がドームでやった試合はキ○○イみたいですよ（笑）。

――キ○○イかどうかはべつとして（笑）、あの試合はとんでもない試合でした。プロレスファンなら絶対観たほうがいいです。

豊田　下がコンクリとかマットも何も敷いてないところでラ・ケブラーダとかやって骨折とかもしてるし。足の甲の骨を3本とか折ったこともあって、その一週間後くらいにメキシコ遠征が決まってたんですよ。

――どうしたんですか？

豊田　記念大会だったから「他の人には代えられない」と言われたんで、骨折したまま試合をして、飛行機の中も3人がけの真ん中で動かず立たずメキシコから帰ってきましたね。

――凄いことやってますねぇ。

豊田　医者には全治3ヵ月かかると言われたんですけど、1ヵ月くらいしてまったく痛くなくなったんですよ。それで病院に行って診てもらったら、くっついてた（笑）。

――え～、それは凄い！

豊田　そのあいだにも試合とかしてるにもかかわらず。私はケガが治るのが凄く早いんですよね。

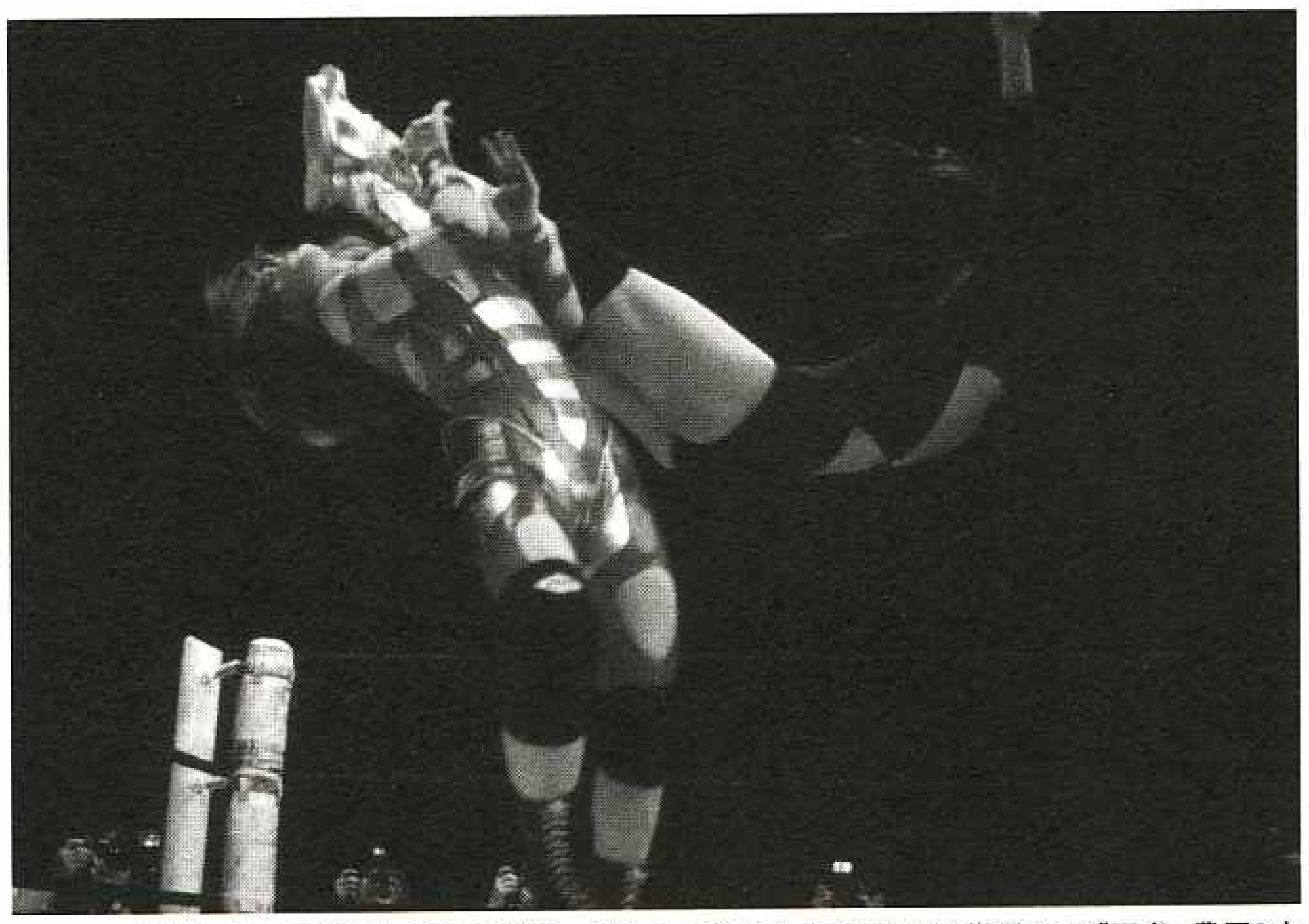
――ドームでのアジャ様との試合でもありましたけど、豊田さんって、たまに技を失敗したりしてコーナーポストから凄い角度で落ちたりするじゃないですか。観てる側は「これはヤバイ」と息を飲むわけですが、豊田さんは平気で起き上がってきますよね（笑）。信じられない。

豊田　セコンドについてる後輩とかからも、「今回こそやっちゃった」と思っても、むくっと起きて「よっしゃいくぞ～！」とか言ってるらしく、キ○○イだって言われました（笑）。

――後輩からも言われてましたか（笑）。本人的には「これはヤバイ」と自分の身体を心配しつつ起き上がるんですか？

豊田　失敗しちゃって恥ずかしいとか、失敗をどうごまかそうか、って感じで。でも、それで焦って空回りしちゃうんですけど（笑）。それに、試合中はアドレナリンが出てるんで痛みもあまり感じないんですよね。

――そんなもんなんですか？　じゃあ、試合後はどうなんでしょう？



92.11.26川崎大会にてJWPとの対抗戦第一弾として行なわれたWWWA世界タッグ王者・豊田&山田vs関西&尾崎のタイトル戦。開始早々、豊田のドロップキックで意識が飛びかけた尾崎だったが驚異の打たれ強さで徐々に復活。敗れはしたが王者組相手に大健闘し、大会ベストバウトを獲得。

豊田　試合の次の日とかは大変なことになってますね。身体中が痛くて起き上がれないこととかしょっちゅうで。でも、ホントあの頃は若かったと思いますよ。私の辞書に"怖い"って言葉はなかったですから。

――はあ、それは凄い。身体が丈夫なのは、血筋もあるんですか？

豊田　あ～、そうかもしれない。うちのおばあちゃんは凄い元気だった。

――車に轢かれても大丈夫とか？

豊田　それホントなんですよ（笑）。

――えっ、実際に轢かれたこともあるんですか!?　冗談で言ったのに。

豊田　もうだいぶ前ですけど、実家に帰ったとき、おばあちゃんが道を渡っていて車に轢かれたことがあって。軽自動車だったんですけど、フロントガラスが割れるくらいぶつかって倒れてたんですよ。見ていて、もう死んだと思ったんですけど、ヒザを骨折しただけで普通に歩けるようになりましたね。

――ホントに血筋なんですね（笑）。ドームでのアジャ戦の話に戻りますけど、なんであんなに激しい試合になったんですか？　おいしいところを全部持っていく北斗さんへのライバル心もあったんでしょうか？

豊田　それもあったと思うし、トーナメントだったんでもちろん優勝したかったし、結果は1回戦で負けてしまったけど、優勝する人よりも北斗晶よりも印象に残る試合をしたいという気持ちはありましたね。

――その結果がキ○○イプロレスになってしまった、と（笑）。

豊田　そうですね（笑）。でも、いま思い返すとドームでのアジャ様との試合が自分のベストバウトだったのかな、と。それに続くのが、京子と60分フルタイムやった試合とか。

――京子さんが言ってたのは、豊田さんとの試合で、腰が痛くてどうしようもないときがあって、豊田さんも痛いのを知ってるはずなのにそこをおもいっきり攻めてくる、と。「ホントにひどい人です」と笑ってましたけど、それに関してはどう思います？

豊田　他人のことなんか考えてないですもん。その当時の全女はね。

――全女のリングはそういう場所だと？

豊田　いや、私だけかもしれないけど（笑）。試合のときは、そういうこと考えながらやってないし、他人から何を言われても気づいてないし。……いま思うと、ホントにひどい人ですよね、私って（笑）

――いつ頃までひどい人だったんですか？

豊田　97年かな？　全女で大量離脱があったじゃないですか。そこからは、それまでの私でやってたら全女は終わってたから。

――どういう意味でしょう？

豊田　大量離脱後は「全女を守っていかないといけない」という気持ちがあったんで。それまでは会社のことなんて考えずに、自分のことだけやってればよかったけど、それからは後輩のことだとか会社のことだとか、いろいろなことを考えないといけなくなって。それからかな？　豊田真奈美がつまらなくなったのは。

――それ以前は、自分は自分の仕事をやればそれが会社や、プロレスのためになると思っていたんですね。

豊田　はい。でも、そうも言ってられなくなりましたからね（笑）。

――悲しい話です。対抗戦時代に最も輝いていたレスラーは北斗晶だと思うんですけど、私にとって一番印象的な北斗さんは、試合ではなくてじつはマイクなんですよ。凄く口が達者じゃないですか。

豊田　頭いいですよね、北斗さんは。

――現役である自分たちは、ハイレベルの試合を肉体で見せている。にもかかわらず、北斗さんのマイクに全部持っていかれてしまう、そこにジレンマはありませんでしたか？

豊田　私はしゃべれないぶん、それに対抗して試合で表現しようとしていた。いまなんか、新人レスラーとかが試合中に言葉で笑いを取って、沸かせた気持ちになったりしてるんですよ。私はそういうのがあまり好きじゃなくて。

――最近は豊田さんも試合中に後輩レスラーから「おばちゃん」呼ばわりされてたりもしてるみたいですね。

豊田　そうそう。試合中に私に向かって「おばちゃん！」とか「ババア！」とか言うと、会場はドカンとなるんですよ。それでお客さんを沸かせたと勘違いする。「おばちゃん」って言

われるのも、まあムカつくし（笑）、「お
けばいいんじゃないですか。いまは
たいっていうのがあったんで。
ってた人もたくさんいるし、吉田万
長は凄いなと思ったんですよ。

全女の頃は骨折なんて
ケガのうちに入らなかったです

われるのも、まあムカつくし（笑）、「おまえらもそうなるんだ」と思うんだけど、いまの若い子には、言葉じゃなくて試合で沸かせられるようになってほしいなって思います。ちょっと勘違いな方向にいってる人たちがかなりいると思う。

——本来、プロレスというものは身体で見せるものだっていう信念と、自分はそれをやってきたという自負が豊田さんにはあるわけですね。

豊田　そうですね。私はいま太っちゃってよくないけど、いまのコって太っちゃいけないとかスタイル重視のコが多いじゃないですか。いまの私はベスト体重じゃないからいけないんですけど、レスラーはレスラーらしい身体になってほしいと思う。男の人から見て「俺だったら勝てる」って選手ばかりじゃないですか。

——確かに、それは言えますね。

豊田　「コイツには絶対勝てねえよ」というアジャ様みたいな人がいないと思うんですよ。だからプロレスは低迷してるって言われるのかなって。

——そういう意識を変えないかぎり、女子プロは以前のようなブームは起こせないということでしょうか？

豊田　どうなんですかね。女子プロも最初はストリップ劇場から始まったそうじゃないですか？

——そうみたいですね。

豊田　逆にそれに戻っちゃえばいい。そこまで戻して、そこから変えていけばいいんじゃないですか。いまは原点に戻ったほうがいいと思います。

——それは画期的な意見だと思います（笑）。ちょっと話を戻してしまいますが、クラッシュが去って客が入らなくなって、ブル様とアジャ様の金網マッチがあったわけですけど、あの試合はどう見てましたか？

豊田　「危ないよ」という感覚はなくて、自分を見せようとするプロ根性という意味では、あれはあたりまえというか。中野さんが持ってるあたりまえだったと思います。「さすがブル中野」って感じでしたね。

——"闘う宝塚"であった女子プロレスが、ブル様とアジャ様の試合以降、どんどんハードヒットな方向に進んでいったからこそ、女性が観るものでもなくなり、レスラーを目指す女の子も減って、男性ファンだけが観るものになってしまった。私は女子プロレスの衰退の理由はそこにあると思っています。だとすれば、女子プロレスは、ビューティ・ペアやクラッシュギャルズの時代のままがよかったんでしょうか？

豊田　まあ、人それぞれだと思うんですけど、私は男子プロレスをマネするのも嫌いだし、見るからに「男じゃん！」みたいな女子レスラーっているじゃないですか。

——たくさんいますね（笑）。

豊田　私は女子にしかできない華やかな感じで、女子レスラーらしくしたいっていうのがあったんで。

——クラッシュの影響もあってか、北斗さんや堀田さん、山田さんもボーイッシュな感じでやってましたね。

豊田　でも、私が憧れたのは五紀さんだし、五紀さんはホントに女子プロレスラーって感じじゃないですか。

——そうですね。五紀さんたちがやっていたプロレスがブル様とアジャ様によってドンドン違うものになってしまったとき、女性らしいプロレスに憧れていた豊田さんはどう感じたんでしょう？

豊田　そういう流れになっていっちゃったんで、しょうがないかなって。

——「このままだと死人が出るんじゃないか」という危機感はありませんでしたか？

豊田　そういうのはまったくなかったです。

——ケガさせちゃうよとか、ケガしちゃうよというのもなかった？

豊田　ケガさせちゃうよっていうのはありましたね。自分がケガすることに対しては怖いと思ったことはないです。だって、あんな激しいことやってるんだからケガするのあたりまえじゃないですか。

——確かに。プロレスラーをやっている以上、どこかしらにケガを抱えているのはあたりまえの話だと。

豊田　そう思いますよ。骨折なんてケガのうちに入らないですよね。

——はあ。普通の人にとって、骨折は凄いケガですけれど。

豊田　だって、骨折って時間が経てば治りますからね。全女の人は骨折してても気づかないでやってる人も多かった。足の小指が折れたままやってた人もたくさんいるし、吉田万里子とかも腕折れたままやってたし、私も肩なんかそうなんですけど。

——豊田さんは、全女を辞めてガイアに上がるようになってから肩を手術されてましたよね。

豊田　そうですね。昔、全女には25歳定年制ってあったじゃないですか。あれはホントにあったほうがいいと思うんですよね。（松永高司）会長は何も考えずにキリのいい25と言ったんでしょうけど、いま思い返してみると、25歳までは本当にケガしなかったんですよね。でも、25をすぎてからはガタガタとケガするようになり、太り始めたんで、それを決めた会長は凄いなと思ったんですよ。

——でも、それからもう10年以上も現役を続けているわけですよね。

豊田　もうガタガタですよ、自分の身体（苦笑）。まあ、だましだましでもできてしまうプロレス界もよくないとは思いますけどね。最近は目も悪くなってきて、たぶん職業病だと思うんですけど、片目つぶらないと見えないです。視神経がやられてるのかな。昔はロープにピョンと乗っかったりしてたんですけど、いまはロープが二重、三重に見えたりするんで、やれなくなってきたし。

——うわ〜。プロレスラーはみんなそんな感じなんですかね。

豊田自ら「キ○○イみたいな試合だった」と振り返るのが94年11月に行なわれた、全女の最初で最後の東京ドーム大会でのアジャ・コング戦。場外へのテーブルプレスをはじめ豊田のキ○○イぶりは必見です。試合映像は各自入手！

豊田真奈美

全女の倒産直前に「いくらか持ってないか」って言われて

豊田　みんなというか、ケアをちゃんとやってないからじゃないですかね（苦笑）。昔は病院行かなくても全然大丈夫だったけど、さすがに年取ってきたら何かしらケアしないと。

——そうですよね。で、根本的に個人主義者である豊田さんがフリーダムフォース（伊藤薫、吉田万里子、長谷川咲恵で95年に結成されたユニット）を結成した理由もよくわからないんですけど、どうしてああいうユニットを始められたんですか？

豊田　あのとき、自分は全女で凄く孤立してたんですよ。自分しか信じるものがないって感じで。同期の3人からも2年近くシカトされてたし。

——え〜〜っ、同期から2年近くもシカトされてたんですか！

豊田　そうなんですよ。

——それって、かなりキツくないですか？

豊田　大変でしたけど、私のほうが人気もあるし試合もできるからいいや、3人で好き勝手やってればって思ってて。地方巡業とかでも3人で固まって何か話してても、私は一人でコンビニで弁当買ってきて食べたりとか。一人でも全然大丈夫でした。

——全女というより、豊田さんが凄いと思います（笑）。

豊田　そういうのを見てた後輩の伊藤とかは「豊田さん誘おうか」とか言ってたらしいんですけど、誘ったのがバレたら怖いじゃないですか。

——先輩から何をされるかわかりませんからね。

豊田　だから、そういう部分も知ったうえで共感してくれた子たちと作ったユニットなんですよ。マジな人間関係というか（笑）。

——そこが全女の魅力でもありますからね。

豊田　そうそう。全女って選手のガチ喧嘩を取り入れるんですよ。だからこそ殺伐としてる感じが出ておもしろいのかもしれない。まあでも、私と組んだことによって、伊藤たちはひどい目に遭ってますけどね（笑）。

——そうなんですか。同期のあいだで孤立してしまったのはジェラシーが原因なんですか？

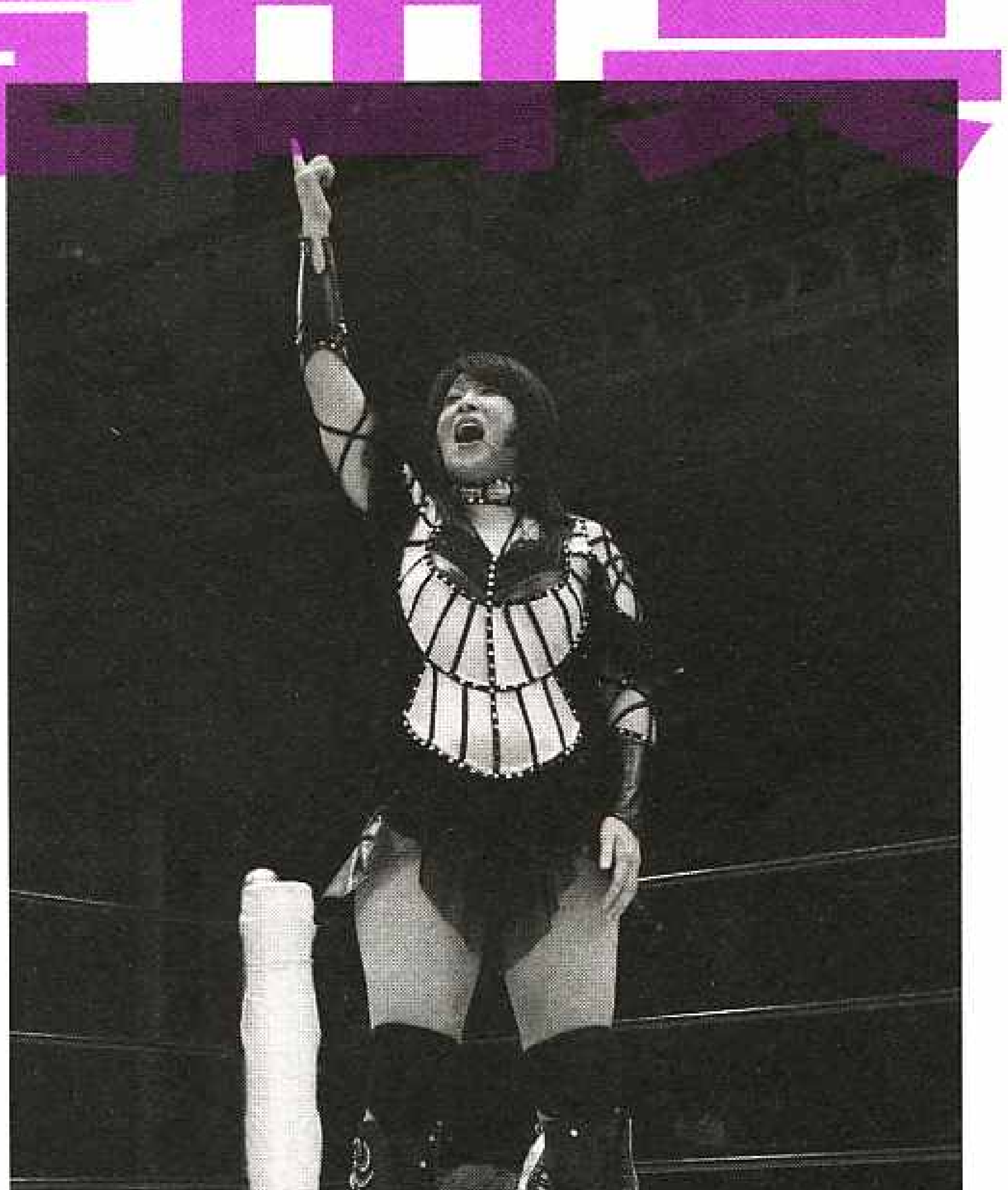
豊田　なんなんですかね？　私はわからないけど、その頃って一人一人だと話すんですけど、3人集まると話さないんですよ。

——へぇ〜、複雑な人間関係だったんですね。

豊田　でもいま言ったこと書かれたら、また英津子にシカトされるかも（笑）。

——もう皆さん大人なんで大丈夫だと思います（笑）。豊田さんは大量離脱があってから5年後の02年に全女を離れるわけですけど、それまで、どうしてお金も出ない全女に残って、どうしてあのタイミングで離れたのかを教えていただけますか？

豊田　あのときは堀田さんもいたけど、私が全女のトップだと思ってたから、二人で支えていかなきゃっていう思いがあって。堀田さんが欠けても私が欠けてもダメだと思ってたし、それについてきてくれる後輩がいたんで。大量離脱後に残った中西（百重）とか高橋奈苗とか、あのあたりは入って1年目ぐらいで何もできなかったときなんですよ。で、私が抜けてガイアに行ったときは、そのコたちがしっかりした試合ができるようになってたじゃないですか。



とよた・まなみ■1971年3月2日、島根県益田市出身。87年5月、全日本女子・後楽園大会での中村幸子戦でデビュー。難易度の高い各種オリジナルホールドを武器に90年3月にアジャ・コングを下し、WWWA世界王座を奪取。08年にアジャとのリングネーム剥奪マッチに敗れ、現在は「豊田魔波」としてOZアカデミーを中心に活躍中。167cm、75kg。

——そうでしたね。

豊田　私はもうここに残ってなくてもどうにかなるって思って。やっぱり全女にいるといろんな制限があって、やりたい人とやれないっていうのもあったし、自分が好きなようにやりたいなと思って。私は全女に対してはもう充分やったと思ったんで。

——なるほど。最後に教えていただきたいのですが、私は、全女っていう団体は世界最狂の団体、世界で最も狂ってる団体だと思ってるんですけど、選手である豊田さんから見るといかがですか？

豊田　そもそも松永一族が頭おかしいですから（笑）。

——皆さんそうおっしゃいます（笑）。

豊田　やっぱり、普通の人とは違う発想を持ってると思うし、だから全女がおもしろかったのかもしれない。

——どのへんが違うんですか？

豊田　一般常識がない（笑）。金銭面だけじゃなくて、常にありえないことばかり考えてるんですよね。

——ちなみに、全女時代のファイトマネーの未払いってけっこうあったんですか？

豊田　そりゃありますよ。ファイトマネーだけじゃなくて、写真集とかのギャラとかもあるし、ウン百万円分とかもらえてないですから。

——トップの豊田さんでも、未払い状態で試合をしたりしてたんですね。

豊田　そうですね。逆に上だったからもらえなかったというのもあるし。

——あ、そうなんですか？

豊田　だって、新人はギャラが安いじゃないですか。だから、わずかのお金の中から、それくらいなら払えるんですけど、自分たちとかだと高くなるから払えない。毎試合もらえなくて、よく生活できてたなって、いまになって思うんですけど（苦笑）。

——大変だったでしょうね。

豊田　最後の最後に「おまえいくらか持ってないか？　それを貸してくれ」って会長に言われたんですよ。

——え〜〜っ、豊田さんにも借りようとしてたんですか!?

豊田　「それがないと今日会社が潰れる」とか言われて、さすがにそう言われたら出すじゃないですか。その時点で自分はスッカラカンですよ。

——会社の前に豊田さんが潰れてしまったと？

豊田　ホントそうですよ。その3日後、人づてに倒産したことを聞いたんですけどね。

——豊田さんが貸したお金も結果的にあまり意味がなかったわけですね。

豊田　そうなんですよね。未払金を全部もらえてたら、いまみたいに苦しまなかったのに（苦笑）。

——波瀾万丈がありましたが、全女についていまはどう思ってますか？

豊田　それでも、全女が最高だと思いますね。やっぱり自分の育ったところなんで大好きですよ。いまでも基本的には〝全女が一番〟です。

——素晴らしい！　今日はありがとうございました。

【09年6月20日／都内・某所にて収録】

イラスト◎ゴローちゃん

ア～メマ～ッ！（両目を赤く光らせてくぐもった声でご挨拶）女子プロレスの未来の可能性をダウジングで探る疑似超能力コーナー『萌え萌え女々苑』。今回のゲストは、アイスリボン選手代表にしてエースレスラーのさくらえみさん！　女子小学生レスラーや元ひきこもりレスラーの真琴など異色の選手ばかりを擁する先鋭すぎる団体の内情をうかがっちゃったもんね！

さくら　私、AKB48とか好きなんですけど、掟さんもアイドルが好きなんですよね？

掟　AKBは門外漢ですけど、アイドルは全般的に好きですね。アイスリボンって、レスラーの人選も含めて、地下アイドルのライブに通じるところがあると思うんですよ。

さくら　へぇ～、そうなんですかね。

掟　以前、モーニング娘。の保田圭のファンだった知り合いが、保田圭卒業と同時にライブにも来なくなっちゃったんですよ。で、どこに行ったかと思ったら、さくらさんがやられていた我闘姑娘で再会して。彼はもともと全女の追っかけをしてたんですけど、妙に納得しました。ファン層は見事にかぶってますよ。

さくら　我闘姑娘とアイスリボンは全然客層が違う感じはするんですよ。で、我闘姑娘のときのほうが勢いがあった感じがして。

掟　我闘姑娘のときのほうが小学生や中学生レスラーが多かったっていうのもあるでしょうね。

さくら　そうですよね。

掟　でも、なんでまたAKBが好きなんですか？

さくら　一回観に行ったんですけど、おもしろかったです！　ホント〝萌え〟で。それに私、若い女の子が歌を唄うのが大好きで。だから、歌を作ってリング上で唄わせてるんですね。でも、「歌はちょっと」とか目立ちたくないみたいな感じで。

第37回
さくらえみ
（アイスリボン）
の巻

さくら・えみ■本名・元川恵実。1976年10月4日、千葉県出身。94年にIWAに入団、翌年8月の富山大会での市来貴代子戦でデビュー。99年の退団後はフリーを経てFMWに入団するも02年に倒産。その後、我闘姑娘を設立。06年11月にはアイスリボン代表となる。09年1月からはアイスリボンの新体制移行に伴ない代表は退任し、選手代表として活躍中。156cm、66kg。好評のさくらブログも読めるアイスリボン公式サイトアドレスは→http://ice-ribbon.ne07.jp/

進んで唄ってくれる人がいないんで、仕方なく自分で唄ってみたり。

掟　レスラーなのに目立ちたくない！　歌とプロレスはまったく別ジャンルとはいえ、リング上で歌を唄うのも女子プロの伝統なんですけどね。でも、さくらさんって、プロレスの枠の中で誰もやってこなかったことをやってきた人だと思うんですよ。小学生レスラーをデビューさせるとか。しかもその小学生が練習していたのが長州さんの道場だったり。インディーを否定し続けてきたあの長州さんのリングに女子小学生が立つというのは、凄いカルチャーショックがあって、自分はそこに感動しましたよ。

さくら　長州さんは、いつも「ケガしないように」とか、冬はストーブを炊いてくれたりとか凄い優しくしてくださって。

掟　さすがの長州さんも気のいいおじさんにならざるをえないですよね（笑）。でも、小学生がやるぐらい、いままでの枠を壊さないと、もうプロレス業界は活路がないんじゃないかと思うんですよ。

さくら　というか、もともとデタラメな世界だったのに、急にプライドばっかり高くて「なんで？」って思うようなことが多くなった気がして。もちろん、やることは一生懸命やりますけど、「そこまで偉いの？」とか思いますよね。身体張ってるからって偉いわけでもないし。それを言ったらサラリーマンだって身体張ってるわけじゃないですか？

掟　どんな世界の人でも身体張って仕事してる人はいて、そこに変わりはない、と。

さくら　業界の未来がなんたらとか言ってるのは、いまやってる人たちが「俺たちは能力がない」と言ってるのと同じになってしまうので。これからも何かおもしろいことをやっていきたいです。

掟　強さという軸に針を振るプロレスが、総合格闘技の隆盛で一度その意味が崩壊してしまったところがあるじゃないですか。だったらこれまでとは違うところにプロレスの視点を持っていく必要があると。そういう意味で、小学生女子プロレスというのは、「ああ、この手があったか」って思いましたね。

さくら　もともと、小学生にプロレスをやらせようと思ってやったわけじゃなくて、やらせてみたら「あ、おもしろい！」っていう。

掟　最初はさくらさんがやっていた体操教室の一環だったんですよね。

さくら　はい。体操教室で、ちょっとドロップキックとか練習させたりしてたんですけど、「できんのかな？」と思って、やらせたら「できた！」みたいな（笑）。

掟　小学生レスラーがけっこうハードな攻撃とか受けてましたよね。胸板が真っ赤になるチョップとか。

さくら　そうですね。やってみたら、私たちが思いつかないような攻防とか、切り返しとかしたりして。頭の柔らかさだったり、身体の柔らかさで生まれてきたものもあって、逆にそれを見てマネしたりとか。

掟　子どもの技とかを素直に取り入れられるのは、さくらさん自身も頭が柔らかい証拠ですよ。

さくら　いえいえ。でも、小学生レスラーも、卒業しちゃったり、いろいろあったりで、少なくなっちゃいましたからね。

掟　新人小学生とかも、まだまださくらさんにスカウトしてもらいたいですね！

さくら　スカウトとかしたいんですけど、いろいろと難しいところもあって。

掟　たとえば、小学生をリングに上げることで、クレームが来たりとか？

さくら　いっぱいありましたよ。あとは、真琴がデビューしてから「さらし者にして」みたいな感じで言われたりとか。

8月23日にはアイスリボンが後楽園に初進出！「kamipro Move」の動画コーナーでは、さくら、真琴、希月あおいが大会を大宣伝！　そして掟vsさくらの一騎討ちも実現!?　掟さん、失神寸前です。140ページをチェックし、いますぐ加入!!

掟　え～、本人がやりたくて始めたのに!?　引きこもりが克服できたっていう、いい例だと思うんですけどね。

さくら　でも、同じぐらい「ウチのコも預かってほしい」っていう声もあって。

掟　ダハハハハ！

さくら　そのへんは難しいですよねぇ。

掟　自分はプロレスのいかがわしい部分が大好きで、UWFスタイルよりも怪奇派とかロートル外人とか、ほかの格闘技では味わえないケレン味こそがプロレスの醍醐味だと思ってて。そういう意味で小学生女子プロレスほどいかがわしいものはないと思うし。8月23日には初の後楽園大会もあるみたいですし、今後のアイスリボンに注目したいと思います！

さくら　掟さんにも観に来てもらえるよう、これからも、いかがわしいことをいろいろやっていこうと思います！（笑）。

Okite Porsche◎掟ポルシェ■イベント&ロマンポルシェライブ予定は7・27(月)新宿ロフトプラスワン（03-3205-6864）『ギョーカイ騒然！　ココロにのこらない話 DVD発売記念イベント』、出演は掟ポルシェ、杉作J太郎、森下悠里、吉田豪、8・1(土)名古屋CLUB UPSET（052-763-5439）『ROCK-IN JAPAN』W／ザ・キャプテンズ、レジオキングほか、その他の情報は掟ポルシェブログを死ぬ気でチェック！【http://blog.excite.co.jp/porsche/】

同級生から見たプロレスラー・三沢光晴

足利工大附属高校レスリング部・元主将
渡部優一
(掣圏真陰流 興義館 館長)

三沢光晴さんの高校時代の同級生で足利工大附属高校レスリング部で主将を務めていた渡部優一。同校の卒業生には川田利明もいて、プロレス界とは非常に縁が深いことで知られている。そんな青春時代を三沢さんとともにすごし、現在もプロレス界に身を置く渡部優一はどのように今回の事故を見たのか？ 生前の三沢さんの思い出とともに語ってもらった。

聞き手／坂井ノブ　写真提供／渡部優一

——渡部さんが最初に三沢さんと知り合ったのは？

渡部　当時はレスリングで日本一だった足利工大附属高校のレスリング部の同級生でした。三沢や1年後輩の川田（利明）と同じ寮に入ってました。練習するのも寝るのも食事するのも一緒でしたね。

——当時の三沢さんはどんな方でしたか？

渡部　当時も最近も変わらなかったです。高校卒業してから全日本プロレスに入って、赤いトランクスを穿いて越中さんとやってた頃や二代目タイガーマスクになってた頃にも何回か会場で会ってたんですけど、本当にあのまま。純粋で、男気が強くて、正義感が強くて。三沢は高校1年生のときに学校を抜け出して、プロレスラーになりたいからって全日本プロレスの事務所に行ったんですよ。学校は大騒ぎになって、僕らはそれを三沢から聞いてたんですけど、先生に聞かれても「知らない」って言うしかない（笑）。夜になったら帰ってきて「（ジャンボ）鶴田さんに会ったら『高校を卒業したら来なさい』って言われた」と。

——有名な話ですよね。

渡部　三沢はその後、国体で優勝するんですけど、そうなると自衛隊体育学校や大学からの勧誘が凄いんですよ。でも、あいつは「高校を卒業したらプロレスに入るって鶴田さんと約束したから」って全部断ったんです。当時の自衛隊には佐々木さんという鶴田さんのアマレス時代の恩人がいて、鶴田さんに「三沢が来てもプロレスに入れるな」って話をしたらし

「好きなプロレスにたずさわれるならリング作りでもいいよ」（三沢）

いんですよね。でも、鶴田さんは3年前の約束を覚えてて、「佐々木さんにはそう言われたけど、高校を卒業したらって約束したんだから頑張ろうな」って言われたという話を聞きました。そもそも三沢はプロレスラーになるために、アマレスを始めた男ですからね。よく練習後に川田とプロレスごっこやってましたよ（笑）。

——先生からプロレス入りを反対されたりしなかったんですか？

渡部 周りの指導者たちは「国体に優勝したからってプロじゃ通用しないよ。全日本選手権を獲ったりオリンピックに出たりして箔をつけてから行ったほうがいいんだから」って言ってましたよね。「せいぜいリング作りで終わりだよ」と言ってる人もいたし。僕らも冗談で「近くに巡業が来たら『リング作りの三沢くんいますか？』って訪ねて行くから、そのときは会場に入れてくれよな」って言ってたんですよ。そしたら、あいつは笑いながら「わかったよ。たとえリング作りでも俺はプロレスが好きだから。好きな仕事にたずさわれるならリング作りでもいいよ」って言いきったんですよ。それを聞いたときは、こいつはプロレスで大成功するんじゃないかなと思いました。

——当時から意志の強さはハンパじゃなかったんですね。その根っこにあるのはなんだったと思いますか？

渡部 彼の家庭の事情だと思うんですよ。当時から「一日も早く好きなプロレスで一人前になって、母親に楽させたい」って言ってましたから。寮でも母親のことは常に気にしてましたね。

——プロレスラーになってからの三沢さんの試合はいかがでしたか？

渡部 マスクを脱いで素顔になってからが良かったですね。それは師匠（佐山聡）も言ってましたけど、どうしてもタイガーマスクの頃は初代のイメージと比べられちゃうし。二代目をやってた頃は会っても元気がなかったんですよ。「やりたくてやってるんじゃねえ」って感じで言ってたこともあったし。でも、ヘビー級のタイガーマスクになってからよくなりましたよね。そして、脱いでからは素晴らしかったと思います。

——素顔になってから鶴田さんと抗争が始まって、四天王時代に突入していくんですが、その頃の試合スタイルが今回の事故につながった部分もあったと思うんですよ。

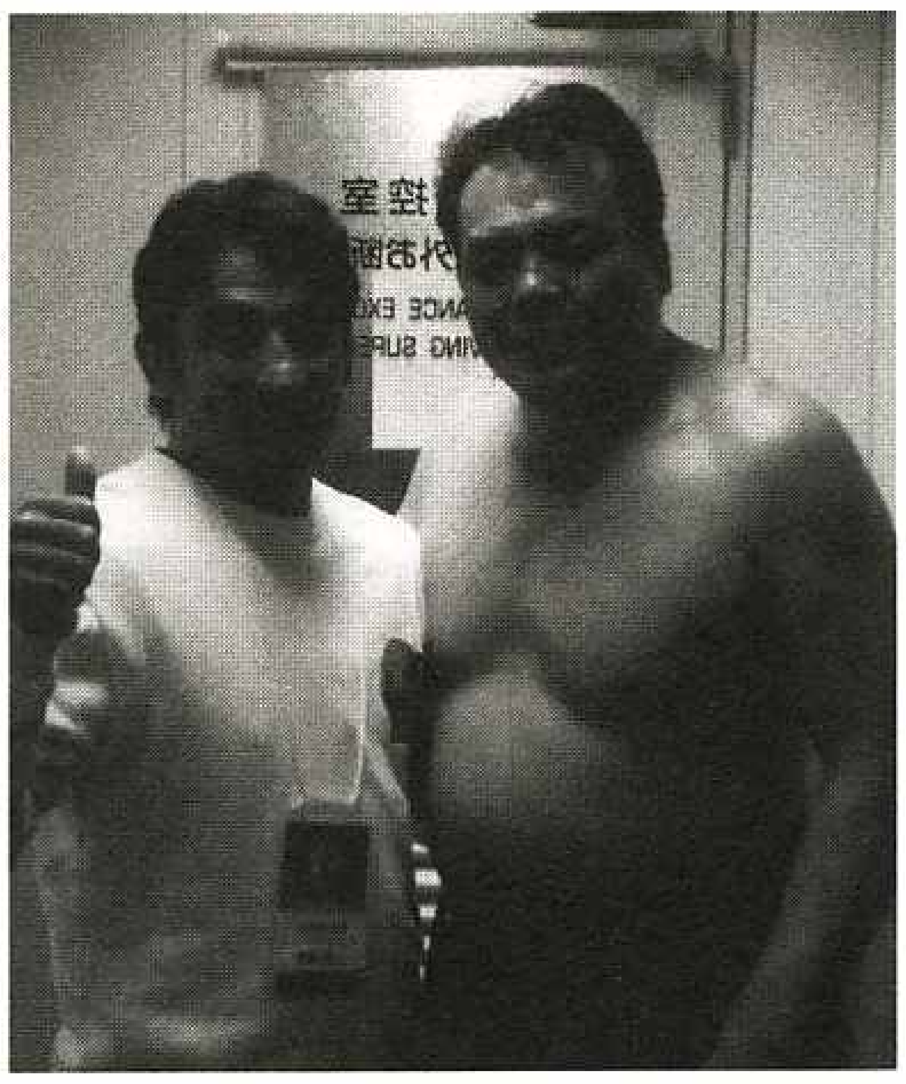
渡部 あるでしょうね。

——どういう状況で今回の第一報を聞いたんですか？

渡部 4代目タイガーからの電話で聞いたんですけど……（沈黙）。いまでも信じられないです。

——その瞬間、何を思いました？

渡部 去年の12月、あいつと師匠が試合したじゃないですか。あのときに、僕は通路で入場を待ってるあいつのところに行って「今日はおまえの応援するからな」って言ったんですよ（笑）。そしたらニコっと笑ってね。「まさか、こんな日が来るとは思わなかったんだ。三沢と同期だったことを誇りに思うよ」って言ったら、あいつも笑ってくれて。入場曲がかかって「じゃあ、行ってくるな！」ってあいつが言ったときに、そのうしろ姿が凄く輝いてたんです。第一報を聞いたときにビックリしたけど、そのシーンを思い出したんです。あいつを送り出したときに、じつは少しうらやましかったんですよ。注目を浴びる中で試合ができていいなぁって。でも、いま思えば、あれが彼の人生だったのでしょうか。短い時間でも輝いて生きて、プロレスに殉ずるということが。



わたなべ・ゆういち■1962年11月9日、栃木県足利市出身。初代タイガーマスク・佐山聡に師事して初期のシューティングで活躍、初代ウェルター級チャンピオン。その後にはマスクマンとしてインディー団体にも参戦していたが、現在は佐山のもとリアルジャパンで活躍している。

——輝いたうしろ姿、ですか？

渡部 銀色に光り輝く神々しいほどの眩しさでした。だからうらやましかったんです。でも、いまは思いますよ。僕にはできない。自分はシューティングとか格闘技をやって、プロレスも少しかじってきましたけど、プロレスをやりながらもどこかでプロレスを醒めた目で見てた部分もあったんです。今回の事故のことを聞いて、僕は三沢の足元にも及ばない。なぜあいつが輝いてたか、よくわかった。それは命懸けでやってたからですよ。僕にはとてもじゃないけどできない。凄い男だなとあらためて思いました。あいつはプロレスを愛するがゆえに、最期までプロレスラーをまっとうしたんです。

——初代タイガーと三沢さんの試合はどうでした？

渡部 あの二人がリングに立つだけで「わぁ～」ってなっちゃって、単なるファンになってました。リング下に座ってたら、ちょっと目が合った瞬間にフッて笑ってましたけど。師匠と三沢が闘うなんて想像もしてなかったんで感無量でしたね。

——それが去年の12月ですけど、半年経った6月の後楽園大会では渡部さんも三沢さんの遺影を持ってリングに立ちました。

渡部 最初は断ったんです。あいつの写真は僕が持てるようなものじゃない。つらかったですよ。僕はあの日、試合を休んだんです。気持ちが完璧に切れてましたよね。これからもどうなるかわからないですけど、とてもリングには上がれない。あいつと同じ意識レベルにまで到達できれば、リングに上がれるでしょう。そこまでなれないなら、命懸けでプロレスをやってた男に申し訳ないという気持ちのほうが大きいです。命を懸けるって言葉だけじゃなくて、実際にそうなった。それをまざまざと見せつけられたときに、同期であるがゆえに、あいつがそこまでやったものを僕なんかがふざけた気持ちで上がるべきじゃないっていう気持ちはありますね。

——三沢さんのプロレスを渡部さんはどう見てましたか？

渡部 危なかったですよね。そういう言い方が適当かどうかわからないですけど、何度か頭から落ちるシーンを観て、よくあんなことができるなぁ、凄いなぁって思ってましたよ。

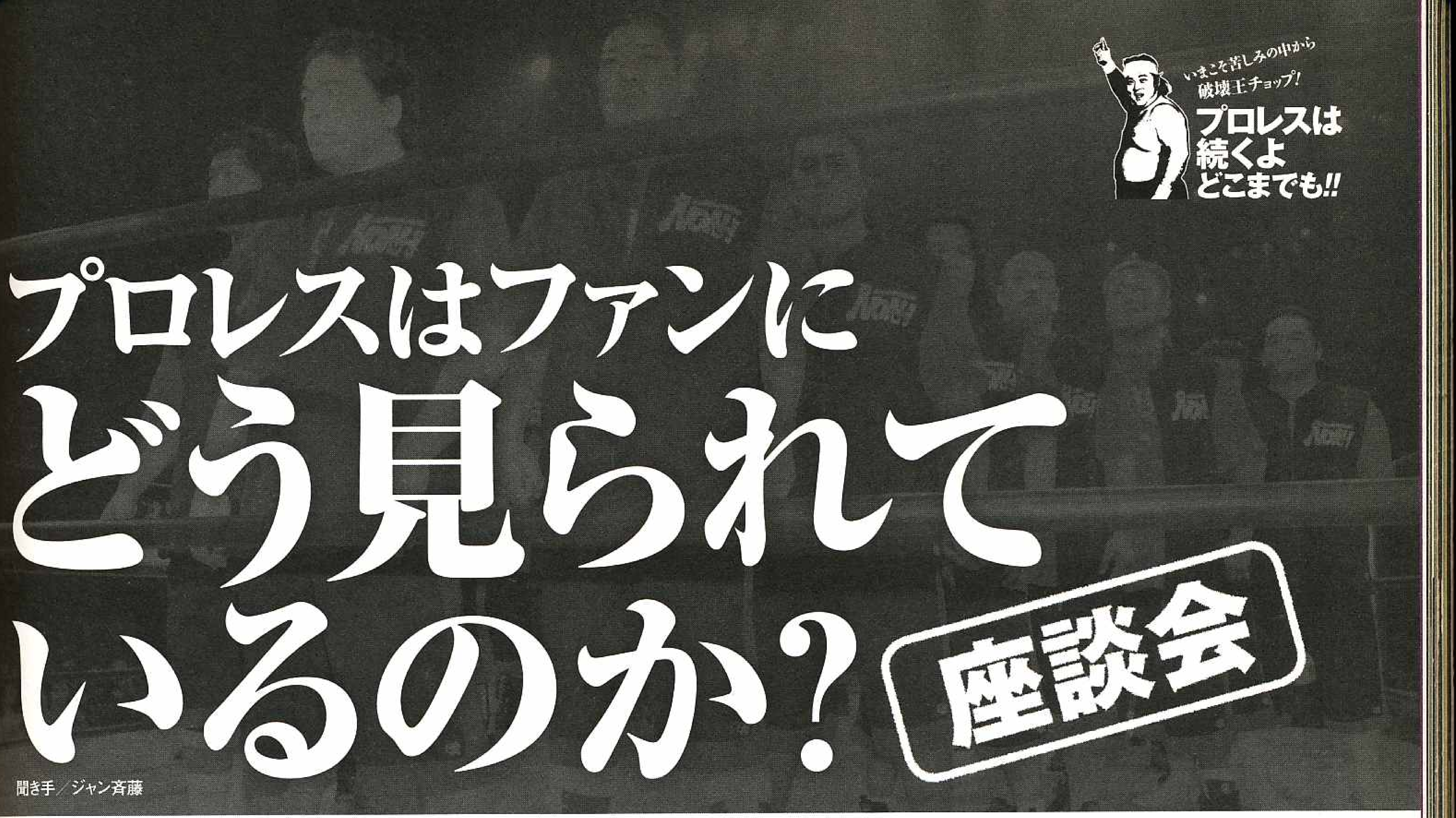
——いくら受け身を取るとはいっても、絶対にダメージはありますよね。

渡部 でも、それだけ危険なプロレスをやり続けたんですから、凄い男ですよ。高校生の頃に「好きなプロレスにたずさわれるならリング作りでもいいんだ」って言ってたじゃないですか。それをいまに置き換えると「好きなプロレスをやってるんだから……不惜身命だよ」とも聞こえますね。去年会ったときには、「身体がきついから、そろそろ辞めたい」って言ってたんですよ。

——では、最後にいまの三沢さんに言葉をかけるとすると、どんな言葉になりますか？

渡部 「やっぱり、おまえは凄いよ」って言いたいですね。去年見たうしろ姿が神々しく輝いてたのも、あそこまでやってる人間は輝くよなって納得してます。本当にかっこいい。凄い男ですよ。

【09年6月30日／都内・興義館にて収録】



プロレスはファンにどう見られているのか? 座談会

聞き手／ジャン斉藤

『kami-pro Special 2009 JULY』に掲載された「格闘技はファンにどう見られているのか?」座談会に引き続き、プロレスバージョンを開催でございます。出席者は前回と同じく本誌発行元エンターブレインの社員の方々なんです。

――今日は「プロレスはファンからどう見られているのか?」というテーマでプロレス業界外の皆さんにお集まりいただきました。まずはそれぞれ、自己紹介からお願いします。

中村　エンターブレイン広告部の中村了です。僕は格闘技に凄く興味があって大好きで、その流れでプロレスを見始めました。どちらかといえば、いまでも格闘技のほうをよく観てるんですけど。

伊藤　マジキューコミックス編集部の伊藤ヒドラ(仮名)です。ボクは古くからのプロレスファンで(笑)。ノアの武道館大会はほとんど観に行ってて、プロレスの原体験はジャンボ鶴田vsミル・マスカラスの3本勝負です。

――1977年のことだから、ホントに古くからですね(笑)。

藤田　ライブコンテンツ部の藤田隼人です。僕の場合はもともとそこまでのファンではなかったんですけど。高校のときに「テーブルトーク」っていう遊びの中で女子プロを素材にしたゲームがあって、それがきっかけでプロレスを見始めました。決定的だったのがUWFインターvs新日本の対抗戦の高田延彦vs橋本真也です。そこからもう橋本にどっぷりとハマった感じですかね。いまはメジャーを離れてインディーのほうにいっちゃったというか。去年、一昨年で一番観に行ったのが666(トリプルシックス)です(笑)。

――666ってホントに評判いいですねぇ。それでさっそくお聞きしますが、皆さんは三沢さんが亡くなったことを聞いてどう思われましたか?

藤田　ショックはショックだったんですけど、いままでずっときわどいプロレスを続けてきたこともあるのかなって。ただ、一番のファンだった橋本選手が亡くなったことを体験してるので、そこまでのショックは受けてないです。

伊藤　ボク、泣いちゃいましたねぇ……。当日、同僚のプヲタやらネットで知り合ったプヲタの方々からも連絡が入って。で、いよいよ「ホントなのかな……」と思っていろいろ調べたら、事実だということがわかって。そこからボンヤリしながら動画サイトで三沢の試合を朝まで観てました。

――プロレスに対して少し距離がある中村さんはどうでした?

中村　ショックはショックでした。全日時代の四天王プロレスは観てたし、それにちょうど映画『レスラー』の劇場公開日と重なってたじゃないですか。「三沢が死んだのか……」って思いながら『レスラー』を観に行き、そこで泣きました。

――ああ、『レスラー』と重なるところはありますよね。

藤田　やっぱり、いままでのダメージの蓄積もあったと思うんですけど、「広島大会にはリングドクターが帯同していなかった」って話だったじゃないですか。ノアって、なんだかんだ言って選手を大事にしているイメージがあったんで、そこはけっこう意外だったんですけど。

――ノアファンの伊藤さんは、三沢さんの体調はどうご覧になっていたんですか?

伊藤　最悪だったと思います。振り返ってみると、2007年に三沢が『東京スポーツ』のプロレス大賞MVPを獲ったときって、あの一年間、三沢は老体に鞭打ってGHC王座の防衛ロードを続けて。ボクはあの防衛ロードをけっこう生で観てたんですけど、ぶっちゃけつまんなかったんですよ。

――どんな防衛ロードですか(笑)。

伊藤　「プロレス大賞もいかがなものか?」って感じだし、佐野(巧真)vs三沢とか「こりゃないわ」みたいな内容で日本武道館が半分くらいしか埋まってなくて。だから、あの時点で三沢はもうレスラーとしては終わってたと思うんですよ。終わっていたのに周りが止めてあげられなかった。『週刊プロレス』の三沢追悼増刊号で仲田(龍)取締役が「『社長、試合に出なくていいです』って言えなかったのはボクのせいです」って泣いてたけど。そのとおりかもしれない、と思いましたね。

――その07年の防衛ロードは、若手のエース格だった丸藤正道からGHCのタイトルを奪ってスタートしたんですよね。以前、『kami-pro』の編集部員にノアファンがいたんですけど、彼が言っていたのは「ノアの運命が狂ったのはあのとき三沢が丸藤に勝ったからだ」と。つまり「どうして若手の丸藤に未来を託さなか

ったんだろう?」と。

期の頃って、凄く嫌々やっているよ

大会、観に行くことなんてことはで

したけど、結局10回目であきらめま

証をしているプロレスマスコミもあ

ったんだろう？」と。
伊藤　あのとき三沢が2回とも丸藤に勝っちゃったんですよね。
藤田　「丸藤はジュニアヘビーだから」っていう理由なんですかね。そういう格の問題は、馬場さんの頃から脈々とあるんだと思いますけど。
伊藤　あのとき、ファンはみんな丸藤が勝つと思ってましたよ。とくにベルトを奪われてからのリターンマッチのときは間違いなく。
藤田　定石だったらそうですよね。
伊藤　ただね、会場は基本的に「三沢！」コール一色なんです。もしそれで団体側に勘違いされてしまったとしたら凄く残念なんですけどね。会場では「三沢！」コールになるんだけど、みんな心の中では「丸藤が勝つべき」って思ってたんだから。
藤田　「三沢！」コールになるのはしょうがないですよね、どうしても。
伊藤　うん。だって三沢がホントにくたびれた中年戦士の代表みたいに見えるんですよ。汗がダラダラで、顔色は真っ白で、若いヤツの技をバンバン食らうじゃないですか。そうしたらボクらみたいな連中はみんな「三沢！」って応援しちゃうに決まってるんですよ。
――無理して身体を張ってるわけですしね。
中村　『レスラー』を観たあとだからっていうのもあるかもしれないですけど、もう誰も止められなかったのかもしれないですね。それに、好きでやってるわけでしょ？
――いや、そこは凄く考えどころですよね、じつは。
藤田　う〜ん、馬場さん全日本の末期の頃って、凄く嫌々やっているように見えましたよね。ケガをしても欠場すると給料が出ないっていう環境だったらしいんで。無理してでも出なきゃなんなかったのかなって。
伊藤　好きでやってるレスラーと、そうじゃないレスラーは確実にいると思いますけどね。逆に大手の団体が「仕方なく」ってところがどんどん増えてると思います。責任があるから休めないし、看板役者だったら無理するわけであって。
――そういう過酷な環境、低迷する人気もあってか、ここ数年のプロレス界って、ファンの愛情だけで支えられてますよね。
伊藤　ああ〜、確かに観る側の愛情だけで成立しているところはありますね。
藤田　それは凄くありますよ。
伊藤　でも、そんなにファンに頼られても困るんですよ（笑）。
――ダハハハ。
伊藤　ファンは毎大会、観に行くことなんてことはできないし。ボクだってノアに行きますけど、やっぱビッグマッチオンリーです。だって、そんなにお金はないっていうか、ほかにもいろいろ興味がある中にプロレスがあるだけなんで。
藤田　ボクも昔、絶対に月イチでZERO-ONEを観に行こうとしましたけど、結局10回目であきらめましたから。

いまのプロレスは観る側の愛情だけで成立しているところはある

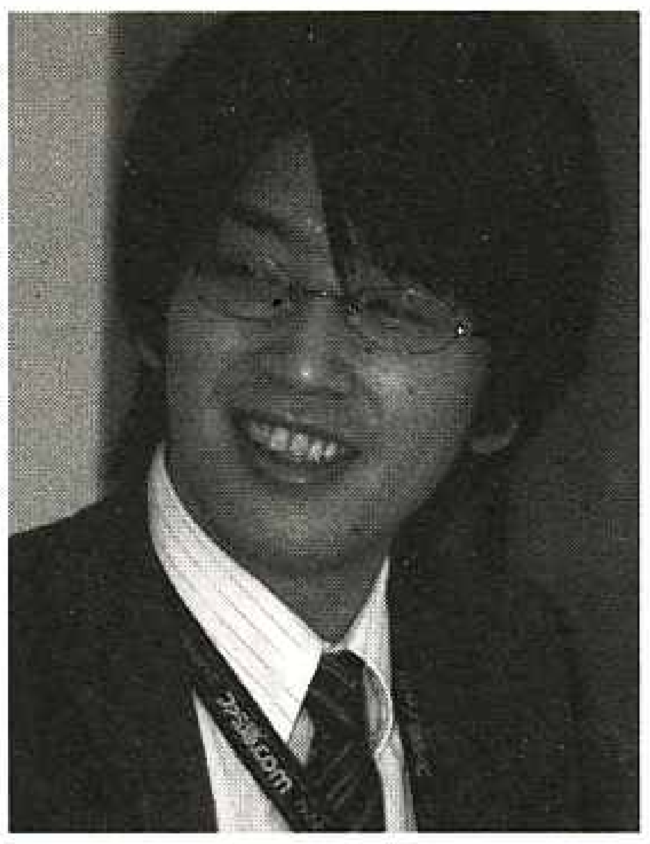
流れ流れて“どインディー”マニア
藤田隼人

橋本真也が入り口で、いまや666に通い詰めるというプロレスファンの終着駅。こんな人が1万人いたらプロレス界は安泰というか、かつてはいたんですよ!

ノアヲタだけはガチ
伊藤ヒドラ（仮名）

ノアヲタにしてザ・プロレスファンというべき姿勢を見せてくれた伊藤さん 。こんな人が5万人いたらプロレス界は安泰というか、かつてはいたんですよ。

総合のほうが好きです
中村了



冷たく見える中村さんですが、世間のプロレスへの関心はもっと冷たいんです。こんな人を虜にすればプロレス界は安泰というか、かつてはそうできていたんですよ。

――どうしてあきらめたんですか？
藤田　「もういいや……」と思っちゃって（笑）。だんだんお金がキツくなってきて、「今回はいいや」とあきらめたら、そのままぱったりと行かなくなって。その代わり、12月にクリスマス興行3連戦をやったときは全部行きましたけど。
――その代わり3連戦は行ったんですか！（笑）
本誌・松林　急に話を変えて申し訳ないんだけどさ、昨日の『ハッスル』後楽園大会を客席で観ていたんだよね。そうしたら、オレの隣の席に〝プロレス愛〟にあふれた二人組が座っていて。川田利明とマグナムTOKYOのシングルマッチが始まったら、いきなり「やっぱりアマレスのベースがある川田は、動きが違うよな」って会話をしてるんだよ。
伊藤　そ、そ、そんなトークはやめてくれぇ！（笑）
松林　しかも「やっぱりロックアップしちゃうと、川田とマグナムじゃあ身体の厚みがまったく違うわ」とか言っているわけ。
伊藤　うわ〜、ギブギブ！　ボクにも愛はあるけど、そういう目線のトークはできない。
松林　リング上よりもそっちの会話のほうが格段に興味深くてさ。「すげえな。まだ、ちゃんとこういう〝超スーパーエリート〟なファンがいるんだ……」って驚いたんだよね（笑）。
――でも、この時代に三沢vs小川直也を引き合いに出して、「三沢のレスリングテクニックは……」という検証をしているプロレスマスコミもありますからね。
伊藤　あれは馳（浩）の解説が最高なんです。「三沢は凄いよぉ〜！」って。
中村　あの〜、プロレスに強さの幻想というか、付加価値みたいなのをつけるのって正直、いまさら感はあるんですよ。「それでプロレスがおもしろくなるのか？」みたいな。もちろんプロレスラーも強さを売りにしてる部分があるから、ファンとしてそういうふうに語りたいのはわかるんですよ。ただ、一度プロレスから距離を置いてその図を見てみると、もの凄く違和感があるんですよね。だから僕がいますんなりプロレスを観られるのは、強さの主張だけではないDDTや『マッスル』なんですよ。
――そこはカミングアウトの問題にもつながってきますよね。日本の場合はその曖昧さが魅力とはいえ、レスラーや関係者にはいまだにモヤモヤしたものがありますけど。
伊藤　だからそこでモヤモヤするのは、世間がいきなり上から目線、蔑み目線だからなんですよ。プロレスを知らない人間がバカにした感じで「八百長なんでしょ？」って聞いてくるのがイラッとくるんですよね。
――プロレスを上から目線を語るな、と（笑）。でも、このまま曖昧にしておくことでの弊害ってあるんじゃないですか？
伊藤　それはあるでしょうね。ショーだと割りきったところでアメリカみたいになる気もしないですけど、このまま行ったらプロレスはどこかでパッと消えてなくなるんじゃないかなって。こんなボクみたいなアラ

フォーなファンはいなくなるのかなあって思うけど。

――いなくなりますか（笑）。

伊藤　……と思うんですけど、その裏でボクらがあまり気にしてないドラゴンゲートは新しい客がいっぱいいるわけじゃないですか。ボク、ドラゲーとかもたまに観るんですけど、客層が全然違うんですよ。女の子たちに埋もれてボクらは観てたんですけど、その日はたまたまアンハッピーエンドなオチだったんです。そうしたら、ボクらのうしろの席に座ってた40代ぐらいのオバちゃんが「正々堂々と闘えー!!」みたいに絶叫して（笑）。

――ダハハハハ！

中村　ドラゲーくらいになると強さもへったくれもない、ビジュアルのいいレスラーが闘ってますから。独自の世界になってますよね。

――ほかにそういった独自の世界観がある団体はどこですか？

中村　ＤＤＴにはありますね。

――すると『マッスル』もある？

中村　ありますねぇ。そうすると新日本、全日本、ノアがイベントとして非常に微妙な感じになってるんだよなあ。なんか、たまに会場に行ってもボーッと観るしかないんですよ。

――ボーッと観てるって（笑）。『ハッスル』も微妙じゃないですか、ここ最近は。

伊藤　おそらく、『ハッスル』って、みんなお笑いだと思って観に行ってるはずなんですよ。でも、わりと真剣なプロレスをやられちゃってドン引きしてみたりとか。

藤田　『ハッスル』って自分の中ではカテゴリー的にいまいちよくわからない位置にいて、プロレスとして観に行っていいのか、『ハッスル』っていうものとして観に行っていいのか、後者なのかなと思ってたまに観に行ったりすると、ガッカリしちゃうイメージがあるっていうか。

伊藤　見方がよくわからないですよね。『ｋａｍｉｐｒｏ』さんの誌面からも消えましたもんね。

――いつのまにか、パッタリと（笑）。

伊藤　ボクは『ハッスル３』くらいから見させてもらってて、ガラガラの横アリ大会とかも観てて、「これ、大丈夫かな？」とか思ってたんですけど。和泉元彌のときは感動して「もしかしたら凄いかもしれん」と信じかけた……けど、結果として無理だった。

――いまの『ハッスル』は宗教的なパワーが薄くなっちゃいましたよね。やっぱりプロレスも格闘技も宗教じゃないとダメだと思うんです。それは愛情にも似ている部分で「それでも信じなきゃならない」と思わせないといけないというか。一時期は「プロレスとはストロングスタイルである」というところにファンもマスコミも乗っかってたわけじゃないですか。いまはどのプロレスを信じればいいかわからなくなっている。

松林　プロレスマスコミ自体に、とくにその傾向が見られるよね。

――いまは「我々の宗教ではこういったことは絶対にやりません」って主張してきたことが何もなくなってきてますね。ノアや『ハッスル』が苦戦してるのは、彼らを支えてきた宗教的要素が崩れてきたからだとは思うんですね。そういう中で、まったくプロレスを知らない人にプロレスを見せるとしたら、皆さんはどの団体を選びますか？

伊藤　それはやっぱりＷＷＥじゃないですか。

藤田　オレ的にはＤＤＴかなあ。

中村　僕もＤＤＴですね。ＤＤＴかドラゲーだと思いますよ。ひと目で観てわかりやすいから。

クマのぬいるぐみを着てUWFルールで闘うレスラーもいれば、頑固としてプロレスを守ろうとする関係者もいる。どれもこれもプロレス！……なのか!?

プロレスが対世間で話題になることは二度とないと思ってるんです

藤田　確かにキャラクターがはっきりしていて、必ずやることを確実にやってくれるっていう。

中村　新日、全日、ノアって、その選手の人となりとか歴史がわかったうえで観るとおもしろいですけど。その歴史をスパーンと切って「はい、初めて観てください」って言われると、初めての人はわかりづらいと思うんです。でも、ＤＤＴとドラゲーは興行の流れの中で観客が飽きないような作りをしてるんじゃないですかね。

――一つのショーとしてお客さんのことだけを考えている感じですか？

中村　はい。ＤＤＴやドラゲーは会場に来た２０００人に向けて、どれだけおもしろく感じさせるかってことに一番燃えてると思いますね。

藤田　最近のメジャー団体って、ストーリーラインがよくわかんないですよね。

中村　確かに。

藤田　昔はストーリーラインがあったうえで大会場へ続くっていう流れがあって、途中を観てなくても最終的な場面を観たらなんとなくわかるっていうところはあったじゃないですか。最近はよくわかんない。たとえばノアの軍団抗争って、個人的にはどっちらけになるだけなんで、いらないと思うんですよね。

伊藤　ノアはね、なんにも考えてなかったんだと思うんですよ（笑）。

――でも、パイだけで見ると新日本やノアのほうがドラゲーやＤＤＴより上なんですよね。

中村　ドラゲーやＤＤＴでは話題にならないですよねぇ。『週プロ』でも表紙はよう取れんし、スポーツ新聞でも取り上げられないし。

伊藤　スポーツ新聞っていうコミュニティの中では新日本とかがメジャーなんだよね。

中村　でも、そもそもいまの20代以下の層ってスポーツ新聞なんか絶対に読まないですからね。そこから拡がりようがないうえに、だいたいプロレス自体が対世間で話題になることって、もう二度とないと思ってるんですよ。

――二度と浮上はできないですか（笑）。まあ正直、ここ5～6年間のプロレス界で、選手の訃報以外の一番大きな話題って、和泉元彌の『ハッスル』参戦でしたしね。

中村　ホントに話題にならないし、いまはメジャーとインディーに分けてますけど、外野の僕からすると一緒くたでインディーっていうか、プロレスっていうジャンル自体がインディーって感じだと思います。結局、単館上映の映画みたいに「好きな人が作って、好きな人が観に行く」っていうジャンルになっていくかなって思ってます。

――単館上映プロレスですか（笑）。

中村　ええ。こんなことを言ってると、ファンから刺されたりするんじ

ゃないですか？

抜きにはノアは観れていなかった。

いけるように」っていう。ボクもノア

意識的に観てないんですけど（笑）。

――逆ギレじゃないですか（笑）。

ゃないですか？

伊藤　いや、いま中村くんが言ったことが多くの人の意見だと思いますよ。プロレスファンの多くもじつはそう思ってるでしょう。

藤田　言いたいけど、言えないっていう。

伊藤　これはさっきも少し言ったんですけど、昔のブームのときに観てた人たちはいっぺん去るしかないかなという気はしてます。昔の文化のままのプロレスはいっぺん終局を迎えて、ファンもいっぺんいなくなるっていう流れになったほうがいい。というか、今回、三沢さんが亡くなってプロレスファンをやめたって人は凄くいると思うんですよ。「もうこれ以上は……」っていう。さっきも言ったとおり07年頃から、もう愛情抜きにはノアは観れていなかった。だけど、その愛情を注ぐ相手ももういないっていう。

藤田　オレ、ファンをやめる心理ってよくわからないので、そのへんがピンとこない感じはあるんですけどね。

伊藤　その感覚もわかりますけどね。取引先のメーカーさんの方でボクより年下なんですけど、猪木信者を称する人がいて「ＩＧＦのチケットは買うんですけど、会場には行きません」って言ってました。「それでも猪木さんのためになるなら」って。

藤田　……ある意味でホンモノの人ですよね。

——そこまで狂わせないとジャンルって成立しないんでしょうね。

伊藤　だからチケット代って「お布施」じゃないですか。「団体が食っていけるように」っていう。ボクもノアのチケットを買いますけど、前座は観ないことが多いですもん。１試合しか観たいカードがないときがあるけど、それでもチケットを買うことはある。ノアの前座はさ、志賀賢太郎や(本田)多聞ちゃんもそうですけど、正直、リング上の動きが観ていてつらい人が多い。だから観られない。多聞ちゃんとかあのへんの人たちに何かを期待しちゃいけないですよ。「やれない人たちに何かを期待するのは間違いだよなあ」って。

——それも愛がないと受け止められないですねぇ。

伊藤　受け止められないというか、意識的に観てないんですけど（笑）。でも、嫌いじゃないんですよね。井上雅央vs秋山準のタイトルマッチも武道館に観に行きましたからね。誰も期待していないタイトルマッチ。半分しか客が入っていない武道館。試合もホントにヒドい。コアなファンとしては、もう笑うしかないわけですよ。

藤田　何を期待して観ればいいのかわからないわ。

伊藤　マニアックなファンは「案の定の内容だった」と。だけど「このままじゃ帰らねえ！　絶対にストンピングしてやる。金を払った以上、楽しむぞ！　オレは」っていう。

——逆ギレじゃないですか（笑）。

伊藤　そういうパラドックスっていうか、キ○○イ的なところがありますよね。ボクらの、いや、ボクらって言っちゃいけないな。ボクの場合はいい大人だから、プロレスの、ノアの揚げ足を取るようなことは言いたくない（笑）。「そんな野暮なことを言ってもね……」って事を荒立てたくない。そういう愛を持ったファンがプロレスを支えてるんですよ。ただ、それを突き詰めていくとだんだんつまらなくなっていくと思うんですよね、みんなが意見を言わなくなるから。愛がある大人が多すぎてプロレスがつまんなくなっていくっていう。

——愛がプロレスを生かしているけれど、愛がプロレスを殺しているところもある。

伊藤　宗教というか、自分本位というか。そういうファンはもう消えるのみですよ……。

——レスラーもつらいですけど、プロレスファンも大変だ（笑）。

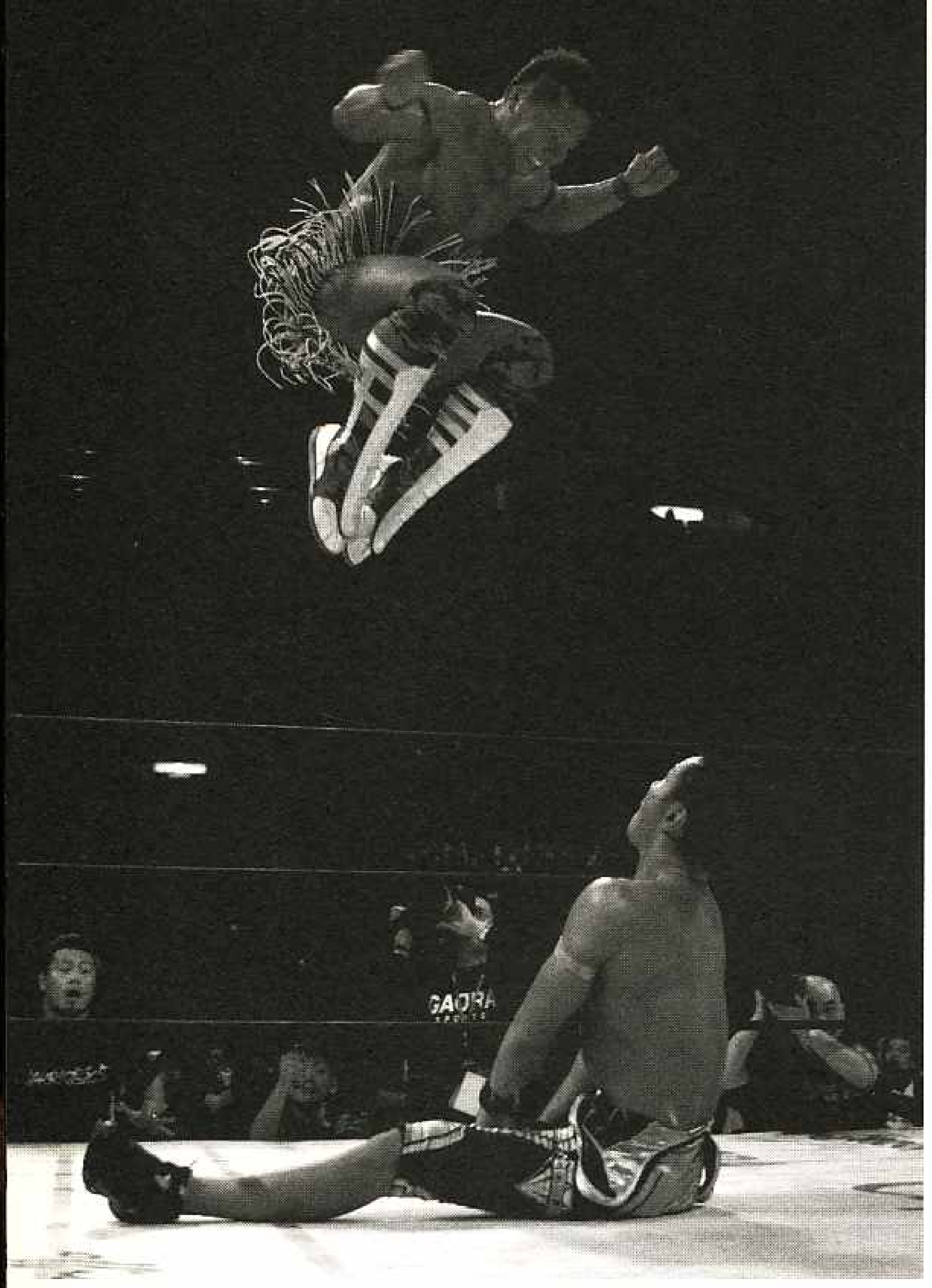
中村　僕はそっちの人間じゃないから、気持ちはわからないですけど。

伊藤　何を言ってるんだよぉ。こっちへおいでよ（笑）。

——まあ、とにかく今後もプロレスをよろしくです（笑）。

【09年6月27日／エンタープレインにて収録】

初心者にオススメしたいプロレス団体はドラゴンゲート、DDTです



"リング外"の猿虐待騒動で揺れるも"リング内"の支持率はあいかわらず高いドラゲー。DDT、666もみな口を揃えて絶賛している。

いまのプロレスを観るならこれだ!?
プロレス特集内で評判がよかった団体です!!

その1

『暗黒プロレス組織666（トリプルシックス）』
新木場1stRING
7月25日（土）開始18:30

チケット料金
社長と心中シート（最前列）¥6,000
怨霊憑依シート（二列目）¥5,000
毒舌！ラム会長シート（指定）¥4,000
※ 当日、浴衣、甚平、水着でご来場のお客様にはプレゼントを進呈！

オフィシャルウェブサイト
http://www.triplesix.jp/

その2

DDT『両国ピーターパン～大人になんてなれないよ～』
東京・両国国技館
8月23日（日）開始17:00

チケット料金
スペシャルシート¥12,000／マス席A¥10,000／マス席B ¥7,000／マス席C ¥5,000／2Fイス席A ¥5,000／2Fイス席B ¥4,000（当日は全席種¥1000増し）

オフィシャルウェブサイト
http://www.ddtpro.com/

その3

『ドラゴンゲート』
8月大会

1日（土）	京都・KBSホール	18:00試合開始
2日（日）	京都・KBSホール	17:00試合開始
5日（水）	千葉ポートアリーナ	18:30試合開始
6日（木）	東京・後楽園ホール	18:30試合開始
7日（金）	奈良・なら100年会館	18:30試合開始
8日（土）	愛知・刈谷あいおいホール	18:00試合開始
9日（日）	和歌山・田辺大塔体育館	14:00試合開始
10日（月）	栃木県立県南体育館	18:30試合開始
14日（金）	富山テクノホール	18:30試合開始
16日（日）	愛知・名古屋国際会議場	16:00試合開始
22日（土）	静岡・アクトシティ浜松	18:00試合開始
23日（日）	兵庫・神戸サンボーホール	17:00試合開始
25日（火）	静岡・キラメッセぬまづ	18:30試合開始
26日（水）	東京・後楽園ホール	18:30試合開始
30日（日）	福岡・博多スターレーン	16:00試合開始

オフィシャルウェブサイト
http://www.gaora.co.jp/dragongate/

～特集の結論～
プロレスファンも大変だって！

ちょっと暑くなってきたからって、なんだい、その下がり眉毛なフェイスは。そんなことじゃ、ファンキーなサマーを堪能できないぜ! ファンキーといえば、この前、道で1,000円拾ったんだが、その1,000円をこっそり財布に入れようとしたら、脇にいたちっちゃいガールにドロボー呼ばわりされたぜ。まったくガキは融通がきかないからお手上げだ……。でも融通のきくユーたちはオレのページを存分に楽しんでいってくれよう!! それじゃあチェケラッチョ!

JULY号へのお便り紹介

川尻達也さんの記事は読みやすいし楽しかったです。MMAファンとしてK－1ルールでの参戦はどうなの？ って思ったりもしたけど、川尻選手ならやってくれると思いました！ 声が涸れるぐらいの野太い声を出して応援したいと思います。

【茨城県・張替美智子さん・保育士・23歳】

Dおっと、これはタツヤにガールズファンが増えてきた証拠だな。まったく、タツヤはどこまでビッグになっていくんだい。オレとミツヒロ・イシダと3人で海を見に行った日がウソのようだぜ。……ま、それはウソなんだけどな！

菊田早苗と宮戸味徳の対談は昔ながらのファン以外は、意外な組み合わせだったのではないでしょうか？ 話の中身はもちろん、ひたすら「ラーメン入れて食べたい」と言い続ける宮戸だけはガチ！

【福島県・毒柴さん・変態福島県支部長・38歳】

Dミヤトってヤツはプロレスだけじゃなくて、クッキングにもうるさいのか。こんなヤツがシュウトメだったら、相手が吉永小百合でも、オレは一日で離婚するぜ！

所さんのインタビューがおもしろかった。いままで格闘技雑誌なんて買ったことがなかったのですが、5月26日のDREAMを観て所選手とカラム選手の試合に感動して格闘技が好きになりました。これから『kami-pro』をチェックします。

【東京都・菊田恵梨さん・会社員・30歳】

D格闘技雑誌を買ったことがないガールに『kami-pro』が引っかかるなんて、やったじゃないか、編集部員さん。若干、読者の若返りに成功してるんじゃないのか？ 編集部員はどんどん高年齢化しているみたいだけどな。クックックック。

髙阪剛×須藤元気がおもしろかった。私も『DREAM・8』はPPVで観てたので、フツーにおもしろいと思いました！ 以前は「須藤元気の解説、あれはアリなの？」と思うぐらい大笑いしながら観てましたし、もうこの二人の解説じゃなきゃイヤだ!! と思っていたので、この企画はすんごく嬉しかったです！『戦極』のPPVもやってくれればおもしろくなるのにと思います。ダメ？ でも、本当にそう思います。

【埼玉県・笠井のり子さん・会社員・37歳】

D『戦極』の解説もこの二人でやろうってのかい？ そりゃ、アキヒロ・ゴーノがしょんぼりだぜ……。オレはゴーノの解説が好きだ。金的のときはたまらなくナイスな解説をするからな。ユーも見逃すなよ！

谷川さんインタビューがおもしろかった。谷川さんのファンだから。

【新潟県・南雲正志さん・会社員・52歳】

Dサ、サダハルンバのファンだってぇぇぇぇ！ こりゃ『kami-pro』始まって以来の投稿だな、オイ。ああ見えて、じつはナイーブかもしれないから、サダハルンバもきっと喜ぶだろうな！ グッジョブ！

いま、DREAMフェザー級の主役は高谷裕之だと自分は思っている。なぜならKOが凄い似合うから。ファンとしても、凄い盛り上がる試合が高谷裕之選手の試合で観れるから！

【埼玉県・高橋徹さん・会社員・23歳】

Dひょっとして、ユーはタカヤグンダンの一味かい？ オー・マイ・ゴッド！ オレも一時期はグンダンを率いたもんだった。しかし、いまやバンドのメンバーは一人もいない……。おっと、オレはウルフルケイスケじゃないぜ！ ま、似てるけどよ（似てない）。

チェ・ホンマンのインタビューがおもしろかった。チェ・ホンマン選手のバッシングは何をしてもやられるような感じで、心配していました。それでも今回はコンディションもよくなってきたようなので、ぜひ〝スーパーハルク〟の称号を得てほしいです!!

【福島県・紺野春樹さん・会社員・29歳】

Dチェ・ホンマンのバッシングに胸を痛めてるなんて、なんてハートにゆとりがあるボーイなんだい。ホンマンもジャパニーズのハートのやさしさにはグッとくるだろうな。頑張って優勝してくれよ！

● JULY号 おもしろかった記事

RANKING

NO.1 川尻達也

NO.2 特集・解説とは何か?

NO.3 五味隆典変態座談会

NO.4 宮戸優光×菊田早苗

NO.5 世間が考える格闘技とは?

タツヤの人気は止まらないぜ! しかし、ミヤトとキクタのクッキングトークがランクインしているとは何事なんだい? これこそまったくマット界の役にたたない企画じゃないかとオレは思うぞ。しかし、本人たちが楽しいなら、それでいいとも言えるけどな!

● 136号 おもしろかった記事

RANKING

NO.1 追悼 三沢光晴

NO.2 総合格闘家お金事情

NO.3 桜井“マッハ”速人×川尻達也

NO.4 郷野聡寛with戦極グリーン

NO.5 松永光弘

やっぱりミサワはトップだったな。しかし、そのほかはお金、DREAM、『戦極』に動物愛護とバラエティに富んでていいランキングだぜ。ちなみに、オレはDJ.taikiというボーイのクレイジーぶりに感心してたところだ。あのボーイはヒムロが好きらしいな。どうだい? オレのバンドに来ないかい!? (充血)。

136号へのお便り紹介

特集お金全ページおもしろかった。他誌ではありえない特集でとても興味深かったです。次回はもう一歩踏み込んだ危ない記事に期待します。

【香川県・宮内誠さん・自営業・37歳】

Dもう一歩踏み込んだ記事っていったいなんだい？ シンヤ・アオキのハウスにも一歩踏み込んでるし、サオリ・イシオカのバイト先にも一歩踏み込んでるぜい。……はっ！ まさかオレのハウスを取材しろってんじゃないだろうな。それはよしてくれよお。

郷野聡寛with戦極ミドレンジャーがおもしろかった。ラウンドガールが出てくる記事はとてもいいと思う、次は赤レンジャーでお願いします。

【埼玉県・星喜幸さん・イベント関係・23歳】

Dユーはレッドがお気に入りなのかい？ オレはブルーだ。しかし、あのゴーノの得意顔はなんだい？『月刊EXILE』の表紙かと思ったぜ。ちなみに、ヒロユキ・タカヤは表紙に載ったことがあるらしいけどな！

永島勝司の話がおもしろかった。夫が私以上の大のプロレスファン。ずっと永島さんの「力、カテェ!!」を口ぐせに(!?)していたので、意識してしまいました。

【神奈川県・水野芳恵さん・会社員・35歳】

D「力、カテェ!!」を口ぐせにするなんて、いったいどんなハズバンドなんだい？ まったくそいつのギャグセンスが手に取るようにわかって、オレでもゾッとするぜ！ え？ オマエが言うなって？

黒田哲広インタビューがおもしろかった。今回のお金特集でよーくわかったのは、日本のプロレス&格闘技界は本当に儲からない世界なんだなあということです。その中で1000万円貯金した黒田さんは本当に凄いと思います。正直うらやましい。

【神奈川県・廣木和宜さん・会社員・44歳】

D正直言って、オレも1000万円ほしいぜ。この前、一攫千金を夢見て宝くじを買ったけど、100円しか当たらなかった……。

総合格闘家のお金事情特集がおもしろかったです。フリーになったとたんにケガをした金原選手のボヤキはサラリーマンの私も参考になります。それにしても石岡沙織選手はセブンイレブンの制服が似合ってますね。

【兵庫県・春名義行さん・会社員・42歳】

Dそうだぜ、サラリーマンなんて会社に守られっぱなしだ。毎月給料が出ることがあたりまえだなんて思ってたら、そのうちとんでもないことになるぜ！ え？ それはあたりまえなんじゃないかって？ ……確かにそうだな。

やはり「追悼 三沢光晴」です。あまりの衝撃に言葉を失ないました。『kami-pro』登場も信じていたのに、残念でなりません。

【石川県・浅井清治さん・会社員・36歳】

D元『kami-pro』編集部員のマシモおじさんも「ミサワに取材できるんだったらミサワ・コスチュームで行ってもいい！」と大興奮していたのを思い出すぜ。とにかくあっちの世界でゆっくり休んでほしいぜ。

ファンキーでクレイジーなアイツが
読者のメッセージを
Check it out!!

"読者ペイジ"ジャクソン

kamiproの乱2009 大盛況DAZE!!

『kamipro』読者のボーイズ&ガールズはこんなファンキーなイベントが行なわれていたのを知ってたかい? これは6月20日に行なわれた『kamiproムーブ』開設記念『kamiproの乱2009』といって、マット界に転がっているとがったシネマをユーたちに公開しようってイベントだったんだ。当日は無料とあって、お客さんもいっぱいだったようだぜ。なんと、スペシャルゲストもいっぱい来たみたいだからな。それじゃ、来れなかったフレンズに一部だけ披露するぜ!

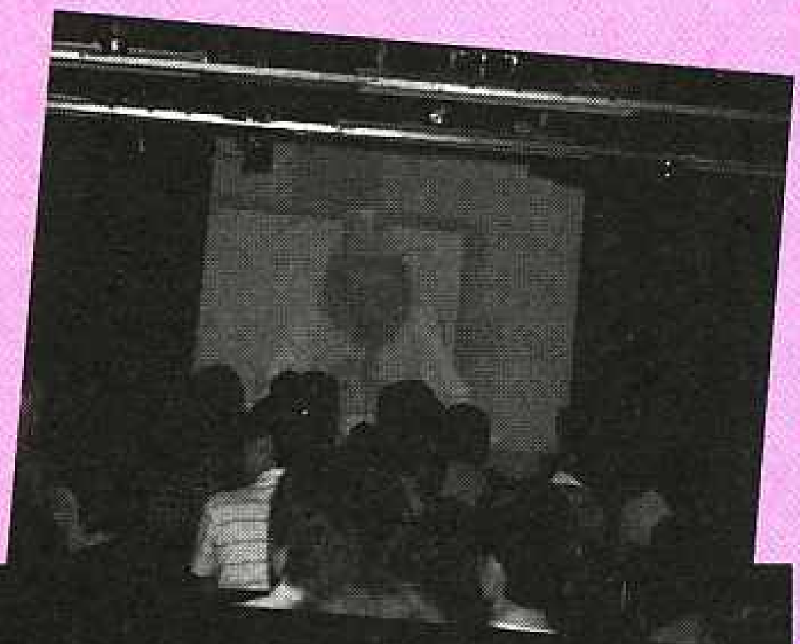
▶これは総合司会を務めたミスター・ハラだ。アシュラ・ハラじゃないから間違えるなよな! クックックック。

▶最初に上映されたのはマサカツ・フナキの監督作品『THE PROPHECY』だ。なんとも言えない"不気味さ"を解説してくれたのは、ご存知ミスター・キクチだぜ。

▶『THE PROPHECY』が何がなんでも観たいと言って駆けつけたのがザ・グレート・サスケだ。ミスター・キクチの解説に「うんうん」と大きくうなずくサスケは「なぜこれを20世紀に発表しなかったのが悔やまれます!」とコメントしたぜ。

▶おっと、この顔合わせは『kamipro』でも見たことないな。ミスター・キクチにサスケ、そしてマッスル・サカイが同じ控室だなんて、ちょっとこの画は贅沢すぎやしないかい?

▶第2部に登場したのは、さっき控室にいたマッスル・サカイとミスター・ターヤン、そしてマシモおじさんだ。プロレスラーや格闘家が出演したシネマを解説しているところだ。



▶そして最後はなぜか『戦極』ポーズで終了。『戦極の乱』からイベントタイトルをパクった負い目からかい? とにかくアシュラ・チョロがハイテンションでポーズだぜ!

▶第3部はオレの大嫌いなターザン・ヤマモトのショートムービー。これはムービーと言えたもんじゃなかったぜ。まったくとんだ駄作だ!

次回のイベントはジャクソンムービーでも放映するかい? クックックック

おハガキ募集!!

おハガキ、どんどん送ってくれよ!
ケータイからでもOKだぜ!!
どんな意見、感想、苦情、抗議、
お悩み、ダメだしでも、ぜーんぜんキャッチするから安心しろって! 待ってるぜ!

こんな情報も24時間どんとこい!
ってヤツだ。
- 譲ってほしいもの
- タレコミ情報
- 選手に対するコメント、試合の感想
- その他、オールOKだ!!

以上、すべてのお便り・
イラストのあて先&メールアドレスは
radical@kamipro.com
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6
パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス kamipro編集部
「キセル常習犯」係まで。

携帯サイト『kamipro Move』からの投稿もできるぜ。

香川県・ハワイアン・グレイシーさん/なんと! ナルヨシ・キクチのイラストは初めてだな。まったくとんでもないところに目をつけやがって。ニクいね!

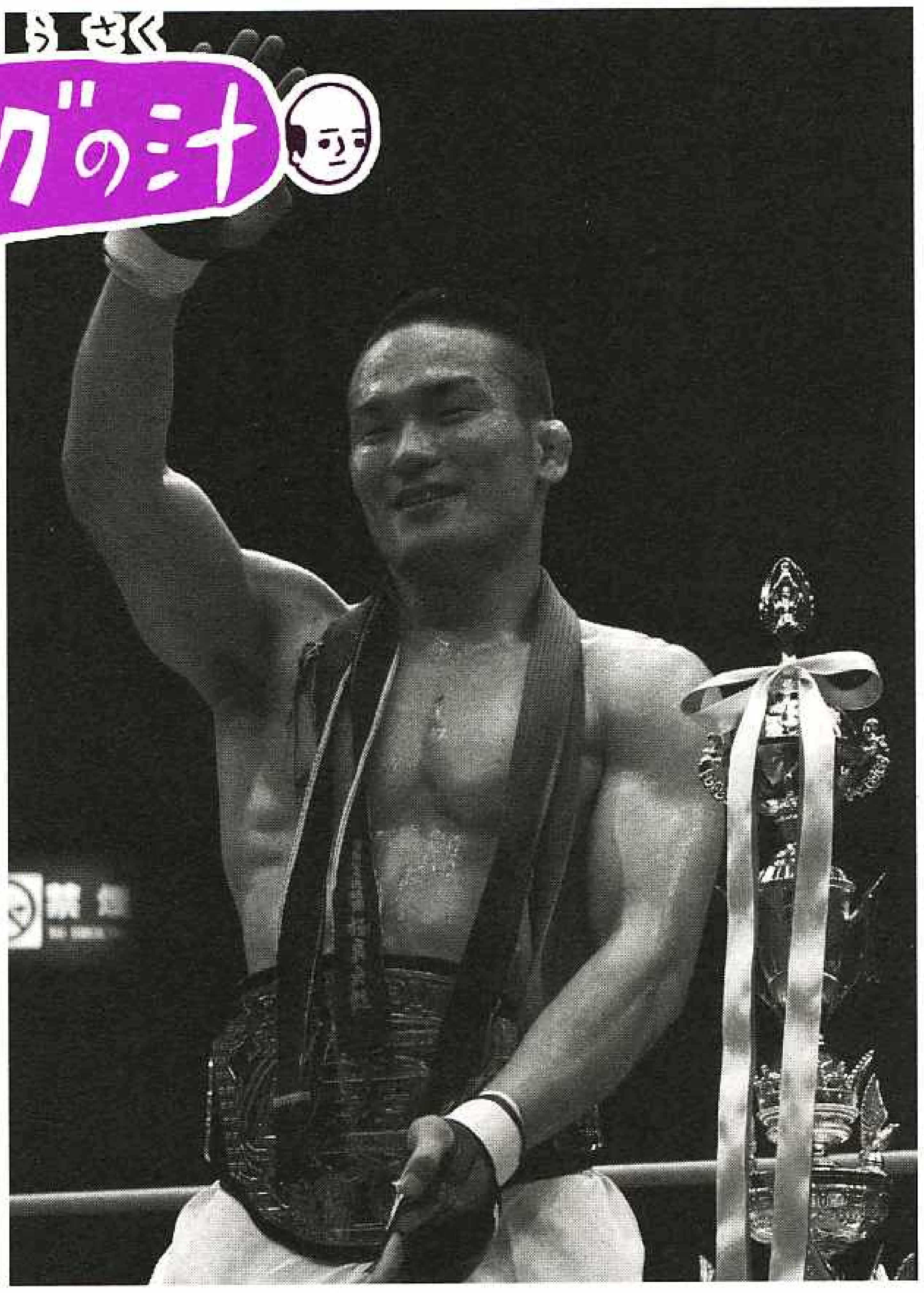
大阪府・英加直純さん/おっと、これはミサワの切り絵だな。モノクロだとわからないけど、ちゃんとミサワカラーのグリーンで作ってくれたんだな。サンキュー!

第44回

ファンエキスポもあるし、今回UFC観に行けばよかったなぁ

花くまゆうさく

豆リングの汁

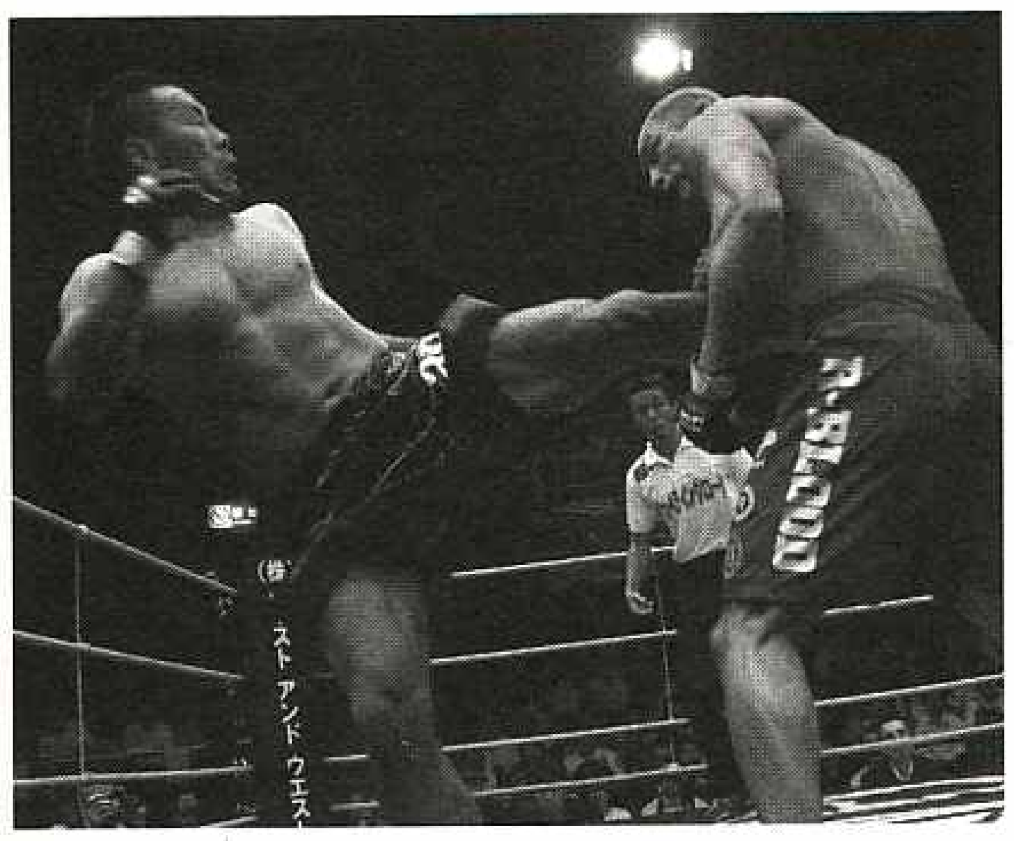


『UFC100』が楽しみだが、UFCファンエキスポで佐藤ルミナがグラップリング出場&セミナーもやるそうで嬉しい。UFCが敬意を表して招待してる感じが、なんかとても嬉しいよね。欲を言えば、昔のバリバリの頃のルミナを、アメリカのメジャーな場に登場させたかったなぁ。同日のグラップリングでは、パイシャオンvsジェフ・グローバーも気になる。セミナーはエディ・ブラボーもやるそうなので、ルミナとの遭遇を妄想するとワクワクする。対談や練習してほしいなぁ。

同じ頃、日本でもDEEPのプログラップリング大会があり、こちらも楽しみ。メイン（宮沢元樹vsマルキーニョス・ソウザ）とセミ（戸井田カツヤvsハファエル・メンデス）がとくに興味深い。日本の柔術家にことごとく足関極めてる戸井田選手と、若き天才ハファエルの激突はどうなるのかワクワクするよ、このカード。

DREAMの菊野vsジダも楽しみ。大舞台に初めて立った選手が、相手のラッシュに負けることがよくあるけど、菊野選手には頑張って空手を炸裂させて、センセーショナルなメジャーデビューをしてほしい。青木vsシャオリンも寝技勝負希望！

Hanakuma Yusaku
◎引越したらTOKYO MX映らずショック。



6月30日にDEEP後楽園ホール大会で行なわれた、桜井隆多選手との試合では、たくさんのご声援ありがとうございました。

結果のほうは1－0の判定で、あと一歩というところで勝利は逃してドローだったんだけど、自分の中ではだいぶ感覚が戻ってきてる感じがあるので、次はしっかり勝ちたいと思うので、また応援よろしくお願いします。

いまはコンディションもいいから、どんどん試合して感覚を取り戻して。あとはフリーだから、少しでも多く試合をして稼ぎたいね（笑）。

で、ここんとこDEEPでは二回連続で前田（日明）さんに会ってるんだよね。宮田和幸選手のセコンドとして来てたんだけど、やっぱり前田さんはおもしろいよ。

前回のDEEPのときは、ウチのカミさんが前田さんと会って挨拶したんだけどひとしきり世間話をしたあと「ところで、おまえ誰やったっけ？」って言ったんだって（笑）。

ウチのカミさんって、前田さんと直接会うのはひさしぶりだけど、前田さんとはメール交換もしてるし、電話でも俺なんかよりたくさん話してよく知ってるはずなんだよ。でも、前田さんは「おまえ」って呼ぶくらいだから知り合いであることは覚えてるけど、誰だったかは忘れちゃってるんだよ（笑）。

今回も元リングスの伊藤博之が前田さんに挨拶したら、最初は気にも留めなかったんだけど、しばらくしてから「おお、おまえ元気か？」って、やっと自分の弟子だったことに気づいたらしいんだよ。

伊藤曰く「前田さんはリングスの若手は滑川さんで止まっちゃってる」とのことだけど、確かに、横井と伊藤の区別があんまりついてなかったな～。前田さんくらいの大物になると、いろんな人と出会う機会も多いから、いちいち会った人の顔を覚えたりしてないのかもしれないね。それにしてもちょっと忘れすぎかな、とは思うけど（笑）。

でも当時、横井が道場でケガしたとき、「これで治療してこい」って10万円ポーンと渡したり、男気みせてくれたりするんだよね。

今回もね、試合で入場する直前に前田さんに呼び止められて、何かと思ったら、前田さんが無言で抱きしめてハグしてくれたんだよ。こんなことしてもらったの初めてだから、ジーンときちゃってね。不思議と緊張も取れてさ。やっぱり美輪明宏さんと交流があったりするから、前田さんには不思議な力があるのかな？　とか思っちゃったよ。

昔、予備校生がアントニオ猪木さんにビンタされて大学に受かったって話があったけど、これからは前田さんにハグしてもらったほうがいいんじゃないかな（笑）。

あとは俺も頑張って活躍して、前田さんに「おまえ誰やったっけ？」って言われないようにしないとね（笑）。

金ちゃんのどこまでやるの？

●第36回●前田さんの不思議な力の巻

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中!
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

MMAがついに『レッスルマニア』に追いついた!

UFC100 ULTIMATE MANIA!!

UFC100 MAKING HISTORY JULY.11.2009
MANDALAY BAY LAS VEGAS

2009.7.11

UFC100

MAKING HISTORY

MANDALAY BAY LAS VEGAS

巨大化の一途をたどるUFCが、ついに100回大会を迎えた！　レスナーvsミア、GSPvsアウベス、ダンヘンvsビスピンの3大カードに、秋山成勲のデビュー戦と盛りだくさんの今大会。はたしてどんなことが起こったのか。そして秋山成勲は、オクタゴンでどんな“魔王ぶり”を見せたのか？

構成／堀江ガンツ　撮影／Josh Hedges（UFC）

成勲

で悶え苦しむ！

“魔王”秋山
魔物の巣窟

［09.7.11 UFC100 MAKING STORY］
米国ネバダ州ラスベガス・マンダレイベイ・イベントセンター

◯秋山成勲 vs アラン・ベルチャー×
（3R終了 判定 2-1）

"魔王" 秋山のUFCデビュー戦。秋山は序盤から積極的にパンチを当てていくが、1R後半にカウンターを浴びてダウン。しかし、その後も前に出続け、ふらふらになりながらもパンチを当て、2-1の判定で辛勝。なんとかUFCデビューを白星で飾った。

［09.7.11 UFC100 MAKING STORY］
米国ネバダ州ラスベガス・マンダレイベイ・イベントセンター

◯ダン・ヘンダーソン vs マイケル・ビスピン×
（2R 3分20秒 KO）

リアリティショー［TUF9］のコーチ対決。米国vs英国とあって、ビスピンには大ブーイングが浴びせられる。ダンヘンが前に出て、ビスピンがサークリングする展開が続くが、2Rにダンヘンの強烈な右フックがヒットし、失神KO勝ち!

［09.7.11 グラップラーズ・クエスト］
ボウルルーム
【スーパーファイト】

◯佐藤ルミナ vs ユリシーズ・ゴメス×
（V1アームロック）

佐藤ルミナが組技大会「グラップラーズクエスト」のスーパーファイトに出場。相手は同大会で7度優勝しているユリシーズだったが、ルミナは上のポジションを取ると、一気にV1アームロック。フェティータ兄弟が見守る前で見事な一本勝ちを挙げた。

イッッッツ・タァァアイム!! リングアナウンサー、ブルース・バッファーのノリノリの叫びどおり、イッツ・タイム、ついにUFCが100回大会を迎えた。

この記念すべき大会にUFCが用意したのは、ヘビー級、ウェルター級のタイトルマッチと、リアリティショー『TUF9』のコーチ対決という3大カード。ダナが「PPV3大会分のカード」と胸を張るだけに、今大会はあらゆることが破格だった。

まず1万4000枚のチケットは発売後即完売。オクタゴンサイドは、なんと3万ドル（約300万円）ものプレミアがついた席もあった。テレビ放映は51カ国、17カ国語で放映。北米でのPPVもUFC史上最高となる120万件という予測が出ている。これはWWEの『レッスルマニア』を大きく超え、米国PPV史上最高を記録したボクシングのマニー・パッキャオvsオスカー・デラホーヤに迫る凄まじい数字だ。

今回の『UFC100』では、本大会だけでなく『UFCファンエキスポ』と題したファンイベントを2日間にわたって開催し、約5万人のファンが来場。ここではMMAのトップファター数十人が参加し、サイン会やトークショーを行なった。

さらに『グラップラーズ・クエスト』という、組み技の大会も開催。ここには日本の佐藤ルミナもスーパーファイトで出場し、見事に一本勝ち。UFC100回大会に花を添えた。

こうした大会前に大規模なファンイベントを行なうのは、NFLの『スーパーボウル』などでおなじみの形式。WWEの『レッスルマニア』でもこうしたイベントを開催している。

イベントの規模、そしてPPV件数なども含め、まさに『UFC100』は『レッスルマニア』級のモンスターイベントとなった。

こんな空前のスーパーイベントのPPVマッチに登場という、破格のUFCデビューを飾ったのが〝魔王〟秋山成勲だ。

UFCのPPVは、全試合完全放映が基本である日本のPPVとは違い、午後7時から2時間半と、時間枠が限られている。そこにUFCデビューで組み込まれるということは、アジア市場向けに秋山がいかに期待されているか、ということだろう。

やはり秋山成勲という男もまた、あらゆる意味で規格外だ。

ビッグカード揃いの今大会も、日本や韓国のファンにとっては、秋山がUFCにどんな異物感を持ち込み、化学反応を起こすのか、つまり「どんな〝魔王ぶり〟を見せるか」に注目が集まっていた。

しかし、オクタゴンに〝魔王〟は現われなかった。

もともと〝魔王〟というのは、ファンの秋山に対する過剰な幻想と憎悪によって生み出されたものだ。しかし、UFCの会場は秋山に対する過剰な幻想、過剰な憎悪、いずれもない空間。あるのはオクタゴンという戦場と、アラン・ベルチャーという確かな実力を持った対戦相手だけだった。

そこで秋山は大苦戦する。自分より一回り身体の大きいベルチャーのリードジャブを浴び、1ラウンドにはストレートをもらいダウンも喫し

てしまう。さらに右ローキックも幾

くことになる。

[09.7.11 UFC100 MAKING STORY]
米国ネバダ州ラスベガス・マンダレイベイ・イベントセンター

【UFC世界ウェルター級タイトルマッチ】
◯ジョルジュ・サンピエール vs チアゴ・アウベス×
(5R終了 判定 3-0)

最強のウェルター級王者GSPが、最強の挑戦者アウベスを迎え撃つタイトルマッチ。打撃が得意なアウベスに対し、GSPはタックルで何度もテイクダウン。アウベスも極めさせはしなかったが、5Rすべて試合を支配され、完敗を喫してしまった。

[09.7.11 UFC100 MAKING STORY]
米国ネバダ州ラスベガス・マンダレイベイ・イベントセンター

【UFC世界ヘビー級タイトルマッチ】
◯ブロック・レスナー vs フランク・ミア×
(2R 1分48秒 TKO)

ヘビー級王者レスナーと暫定王者ミアのヘビー級王座統一戦。レスナーにとって、前回ヒールホールドで負けたリベンジマッチとなるが、レスナーはミアを冷静にテイクダウンさせると、強烈なパウンドを叩き込みKO。真のヘビー級王者となった。

[09.7.11 UFC100 MAKING STORY]
米国ネバダ州ラスベガス・マンダレイベイ・イベントセンター

◯マーク・コールマン vs ステファン・ボナー×
(3R終了 判定 3-0)

熱血オヤジ、コールマンが『TUF1』出身の人気者ボナーと対戦。コールマンは1Rから果敢にタックルしテイクダウン。その後、逃げられても逃げられても愚直にタックルを繰り返し、強烈なハンマーパンチを叩き込む。そして見事に判定勝ち!

てしまう。さらに右ローキックも幾度となく入れられ、スタミナも消耗。それでも秋山は、ただただ意地と根性で前に出て、ふらふらになりながらもパンチを叩き込んでいった。こんな〝必死〟な秋山の姿は初めて観た。

ただ、その必死な姿は、秋山から〝魔王〟のオーラを取り去って、一人のファイターにさせてしまったのも確かだ。

試合は大苦戦の末、2−1のスプリット判定で秋山の勝利。〝お茶濁し〟を捨てた秋山は、オクタゴンで世界を相手に闘える実力を証明してみせた。UFCファイターとしての合格点を取ったといえるだろう。

しかし、それは同時に、秋山がUFCヒエラルキーの中に、否応なしに組み込まれたことを意味している。秋山はベルチャーを判定で下し、UFCの門を突破したが、そこはまだ山の麓。頂点ははるか先にある。

日本ではワン&オンリーだった秋山は、ここUFCでは、上を目指す多くの選手の中の一人。ワンオブゼムとなったのだ。

秋山の次の試合では、同階級のダン・ヘンダーソンが、マイケル・ビスピンを壮絶なKOで破った。それ以外にもミドル級には、ネイサン・マーコートがいる、デミアン・マイアがいる、ヴァンダレイ・シウバも落としてくる。そして、その頂点にはパウンド・フォー・パウンド最強と呼ばれるアンデウソン・シウバがいる。

日本で〝魔王〟と呼ばれた秋山が足を踏み入れてしまったUFCこそ、魔物の巣窟だったのだ。

魔法が解けた魔王は、これから生身の肉体でこの険しい山を登っていくことになる。

そんな魔王が人間になった日、UFCに真の魔王が現われた。ブロック・レスナーだ。

この大魔王レスナーは、UFCヒエラルキーをたった3試合で木っ端みじんに破壊。強烈な異物感をオクタゴンに持ち込み、自分の色に染め上げてしまった。

秋山は今回、自分の判定に対するブーイングを「あれは次の試合に出るビスピンに向けられたものらしいです」と、苦しい弁明をしていたが、大魔王レスナーは、秋山に対するそれより何十倍ものブーイングを浴びながら、それを自らの栄養素にしてしまっている。憎々しい笑みを浮かべながら中指を突き立て、観客をヒートさせるプロだ。

いまのUFCはこんな大魔王をも内包する巨大なものとなっている。

7・11『UFC100』は、UFCの底知れなさをあらためて知らしめたイベントとなった。大ベテランながら、いまが全盛期のようなダン。最強の挑戦者にことごとく完勝するGSP。圧倒的なパワー、身体能力、そしてMMAへの適応力によって、手がつけられない状態となっている〝大魔王〟レスナー。

ビジネスとしてだけでなく、そこで闘うファイターたちも、どこまで強くなるのか見当もつかない。

「UFCにとって100回大会は単なる区切りにすぎない。我々が目標としている位置は、もっとはるかに高い位置にある」

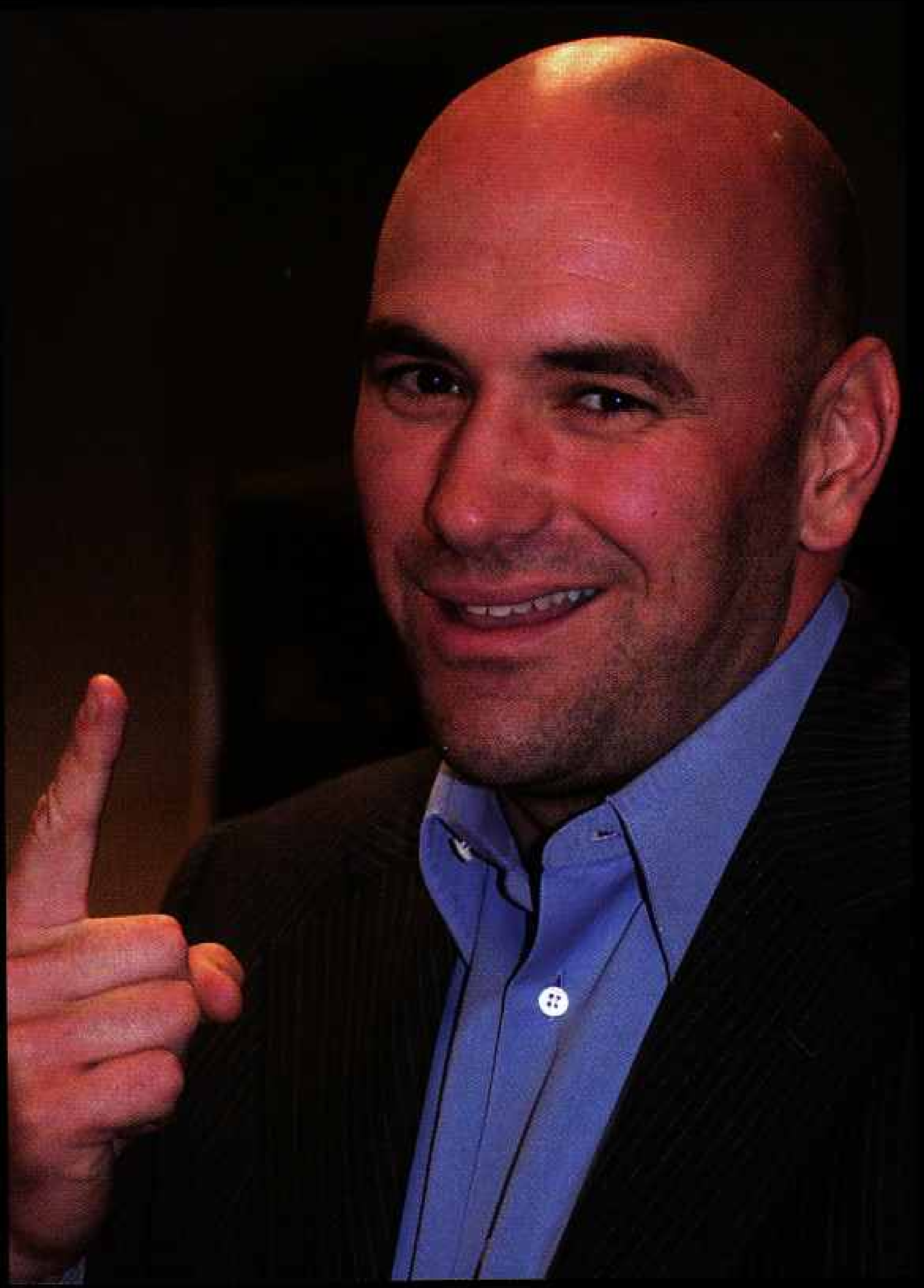
そううそぶくダナ・ホワイトの言葉は、ハッタリでもなんでもないのだ。

『UFC100』を観たファイター&関係者に直撃!

秋山成勲
UFCデビュー戦を
Do The Judge!

『UFC100』にてオクタゴンに降臨した魔王・秋山成勲。
UFCデビュー戦はスプリット判定での勝利となったが、
魔王の闘いぶりをファイター、関係者たちはどう見たのか? 計16名に直撃した。

構成／松下ミワ



Do The Judge!
01

UFC代表
ダナ・ホワイト

今夜のアキヤマは、闘犬のようなファイトを見せてくれた。1ラウンドからつばぜり合いで、お互いにパンチを出し合って、エキサイティングな内容だったよ。ただ、俺の採点ではベルチャーが勝っていたんだけどな(笑)。一緒に観ていたエージェントのヤツはアキヤマにポイントを入れていた。そしてお互いに「俺の採点が正しいよ」って言い合ってたんだけど、ジャッジはアキヤマをコールしたね。これはしょうがないことだが、試合の見方は各個人によってどうしても異なる。とくにジャッジたちはな(笑)。

アキヤマはグレートファイターであることを証明してくれたけど、もっと試合経験を積んでいく必要がある。ファイターにとって一番のチャレンジは、UFCデビューということでナーバスになってしまうことだ。なぜか理由はわからないが、過去に輝かしいファイトレコードや経験を持ったファイターがUFCに来ても、デビュー戦ではガス欠になってしまったり、ナーバスになりすぎて通常では考えられないようなとんでもないミスを犯してしまってるんだ。でも数試合を経験することによってUFCが自分のホームであると感じ始めてくると本来の実力を発揮してくれてる。

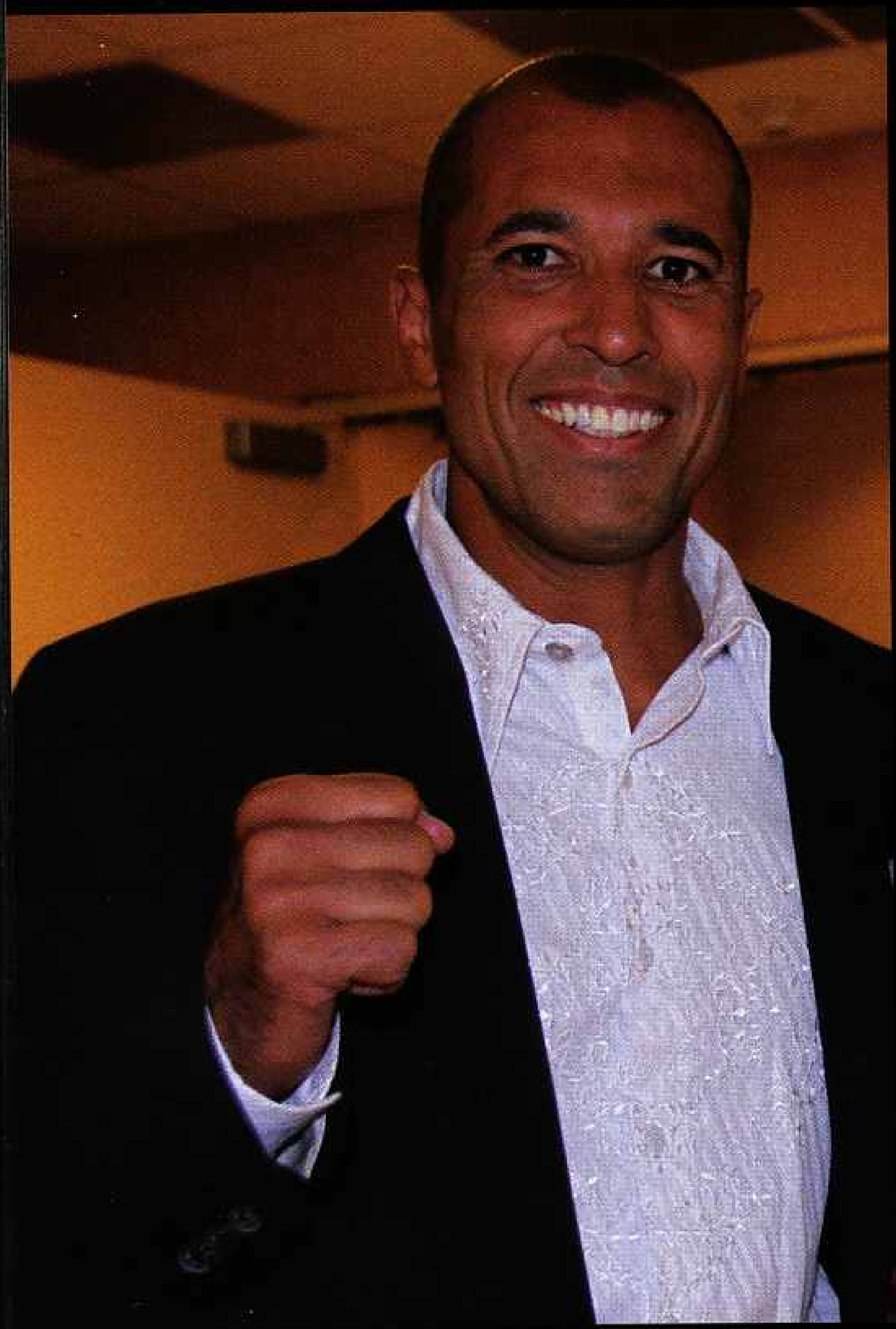
リョート・マチダはその一人。最初の数試合は不安定な動きを見せてたけど、いまではまったくそんなかけらも感じられなくなってる。アキヤマも今後は本来の実力を発揮してくれることを期待しているよ。

Do The Judge!
02

第1回UFC王者
ホイス・グレイシー

アキヤマはとてもいい試合をしたよ。でも、なぜ柔道をバックボーンとしたグラップラーであるアキヤマが、自分の専門分野ではないボクシングで勝負したのか、ちょっと理解に苦しむね。

何度もテイクダウンを奪いグラウンドゲームになったけど、そのときは相手をコントロールしていたじゃないか。スタンドよりもグラウンドのほうが自分のペースになっていただろう？　なぜ相手の得意とするゲームをしていたんだい？　ゲームプランを立てるときは「ネバー・プレイ・アナザーマンズゲーム！」というのがあたりまえなんだよ。柔道家が柔道を忘れたらダメだ。



Do The Judge!
03

元PRIDEミドル&ウェルター級王者
ダン・ヘンダーソン

アキヤマの試合は自分の試合の直前だったけど、ロッカールームでちょっとだけは観ていたよ。お互いにパンチが交錯するタフな試合だったね。でも、彼のルーツは柔道だろう？　なんでもっとテイクダウンを奪って、グラウンドゲームに持ち込まなかったんだい？　どんなときでも自分のルーツを忘れちゃいけないよ。

Do The Judge!
04

UFCウェルター級の実力者
ジョン・フィッチ

アキヤマのUFCデビュー戦は、とても内容の濃い素晴らしい試合だったね。最後までつばぜり合いをする接戦だったけど、見事なテイクダウンを何度も見せてくれたし、グラウンドでもコントロールしていた。彼はスタンドアップのスキルも高いんだけど、ガードポジションの微調整や、柔道の流れをスムーズに行なえるようになったらますますよくなると思うよ。

Do The Judge! 05

『TUF』第1シーズン出身ファイター

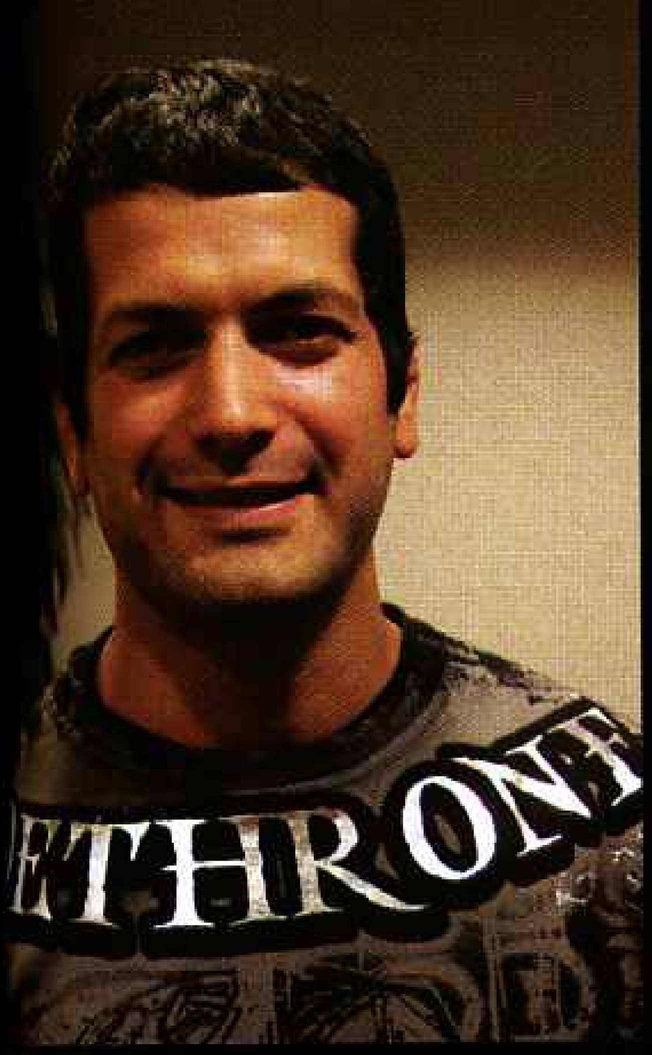
マイク・スウィック

接戦ではあったけど、内容としてはデニス・カーンとの試合よりもよかったし、当時よりレベルも向上しているように感じる。とにかくアキヤマはタフなファイターだね。でも、今日はUFCデビュー戦。ほかの多くのファイター同様、すべての力を出しきれなかったんじゃないかな。もともと素晴らしいファイターだから本来のアキヤマを観るということで次の試合を楽しみにしてるよ。

Do The Judge! 06

黒帯柔術家

デイビット・カマリロ



なぜ柔道のテクニックを使わなかったんだい？ スタンドアップの攻防が多かったね、それはそれで動きの速いシャープでパワーのあるパンチを持ってるのでいいんだけど、単調な攻めになれば相手はそれに合わせてくるのは簡単だからね。そのパターン、サイクルを変えるためにもクリンチや柔道のテクニックを少しずつ混ぜるべきだよ。「トランジション」がMMAのすべてと言っても過言ではないんだからね。コンビネーションのパンチ→クリンチ→柔道スロー→テイクダウン、またはうしろに下がって距離を取ったりと、ストライキングだけの単調な攻めより間違いなく試合をコントロールしやすくなるからね。

もちろん、いい流れでのテイクダウンは取ってたけど、少しでもミックスさせればもっとラクに試合をコントロールできたと思うよ。レッグキックに関しては「キャッチ→パンチ」という流れは見せてくれたけど、「チェック（ガード）→パンチ」という流れも重要だからね。今夜はレッグキックをチェック（ガード）できていなかったぶん、脚にダメージをもらいすぎたようだね。

Do The Judge! 07

AKAヘッドトレーナー

ボブ・クック

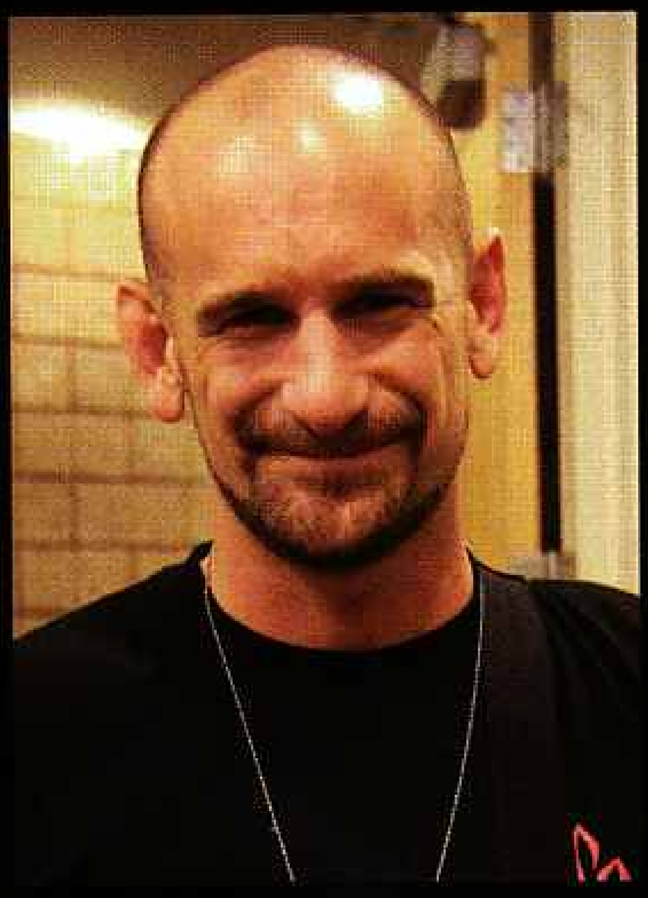
素晴らしい試合だったと同時にアキヤマの潜在能力の高さに非常に驚いている。日本でハイレベルな試合経験を積んできたということを証明していると思う。今後、伸ばす必要がある点を挙げるとすれば、柔術のテクニックになると思う。

Do The Judge! 08

ジャクソンサブミッション参謀、GSPらのコーチ

グレッグ・ジャクソン

とてもパワフルでハードストライカーであると同時に素晴らしいテイクダウンのテクニックを兼ね備えてるファイターだね。今日は途中で疲れが見えたけど、やはり今夜が最初のUFCであったことが原因だと思うが、そういう意味でも自分の普段の力を出せなかったんじゃないかな。



Do The Judge! 09

UFCライトヘビー級の強豪

キース・ジャーディン

とてもいい試合だったし、アキヤマは真のウォリアーだということを証明してくれたね。彼の試合はエキサイティングなので観ていて楽しいよ。気になったのは185ポンドだと、ほかのファイターと比べて身体が小さすぎること。UFCにはない階級だけど、160ポンドぐらいでちょうどいいように感じたけどね。

Do The Judge! 10

夕焼け番長

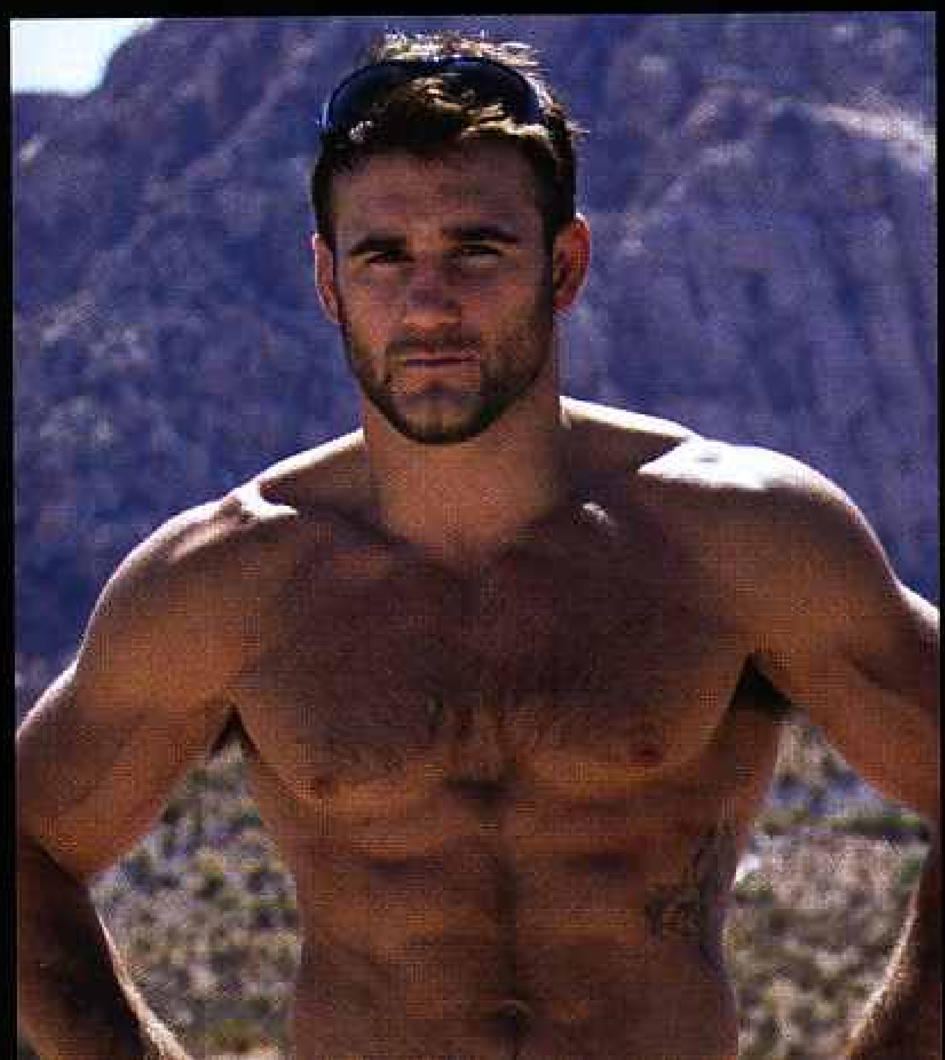
フィル・バローニ

とても接戦でいい試合だったな。判定はスプリットになったけど、試合の内容からアキヤマに勝利の権利があったように思う。

とにかくUFCのデビュー戦を勝利で飾れたのは素晴らしいこと。これでUFCの日本＆韓国進出のいい弾みになるだろうね。

アキヤマはすでにトップレベルのコンテンダーだけど、もっとパンチのパワーをつけ柔道のテクニックを織り交ぜてよりアグレッシブに攻めるようにすればいいと思う。

なぜか日本で試合をしてたときよりも身体が小さく感じたんだけど、対戦相手と比較してしまったからかな。アメリカでは170ポンドに落としたほうがいいかもしれないな。そうすれば俺と同じ階級だから、俺もアキヤマと闘いたいよ（笑）。



Do The Judge! 11

ミスターPRIDE ヴァンダレイ・シウバ

アキヤマの試合は興味深く観ていたよ。UFCデビュー戦だけに、どれだけオクタゴンの中で力を出せるのかと思っていたが、いいファイトを見せてくれたと思う。判定に関しても、いろいろ言われているようだけど、俺はアキヤマの勝利で問題ないと思う。アキヤマは常にアグレッシブに攻めていたし、何度かテイクダウンを奪って、上のポジションをキープしていたからね。ただ、いいポジションをキープしていながら、そのあとパウンドやサブミッションで効果的な攻撃ができなかったのは、今後の課題となるだろう。あと、スタンドに関しても、UFCにはボクシングがうまい選手が多いから、もう少し工夫が必要だろうな。とにかく、アキヤマがいい試合をしてくれてうれしいよ。ようこそUFCへ！ と、言いたいね。

アキヤマと闘いたいかって？ それはボスが決めることだからね、ボスがやれと言えば、俺はいつでもOKだよ。本来なら俺とアキヤマが闘うなら、UFC日本大会でやるのが一番ファンに喜んでもらえるんだろうけど、日本大会開催がもっと先の話になるなら、闘う場所はどこでもいい。アキヤマとだったら、ファンに喜んでもらえる試合ができるだろう。もちろんKOで勝つのは俺だけどね。

Do The Judge! 12

UFCミドル級トップファイター ネイサン・マーコート

同じ階級ということもあり興味を持って試合を観てたんだけど、グレートな内容だったね。これまでもアキヤマの試合はビデオで観ているんだけど、デニス・カーン戦のときは見事なアッパーカットでKOしたよね。今夜は接戦だったけどとにかくエキサイティングな内容で観ていて楽しかった。ローキックはちょっともらいすぎたけど、足を取ってのテイクダウンという流れを何度か見せてくれたからね。

今後、課題があるとすれば戦略。今夜だってグラウンド勝負を中心に立ててればもっと簡単に勝利を収められたんじゃないかなと思うよ。

Do The Judge! 13

元WECフェザー級王者 ユライヤ・フェイバー

判定も割れたように接戦のとてもいい試合だったね。ダメージという点から見るとベルチャーよりアキヤマのほうが間違いなくあったから、どちらに軍配が上がってもおかしくない内容だったと思う。アキヤマが評価されたのはローキックを受けてからのテイクダウンとグラウンドでコントロールしたという流れじゃないかな。それにしても、なんでもっと柔道のテクニックを使わなかったんだい？ アキヤマのゲームプランが理解できないんだ。今後の課題はそのゲームプランじゃないかな。

Do The Judge! 14

元ストライクフォース ライト級王者 クレイ・グイダ

お互いが攻め合うエキサイティングな試合だったね。アキヤマは今後UFCで成功していくことを証明できたと思う。まだボクシングのスキルやガード、そしてゲームプランそのものを向上させていく必要があると思うけど、これからはよくなっていくことしかないからね。アキヤマが参戦するUFCの日本開催が待ちきれないよ！

Do The Judge! 15

闘魂ストーカー ヴァリッジ・イズマイウ

俺に話が聞きたいのかい？ そうかそうか。俺は日本のファンに愛されているからな。

アキヤマの試合？ とてもタフな接戦だったね。判定は割れたけど、間違いなくアキヤマが勝った試合だよ。アキヤマの素質は素晴らしく、トップレベルに駆け上がる軌道に乗ってるので、あとは充分なトレーニングを続けることが成功のカギになると思う。

アキヤマが俺のところに練習に来たかったら、いつでも連絡をしてほしい。（目をギラギラさせながら）ホントにいつでもいいぞ。

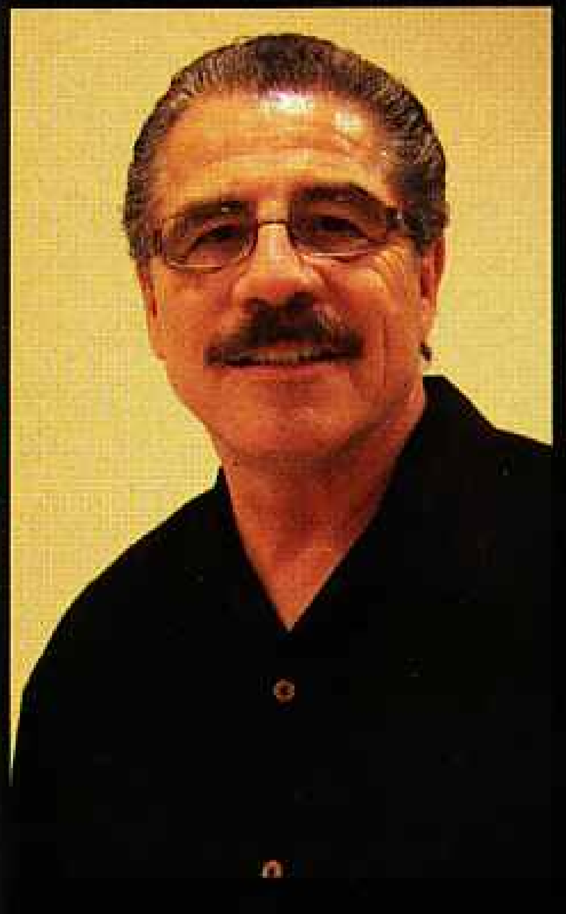
Do The Judge! 16

UFCオフィシャル＆ジョシュの止血係 スティッチ

接戦でいい試合だったけど、あの判定結果は疑いがあるよ。秋山のテイクダウンはよかったけど、そのあとの攻撃がなかった。それに対してベルチャーはジャブやローキックの有効打を確実に決めていたからね。

課題としては明確なゲームプランがないように感じたのとローキックをもらいすぎたこと。おそらく試合後は歩けないんじゃないかな。

テイクダウンは取れるんだからそのあとのパウンドや、ムエタイのテクニックでローキックのディフェンスを習得する必要があると思う。でも、とにかくお互いが3ラウンドフルに打ち合ってとてもエキサイティングな試合だったね。



UFC100 ULTIMATE MANIA!!

魔王・秋山からの“ラブコール”に返答！

「アキヤマとの対決？俺はいつでもOKだ」

注目カードが並んだ『UFC100』を前に、
いまやUFCの主要ファイターとなったヴァンダレイ・シウバを直撃！
ヴァンダレイの次戦の話はもちろん、盟友ヒョードルとジョシュの試合展望や、
“ラブコール”を送られている秋山成勲についても聞いてみた。

聞き手／堀江ガンツ

ヴァンダレイ・シウバ

erlei Silva

——今日はジムのセミナーにお招きいただき、ありがとうございました！

シウバ　こちらこそ参加してもらえて嬉しいよ。

——今回、MMAのメディアを対象にセミナーを行なった目的はなんですか？

シウバ　やはりMMAをちゃんと理解したうえで報道してもらうという意味で、メディアの人たちにも実際にトレーニングを体験してもらうことは非常に重要なことじゃないかと思う。短い時間ながら、MMAを体験することによって、いい記事を書いてもらえると思うし、ファンの理解度ももっと増えると思うからね。

——まあ、ボクらは普段、ロクに運動もしてないのに「あの選手はスタミナがない。練習不足だ」とか書きがちですからね（笑）。

シウバ　ハハハハ。でも、ファイターのことをわかるだけでなく、セミナーを受けることによって、また違った試合の見方ができると思うから、いいことだと思う。これはファンも同様だけどね。だから、これからもこういったイベントは続けていくつもりさ。

——次は少しは動ける身体にしてきます（笑）。

シウバ　ぜひ、次の機会も来てくれ（笑）。

——では本題に入りますが、このたびUFCが100回大会を迎えたことについて、どんな感想をお持ちですか？

シウバ　MMAというスポーツがここまで歴史を積み重ね、大きくなっていった証明だから、素晴らしいことだと思う。ただ、これは歴史であると同時に、始まりを意味していると思う。UFCがスタートして今日まで、MMAがようやくプロスポーツとして、しっかりしたかたちができてきた。この土台を元に、これからどんどん発展していくんだ。だから俺は『UFC1000』でどんなことが起きているのかが、楽しみだね。

——もう『UFC1000』のことを考えてますか。気が早いというか（笑）。

シウバ　まあ、10年かかるか、100年かかるかわからないけど、MMAというスポーツが一瞬のブームのように消えていくことはないだろう。いつかこのニュースポーツが、トラディショナルなスポーツになるための新しいスタートだと考えているね。

——なるほど。シウバさんは、100回大会を迎えたUFCの一番の素晴らしさはどこにあると思いますか？

シウバ　UFCはあらゆることが、しっかりとオーガナイズされているね。とにかくプロモーションとマーケティングが素晴らしいよ。とくにアメリカのマーケットに対するプロモーションは、他の追随を許さない。それが世界に広がり、いまや100カ国以上でプロモーションが行なわれているんだから、信じられないことだよ。

——シウバさんは、エメリヤーエンコ・ヒョードルに対して、再三「UFCに来るべきだ」という発言をされていますが、それはやはりUFCの素晴らしさを理解したうえでのアドバイスなわけですか？

シウバ　彼とはいい友だちだけど、いまの彼がどうしているのか、どう考えているのかはわからない。ただ、UF

ジョシュにまで勝ってしまったら誰がヒョードルを倒せるんだ!?

Cは本当にプロモーションが素晴らしいし、彼ならお金をたくさん稼ぐチャンスが誰よりもある。世界でベストなファイターは、ベストなプロモーションで闘うべきだと思うからね。

―8・1『アフリクション』アナハイム大会でヒョードルはジョシュ・バーネットと闘いますが、この試合はどうなると予想しますか？

シウバ これは初対決だよね？ バーネットはいまファイターとして一番いい時期に来ているし、ヒョードルはみんなが知ってのとおり世界最強の男で、一発で試合を終わらせる強烈なパンチを持っている。結果はどうなるかわからないけど、ヒョードルがジョシュにまで勝ってしまったら、誰が彼を倒せるんだ。フー・イズ・ネクストということになる。

―もう相手はいないだろう、と。

シウバ 少なくとも『アフリクション』にはいない。誰がヒョードルに勝てるかなんて、俺も知りたいよ（笑）。

―もう相手がいないから、あとはUFCでチャンピオンになるだけという感じですかね？

シウバ 彼がUFCに来たら、このスポーツはさらに巨大化するだろうね。ロシアやヨーロッパのヘビー級の素材の目をこのスポーツに向けさせるきっかけになるだろう。

―UFCに来たら、誰かヒョードルに勝てる可能性のある選手はいますか？

シウバ 可能性という話だったら、ランディやミノタウロにも勝つ可能性はあるだろうけど、一番大きな可能性があるのはフランク・ミアかな。

―へえ、ミアですか。

シウバ 彼は身体も大きいし、グラウンドゲームが素晴らしい。そしてストライキングもミノタウロをKOしたことでもわかるとおり、急激に成長している。ヒョードルにとっては嫌な相手だと思うよ。

―なるほど。

シウバ でも、ヒョードルがヘビー級のトップコンテンダーをすべて倒してしまう可能性が、じつは一番高いかもしれないけどね（笑）。

―では来月、『UFC102』でランディ・クートゥアーとノゲイラの対戦が実現しますが、この試合はどうなると思いますか？

シウバ これは非常に興味深い試合だね。二人とも俺の大事な友だちだから、勝敗はフィフティ・フィフティとしか言えないけど、素晴らしい試合になることは間違いない。

―勝負のポイントはどのへんになりますか？

シウバ ミノタウロはMMAヘビー級で最高の柔術家だし、ランディのレスリングはほかに代え難いものがある。両選手ともすべての面で秀でていながら、スペシャリティを持っているから、どちらが自分のフィールドに引き込むかが、勝負の分かれ目になると思うよ。

―さて、では今回、秋山成勲選手がUFCデビューをしますが、彼をどう評価していますか？

シウバ えっ!? 彼が『UFC100』に出るのかい？

―知らなかったんですか（笑）。

シウバ 彼がUFCと契約したのは知っていたけど、今回、試合が組まれていることは正直、知らなかったよ。でも、頑張ってほしいね。彼はアスリートで、強い身体能力を持っているから、いい試合をしてくれるんじゃないか？

インタビューした7月9日、ヴァンダレイのジムにはなんと『戦極』ファイターの石井慧も登場。初対面の彼らだが、近いうちにこのジムで一緒に練習することを約束した。

―お話を聞いていると、あまり眼中にない感じがしますが（笑）。

シウバ UFCでの試合をまだ観ていないから、なんとも言えないね。とにかく彼がオクタゴンで闘っているところを観てみたいし、幸運を祈っているよ。

―そんなUFCデビュー戦を迎える秋山成勲は、シウバ選手と闘いたいと公言してるんですよ。

シウバ ハッハッハ、そうなのかい？

―"目じゃない"って感じですか？

シウバ いや、俺は逃げも隠れもしないし、誰とだって試合をするよ。ただ、彼と俺の試合が実現するかどうかはボス（ダナ・ホワイト）が決めることだよ。

―彼はシウバ選手に挑戦する権利があると思いますか？

シウバ 権利があろうとなかろうと、ボスが試合をしろと言えば、俺はやるよ。だから問題は彼がいかに「ヴァンダレイ・シウバと闘わせてみたい」とファンやボスが思うような試合をするか、じゃないか？ 俺は試合が決まったらKOする、それだけだよ。

―では、秋山選手の試合が終わったら、あらためて感想を聞かせてください。

シウバ オーケー、オーケー。

―シウバ選手自身の次の試合はいつになりそうですか？

シウバ いくつか話は出ているけど、おそらく12月になるだろう。

―階級は185ポンド（ミドル級）ですか？

シウバ たぶん、そうなるだろうね。ここ3週間で185ポンドに落としても、いいパフォーマンスができるか、テストをしているんだ。

―185ポンドで試合ができるまで準備をするのに、どれぐらいかかりますか？

シウバ トレーナーがいうには、2カ月の準備が必要ということだ。だから、やはり12月ぐらいがちょうどいいかな。あと階級に関しては、UFCも選手層が厚くなってきているから、205ポンドと185ポンドのあいだに、195ポンドの階級ができるかもしれないから、将来的にはその新階級で闘うかもしれないけど、とりあえず次はミドル級で闘うつもりだ。

―それにしても、シウバ選手はもう10年近くトップで闘い続けていますが、これほどブランクを空けずに闘い続けているファイターもいませんよね？

シウバ そうだね。いつのまにか時間が経ってしまったな（笑）。とにかく俺はトレーニングが好きだし、試合をするのが好きなんだ。いまは自分のジムを持ったし、自分のチームも持って転換期にはきているが、試合をするのが好きなのは、いまも昔も変わらないよ。

―これだけ激しい試合を長年続けてきて、ダメージのほうはどうですか？

シウバ もちろん、この仕事をしている人間で、痛いところがないヤツはいない。でも、俺はいまでも毎日2回トレーニングしているし、それをずっと続けているから、体調はいつもいいんだ。それはトレーニングのおかげだよ。

―では、闘うモチベーションはどうやってキープしているんですか？

シウバ それはファンのおかげだよ。世界各国、どこの国に行ってもいろんなファンが俺を待っていてくれる。そのファンがいるからこそ、俺も頑張れるし、自分のモチベーションを保っていられるんだ。だからファンあるかぎり、俺はできるだけ長く闘い続けたいと思っているから、これからも応援してほしいね（ニッコリ）。

【09年7月9日／米国ネバダ州ラスベガス・ヴァンダレイのジムにて収録】

UFC100回大会を迎え、“ジャイアン節”さらに爆発!!

「UFC躍進を止めるには俺を殺すしかないんだよ!」

ダナ・ホワイト

UFC100
ULTIMATE
MANIA!!

ついにナンバーシリーズ100回大会を達成し、とどまることを知らぬ勢いのUFC。
しかし、“強欲”ダナはこんなものでは満足していない。100回は単なる通過点であるという。
そんなダナが大会前と大会後、報道陣の囲み取材に応じた。ここではその発言を再構成してお届けしよう。

構成／堀江ガンツ

汚いヤツらの妨害を乗り越えて
日本進出を必ず実現させてやる

ダナ　みんな元気かい？　ずいぶん記者が集まったもんだな（笑）。

――まずUFCが100回大会を迎えた感想を聞かせてください。

ダナ　どう思うかって？　もう死にそうだよ（笑）。とくに先週は準備でケツを叩かれていた。もちろん、ここまでこれたのは幸せだけどね。この100回という区切りは、ズッファにとって達成しなければならない大きなマイルストーンだったからな。『UFC100』を迎えてやっと次のステップへ進めるところまで来たんだ。まだメインストリームにはなってないけど、その段階に来たのは間違いない。

――やはりここまで来たことは感慨深いですか？

ダナ　感傷的になっていることはまったくないよ。ここ一週間、メディアのみんなは昔のことを思い出させようとしてるけど、俺は過去を振り返るのが好きな男じゃない。常に明日のことを考えてるんだ。これからも頭を低くして前進していかなくちゃいけないし、そのためにやることがまだまだたくさんあるんだよ。我々の目標を達成するにはまだ長い道のりなんだ。

――日本ではついにWOWOWでリアリティショー『TUF』シリーズの放映を始めます。

ダナ　『TUF』については、ほかの国でも放映を始めるが、日本の市場はメキシコ同様大きなものだからね。UFCとしては『TUF』のインターナショナルシリーズを開催する計画なんだ。日本、メキシコなどから数名ずつファイターを呼んでね。

――『TUF』を始めたことで、UFCにどのような影響を与えましたか？

ダナ　UFCが爆発的に認知されるきっかけになったよ。MMAとは何かということをテレビのリアリティショーでやることは必要だと思っていても誰もやらなかったんだ。それを我々が初めて実践したんだ。ただ一つ、今後何が必要かといえば、日本でUFCを開催させることだけだよ。

――秋山成勲選手に関してはどんな感想を持ちましたか？

ダナ　グレートファイターだよ。ただ、どんなに経験豊富なファイターでもUFCデビュー戦では、気持ちが先走り雑な試合をしてしまうものなんだ。オクタゴンの中に入ったときや、試合中に感じるエネルギー、振動、観衆の声援は、とくに静かな観衆の前での試合にしか慣れていない日本人ファイターにとってはナーバスになってしまうものだ。この事象を我々はUFCジターと呼んでいる。アキヤマはそのUFCジターを乗り越えなければならないんだよ。

――『UFC100』のメインイベントで勝利したブロック・レスナーの闘いぶりについてはどうですか？

ダナ　アメージングだね。レスナーの技術は毎回向上している。今回もグラウンドで見せたコントロールは素晴らしいものだった。次の対戦相手はまだ誰になるかわからないが、早ければ年内にタイトル戦を行なうかもしれない。

――エメリヤーエンコ・ヒョードルとブロック・レスナーの対戦はMMAファンの誰もが望んでいますが、このマッチアップについてどう思いますか？

当然のように超満員札止めとなった7.11『UFC100』。オクタゴンサイドのチケットは、なんと3万ドル（300万円）ものプレミアがついたものまであったという。UFC恐るべし！

ダナ　いつもヒョードルのクソほど延々と質問されるが、何度も言っているとおり、俺はヒョードルがほしいんだ。それをなんとか実現できるようにしてやるよ。いろいろな手段を使ってね。ぜひともヒョードルにはUFCヘビー級のタイトルを狙ってほしい。ブロック・レスナーとのタイトル戦が実現すれば、それはとてつもなく巨大なものとなるだろう。

――ヘビー級のもう一人の大物、ジョシュ・バーネットについてはどうですか？

ダナ　みんなにその名前を聞かれるから、気にはかけている。

――8月1日にそのヒョードルとジョシュの対戦が実現しますが、どう思いますか？

ダナ　どうだろうな。俺はヒョードルの強さを完全に認めたわけではないが、常に挑戦者をノックアウトしていることは確かだ。ジョシュは身体も大きいしタフなファイターだけど、過去にKO負けがある。この試合のカギは、ヒョードルがどれだけ試合に向けた準備をしてくるかだろうな。アルロフスキー戦のときはあきらかに準備不足だった。だからハードパンチで勝つには勝ったが、ひどい試合をしていたからな。

――ミルコ・クロコップのUFC再登場については、結局どうなりそうですか？

ダナ　クロコップに関しては、みんなにホントのことを話してやろう。しっかりメモするんだぜ。前回のドイツ大会でのプレスカンファレンスを覚えているかい？　あのあとクロコップから600回以上電話をもらったんだ。で、彼は言っていたよ「誰の契約書にもサインしていない」とね。日本でファイトビジネスに絡んでいる卑劣なヤツが、いつも我々の邪魔をする。おそらく今回のクロコップとの契約話もそいつらのせいだと思うんだ。誰のことを話しているかわかっているだろう？　「クロコップがDREAMと契約した」というプレスリリースは、UFCドイツ大会でクロコップが俺のために闘ったその当日に日本からリリースされたものなんだよ。これがどれだけ汚いことをされているか理解できるか？　それが汚いことじゃないというのであれば誰か説明してくれよ。いつもあいつはそういうショットを我々に対して仕掛けてくるんだ。いいかげんにしてほしい。

――日本進出についてはどう考えていますか？

ダナ　もちろん日本に進出したい。日本にはまだ潜在的に巨大なMMA市場があるんだ。それなのにUFCがイベントを行なえないのはとても悲しいことだよ。日本のファンもUFCを日本国内で観たいと思っているのに、数人のファッキンなヤツらが、いつも我々の邪魔をしているんだ。この話はすでに100万回以上話していることだ。本にしてもいいくらいだ（笑）。ヤツらは自分たちのビジネスを守ろうとして、UFCが日本に参入できないようにしているんだ。これが「事実」なんだよ。俺がヤツらに殺されずにUFCが日本に進出できたら驚きだね（笑）。

――ダナ・ホワイトをもってしても、彼らを蹴散らして日本には来られないわけですか？

ダナ　おいおい、俺はべつにヤツらに殺されるのを恐れているわけじゃない。UFC躍進を阻止するには、俺を殺しでもしないかぎり止めることはできないんだからな。俺はどんなことをしてでも、汚いヤツらの妨害を乗り越えて日本進出を実現させるから楽しみにしていてほしい。今日はここまでだ！

【09年7月11日／米国ネバダ州ラスベガス、マンダレイベイ・イベントセンターにて収録】

FEDOR VS BARNETT
AUGUST 1ST
HDNet
SHOWTIME PPV
HONDA Center
Affliction
TRILOGY
M-1 GLOBAL
GOLDEN BOY

sジョシュ!! の忘れもの

8.1アフリクションで実現!

ヒョードルvs PRIDE最後

『アフリクション』で日本人ファン向けの超ド級対決が実現！

かつて〝世界最高峰のリング〟の名をほしいままにしていたPRIDE。そこで観ることのできなかったエメリヤーエンコ・ヒョードルとジョシュ・バーネットの一戦が、8月1日に米国カリフォルニア州アナハイムで開催される『アフリクション』で行なわれるのだ。

昨年7月の『アフリクション』旗揚げ戦で、〝最強皇帝〟ヒョードルはアメリカ本格上陸。当初、ヒョードルはアメリカのMMAファンのあいだでネームバリューこそ低かったものの、これまでに2回開催されている同大会で、元UFCヘビー級王者のティム・シルビアとアンドレイ・アルロフスキーにセンセーショナルな勝利。MMA界のジャイアン、ダナ・ホワイトもビックリの〝60億分の1〟の存在感を見せつけた。

これにより一気にUFC帝国を驚かす最大の敵対勢力として、世界中のMMAファンの注目を集めるようになった『アフリクション』。開催3回目となる今回は、その切り札的カードであるヒョードルvsジョシュを投下！ とりわけこの一戦を世界で一番観たがっているのは、PRIDEで両者の活躍を見続けてきた我々日本人ファンだろう。

さて、PRIDEはその脈々と流れる闘いの歴史が紡ぎ出す物語性、そして世界最強の座を懸けた実力測定の場としての役割が魅力となり、おおいなる熱を生んできた。そしてその消滅以降、物語性の〝忘れもの〟だったのが田村潔司と桜庭和志の一戦だ。もともと、この闘いは03年大晦日の格闘技興行戦争の際にPRIDEが待望したカード。その後、何度も対戦が噂されながらも流れてきたこの一戦は、昨年大晦日の『Dynamite!!』で実現。UWFを源流とした二人の大河ドラマは終幕を見せた。

そしてPRIDEのもう一つのキーワードであった最強路線の〝忘れもの〟こそ、このヒョードルvsジョシュの一戦。両者はミルコ・クロコップやアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラらとともにしのぎを削ったが、直接対決はついぞかなわず。そんな二人の闘いが今回は満を持して実現。世界最高峰のリングでその存在を証明してきた両者だけに、勝敗の行方、その試合内容に注目が集まる。

なお、今大会にはメインのヒョードルvsジョシュ以外にも、五味隆典vsラファエロ・オリベイラ、ゲガール・ムサシvsレナート・ババル、ジョルジ・サンチアゴvsビクトー・ベウフォートなど、日本人ファンも注目のファイターが多数出場。また日本初となる『アフリクション』のPPV放送も正式決定、新たな熱を生むお膳立ては整った。

海を越えていまも息づくPRIDE幻想。はたして〝60億分の1〟は、やはり〝60億分の1〟なのか？ PRIDEを観る者の期待と想像を刺激してやまない、PRIDE最後の〝忘れもの〟を見届けろ！

五味とムサシも参戦!

8.1『アフリクション～TRILOGY～』

米国 カリフォルニア州
アナハイム・ホンダセンター

主要対戦カード

エメリヤーエンコ・ヒョードルvsジョシュ・バーネット
レナート・ババルvsゲガール・ムサシ
ビクトー・ベウフォートvsジョルジ・サンチアゴ
ギルバート・アイブルvsポール・ブエンテロ
五味隆典vsラファエロ・オリベイラ
ジェイ・ヒエロンvsポール・デイリー
クリス・ホロデッキーvsダン・ローゾン
ベン・ロスウェルvsチェイス・ゴームレー
L.C.デイビスvsハビエル・バスケス
マーク・ホーミニックvsデイビダス・タウロセビキウス

PPV放送スケジュール

■スカパー! HD「スカチャンHD」
[生中継]
8月2日(日) 10:00～(Ch.190)
[再放送]
8月6日（木）18:00～(Ch.190)
8月26日（水）19:00～(Ch.190)
視聴料金＝3,150円/番組(税込)

■スカパー!「スカチャン」
[生中継]
8月2日(日) 10:00～(Ch.180)
[再放送]
8月3日（月）21:00～(Ch.172)
8月4日（火）20:00～(Ch.177)
8月6日（木）18:00～(Ch.180)
8月7日（金）22:00～(Ch.179)
8月26日（水）19:00～(Ch.180)
視聴料金＝3,150円/番組(税込)

■スカパー! e2「スカチャンHD」
[生中継]
8月2日(日) 10:00～ (Ch.800)
[再放送]
8月6日（木）18:00～ (Ch.800)
8月26日（水）19:00～ (Ch.800)
※アフリクション・トリロジー 視聴チケット(3,150円)の事前購入が必要。受付期間は7月15日(水)～8月1日(土)

詳しくはスカチャンHPへ　www.sukachan.com/battle/

――今日はもちろんヒョードル戦について

レスラーvsミアとは次元が違う!!

「ヒョードル戦は真の世界ヘビー級タイトルマッチだ!」

青い瞳のケンシロウ／元キング・オブ・『戦極』（？）

ジョシュ・バーネット

ダナ・ホワイトが歯ぎしりして悔しがるようなヘビー級のスーパーファイトが、『アフリクション』でついに実現! プロレスにMMAにと縦横無尽に活躍、打倒“60億分の1”の最右翼とされるジョシュの魂の咆哮を聞け! アターッ!!

聞き手／堀江ガンツ　写真／Affliction、乾晋也

――今日はもちろんヒョードル戦についてうかがいたいのですが、その前に……。

ジョシュ　ミサワサンのことでしょ?

――あ、ご存知でしたか。

ジョシュ　もちろん。ボクもプロレス界の一員として、また彼のファンの一人として、非常にショックを受けたし、驚いたよ。いままでミサワサンは、常に危険な闘いに身をさらしてきた。長年、ハードな試合をしているうちに、身体に疲労がどんどん蓄積されて、バックドロップという普通の技だったのが当たりどころが悪くてこんなことになってしまったんだろう。ホントに残念だよ。

――まさか受け身のうまい三沢さんにかぎって、こんなことが起こるとは思いませんでしたよね。

ジョシュ　ボクもプロレスラーだから、可能性として、リングで亡くなってしまったり、神経がやられて身体が動かなくことはありうることなんだ、と頭で理解はしていたけど、実際にトップレスラーにあいうことが起こるとね……。ただ、彼自身は自分の好きなことをやって、自分が一番誇りに思えるリングの上で亡くなったんだから、本望だったんじゃないかな。人間いつかはこの世を去るんだから。

――じつはジョシュさんが初めて『kamipro』に登場したのは、UFCの会場でウチの阿修羅チョロに「ボクはノアに出たいんだ」と話したときなんですよ。当時からノアへの思いっていうのはあったんですよね。

ジョシュ　ボクは日本のプロレスが好きだったんで、どこのリングでも上がりたかったんだ。でも、当時はノアが始まったばかりで、たしかベイダーが参戦し始めた頃。カワダ（川田利明）はゼンニホンにいたけど、カワダ以外のいいレスラーがノアには

揃っていたよね。だから興味を持ったんだ。その中のトップがミサワサンだから、やっぱりリスペクトをしていたよね。

――三沢さんが特別なところはどんなところだと思いますか？

ジョシュ　まず彼はタフなレスラーなんだ。カワダやコバシ、ベイダーと長時間にわたる激しい攻防。さらに自分より先輩で、かつはるかに身体が大きいスタン・ハンセン、ジャンボ・ツルタらとも、真っ向から闘い、彼らの強烈な技を比較的小さな身体で受け止めていた。彼のタフネスぶりが、90年代のゼンニホンプロレスを作っていたんだ。

――確かに信じられないような激しい闘いに、自分を幾度となくさらしていましたよね。

ジョシュ　あとミサワサンはスマートなレスラーでもあった。彼は新しい技をどんどん開発していったよね。タイガードライバー、タイガードライバー91、エメラルドフロウジョン……それらはみな、革新的な技だったよ。しかも、そういった革新的な技を、ただ繰り出すだけでなく、試合の攻防の中でじつにたくみに使いこなしていた。それはスマートなレスラーじゃないとできないことさ。そして、なんといってもミサワサンは日本人のスピリットを持っているファイター。勝っても負けてもハートに訴えかけてくるレスラーだったね。

――そんな三沢さんがなくなったのは、マット界にとって大きな損失ですよね。

ジョシュ　そのとおりだね。日本のプロレス界だけでなく、世界のレスリングシーンにとって、ミサワサンが亡くなることはとても大きな損失だよ。ただ、いまは安らかに眠ってほしい。それしか言えないね。

――わかりました。では、そんな悲しい事故もありましたが、ジョシュさんにはエメリヤーエンコ・ヒョードル戦という大一番が待っています。試合まで1カ月を切った、いまの気持ちは？

ジョシュ　ツカレタ……。

――かなり疲れてますよね（笑）。試合まで3週間、いまが一番キツいときでしょうし。

ジョシュ　あと2週間が一番、身体にも心にもハードなときだね。でも、いいコンディショニングができているよ。とにかく、このコンディションをキープしながら、試合のことだけを考えて、どんどんタフでシャープになっていく時期だ。自分の"刀"はすでに焼き入れが入って、研ぎ澄まされている。あとはそれを使うだけさ。

PRIDE時代、ヒョードル弟のアレキサンダーから一本勝ちを奪っているジョシュ。試合後、ヒョードルに向けて首切りパフォーマンスを行なったところヒョードルが大激怒！（ジョシュがプロとして挑発していることを理解してなかった）。のちに和解してウォッカパーティで酔い潰れるほどの仲になったが、試合となれば話は別だ。

――試合に向けたトレーニングはいつからスタートしているんですか？

ジョシュ　今回のキャンプは5月の後半から始めているんだ。

――ヒョードル戦が正式発表されたのは、6月に入ってからでしたけど、やはりヒョードル戦が組まれることを見越して早めのスタートを切ったんですか？

ジョシュ　いや、ヒョードル戦が組まれるかどうかはわからなかったけど、8月1日に何かしらのカードは組まれると思ってね。その準備をしていたんだ。

――日焼けしていますけど、これは野外のトレーニングを行なっているからですか？

ジョシュ　いや、プロのファイターとして、見た目も大事だから、今回ちょっと焼いてみたんだ。

――見た目の問題ですか（笑）。

ジョシュ　しかも、日焼けサロンでね（笑）。カリフォルニアは日差しが強いから、日光浴をしてもいいんだけど、トレーニングスケジュールが詰まっているから、時間がナイ。

――今回、スペシャルなトレーニングは行なっていますか？　日焼け以外に（笑）。

ジョシュ　とくにヒョードル戦だからというわけじゃないけど、ストライキングのカウンターへの対応をやっている。すべてにおいて「ヒョードル対策」というよりも、とにかく自分の持っている力をすべて引き出せるようなトレーニングをしているんだ。ルーズトレーニングシステムというところで、コンディショニングのメニューを組んでもらっているし、あと技術に関してはここCSW（コンバット・サブミッション・レスリング＝エリック・パーソンのジム）で行なっている。

――今回のヒョードル戦は、ジョシュさんにとってどんな意味がありますか？

ジョシュ　とにかくこの試合は、ボクのキャリアの中で一番大きな試合になる。そして、それはヒョードルにとっても同じことだろう。さらには、ボクとヒョードルにとってだけでなく、MMA界全体にとっても、過去10年間のヘビー級ファイトとして、最も重要な試合になることは間違いないよ。

――MMAの歴史上の頂上対決になる、と。

ジョシュ　そのとおり。この先、10年はこれ以上のカードはないんじゃないかな。

――ジョシュさんにとっては、ある意味、この日のために、長年厳しいトレーニングを積んできたようなところがありますか？

ジョシュ　そのとおりだね。ボクは本当は3年前に世界の頂点に立つべきだった。PRIDE無差別級GP王者という頂点にね。しかし、実際はそうはなれなかった。そこからまた頂点を目指すためには、とにかく対戦相手を一人一人確実に倒していって、チャンスを待つしかなかった。今回のヒョードル戦は、ボクにとって決して逃すことのできない大きなチャンスなんだ。

――最近のヒョードル選手の闘いぶりについてはどう思っていますか？

ジョシュ　彼はこのところ、衝撃的なKOで勝っているよね。彼の攻撃は本当にストロングだ。前回のアルロフスキー戦は、確かに苦戦しているように見えたけど、ただ、あれは5ラウンドの試合だから、最初の4分間ぐらいの状況だけで評価をするのは難しい。フィニッシュの右フックがなければ、その後、どんな展開になっていたかなんて判断できない。ただ一つ言えることは、ヒョードルはいまでも過去と同様、世界で最も素晴らしいファイターだということさ。

――今回、ジョシュさんは5ラウンドフルに闘うつもりでいますか？

ジョシュ　もちろん5ラウンド闘うつもりで準備している。おそらく彼を倒すには5ラウンドかかるだろうしね。でも、PRIDEで闘っていたときも10分・5分・5分で20分は闘える準備をしていたからね。今回は特別じゃないよ。

――これまで多くのトップファイターが、その全盛期にヒョードルと闘いながら、す

これはボクが日本のファンだったら飛行機に乗ってでも観に行く試合だ

べて敗れています。これまでヒョードルと闘った相手とご自分の違いはどこにありますか？

ジョシュ　とにかくこのマッチメイクが組まれるまでも、簡単なことじゃなかった。いままで自分がやってきたことのすべてが、こういったチャンスにたどり着いた要因になっている。確かにこれまでヒョードルはチャンピオンとして、非常にいい試合をしてきた。ただ、いままでやってきたこと、今回の試合でどうなるかというのはまったく違うことで、重要なのは、この試合がどうなるかということなんだ。

――ヒョードルの一番警戒しているところはどこですか？

ジョシュ　彼は破壊力があって、スマートなファイターだ。しかも試合を相手にコントロールさせるということがない。

――確かにコントロールされるのは観たことがないですね。

ジョシュ　マーク・ハント戦だけ、若干コントロールされたけど、それ以外は何もないね。しかし、彼も人間だから弱点はある。絶対に勝てない相手なんて存在しないんだ。

――ジョシュさんはヒョードルの弱点を見つけているわけですか？

ジョシュ　彼の試合はずっと見続けているからね。彼の強い部分、そしてわずかばかりの弱い部分はわかっているさ。

――いろんなファイターの予想を聞くと、ジョシュさんがグラウンドで上になれば、勝つ可能性があると言う人が多いです。

ジョシュ　もちろん上になればコントロールできるよ。パウンドを入れたり、確実にダメージを与えることができるし、自分の体重がかかっているから、彼が下からコントロールすることは不可能だろう。

――一本を極める自信はありますか？

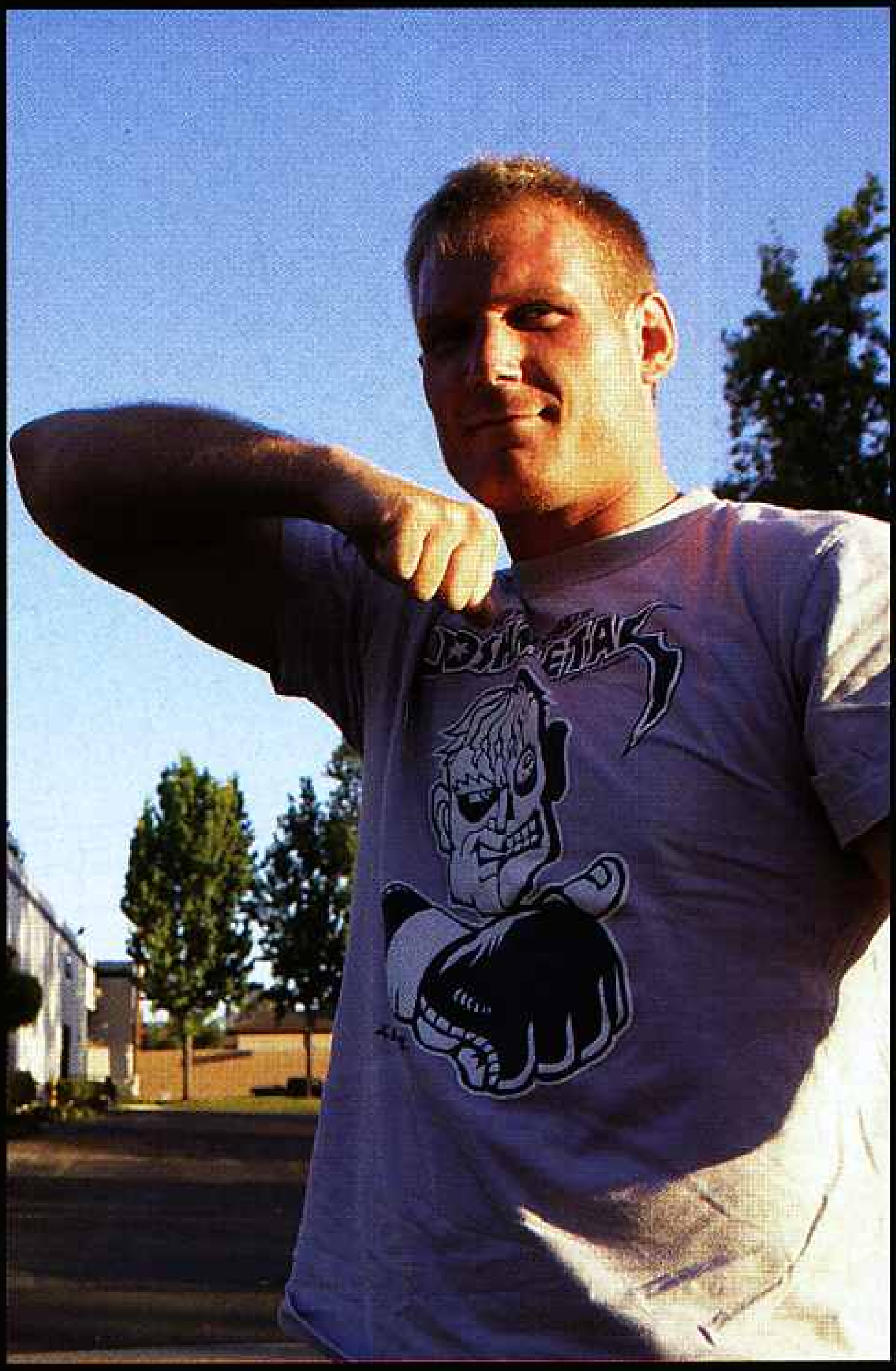
ジョシュ　彼がボクを極めることはできないだろう。おそらく彼はグラウンドで上になったら、サブミッションではなく、パウンドでダメージを与えてくるはずで、それはスマートな闘い方なんだ。でも、ボクが上になったら、彼をコントロールできるし、彼がミスを冒す可能性が高くなる。そうすれば、自分にチャンスが生まれるんだ。そのときは、もちろん一本勝ちを狙っていくよ。

――この試合を『UFC100』のメイン、ブロック・レスナーvsフランク・ミアと比較する向きもありますが。

ジョシュ　ボクらの試合はMMA史上最大級の闘いだけど、彼らの試合はMMA史上最大級のパブリシティをしているというだけさ。彼らのレベルと自分たちのレベルは比べようもないね。そして彼らの試合はUFCという一つの団体のタイトルマッチで、ボクたちの闘いはMMAワールドランキングの1位と2位の闘いなんだ。

――レスナーvsミアとはレベルが違うし、次元が違う、と。

ジョシュ　イエス。MMAをよく知らない一般の人は、パブリシティのおかげでUFCのほうが大きなタイトルマッチに見えるけれど、MMAファンはどちらが真の世界ヘビー級タイトルマッチだか知っているはずさ。



Josh Barnett■1977年11月10日、アメリカ出身。元UFC世界ヘビー級王者、現パンクラス無差別級王者、PRIDE無差別級GP2007準優勝。強いだけじゃなくておたく文化や日本のプロレス、UWFに通じている。191cm、113kg。

――ダナ・ホワイトはジョシュさんが勝ったら、契約したいと発言していますが、それについてはどうですか？

ジョシュ　ホントに契約したいと思っているなら、そんなメディアにコメントを出すのではなく、きちんと契約書に金額を書いてみろと言いたいね。「獲得したい」なんて言うだけなら誰にもできる。問題はどれだけの金額が払えるか、だ。ボクがヒョードルに勝ったら、ボクのことをダナがほしがるのは確かだろう。しかし、ボクがWAMMAのチャンピオンになってから要求する額と、ダナが頭で考えている金額は違うからね。UFCと交渉するなら、少なくとも1カ月は交渉期間が必要だろう。まあ、先のことはまったく考えてないけどね。いまはヒョードル戦に完全にフォーカスしている。先のことで考えているのは、8月9日のIGF（有明コロシアム）に出ようと思っているくらいだ。

――あ、IGFにはホントに出るんですか（笑）。

ジョシュ　いまは出るつもりでいるよ。チャンピオンベルトを持って日本に行く予定だ。

――では最後に、試合に向けての意気込みをお願いします。

ジョシュ　日本のファンがこの試合を観てくれることを楽しみにしている。ボクとヒョードルの試合は、本来、日本のファンの前でやるべき試合だと思う。でも、MMAはインターナショナルになっているから、飛行機に数時間乗ってでも、試合を観に来てほしい。日本のファンならわかっているだろうけど。

――ジョシュさんがファンだったら、飛行機に乗ってでも観に来ていますか？

ジョシュ　もちろん観に行くよ。いろんなビッグカードはあるけど、絶対に見逃しちゃいけない試合というのがある。それはタカダvsベイダーだったり、サクラバvsホイスだったり、タムラvsヘンゾだったり、ミサワvsカワダだったりする。そして、ジョシュ・バーネットvsエメリヤーエンコ・ヒョードルも絶対に見逃しちゃいけない試合なんだ。

――間違いなく歴史に残る一戦というわけですね。

ジョシュ　日本からアメリカまで観に行く価値は充分にある。あとフジメグ（藤井恵）がイシオカ（石岡沙織）と闘う7・11『ジュエルス』の試合も見逃せないけどね。

――その試合まで歴史に残っちゃいますか（笑）。とにかく8月1日のヒョードル戦、歴史に残る闘いを期待してます！

【09年7月7日／米国カリフォルニア州『CSW』にて収録】

──いよいよ8・1『アフリクション』か?(笑)。

では、ヒョードルvsジョシュと『UF

アフリクションの頭脳が五味参戦の裏側を語る!!

tencio

『アフリクション』副代表
トム・アテンシオ

日本向け!?　五味隆典、ゲガール・ムサシも参戦！

「アフリクションはUFCよりハードコアだ！」

日本の格闘技ファンなら何がなんでも見逃せないラインナップとなった8.1アフリクション。
副代表のトム・アテンシオにヒョードルvsジョシュ、五味参戦の実現の裏側を語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／石井史彦

Tom At

公表はできないが、ジョシュはまだクレイジーな金額かもしれない（笑）

——いよいよ8・1『アフリクション』アナハイム大会が近づいてきましたが、反響はどうですか？

アテンシオ　いままでで最高のカードが組まれてるということでとても素晴らしい反響だよ。ファンのみんながどれだけヒョードルとジョシュの試合を待ち望んでたということがわかるよ。

——大会チケットの売れ行きはどうですか？

アテンシオ　チケット発売日には、まだヒョードルvsジョシュ戦を正式に発表していなかったにもかかわらず、初日だけで20万ドルの売り上げがあり、ここまで順調に伸びてきている。今週からさらに宣伝活動を行なうので、ここで一気に完売することを期待しているんだ。

——やはり今回のメインカードがファンに評価されてるということでしょうか？

アテンシオ　そう見て間違いないだろうね。ヒョードルvsジョシュは世界のMMAファンにとってドリームマッチだからね。そして、〝PRIDEの頂上対決〟でもある。だから演出もいままでどおり、日本的なPRIDEやDREAMがやっているような選手紹介のやり方を取り入れる予定なんだ。

——ただ、空前のビッグカードだけに、ファイトマネーも史上最高クラスのものになってるんじゃないですか？（笑）。

アテンシオ　そんなことはないよ（苦笑）。確かに『アフリクション』をスタートした当初はファイトマネーを払いすぎたという問題があったけど、今回それは解決したよ。だから、いままでのメインカードに比べると、少ない予算で契約することができたんだ。

——へえ、そうなんですか。ティム・シルビアやアンドレイ・アルロフスキーのギャラのほうが上だった、と。

アテンシオ　当初はファンや業界に対して注目度を上げるために、スプラッシュを上げなければいけなかったんだけど、もうそういう時期はすぎたしね。いまはファイターからもプロモーターから見てもフェアなところで同意に至ってる。もちろん、彼らのファイトマネーは業界から見てハイエンドにはなるけどね。

——では、いままでのようなクレイジーと言われる額ではなくなったということですね。

アテンシオ　金額に関しては公表できないけど、個人的な観点からすると、ジョシュなんかはまだクレイジーな金額かもしれないけどね（笑）。

——そうでしたか（笑）。でも、これだけのビッグカードを組むにはある程度はしょうがないことですよね。

アテンシオ　もちろんそのとおり、ファンが望んでいたカードだからね。

——MMAファンや関係者のあいだでは、ヒョードルvsジョシュと『UFC100』で行なわれるタイトルマッチ、レスナーvsミアを比べるむきもあります。

アテンシオ　自分たちがどうしようかにかぎらず、ファンや業界の人たちが比較するのは避けられないことだよね。でも、それは『アフリクション』にとっては非常にプラスになることなんだ。「アメリカでナンバーワンの団体であるUFCのヘビー級タイトルマッチより、『アフリクション』のほうが上」という評判が立つわけだからね。

——それぐらい自信のあるカードということですね。

アテンシオ　本来ならファンの頭の中で比較するのではなく、お互いの勝者が本当の意味でのタイトルを懸けて試合をするべきだよ。UFCがそれを許さないのが残念だ。『アフリクション』としては常に他団体と協力してよいカードを実現させたいと思ってる。ご存知のとおり、すでにストライクフォースやM-1グローバルとは非常に良い関係であり選手の交流を行なってるからね。

——日本においては『アフリクション』のメインカードのほうが『UFC100』に比べ注目度が高いんですよ。

アテンシオ　それは嬉しいね。でも、だから我々はUFCに嫌われているんだ（笑）。ここアメリカでもハードコアなファンは、UFCより『アフリクション』のほうが、いいカードを組んでいることを知っているからね。同時にUFCに影響を与えてると思ってるよ。以前のUFCは一つのイ

ベントで本当に注目できるカードは、1試合か、せいぜい2試合だった。それが現在では3～4カード、注目カードを組んでいるからね。これは『アフリクション』が日本と同じように、全カードをファンに喜んでもらえるラインナップにしている努力に対抗するために、UFCも出し惜しみができなくなったんだろう。競合団体があるというのは、ファンにとってこうしたいい面もあるんだ。

——五味隆典選手の『アフリクション』参戦が、昨日正式にアナウンスされました。五味選手の参戦は、アメリカのファンからどのような反応がありますか？

アテンシオ　とてもいい感触を得ているよ。ハードコアファンにとってはゴミの試合は絶対に見逃せないものだと思う。カジュアルファンは、ゴミのアグレッシブなファイトスタイルを素直に受け入れてくれるはずだよ。

——アメリカの一般層にはまだ名前が知られていない五味選手の試合をPPVに組み込んだというのは、それだけ期待が高いわけですか。

アテンシオ　確かにゴミはアメリカでまだ有名ではないけど、彼はエキサイティングな試合をしてくれるから、大会を盛り上げるためにもメインカードに組み込んだんだ。あと自分自身、PRIDEの大ファンだったから、あのPRIDEのエキサイティングな空間を『アフリクション』でよみがえらせたいんだよ。そのために、ヒョードルvsジョシュと同様、ゴミの参戦も必要だと思ったんだ。

——元PRIDE王者である五味選手の対戦相手がハファエロ・オリベイラになった経緯を教えていただきたいのですが。

アテンシオ　ゴミの対戦相手に関しては、彼が過去160ポンド(73キロ)で試合をしていたことを考慮し、155～160ポンドのファイターを3人提示していたんだけど、彼のほうから155ポンドでやりたいという希望もあり、その内二人に絞られたんだ。確かにオリベイラの知名度は低いし、ファイトレコードもゴミと比べて大差はある。でも、彼はトップファイターを多数輩出しているATTで現在練習していて、柔術とムエタイをベースにしたアグレッシブなファイターで、以前から『アフリクション』のマッチメイカーが気にかけていた選手なんだ。そして彼ならゴミとエキサイティングな試合をしてくれるということで提案したところ、ゴミサイドも同意してくれたんだ。

——『アフリクション』としては、今後伸びてくる選手としてオリベイラに期待しているということですね。

アテンシオ　もちろん。もしゴミから勝利を奪ったら、彼の名前はスカイロケットのように一気にハードコアファンの中で広がるだろうからね。そして、勝敗にかかわらずエキサイティングな試合をすれば、彼の名前を売り出す最高のチャンスでもある。その点、ゴミのほうには若干のリスクはあるけど、彼にとってもアメリカ国内で存在感を増すために、最高の舞台であることは間違いないよ。

——今回、五味選手の参戦が噂されてから、二転三転しましたが、交渉が難航した理由はなんだったんですか？

アテンシオ　どんなときでも新しく選手と契約する場合は時間がかかるものだけど、大きな理由としては、今回は交渉をし始めてすぐにその噂がリークされてしまったこと。また、『アフリクション』はファイトマネーが高いという先入観、期待感が選手側にあったことが要因として挙げられると思う。『アフリクション』なら、いくらでも高いギャラを出すんじゃないかというね（笑）。

——つまり金額に大きな開きがあった、と（笑）。

アテンシオ　でも、『アフリクション』はいまファイトマネー高騰の問題を解決しつつあるから、しっかりと話し合って要求額と提示額の差を埋めることができたんで、ゴミの場合は最終的にはフェアな条件で締結できたと思う。確かに交渉にちょっと時間がかかりすぎたので不安になったときもあったけど、無事締結できてほっとしているよ。

——ファイトマネーに関して日本の選手とアメリカの選手で考え方の違いはありますか？　たとえば日本ではショーマネー（ファイトマネー）のみだけだけど、アメリカの場合はショーマネーは低く抑える代わりに勝てばそれば倍となるウイニングボーナスという契約が一般的だと思います。

アテンシオ　今回はゴミサイドの意向もあり、ショーマネーのみでの契約になっている。ただ、これはケースバイケースで、ゴミのように名前のあるファイターだったら、ショーマネーを高くしてボーナスをカット。ルーキーに対しては、エキサイティングな試合を期待して、インセンティブとしてボーナスを提案する場合もあるからね。

——今回の契約は一試合のみですか？

アテンシオ　はい、一試合の契約です。

——最初から複数の試合をする契約

DREAMのゲガール・ムサシ、「戦極」のジョルジョ・サンチアゴら日本のトップ外国人も参戦！　日本の立場は今後どうなっていくのかという不安もある……。

取材場所となったアフリクション本社はジム設備も充実。ダナとのツーショットはUFCファイターをスポンサードしていたときのものだろう。かつては仲がよかったのだ。

Atencio

ヒョードルとは2012年までの期間で契約の話をしている

じつはMMAファイターでもあるトム・アテンシオ副代表は、イベント運営の傍ら、トレーニングにも余念がない。なんと6.27 Ultimate CHAOSでひさしぶりに実戦のリングに登場。2ラウンド終了時TKOで見事勝利を飾った。次回はぜひともダナ・ホワイト戦が観たい!!

を提案しなかったのですか？

アテンシオ　普段は複数試合での契約で交渉をするが、今回はゴミサイドの意向もあり一試合契約となったんだ。

――失礼な質問になりますが、『アフリクション』は今回が最後になるという噂が出てますけど、そのための一試合契約ではないですよね？

アテンシオ　ハッハッハ！「『アフリクション』は今回で終わり」というのは、第1回大会から言われ続けているから気にしてないよ（笑）。もちろん、今回で終わりなんてことはないし、今後もイベントを開催していく予定だよ。8・1『アフリクション』のあと、なるべく早い時期に、その後のスケジュールを発表できればと思っている。

――ヒョードルとは今回で契約が切れるそうですが、契約延長の話は進んでいますか？

アテンシオ　ヒョードルとは2012年までの期間で契約の話をしている。おそらく契約延長できるだろう。ただ、『アフリクション』としては、ヒョードルに100パーセント頼ってばかりはいられないので、これまでのようにすべてのイベントに参加してもらうというかたちではなくなると思うけどね。

Tom At

――大晦日にDREAMと交流するという話は進んでいますか？

アテンシオ　大晦日にかぎらず、いくつかの可能性を話しているよ。大晦日がどうなるかは、今後の話し合い次第だね。

――今後、五味選手以外に参戦させたい日本のファイターはいますか？

アテンシオ　日本にはたくさん素晴らしいファイターがいる。昔から私はKIDヤマモトの大ファンだし、アオキも好きなファイターでアフリクションの商品を提供してあげたんだ。日本人ではないけど、日本を主戦場にしているヨアキム・ハンセンやメルヴィン・マヌーフにも声をかけているところだよ。まあ、将来のことはともかく、まずは8月1日の大会を成功させないとね。

――8月1日は夏休み期間中ですから、日本から観戦に来るファンもいると思いますよ。

アテンシオ　日本からファンが観戦に来てくれたら、本当に光栄なことだよ。日本のファンは長年、PRIDEを見続けた、世界で最も目の肥えたファンだからね。そんな人たちに支持されるイベントにできたら嬉しい。ぜひ、時間を作って観戦に来てほしいね。

――日本でのPPV放送はどうなりそうですか？

アテンシオ　いまM-1グローバルのスタッフが話をしていて、スカイパーフェクTVで放映される予定だ。近々、正式発表されると思うから、そちらも楽しみにしていてほしいね。

【09年7月7日／米国カリフォルニア州ロングビーチ、アフリクション本社にて収録】

ファイター＆関係者に聞きました！

8.1『アフリクション』の

ヒョードルvsジョシュは どっちが勝つと思いますか？

8月1日に迫った『アフリクション』での大一番、ヒョードルvsジョシュをアメリカのファイター&関係者に大予想してもらった。はたして勝つのはどっち!?

ヒョードル

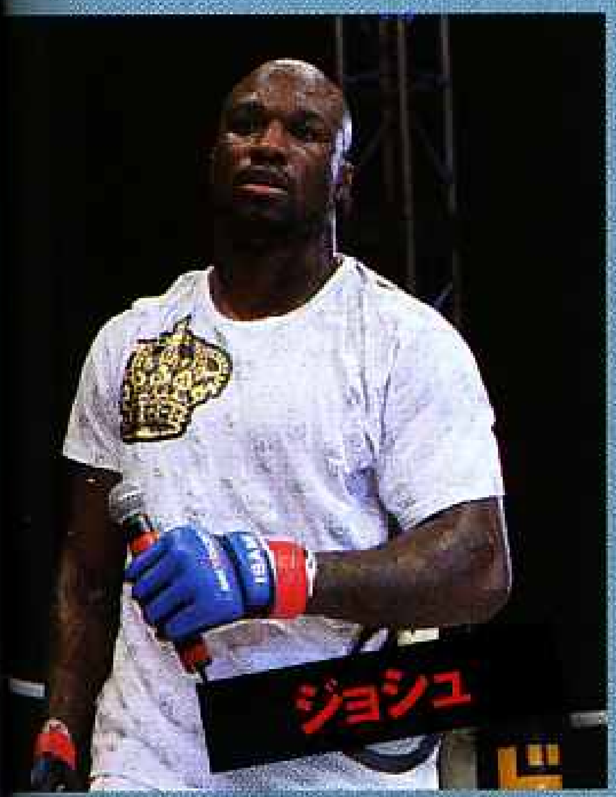
ロバート・ドライスデール

自分はヒョードルにベットするね。ヒョードルはどのポジションでも、ジョシュを上回っている。どんな部分でもジョシュがヒョードルより勝っている部分が見当たらない。仮にジョシュがグラウンドで上になったら、ジョシュが上回っている点を見せられるかもしれない。ただ、試合の流れを予想すると、ジョシュが上を取れるチャンスはないんじゃないかな。だから結果的にヒョードルのTKO勝ちになるだろうね。ジョシュが勝てなくても、フランク・ミアかランディ・クートゥアーならヒョードルに勝てるだろう。ケージの中で闘ったら、ランディはケージに押し込んでテイクダウンして、ヒョードルが苦手としているバックを取るだろうし、ミアはキックを多用すると思うよ。グラウンドになれば、ミアのグラップリングは非常に優れているから、勝つ可能性は高いね。

ディーン・リスター

ヒョードル

やはりヒョードルだろうな。すべての面でヒョードルが上回っている。将来的にヒョードルを倒す可能性があるファイターは４人ぐらいいるが、やはりいま現在はヒョードルが世界最強だと言わざるをえないだろうな。



ジョシュ

キング・モー

勝つのはジョシュ・バーネットだよ。ジョシュはヒョードルが得意とする左フックと右のコンビネーションをうまくガードできるだろうし、テイクダウンしてサブミッションというゲームプランでの流れを執拗に狙い、５ラウンド動き回れば極めることはできなくても判定で勝利を収められるんじゃないかな。

ヒョードル

ファブリシオ・ヴェウドゥム

試合会場に行って目の前で観戦する予定だよ。とても楽しみにしてる。
ボクはヒョードルがKOで勝つと予想するね。ジョシュは非常に素晴らしいファイターだけど、ヒョードルはスペシャルでヘビー級のベストファイターだからね。もし自分が対戦するんだったらテイクダウンしてサブミッションを狙う作戦になると思う。でもとても大変な試合になるだろうけど。８月15日にストライクフォースのチャンピオンになったら次はヒョードルと試合したいね。

マット・リンドランド

とにかくエキサイティングなファイトになるだろうね。どちらが勝つかは非常に難しい質問だが、ジョシュと言いたいね。自分は愛国者だから、とにかく誰かアメリカ人がロシア人に勝つことを期待しているんだ。ロシアのファンも多いだろうから、たくさん応援するだろうし、自分もMMAファンなのでいい試合を期待しているが、アメリカ人のジョシュの勝利を信じているよ。

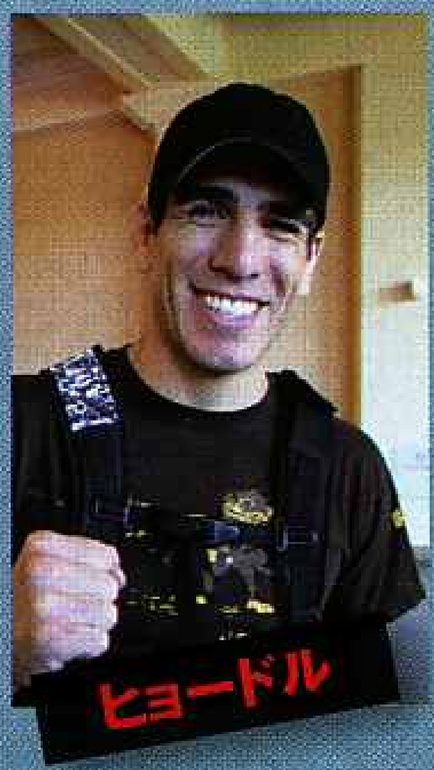
ジョシュ

ケニー・フロリアン

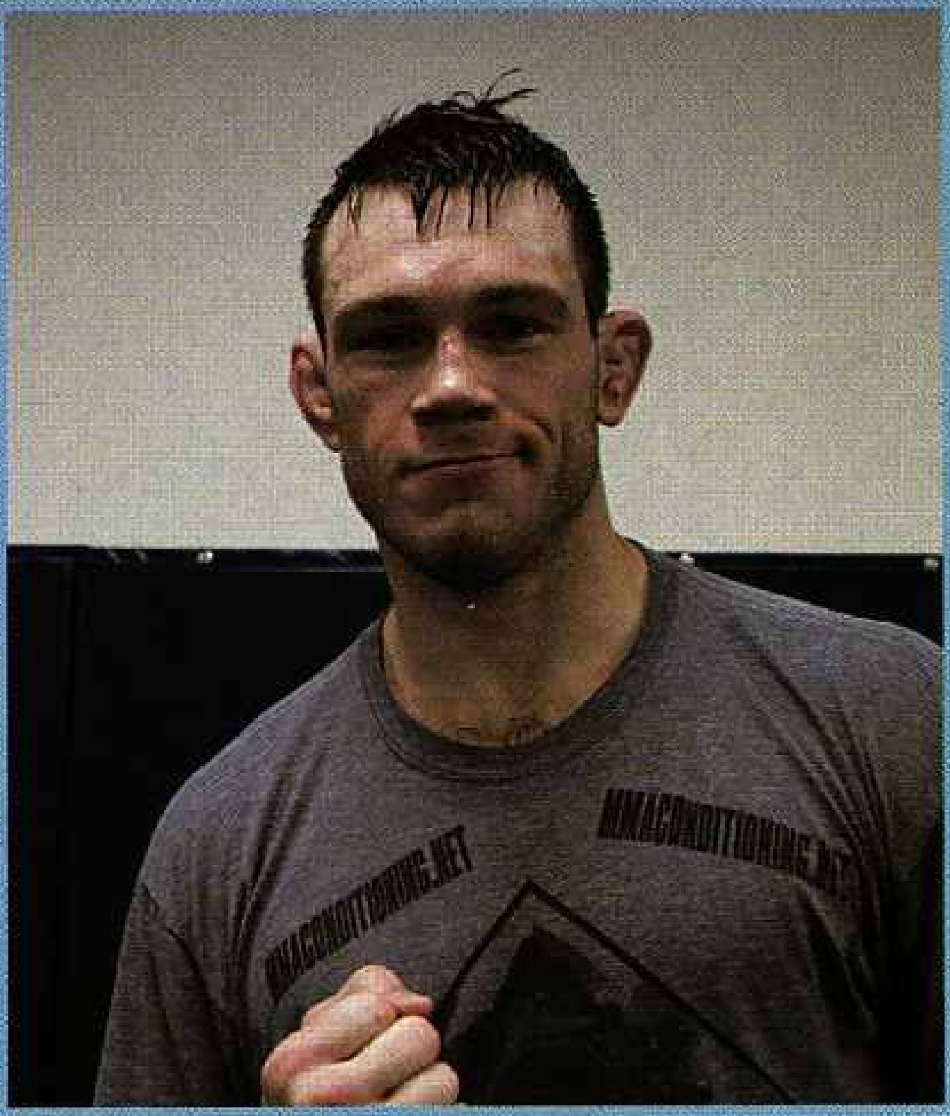
アメージングファイトだね！　ヒョードルは今回のジョシュとの試合でヘビー級で世界一のファイターであることを証明したいだろうし、ジョシュは対戦相手として充分な可能性を持ってるファイターだからね。ジョシュは間違いなくヒョードルを苦戦に追い込むだろうから、とてもエキサイテイングンな試合になると思う。

ジョシュはとくに脚やグラウンドでの攻防でヒョードルにプレッシャーを与えると思うね。みんなジョシュの動きをそれほど評価をしてないけど、彼は素早い動きができるからね。でも、ヒョードルの最も優れているところもスピードなんだ。そこで、どちらかを選ぶとしたらヒョードルだね。いままでの歴史を見ればどうしてもそうなってしまうよ。

誰がヒョードルを倒せるか？　そりゃ素晴らしい質問だ、ボクも質問したいくらいだよ。今週末のブロック・レスナーvsフランク・ミアの勝者との対戦というのは興味深いし、ランディとヒョードルの試合は間違いなくみんなが観たいカードだろうね。



ヒョードル



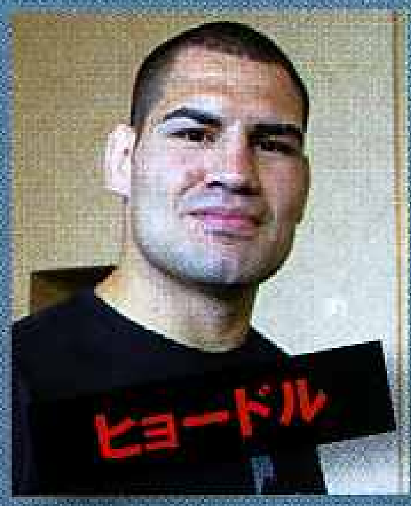
フォレスト・グリフィン

?

ヒョードルとジョシュって試合するの？　ジョシュと闘うのは弟のアレキサンダーかと思ってたよ（笑）。これはいい試合になるだろうね。バーネットはいいところが見せられるだろうけど、試合はわからない。ヒョードルは素晴らしい試合をずっとやり続けている。タフな試合になるだろうね。

ケイン・ヴェラスケス

この試合は間違いなくグッドファイトになるが、勝つのはヒョードルだろうね。自分は昔からのヒョードルの試合スタイルが好きで、見習ってるところが多いんだ。スピードもあり、パワフルなパンチを繰り出すし、オールラウンドのファイターとして、自分がMMAを始めた頃から憧れているんだ。いま自分がヒョードルを倒すのは、まだ経験が浅すぎて無理だけど、将来そのレベルに達してヒョードルと試合をすることは、自分の中での夢だよ。

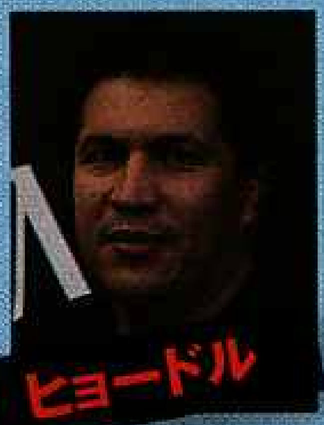


ヒョードル

ハビア・メンデス（AKAオーナー）

試合を予想するなんて自分のスタイルじゃないんだけど……勝つのはヒョードルだろうね。ジョシュの最大の武器はサブミッションだけど、ヒョードルがタップアウトする姿が想像できないんだよ。スタンドではヒョードルはとてもアグレッシブだから、こちらもヒョードルが有利。ジョシュは一本負けすることはないだろうけど、ＫＯで試合は決まると思う。

ただ、ジョシュが負けてしまうと、ヒョードルと同等の実力と経験を積んだファイターは誰も見当たらなくなる。近い将来であればブロック・レスナー、ケイン・ヴェラスケス、ショーン・カーウィン、ドス・サントスらにチャンスがあるとは思うけど。でも、現時点でヒョードルを倒せるファイターはいないね。



ヒョードル

ショーン・シャーク

ジョシュはいま世界で一番テクニックを持ったヘビー級ファイター。ヒョードルはタフで素晴らしい世界ナンバーワンのファイター。ヒョードルは、まったく弱点がなく動きが速いハードパンチャーなんだけど、ジョシュは極めるツールを持っているし、オールラウンダーだ。レスリングゲームもいいし、スタンドもソリッドだから、ジョシュが勝利を収めるチャンスはあると思う。でも、ヒョードルが極められることは想像しがたいので、ジョシュが判定で勝つほうに賭けるよ。ジョシュも自分もCSWで練習を積んでる仲間だからね、そういう意味でもぜひジョシュに勝ってほしい。

ジョシュ

クリスチャン・ウェリッシュ

間違いなくヒョードルが勝つね。彼はロシアンサイボーグ、負けることなんてないよ。オイル切れでも起こさないかぎり、負けることなんて想像もつかない。真面目な話、病気やケガでもないかぎりね。

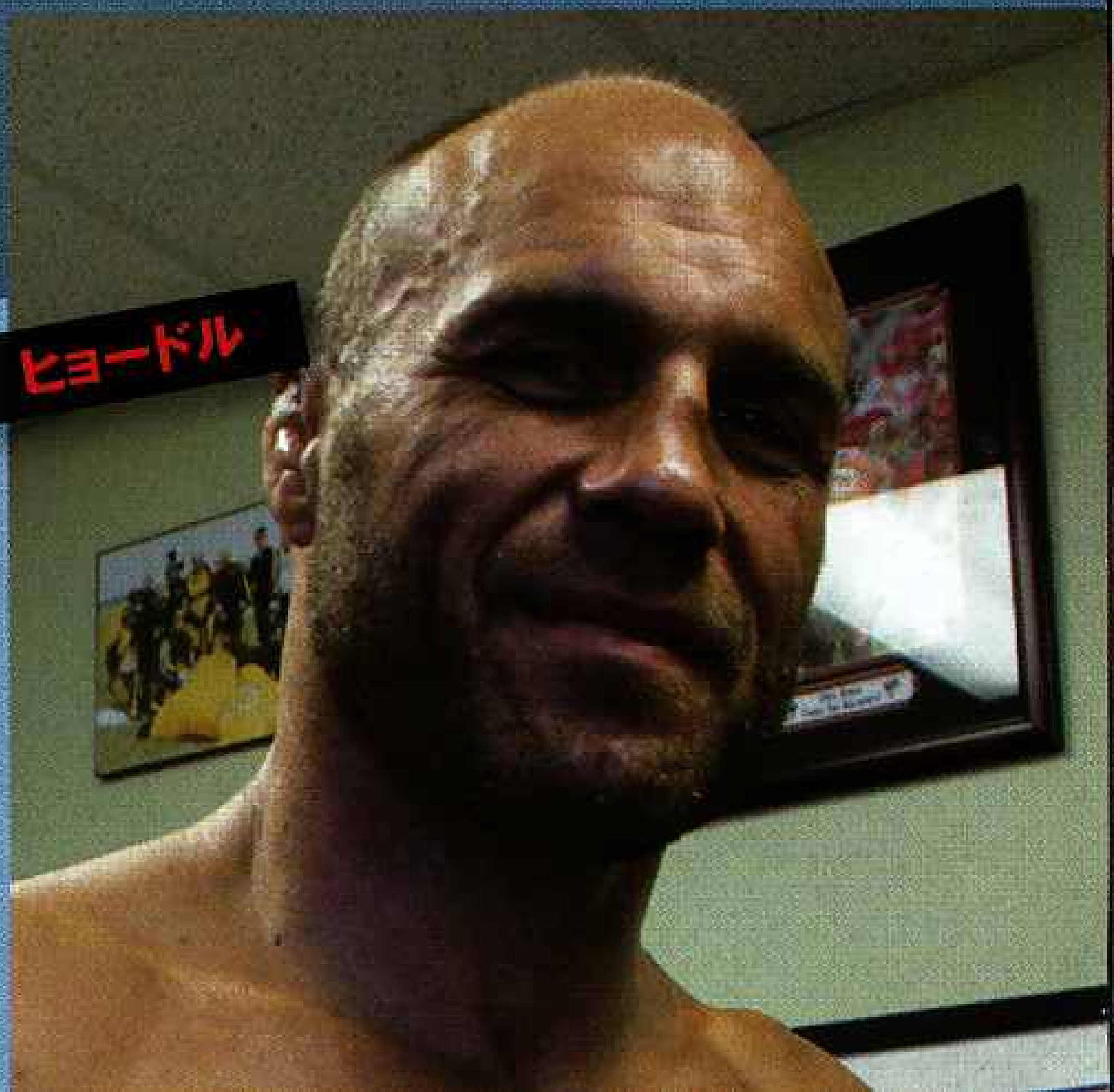
ヒョードルの凄いところは、すべての面においてほかの誰よりも一歩進んでいるところだよ。どんなに強い相手でもクイックでシャープな動きを見せるし技術面でも少しだけ上回ってる。そのうえゲームプランを対戦相手によって適応させながら確実に実行している。テイム・シルビアを含め身体の大きな相手でもまったく苦にしないで対応しているからね。ぜひ、ブロック・レスナーとの対戦を観てみたいよ。

ヒョードル

ランディ・クートゥアー

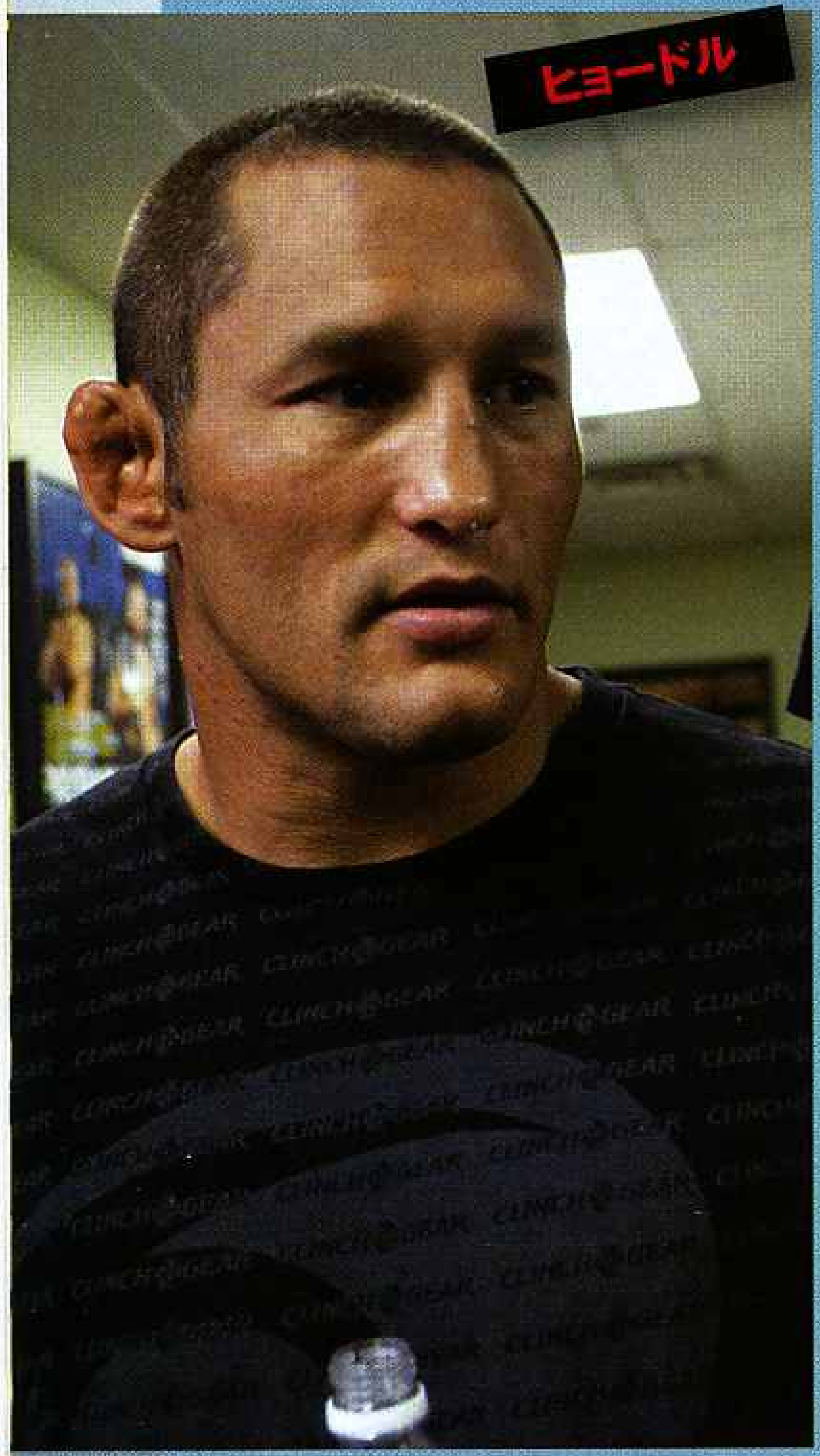
ヒョードル

8.1『アフリクション』は自分のジムの選手が参加するから私も会場に行くよ。ヒョードルvsジョシュ・バーネットは、とても興味のあるカードだね。ジョシュも素晴らしいファイターだけど、いま闘えば、まだ勝機はヒョードルのほうにあると思う。私もヒョードルとは闘いたいが、そのためには彼がUFCに来てくれないとね。私とヒョードルの闘いが実現すれば、素晴らしい闘いになると自分でも確信しているんだけど、こればかりは、どうなるかわからないね。



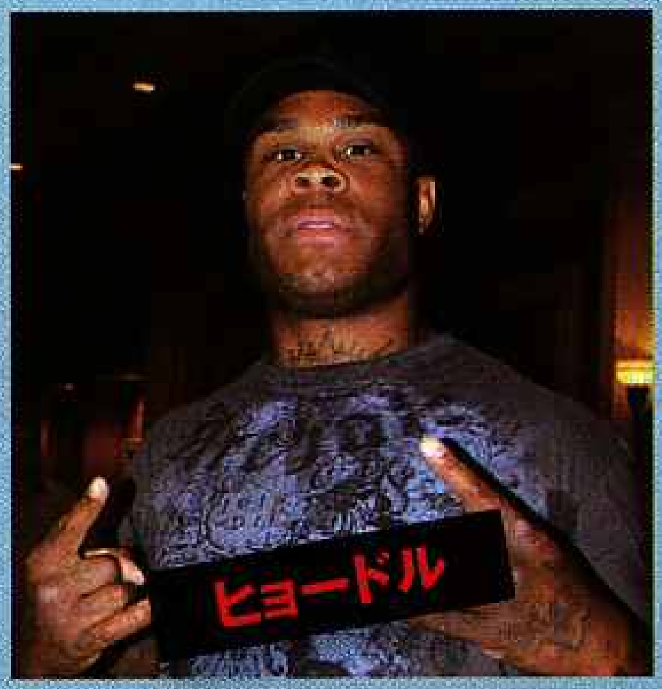
ダン・ヘンダーソン

ケガもなくグッドシェープであれば間違いなくヒョードルが勝つだろう。彼は常にハードパンチを繰り出すし、タフなファイターで精神的にもタフだからね。ジョシュもトップレベルの能力を見せてくれるだろうけど、ヒョードルはテイクダウンされないだろうし重いパンチを打ち込んでくるだろう。それにジョシュはパンチを打たれるのを嫌がるだろうから、カギはヒョードルのコンディション次第だよ。ハッキリ言って、誰がヒョードルに勝てるかなんて、まったくわからない。本当に見当もつかないよ。



ギルバート・アイブル

このカードは俺も楽しみにしているよ。スゲえ試合になるだろうからね。勝敗については、スタンド、グラウンド、すべての面で勝っているヒョードルがKOかサブミッションで勝つだろうね。で、その次は俺がヒョードルに挑戦だよ。ヤキトリ――ッ！



クイントン・"ランペイジ"・ジャクソン

オハヨウゴザイマス。ヒョードルとジョシュの試合？　グッドファイトになるね。ヒョードルは世界でナンバーワンのファイター、ジョシュはそのヒョードルの対戦相手として申し分ない実力を持ってるし、まだ若くて試合経験が豊富だからね。

ジョシュが自分を信じて試合を運べれば、ジョシュが勝つチャンスが充分にあると思う。

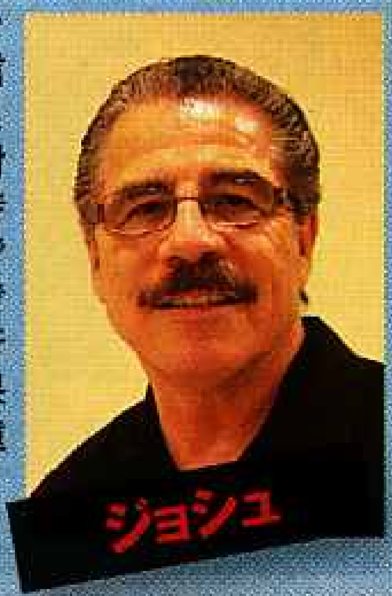
スティッチ

(UFCのオフィシャル&ジョシュの止血係)

グレートファイトになるだろうから、いまから楽しみにしてるんだ。このことは周りにまだ話していないことだけど、ヒョードルとジョシュはお互いにPRIDEで試合をしていたときに友好関係を築き上げたんだ。その関係で、ヒョードルがジョシュと同じ大会に参戦していたときは、いつも私がヒョードルの手をラッピングしてあげてたんだよ。でも、今度の試合ではジョシュの関係者である私にはそれができないよ。

ヒョードルは手に古傷がありいつも私にラッピングすることを依頼してきたんだ。ただ今度は向かい側にいるヒョードルからジョシュを守るのが自分の役目だ。ジョシュがヒョードルに勝つチャンスはかなり高いと思うよ。

先日ドイツで行なわれたUFCの際にミルコ・クロコップからジョシュ宛てにヒョードル戦のゲームプランのメッセージをもらってるんだ。だから凄く心強いよ。周りの人たちはジョシュが勝つことを信じてくれてないけど、ヒョードルとの対戦はジョシュが待ち望んでたことであり凄い集中力でトレーニングを行なってる。試合結果を知るのが待ち遠しいね。



エリック・パーソン

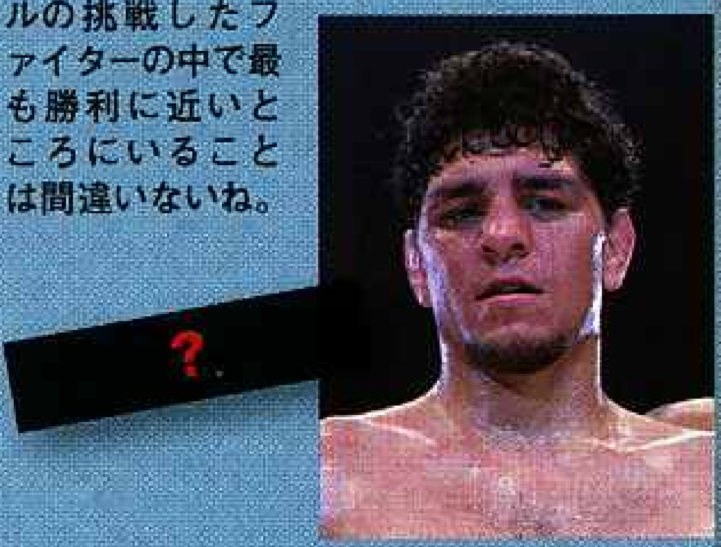
ジョシュはこの試合のために、いままでになく厳しい練習を積んできていて、コンディションも最高の仕上がりを見せてる。驚くことに毎日ランニングもしてるよ。そんなこと過去になかったことだからね。戦略に関してはオレが立てるけれど、ここ1〜2週間後からその戦略に沿ってドリルを繰り返しながらヒョードルとの対戦に向けて細かな修正をしていくんだ。いまはコンディショニングに比重を置いてるけどね。ジョシュには少なくとも50/50のチャンスがあり、ヒョードルのストライキングにうまく対応できてグラウンドゲームになったら勝機は高くなると思う。

ジェイソン・"メイヘム"・ミラー

ヒョードルがカチマスネ！　ジョシュにはMMA業界の世代交代をはかる意味でも、カッテホシイ！　でも、普通に考えたらヒョードルが勝つ可能性のほうがタカイデスネ。ジョシュは通常では考えられないグラウンドの素早い動きをするし、身体もデカいから、タップアウトを奪われる可能性は低いけど、スタンドではヒョードルをテイクダウンするのは困難だし、パワーの乗ったパンチでKOされてしまうと思う。ヒョードル、ツヨイ!!

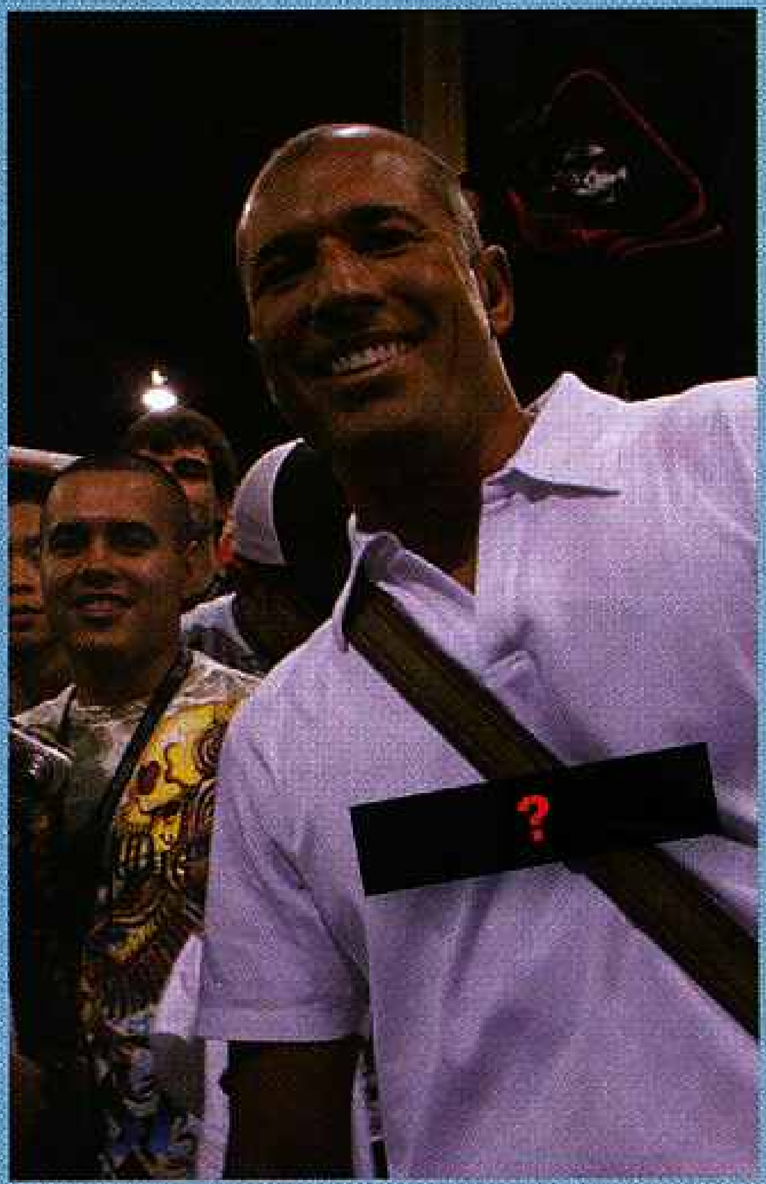
ニック・デイアス

ジョシュにとって凄くいいチャンス。彼は体格的に大きいし、ボクシングもグランドのテクニックも持ってるからヒョードルの攻撃を凌げると思う。試合をコントロールしてラウンドを取りにいくゲームプランを実行できれば勝つ可能性があると思う。ヒョードルは2ラウンドまでにジョシュを捕らえないと苦しい展開になるんじゃないかな。とにかくジョシュは過去にヒョードルの挑戦したファイターの中で最も勝利に近いところにいることは間違いないね。



ホイス・グレイシー

どんな試合結果になってもおかしくないほど接戦が期待できるね。ただ、ボクはギャンブルはしないし、クリスタルボール（水晶）もないので試合結果を占うことはできないよ（笑）。

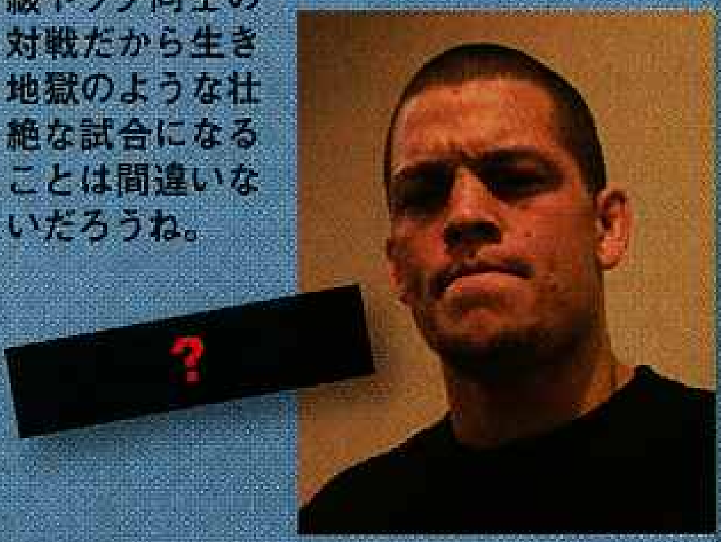


ジョー・ウォーレン

どちらが勝つか予想するのは難しいけど、いままでの実績や経験からいっておそらくヒョードルだろうね。ただ、俺もジョシュもアメリカンだから、"アメリカン"が勝つように応援するよ。そして、もしヒョードルが勝ったら次は"アメリカン"であるランディが倒しにいくよ！

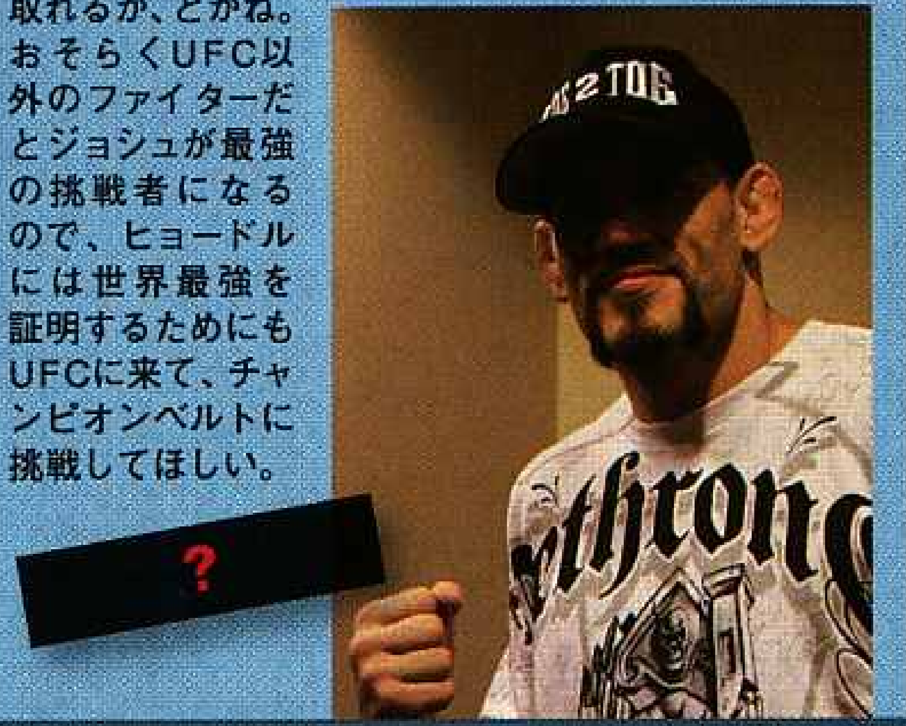
ネイト・ディアス

どちらが勝つなんて言えないけど、両者とも充分な経験を積んでるビッグなヘビー級トップ同士の対戦だから生き地獄のような壮絶な試合になることは間違いないだろうね。



ジョン・フィッチ

ヒョードルは人間としても尊敬してるファイターなんでとても楽しみにしてる。ジョシュはいままでの挑戦者の中で一番オールラウンダーでテクニックを持ってるので、ヒョードルのプレッシャーを受けながらでも自分のゲームプランを実行できればいいと思う。たとえばグラウンドでは優位な点があってもテイクダウンが取れるか、とかね。おそらくUFC以外のファイターだとジョシュが最強の挑戦者になるので、ヒョードルには世界最強を証明するためにもUFCに来て、チャンピオンベルトに挑戦してほしい。



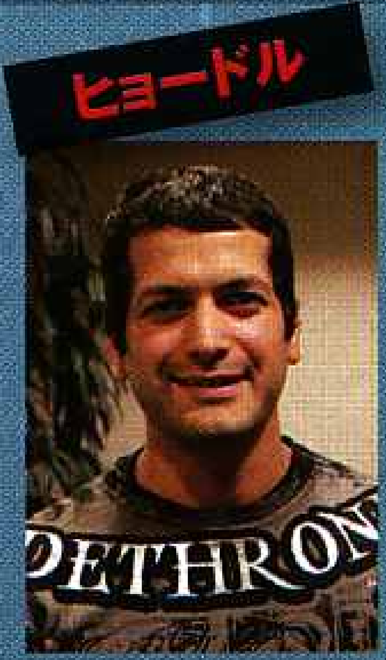
マイク・スウィック

バーネットのスキルを十二分に発揮できればヒョードルを倒せる可能性はあるが、ファイターとして見れば、完成度の高さからヒョードルと言わざるをえないね。もしUFCに来ればヒョードルを倒せる可能性のあるファイターがたくさんいるし、ぜひそれが実現すればと思ってる。

デイビット・カマリロ

ヒョードルの優位性は否定できないけど、ジョシュがテイクダウンからグラウンドゲームへ持ち込めればチャンスが出てくるだろうね。そのためにはストライキング、クリンチ、テイクダウンをうまくミックスさせていくべきだと思う。パワーの落ちてくる後半のラウンドに勝負をかけるのも重要になってくると思う。

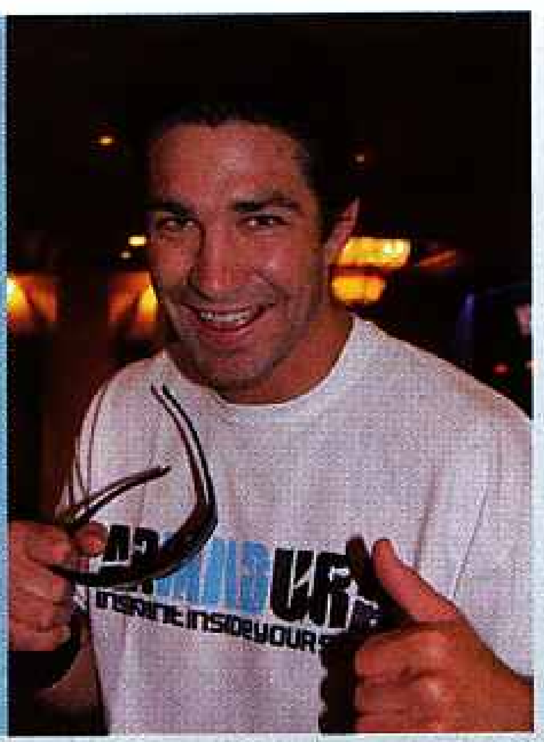
ヒョードルが勝ったら、ぜひブロック・レスナーとの対戦が観たいね。いままでの質問はレスナーはどのようにMMAのテクニックを身につけられるかということだった。それが『UFC100』の1ラウンドからグラウンドでミアを見事にコントロールしていた。今後もMMAの経験とテクニックを身につけていけば体格差からもヒョードルとの対戦は興味のつきないものになるだろうね。



ルーク・スチュワート

アメージングな試合内容になるだろうね。ジョシュは得意なグラウンドゲームに持ち込もうとするだろうけど、それまでのスタンドでの攻防戦がフルラウンドで展開されるんじゃないかな。勝敗は……ヒョードル相手に賭けはできないよ。財産を失いたくないからね（笑）。

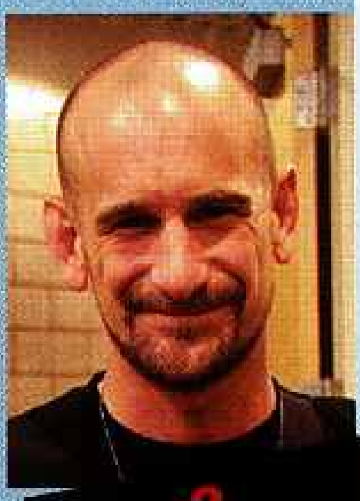
ヒョードル



グレッグ・ジャクソン

（ジャクソンサブミッション参謀、GSPらのコーチ）

みんなが待ち望んでたとても興奮するカードだよ。ヒョードルもジョシュも想像できないようなテクニックを備えてるファイター同士の試合になるんだからね。どちらが勝つかは予想できないけど、間違いなくエキサイティングな試合になるだろうからとても楽しみにしてるんだ。



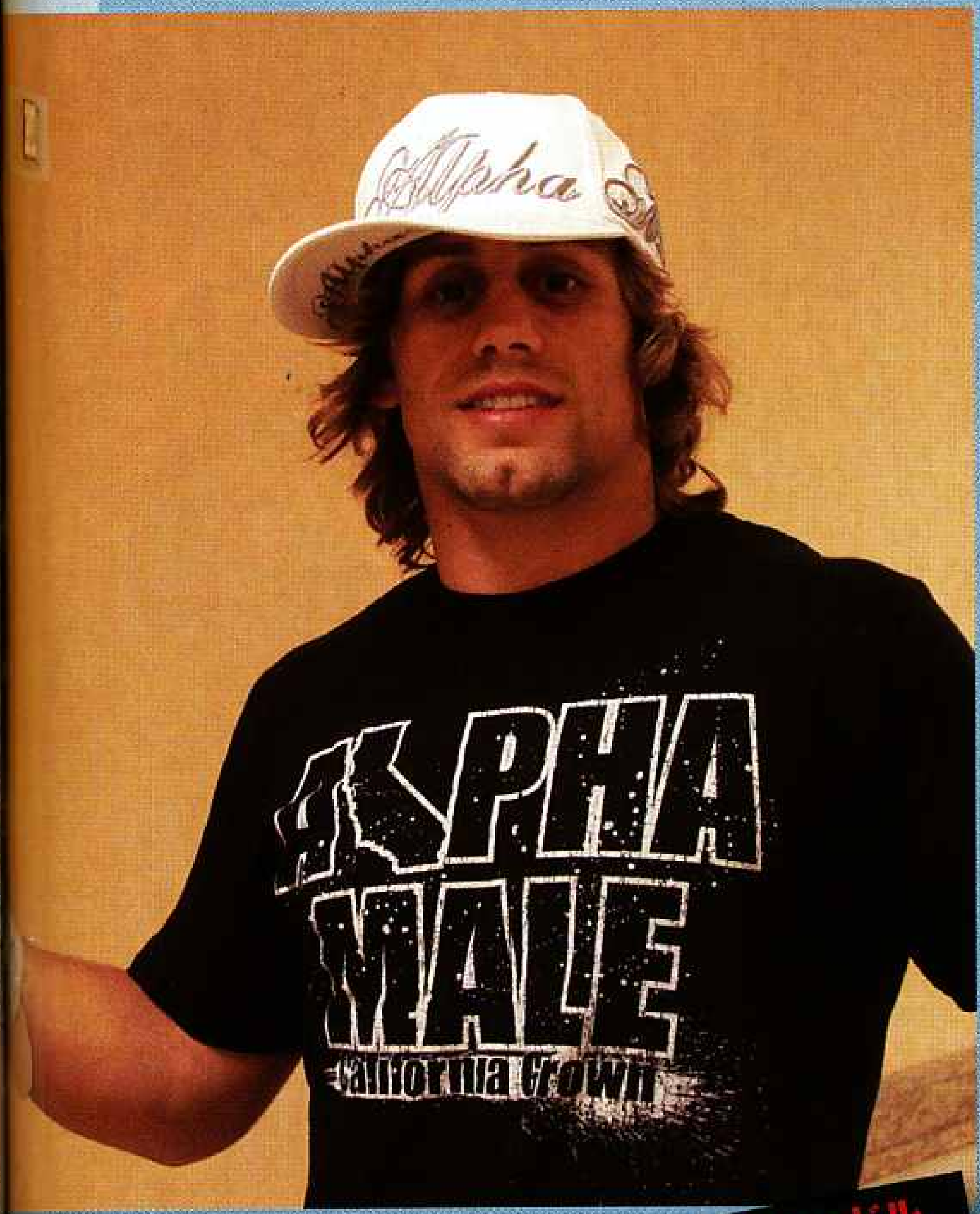
？

ネイサト・マーコート

ヒョードルとジョシュが試合をするのかい？ それはクールだね。噂では聞いていたけど正式に決まったのは知らなかった。勝敗を予想しろだって？ ヒョードルを相手に賭けはできないよ（笑）。

もちろんジョシュにも勝機はあるだろうし、UFCのファイターだったらレスナーやショーン・カーウィンとかの対戦がおもしろいんじゃないかな。

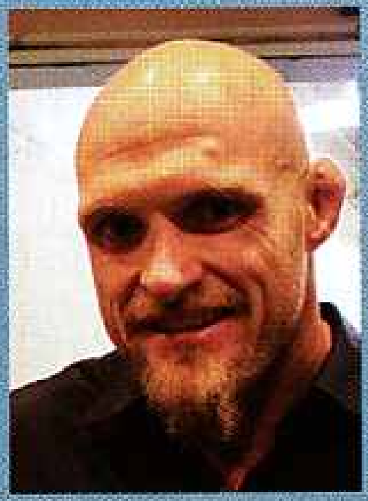
ヒョードル



フィル・バローニ

ヒョードル

こいつはとてつもないハードファイトになるぜ！　ヒョードルもジョシュも俺のマブダチなんだ。ジョシュはヒョードルに勝つためのスタンド、レスリング、サブミッション、すべての技を持ってて体格的にも勝っている。だがヒョードルが負けることは想像できないし、どんな状況に置かれても勝つ手段を知ってるファイターだからね。現在のヒョードルに勝てる相手は想像できない、ブロック・レスナー？　レスナーは身体に似合わずアゴが弱いので、ヒョードルをコントロールしたとしてもパワフルな一撃で仕留められてしまうだろうな。



キース・ジャーディン

ジョシュのことはよく知らないけど、ヒョードルはすべてにおいて優れているし、とくにメンタル面が強いからね、彼のほうに分があるよ。ヒョードルに勝てそうなファイターだって？　シェーン・カーウィンはどうだい？

ヒョードル

クレイ・グイダ

ヒョードルは大好きなファイターの一人だし、ジョシュはこれまでで最高の挑戦者となるから非常に楽しみにしてるんだ。予想はヒョードルだね。すべての面で少しずつ上回っていると思う。この試合が終わったら、ヒョードルを倒せるかどうかはわからないけど、ブロック・レスナーとの試合はぜひ観てみたいよ。

ヒョードル

ユライヤ・フェイバー

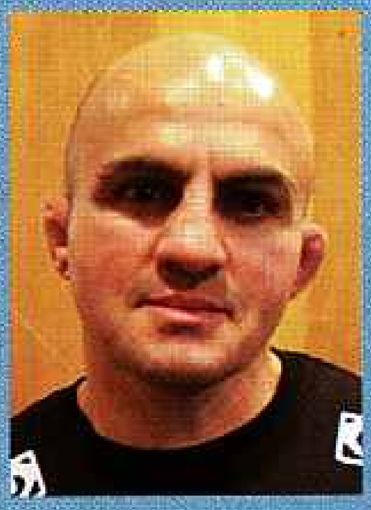
ヒョードル

とてもエキサイティングなカードだよ！　もっとアメリカのMMAファンがこのカードのことを知るべきだと思ってるんだ。これほどのタレントを持ったファイター同士がぶつかるんだからね。もちろんハードコアなファンたちは、このカードの価値を充分に理解していて、楽しみにしているはずだよ。

ヒョードルはほかのスポーツでも世界チャンピオンになってることから精神力的に見ても優位だと思う。誰がヒョードルを倒せるかだって？ブロック・レスナーは可能性があるけど、ヒョードルのパンチは重いし、小さい身体でもグラップリングがレスナーより優れているように感じるね。だから、現時点ではいないんじゃないかな。

ヴァリッジ・イズマイウ

とても興味のある試合だね。タフな内容になるだろうから、オレ様としてでも勝者を予想するのは非常に困難だ。どうしてもというならばヒョードル、ほかの惑星から来たアンビリーバブルなファイターだからね。あいつは宇宙人だよ！



ヒョードル

『VERSAL COM/AOL Fan House』

ヒョードル

お互いに友だち同士であり、ジョシュがヒョードルを尊敬しすぎていることからもジョシュへの評価が低いが、彼はスマートだしヒョードルをテイクダウンしてグラウンド＆パウンドと展開したいはず。ヒョードルはすべての面においてジョシュよりも上回っていると思う。アルロフスキーの試合を参考にすると、ジョシュがアウトボクシングをうまく使えれば勝機が生まれてくると思うけど、ヒョードルが２ラウンドTKO勝利を収めると予想するね。いまはヒョードルは真の世界王者だし、誰も倒せないよ。ここ１～２年であればブロック・レスナーは可能性があると思う。あの大きく強靭な身体は普通の人間じゃ対応できないからね。

『MMA Junky』

ヒョードル

MMAのここ数年の試合においては最大の試合になるだろうね。どのスポーツにおいても世界ランキング１位と２位の選手が対戦するなんてめったに観れないことだから。ヒョードルは過去３人のUFCチャンピオンから勝利を奪ってるという実力から見てもヒョードルが勝つと予想する。ジョシュの前回の試合は「極めるべきだった」と言う声もあるが、ジョシュは間違いなく最強のチャレンジャーだし、その実力も兼ね備えてる。ただ、どのチャレンジャーもそうだったようにヒョードルを止めるのは困難だろう。そのあとはどうやってヒョードルをUFCのケージに入れるかだろうね。ブロック・レスナーとの対戦は自分にとってもドリームファイトなんで、ぜひ実現してほしい。

『MMA WEEKLY』

？

いままでの挑戦者の中でジョシュは一番オールラウンドだしハイレベルなテクニックを持ってるから、過去にない最強のチャレンジャーだろうね。ただし不安要素の一つはスタンド。いままでのジョシュの試合ではガードが雑な場面が何度もあったんだ。そういう動きにヒョードルの一発が入ってしまう可能性がある。グラウンドの攻防戦になればジョシュはヒョードルのアームバーやヒールホールドは防げるだろうけどね。長いラウンドに持ち込めればジョシュに勝機が見えてくるかもしれない。ミルコはヒョードルと接戦を演じたけどスタンドの攻防だけだったのに対し、ジョシュはいろいろな角度から攻めて勝機を狙うことができるからね。ヒョードルのチャレンジャーがみんなそうだったように、ヒョードルと対戦できるこの日はジョシュにとって過去最高の夜になるだろうね。

『Fighters Only/UFC Germany』

ヒョードル

ヒョードルはジョシュを殺すよ！　１ラウンドKOでね。ジョシュはまったく何もできずに終わってしまうと思う。彼は過去３年間を見るとトップレベルの選手とは対戦してないからね。彼が勝ったジェフ・モンソン、ペドロ・ヒーゾらは２ステップぐらいランクが低い選手たちだから。それに対しヒョードルは常に世界でベストのファイターたちの挑戦を受けているんだよ。だから、今日現在ヒョードルに勝てる選手に関しては誰も浮かんでこないんだ。ただブレッド・ロジャーズやケイン・ヴェラスケスら新しい選手がどんどん頭角を現わしてきてるから今後は楽しみだね。個人的にはブロック・レスナーとの試合は絶対に観てみたいよ。

『Yahoo Sports!』

ヒョードル

ヒョードルは世界中でベストファイターであることを証明したいところだね。予想は難しいけどヒョードルが判定で勝つんじゃないかな。ジョシュはハイレベルなグラップラーだけど、ヒョードルはグラウンドでも難なく対応できると思うし、多彩な技で勝つ手段を知ってるから試合を有利にコントロールすると思う。ジョシュはスマートなファイターなのでKOやサブミッションで極められることはないだろうから、25分間ハイレベルな攻防戦が観られるんじゃないかな。UFC以外のイベントだと今後ヒョードルの対戦相手が考えられないから、問題はヒョードルがUFCに来るかどうかになるだろうね。１～２年前まではUFCのヘビー級は粒がそろってなかったけど、現在はブロック・レスナー、フランク・ミア、ランディがいる。ブロックの265ポンドの巨体から繰り出されるパンチにヒョードルがどう対応するかは見ものだよ。

『Fight News Com』

ヒョードル

試合はヒョードルが勝つよ。彼は生きてるレジェンドだからね。

それにしてもヒョードルをUFCで観られないのはとても残念なことだよ。ヒョードルvsジョシュとブロック・レスナーvsフランク・ミアの勝者同士が闘えば素晴らしいイベントになるのにね。ジョシュも実績はトップだが、いまのヒョードルには誰も勝てないと思う。『He is a MAN』だよ。唯一考えられるファイターはブロック・レスナーだね。

こちらの写真が6.30DEEP後楽園大会のメインで行なわれたミドル級タイトルマッチ、福田力vs中西裕一の判定直後の一枚。椎名さん同様、試合後この判定についても各方面で物議を醸しているようだが、それに関する佐伯繁代表のアンサーはコチラをチェック！→http://www.deep2001.com/blog2/

椎名基樹のサムライ三昧

第39回

『MMAの判定基準』

6・30『DEEP42』をテレビ観戦した。金ちゃんは出場するし、宮田vs山崎のような好カード&好試合もあるし、ヘビー級の試合も少しずつ内容が備わってきたし、今回は出場しなかったがMIKUのような素晴らしい女子選手もいるしで、バラエティに富んで、いまDEEPは最も観客を楽しませるMMAプロモーションに成長した感がある。

とくにDEEPは、ミドル級に設定した体重80キロ台の選手層が厚く、それが最大のセールスポイントになっている。技術のある選手と、その選手層が備わった限界点が80キロ台であり、要するに、この階級が、現在日本におけるMMAの最重量級である。PRIDEの消滅により、重量級の外国人の選手層が薄くなり、それに対抗していた日本人の重めの体重の選手が、適正体重で闘うようになって、図らずしてこの階級が明確になった。

ボクシングの日本最重量級がミドル級であるように、機能する最重量級がはっきりしたことは、PRIDE消滅のよかった側面かもしれない。最重量階級ということは、日本最強を決める階級とも言える。そして最も迫力がある、おもしろい試合を見せられる階級ともいえるだろう。

この日メインを務めたのも、中西裕一vs福田力のミドル級タイトルマッチだった。約1年前のDEEPミドル級王者決定トーナメント決勝の再戦であり、トーナメントで疲弊したあとではない、お互い同条件の闘いで好試合を期待した。試合内容は名試合とまでいかないまでも、重量級の技術レベルの高さを認識させられる、期待どおりの好勝負だった。

しかし、福田力の勝ちとなったその判定結果は、1年前トーナメントで行なわれた福田力vs白井裕矢と同じく、納得しかねる判断だった。それは1年前と同じくテレビ実況の解説を務めた熊久保さんと青木真也が、意外な結果に言葉を失なってしまう状況も同じだった。「また福田力がらみかよ」と、それを観ている筆者は思わざるをえなかった。

この日ナイスなことに実況を務めたアナウンサーが、DEEPの判定基準を紹介してくれた（長年MMAを観ているが、アナウンサーが判定基準を読み上げてくれた記憶がない）。それによると「ラウンドごとの採点はせず、①相手に与えたダメージ　②ギブアップにつながるアドバンテージ　③積極性　④印象点の順で3ラウンドを総合的に評価する」という。

ならば第1評価基準の「相手に与えたダメージ」において中西の勝ちが妥当だと思うが、それよりも驚いたのが、印象点という言葉だ。言うに事欠いて印象点って……。中西vs福田の判定について、青木は「判定は難しい。最終的には主観になっちゃいますし」と言っていたが、印象点というのは主観の何ものでもない。それが基準に入っているのだから驚く。よく試合解説で、印象がよいとか悪いとか言うのを聞くが、それは「判定は難しい」そして「不完全だ」という諦念の言葉である。まさかそれを真に受けて明文化したわけではないだろうが……。

しかし、いずれにしても判定は難しいのはたしか。ちなみに修斗の判定基準は「①クリーン・エフェクティヴ・オフェンス（的確で有効な攻撃）＝ダメージを与えた攻撃。②アグレッシヴネス（積極性）＝ダメージは与えられないものの積極的で有効な攻撃。③リング・ジェネラルシップ（ペース支配）＝対戦者の攻撃を無効にするような巧みな試合運び」。

さらに、ボクシングの判定基準は「①有効なパンチによって、どちらが相手により深いダメージを与えたか。②どちらが、より攻撃的だったか。ただし、有効なパンチを伴わない単なる前進は評価の対象とならない。③どちらがよりディフェンス技術を駆使して相手の攻撃を防いだか。ただし、これも攻撃に結びつかない単なる防御は評価の対象とはならない。④リング・ジェネラルシップといって、どちらの試合態度が堂々としていて、戦術的に優れていたか、どちらが主導権を握っていたか」だそうだ。

これを読むとリング・ジェネラルシップの解釈がボクシングと修斗は違う。修斗の③はディフェンスの評価にも読める。また、よく修斗の試合の解説で中井祐樹さんなどが「修斗の判定はダメージですから」と言うのを聞いて、打撃によるダメージとサブミッションによるダメージをどう比較するのか、そもそも一本まで至らなかった、サブミッションによるダメージってなんだろう（とくに絞め技）かずっと疑問だった。

『DEEP42』の宮田vs山崎の判定において熊久保さんは「ギブアップにつながるアドバンテージは山崎が上」と解説していたが、筆者は「ギブアップにつながるアドバンテージ」とは修斗における「キャッチ」の状態のみ評価されるべきだと思う。最もわかりやすい状況で言えば、腕十字で腕を伸ばされたが、ギブアップにまで至らず、しかしそれは判定に加味されるということだ。

となれば、打撃系格闘技と同様MMAにおいてもダメージとは、立ち技・寝技どちらにもかかわらず、打突のみを評価すればよく、あとは「キャッチ」をどこまで評価するかということになる。筆者としては「キャッチ」は「ダウン状態にした打撃」と同等の評価をするべきだと思う。

競技化うんぬんが論じられるMMAだが、判定基準を論じ明確にすることが、それにおいて最も重要なことだと確信する。ハルクトーナメントの是非を論ずることではないのだ。各団体が協議し、統一の判定基準を確認できたらMMAの発展におおいに貢献するだろう。またそれくらいできないでどうするとも思うのだ。

ニュース、動画、コラムが充実のプロレス&MMA携帯サイト

kamipro Move カミプロムーブ

『1976年のアントニオ猪木』著者・柳澤健の連載コラム

『1993年の女子プロレス外伝』

本誌で絶賛連載中の女子プロレス対抗戦全盛期の90年代に焦点を当てた柳澤健氏の連載『1993年の女子プロレス』。残念ながらそこに掲載できなかったものの、お蔵入りさせるにはあまりに惜しい貴重なエピソードを毎週お届けしている携帯サイト『kamipro Move』の連載が、この『1993年の女子プロレス外伝』だ。柳澤氏の徹底した下調べと相手の心の底に深く潜っていくインタビューが大好評です！ 今回は現在掲載中のアジャ・コング編に寄せて柳澤氏が書いた原稿を抜粋してみよう。

▼09年6月26日更新分より抜粋

『kamipro Move』金曜コラム「1993年の女子プロレス外伝」へようこそ、柳澤健です。

三沢光晴さんがリング上で亡くなった事件は、プロレスファンに大きな衝撃を与えました。最後に受けたバックドロップは、いつもとさほど変わらないものだったといいます。いつもと同じバックドロップ、いつもと同じ受け身。でも、28年間にも及ぶ長い現役生活の中で少しずつたまったダメージのために、三沢さんの頸椎は極めてもろくなっていて、ついに致命的な一撃となってしまったということなのでしょう。

日本のプロレスを世界一の高みに押し上げたのは、ジャイアント馬場とアントニオ猪木の二人である、というのは、衆目の一致するところです。二人の大天才が一線を退いた後、彼らのような記号性や風格を持たないレスラーは、何を観客に見せればいいのか？ 三沢光晴、川田利明、田上明、小橋健太（現・建太）のいわゆる四天王が見せてくれた、あの凄絶なプロレスは、そのひとつの答えだった、と私は思います。自分の命を削って相手の技を極限まで受け続け、観客を心の底から納得させること。

それは馬場、猪木なきあとのプロレスラーがたちが、生き残りをかけて自らの意志で選び取った道であり、格闘技には絶対にありえない、プロレスだけが表現できる世界でした。あのハードなプロレスの果てに、三沢さんの悲劇があります。プロレスラーはリング上で死ぬべきではありません。そして私たちが、人の死を求めてプロレスを見ているわけではないのはもちろんです。ただ「危険だからやめろ」という権利は、リング外にいる人間にはありません。「リングの上で何を見せるか」それはリングの上にいるレスラー自身が決めることなのです。

さて、アジャ・コングとブル中野が90年代初頭に見せてくれた、あの恐るべき一連の試合もまた、クラッシュ・ギャルズなき後、自分たちは観客に何を見せるか？ という問いに対する答えではなかったか、と私は思います。

全日本女子プロレスは世界で最も恐ろしい団体です。

年間250試合以上にも及ぶ過酷なスケジュールや、四六時中顔を突き合わせていなくてはならないストレスから生まれる険悪な人間関係が、そのままアングルへと変わり、レスラーたちは憎しみや嫉妬をそのままリング上でぶつけ合うのです。

毎日ブログ好評連載中

金原弘光
「金ちゃんのどこまでやるの!?」

MIKU
『格闘ブロガール』

本誌で好評連載中の女子プロレス&女子格闘技企画が動画になった!!

掟ポルシェ『萌え萌え女々苑Move』

今月は女子プロレスラー・さくらえみが掟ポルシェを返り討ちに!?

充実のコラム連載陣も要チェック!!

月	郷野聡寛の『MONDAY NIGHT FEVER』	『戦極』参戦が決まった郷野聡寛が本音トークで送る！ 試合やパフォーマンス同様に文章でもマルチな才能を発揮してます！
火	ニュース特選『kamiの一週間』	ここ一週間の出来事をヨタ話で振り返るいろんな意味で反響が大きい爆弾企画。これを読まずにマット界は語れない！
水	橋本宗洋の『格闘裏グルメ』	昨年、激痩せした元・重量級ライター（現在はライトヘビー級?）橋本宗洋が格闘技界の見どころをズバリ解説！
木	高橋ターヤンの『This Week MMA』	最先端と言われる北米のMMAを中心に日本の目線で読み解きます。海の向こうの気になる話題を掘り下げろ!!
金	柳澤健の『1993年の女子プロレス外伝』	『kamipro』本誌と連動する柳澤健の女子プロレス連続インタビュー企画で、誌上には掲載されなかった話をお蔵出し!!
土	マット界の事件を徹底追求『kamipro事件簿』	マット界には日々、さまざまな事件が起こる。そんな迷宮入りの事件をピックアップして真相を解明する大反響連載！
日	マッスル坂井の『ゴー・フォー・ブログ！ 週刊マッスル坂井』	鬼才・マッスル坂井がその華麗なる日常を大公開！ いかにしてマッスルが生み出されるのかをここでチェック！

主要3キャリア全端末対応（※端末により一部非対応コンテンツあり）

アクセス方法

iモード	iメニュー	メニューリスト	スポーツ	格闘技/大相撲
EZweb	EZトップメニュー	スポーツ・レジャー	格闘技	
Yahoo!ケータイ	メニューリスト	スポーツ	格闘技	

サービス利用料 月額315円（税込）

enterbrain 株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
［お問い合わせ］株式会社エンターブレイン カスタマーサポート TEL.0570-060-555（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00〜17:00） メールでのお問い合わせは support@ml.enterbrain.co.jp まで。

本誌じゃ読めないインタビュー
ここに載ってます!!

kamiインタビュー

"ZST最強の男"

戦極フェザー級トーナメントベスト4

金原正徳

対戦が決定した日沖発に「プロ意識はあるのか?」と痛烈な挑発!!

このほかにも最近はMIKU、宮田和幸、映画『チョコレート・ファイター』主演女優ジージャー、日沖発、小見川道大、菊野克紀など濃厚インタビュー掲載中!!

美女格闘技『ジュエルス』BLOG

注目の美女格闘技イベント『ジュエルス』のBLOGを毎日更新中。月替わりの7月担当は美女ファイター・長野美香です!!

長南亮の『ピラニアUSA日記』

8.23『DEEP』で日本マット復帰が決定した長南亮。日々の生活の中で感じたこと、試合のこと、家族のことを本音で綴る注目の連載です!

こちらプロレス村役場ドットコム

元『週刊ゴング』編集長・金沢"GK"克彦氏が、プロレス界の最前線で見てきたこと、取材したことを週一回のコラムで激筆!!

青木真也の『週刊ワオ木真也』

7.20『DREAM.10』さいたまSA大会でビトー"シャオリン"ヒベイロと激突した"バカサバイバー"青木真也が心境を綴る!!

ポッドキャスト番組『mimipro』

カリスマ司会者・原タコヤキ君がお届けするプロレス&格闘技トーク番組。多彩なゲストも登場、ここでしか聞けない話もあります!!

試合速報

注目の試合の内容をいち早く速報します。試合の写真はもちろん、試合後のコメントなども細かくレポート!! 生観戦後も必読ですよ。

ニュース

カード発表や重大発表など、規模の大小にかかわらず記者会見の模様を素早くお伝えします。最新情報はここで読もう!!

最新号情報

次号の表紙は? 内容は? そんな疑問にいち早くお答えします。雑誌『kamipro』およびkamipro booksシリーズの発売情報はこちらで!!

このほかにも読者プレゼントなど嬉しい企画を多数ご用意してます

紙

プロレス&MMAのニュースサイト

kamipro.com

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

カミプロドットコム

無料です!

レッツ毎日アクセス http://www.kamipro.com/

サラブレ

特集 **ブエナビスタの敵はアイルランドにあり!?**

世界競馬の力と今

【アイルランドの底力・第2部】愛国産馬はなぜ成功するのか?●英ダービー制覇コンビ、J.オックス師、M.キネーン騎手インタビュー●世界一の巨大生産・馬主組織のマネージャーが語るクールモアの"哲学"と"勝者の論理"●アイルランドのブエナビスタ評
【その他】●'09欧米クラシック結果詳報&トレンド血統レポート●日本馬はなぜ前哨戦を使わないのか?●ディープインパクトの池江助手が語る海外遠征●武豊騎手ほか日本のホースマンが遭遇した海外競馬●日本馬海外遠征秘話

絶賛発売中!

8月号 2009 August
定価 720円

愛調教馬が1～5着を独占した2009年の英ダービー

特別企画 札幌・新潟・小倉を3つ要素から徹底分析
夏競馬コース別クロス攻略

©SEGA

StarHorse2™ FOURTH AMBITION
ULTIMATE GUIDE
アルティメット・ガイドブック

種牡馬
タニノギムレット
出現コード付き
堅実継承型で使いやすい!
ウオッカの完全再現配合が可能に!
※種牡馬タニノギムレットの受け取りにはSTARHORSE.NETへの登録が必要です。

『スタホ』究極の攻略本が登場!

種牡馬・繁殖牝馬・アイテムデータはもちろん、開発チームへの独占取材を始め、サラブレ編集部が独自で調査したゲームデータを元に最新の攻略法を公開!

A5判 定価**1680**円(税込)

絶賛発売中!

enterbrain 株式会社 エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 電話 0570-060-555(代表) URL http://www.enterbrain.co.jp

You are not alone, MJ!!

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①〜⑧の質問の答えをご明記の上、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2009年8月25日(火)頃発送予定です)。

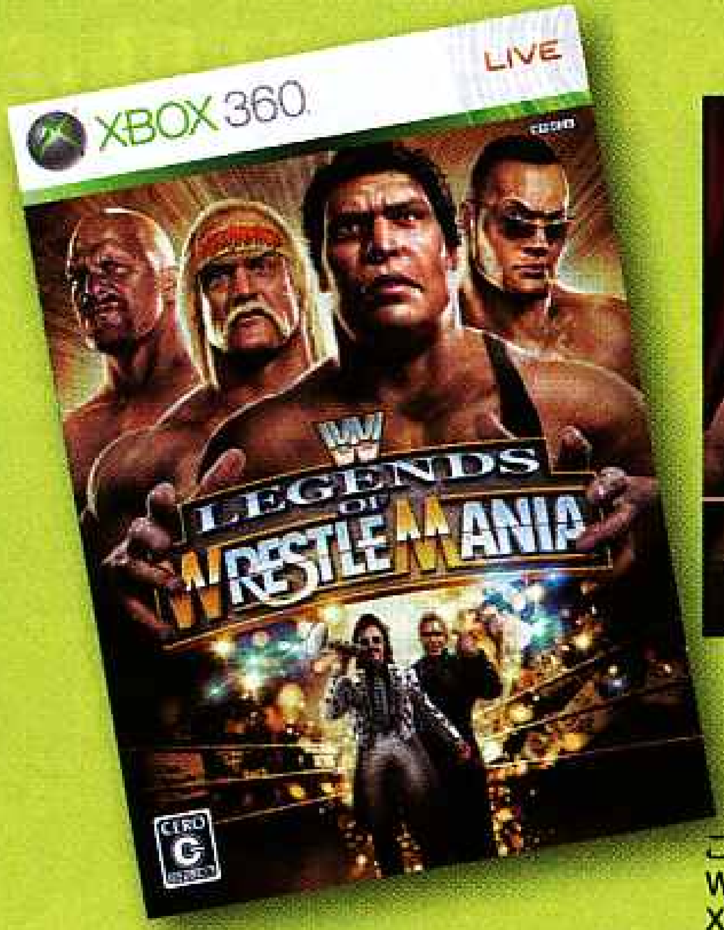
【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦今年上半期(6月30日まで)のMVP、ベストバウト、ベスト興行を一つずつ挙げてください⑧今年上半期(6月30日まで)のワーストMVP、ワーストバウト、ワースト興行を一つずつ挙げてください

【宛先】〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス『kamipro』編集部
「Who's Bad?」係まで

※応募締切は2009年8月14日(金)当日消印有効

PRESENT*01

各1名様



『WWEレジェンズ・オブ・レッスルマニア』

[株式会社コーエー/¥7,140(税込)]

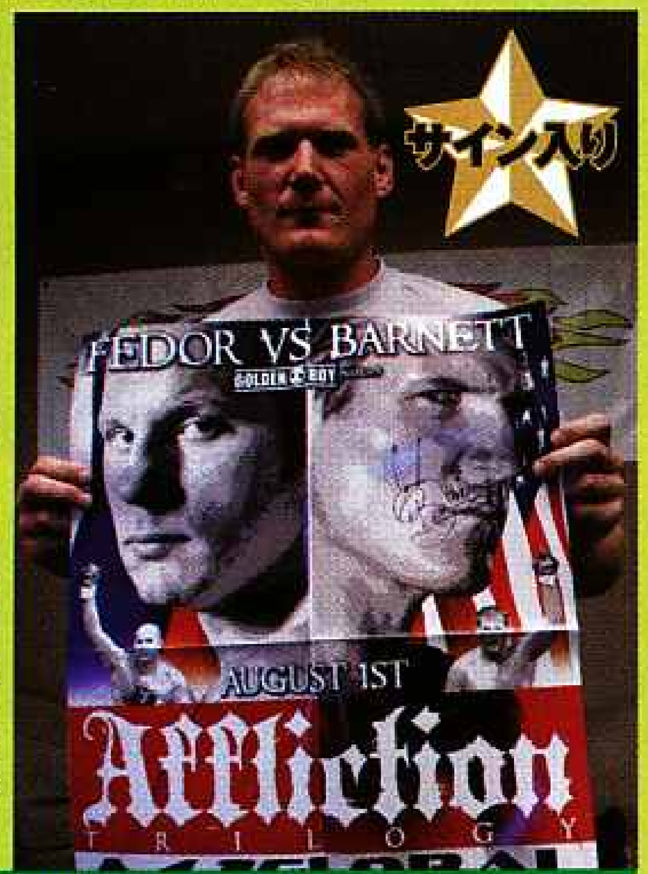
こちらは現在絶賛発売中のプレイステーション3、Xbox360用ゲームソフト。WWEのレジェンド・レスラーを駆使して歴史を塗り替えろ!! プレステ3用、Xbox360用を各1名様にプレゼント。どちらが希望かを必ず明記すること。

All WWE programming, talent names, images, likenesses, slogans,wrestling moves, trademarks, logos and copyrights are the exclusive property of World Wrestling Entertainment, Inc. and its subsidiaries.All other trademarks, logos and copyrights are the property of their respective owners. ©2009 World Wrestling Entertainment, Inc. All Rights Reserved.
©2009 THQ/JAKKS Pacific, LLC. Used under exclusive license by THQ/JAKKS Pacific, LLC. JAKKS Pacific and the JAKKS Pacific logo are trademarks of JAKKS Pacific, Inc. Developed by YUKE'S Co., Ltd.YUKE'S Co., Ltd. and its logo are trademarks and/or registered trademarks of YUKE'S Co., Ltd. THQ and the THQ logo are trademarks and/or registered trademarks of THQ Inc. All Rights Reserved. All other trademarks, logos and copyrights are property of their respective owners.

公式ホームページ■http://www.legendsofwrestlemania.jp/

PRESENT*02

1名様



ジョシュ・バーネット サイン入り 8.1『アフリクション』大会ポスター

[アフリクション/非売品]

8月1日『アフリクション』でエメリヤーエンコ・ヒョードルと激突するジョシュが貴重な大会ポスターにサインを入れてプレゼント!!

アフリクション■http://www.afflictionentertainment.com/trilogy/index.php

PRESENT*03

1名様

ザ・グレート・サスケ試合用マスク (IMAI製タグつき)

[闘道館]

東京・水道橋の格闘技&プロレスショップ「闘道館」からサスケのマスクが登場! 同店にはレアなお宝がズラリ揃ってます!

闘道館■http://www.toudoukan.com/

PRESENT*04

1名様

石井慧&フィル・バローニ サイン色紙

[非売品]

なぜか筋肉三兄弟に加入した石井慧と夕焼け番長フィル・バローニの記念すべきコラボサイン色紙をプレゼント! ほかじゃ絶対に入手不可能!

石井慧オフィシャルサイト■http://ishii-satoshi.com/

PRESENT*05

1名様

大槻ケンヂ サイン色紙

[大槻ケンヂ氏/非売品]

本誌今号に登場した筋肉少女帯"オーケン"こと大槻ケンヂさんのサイン色紙をプレゼント! このチャンスを逃すな!

筋肉少女帯■http://www.kids.co.jp/King-Show/

PRESENT*06

1名様

石岡沙織Tシャツ EU QUERO TEE

[リバーサル/¥5,040(税込)]

女子格闘技の大海原に勇み出すイメージをTシャツに落とし込んだ逸品。惜しくもフジメグに敗れたものの今後も注目! サイズはM。

リバーサル■http://www.rvddw.com/

PRESENT*07

3名様

Affliction Trilogy イベントTシャツ

[Affliction/36ドル50セント]

8.1『アフリクション』が、スカパー!でPPV放送されることを記念してプレゼント! 放送日程は下記URLで。M、L、XLの中から希望サイズを明記。

スカパー!■http://www.sukachan.com/battle/

PRESENT*08

1名様

単行本『生たまご』ゆでたまごのキン肉マン青春録

[エンターブレイン/¥1,680(税込)]

大人気マンガ『キン肉マン』著者であるゆでたまご先生の半生を語った自伝。マッスル坂井も絶賛で大好評発売中!

エンターブレイン■http://www.enterbrain.co.jp/

PRESENT*09

1名様

単行本『子殺し』猪木と新日本プロレスの10年戦争

[宝島社/¥1,500(税込)]

本誌でもおなじみ元『週刊ゴング』編集長・金沢"GK"克彦氏が編集長時代から現在まで新日本プロレスと猪木の暗闘を描いたドキュメント!

金沢GK克彦のこちらプロレス村役場ドットコム■http://www.kamipro.com/column/gk.php

PRESENT*10

3名様

DVDつきムック『サブミッション魂vol.4』

[晋遊舎/¥1,575(税込)]

今年9月にスペインのバルセロナで開催されるアブダビコンバット世界大会のアジア予選を大特集。DVDにはアジア予選全試合収録!

晋遊舎■http://www.shinyusha.co.jp/

kamipro137 応募券 ポウッ!

ちぎって持ってっちゃダメだぜ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! http://kamipro.com/

kamipro 紙のプロレス

No.137
2009年8月6日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎（夏本番のため非番）

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子

編集次長（コールマンに感涙）
松林 貴

デザインGM
出田さん（TwoThree）

デザイニングマネージャー
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂マツくん
谷タニやん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
鐘田やっちゃん
白木みのる（以上、TwoThree）

トメさん
はなえちゃん（以上、さおとめの事務所）

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
タイコウクニヨシ
梅木麗子
丸山剛史

お勘定
工藤ちゃん

ビーチの視線独占
入江マイクロビキニ（TwoThree）

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

業務部
樽本"アラ汁"義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

終身名誉編集庶務
高木由美子

編集チアガール
金川"ナツコ"奈津子
白倉"クララ"明子

ミドレンジャー・マダム
廣橋久美子

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

印刷
図書印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

■広告掲載のお問い合わせは下記まで
株式会社エンターブレイン
スポーツ企画編集部 ☎03-3265-7166

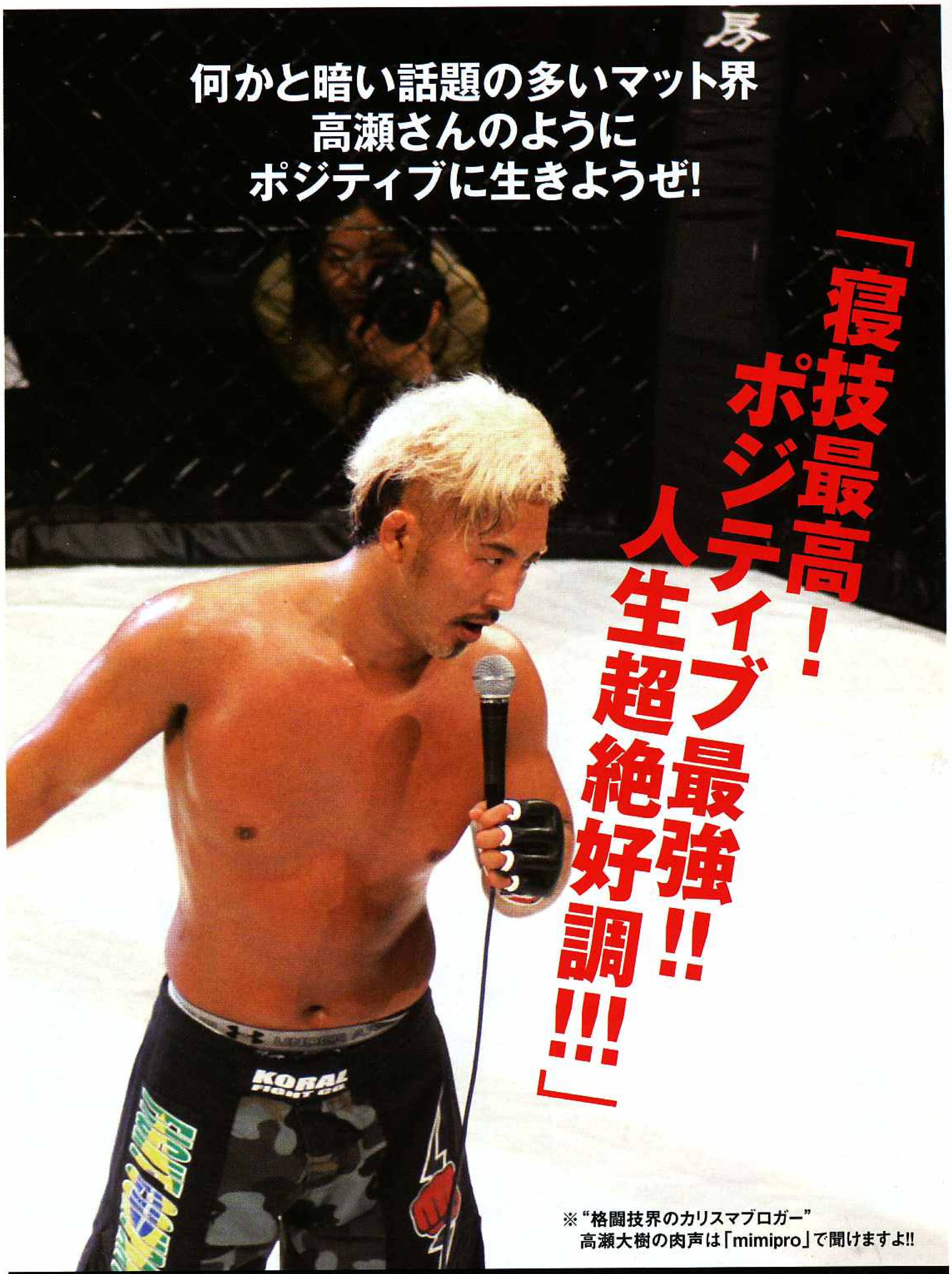
●本書の一部あるいは全部に株式会社エンターブレインから文書による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で複写、複製することは禁じられています。

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555
（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00～17:00）
メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL: http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。

©2009 ENTERBRAIN, INC. ©2009 DOUBLECROSS
Printed in Japan



何かと暗い話題の多いマット界
高瀬さんのように
ポジティブに生きようぜ!

「寝技最高!
ポジティブ最強!!
人生超絶好調!!!」

※"格闘技界のカリスマブロガー"
高瀬大樹の肉声は「mimipro」で聞けますよ!!

NEXT ISSUE

7.20『DREAM.10』速報&8.1『アフリクション』、
8.2『戦極～第九陣～』情報も満載!

kamipro Special 2009 AUGUST は7月29日（水）発売予定!

特集テーマは……友情!?

No.138は8月22日（土）発売予定!

※地域によっては多少発売が遅れることもあると思います。ついてない。ついてない。

ka
No.137
2009年8月6日

発行人
浜村弘一
編集人
斉藤慎一
編集統括本部長
ジャン斉藤
編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎
終身名誉バイザー
吉田 豪
助っ人
ジャイ子
編集次長(コール
松林 貴
デザインGM
出田さん(Tw
デザイニングマネ
金井ヒサくん
デザイン
松坂マツくん
谷タニやん
廣田ブンちゃ
野口ノグッチ
鐘田やっちゃ
白木みのる
トメさん
はなえちゃん
カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
タイコウクニ
梅木麗子
丸山剛史
お勘定
工藤ちゃん
ビーチの視線独
入江マイクロ
雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠
業務部
樽本"アラ汁
編集庶務
原 正典
山内ユリコ
終身名誉編集庶
高木由美子
編集チアガール
金川"ナツコ
白倉"クララ
ミドレンジャー・マ
廣橋久美子
発行所
株式会社エ
〒102-843
☎0570-06
印刷
図書印刷株
協力
BUSHIDO
FightSport

■広告掲載のお
株式会社エ
スポーツ企画
●本書の一部a
ら文書による許
複写、複製する

本書の内容、不
記の窓口までお
記載以上の詳
かじめご了承く

[カスタマーサ
☎0570-0
(受付時間／
メールアドレス

●個人情報の
本書にお寄せい
連してご提供い
ダブルクロス、
http://www.e
ポリシーの定め
©2009 ENTER
Printed in Jap

kamipro 2009 137 苦しみの中から立ち上がれ! プロレス ド元気ですかーっ!?

2009年8月6日

発行人／浜村弘一　編集人／斉藤慎一　発行・発売所／株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555（代表）
印刷・製本／図書印刷株式会社 ©2009 ENTERBRAIN, INC. ©2009 DOUBLECROSS

特別定価：本体895円＋税

雑誌 61957-49 Ⓗ2009.11

Printed in Japan 図書印刷株式会社

©2009 ENTERBRAIN, INC. ©2009 DOUBLECROSS

eb! enterbrain

ISBN978-4-7577-4966-5
C9476 ¥895E

9784757749665

1929476008954

kamipro 2009 137
苦しみの中から立ち上がれ! プロレス元気ですかーっ!?
"魔王"秋山成勲 マイケル・ジャクソン追悼試合
2009年8月6日

発行人／浜村弘一 編集人／斉藤[illegible] 発行・発売所／株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
印刷・製本／図書印刷株式会社
©2009 ENTERBRAIN, INC. ©2009 DOUBLECROSS
enterbrain

kamipro 2009 137
苦しみの中から立ち上がれ! プロレス元気ですかーっ!?

enterbrain

特別定価：本体895円＋税

雑誌 61957-49 Ⓗ2009.11
Printed in Japan 図書印刷株式会社
©2009 ENTERBRAIN, INC. ©2009 DOUBLECROSS